
魔法少女リリカルなのは ~ So close, yet so far ~

SAIHAL

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは ～So close, yet so far～

【Nコード】

N5903V

【作者名】

SAIHAL

【あらすじ】

新暦75年。機動六課は一人の記憶喪失の男性を保護する。彼の名はアクセル・アルマー。時を同じくして、ミッドチルダでは不可思議な事件が多発する。ガジェット・ドローンの活発化。なのはやフェイト、はやてに似た姿を持つ少女たちの目撃談。いまだ試験段階にある新型デバイスを使用する謎の部隊。誰もが気付いていなかった。「極めて近く、そして限りなく遠い世界」からの訪問者達に。全ての騒動の発端は彼らにあることに。

今、並行する世界を超えた戦いが始まる。

第1話 「白い墮天使」(前書き)

初めまして、SAIHALという者です。これが初投稿作品となります。誤字・脱字といったミスは、優しく指摘してくださいと幸いです。

本作は「魔法少女リリカルなのはStrikerS」に「スーパーロボット大戦OG」の設定を取り入れた二次創作作品です。

作者がジ・インスペクター第1話でのアクセル隊長に見惚れ、執筆に乗り出した作品と言っても過言ではありません。

賛否両論あるかと思いますが、生暖かい目で見てください。それでは、どうぞ。

第1話 「白い墮天使」

あたり一面荒野の世界。生命はなく、時たま吹く風が立てる音以外は静寂に包まれた世界。

それも当然である。ここは無入世界。

その名の通り人が存在しない世界。ついでに言えば動植物も同様だ。故に静寂に包まれているのが普通なのだ。だが、その普通はこの世界に存在しない音で破られる。

静寂を乱したのは爆音。そして、何かが地面に落下した音。

状況から鑑みるに何かの爆発によって飛ばされたのだろう。

それは人の形をしていた。こう表現するのも人と言うにはサイズが違いすぎるからだ。

大きさは大体30センチほどだろうか。妖精と言えば誰もが納得する。

それは機能を停止する以前はリインフォース？と呼ばれるユニゾンデバイスであった。

もし彼女を知る者が今ここにいたなら、横たわるその姿に息を呑んだことだろう。

リインフォース？が飛んできた方向を見れば、二つの人影があった。

一人は満身創痍。リインフォース？と同様、仰向けで倒れていたが戦う意欲は失せていないのか、上半身を腕の力だけで起こし立ち上がろうと踏ん張っている。

身に纏うバリアジャケットは機能を果たすことすら怪しいほど焼け焦げ、愛用の杖は砕け散って右手にその名残であろう柄が握られている。彼女のチャームポイントであった帽子は戦闘の最中に失われており、かつて畏怖と尊敬の対象として見られていた黒い翼は無残にも千切れていた。

いま、上半身を起こしていることすら奇跡なほどの重傷を負っていた。

もう一人は悠然と空中に浮いている。夕日を背にしたその姿は見る者に自らの存在を誇示しているようにも思える。

『彼女』が纏う純白のバリアジャケットは激しい戦闘があつたにも関わらず汚れひとつなく、かえってその不気味さを強調している。十年以上使用され続けている魔導師の杖はその穂先を真紅の血液で濡らし、夕日の光を邪悪に照り返していた。

〈第1話 「白い墮天使」〉

地面に倒れている人物

時空管理局古代遺失物管理部機動六課

部隊長、八神はやて二等陸佐

は頭部からの流血で塞がった右

目とは逆の左目で空中にいる『彼女』を睨んでいた。

その瞳に込められた感情は、半分が怒りで半分が驚きだった。そう、未だに信じることができない。あの『彼女』がこんなことをするなんて。

「何故や……」

ふと紡がれた言葉。はやて自身言うつもりもなかった言葉であり、故に返答も期待していなかった。だが、意外にも空に浮かぶ『彼女』はそれに応えた。

その顔を暴虐な笑みで歪め、未だ血が滴る杖の先をはやてに向けることで。

杖の穂先に魔力が集まっていく。『彼女』が最も得意とする魔法であった。その威力は十年前とは比べ物にならないほどであることをはやては身を以て知っていた。

「なんでこんなことを!？」

十年。たったの十年だ。はやてにしてみればあつという間だったように思えた。それなのに人はここまで変わるものなのか。いや、そんなはずはない。“何か”があつたのだ。何か特別な事情が。

だから叫ばずにはいられなかった。こんなはずじゃなかった世界に對して。

そしてそれが八神はやて、最後の言葉になる。

その叫びに応えるように砲撃は放たれ、赤みを帯びた桃色の閃光が彼女を呑み込んだ。

まるで地鳴りのようだった。全てを呑み込むほどの力が込められた一撃は八神はやてという存在をこの世から消し去った。

砲撃によつて巻き上がった砂塵が収まると、残つたのはその一撃により出来上がったクレーターののみ。

辺りを見渡すと似たようなクレーターが二つ存在していた。そこにも人間がいたような証拠は残っていなかったが、クレーターの周囲に何かの残骸が散らばっていた。

一つは鉄製ハンマーのヘッド部分。もう一つは片刃剣の刀身。

どちらも罅割れており、激しい戦闘が行われ敗北したことは明白だった。

再びこの世界に静寂が下りた。

何気なく『彼女』は夕焼けを見つめる。沈みゆく夕日はその儂さ故に格別美しい。

かつての友人をたつた今その手で殺めた『彼女』でも、美しい風景には心を動かすのだろうか。

ふと、地平線に小さな黒い点が見えた。曖昧に揺れるその点は砂塵を巻き上げつつ、段々とその輪郭を明確にしている。どうやらそれは人影のようだ。

『彼女』の瞳はそれだけを映していた。『彼女』はただ自身の同類が近づいてくるのを感じただけ。

夕日はその視界にすら入っていないかったのだ。

高速で接近していた人影は『彼女』の傍まで近づくと、推進装置を切って停止する。

その姿が明らかとなった。どうやら若い女性のようなようだ。

髪は黒みがかった青いショートカット。頭部の左右からはウサギ耳のようなアンテナが、額中央からは一角獣のような突起が伸びている。右腕には根元に回転式薬室が取り付けられた杭打機が、左腕には小口径の連装機関砲が、それぞれ装備されている。

何よりも特徴なのは肩部の装甲だ。巨大なコンテナだろうか。コンテナ前方にはハッチがあり、明らかに内蔵武器があることは間違いない。装甲の各所には髪の色に似た青色の塗装がなされている。

マオ・インダストリー社製パーソナルトルーパー。

初めて開発に成功したゲシユペンストタイプの新型機であり、次期主力機候補。PTX-003C『ゲシユペンストMk-?』。

大火力による一点突破を目的とした機体。それを身に纏った女性は、その“金色”の双眸を『彼女』に向けた。

「例の装備……準備が整いました。いつでも出撃可能です」

その声音は人が出すにしては冷たく、まるで機械のようだった。

「了解……」

応える『彼女』の声もまた、それに近かったが、こちらは何らかの狂気を秘めていた。

会話らしい会話もせず、女性は自身が辿ってきた道筋をすさまじい勢いで逆走する。

『彼女』もまた、追隨するように飛翔した。三つのクレーターには目もくれず。

彼女たちは時空管理局本局特殊鎮圧部隊。通称『デイズスターズ』。敵味方見境なく攻撃する殺戮集団と恐れられる、新暦75年の時点で管理局最強の部隊である。

第1話 「白い墮天使」 (後書き)

アクセル隊長、出せなかった……

なんという失態。始末書もんだな。

さてさて、次回はアクセル隊長VSアインストなのはさんです。
どうぞ期待。

第2話 「蒼い戦神」 (前書き)

ついに来ました。

アクセル隊長VSアインストなのはさん。

もはや語るまい……

では、どうぞ。

第2話 「蒼い戦神」

無人世界。機動六課部隊長及び複数の隊員の反応が消えてから数時間。

場所はこの世界に建設された研究所。現在は時空管理局特別任務実行部隊『シャドウミラー』によって占拠されている。

その一角で、特殊処理班隊長のアクセル・アルマーは迫りつつある脅威を待ち構えていた。

「来たよ。コードはお馴染みの、スターズ1……」

通信機越しに響く若い女の声。彼が最も信頼している女性の声だった。

脅威が接近中であることを伝えるその声からアクセルを心配する感情が読み取れる。

「アリシア。貴様はクロノや人形共と先に行け」

すでに出発の準備は終了している。後顧の憂いを断つのみだ。

ただ尻尾を巻くのは我慢がならない。決着をつけねば……

その表情を見たアリシアは、諦めたように溜め息をついた。

長年の付き合いで理解はしている。一度決めたら変える人じゃない。彼の性分だ。

「アクセル。『こちら側』と『向こう側』は違う。『エルケーニヒ』もそう……それを、忘れないで……」

通信が切れると同時にソウルゲインのセンサーとアクセルの両目がこちらへ接近する物体を捉えた。表示される情報にはアリシアの言

った通り、スターズ1の文字。

それを確認するが早いか、アクセルは忌々しげに舌を打った。接近してくるその姿が彼の予想と合致していたからだ。主に悪い方の。

右手に握られる杖。『レイジングハート・エクセリオン』は槍のよ
うな形状を取っている。エクシードモードと呼ばれる形状で、それ
は限定解除時のフルドライブモードであることを示している。だが、
それだけならば、まだマシな方だ。

周囲を旋回している三つのビット。CW-AEC00X『フォート
レス』。カレドヴルフ・テクニクス社が製作した武装端末。その一
つの到達点にして開始点と呼ばれるそれを『エルケーニヒ』は装備
していた。フォートレスに追隨する三基のビットはそれぞれ実体剣、
プラズマ砲、大型粒子砲として機能する。

さらにフォートレスと連携して使用可能であるCW-AEC02X
『ストライクカノン』もその左手にあつた。長大な砲身は突撃槍と
しても機能する、中々遠距離型の武装である。

そして、その身体に纏う純白の鎧はマオ社製PTの試作機。PTX
-007-03C『ゲシユペンストMk-?・カスタム』。通称『
ヴァイスリッター』。高機動・砲撃戦を想定して試作され、固有装
備のオクスタン・ランチャーは二種の弾丸を放つことができる。『
エルケーニヒ』の弱みである機動性を補いつつ、強みである砲戦能
力を向上させている。これは鬼に金棒と言ったところか。

一時は量産化の話も出たが結局はお蔵入りとなり、試作された唯一
の機体は教導隊へと渡った。『エルケーニヒ』が以前所属していた
教導隊に。嫌な巡り合わせだった。

「腐った管理局の亡霊が！」

完全武装。全ての端末をリンクさせた上で運用しているのは間違
がない。

つまり、数時間前から準備をしていたのだ。用意周到な眼前の脅威に苛立ちを覚える。

そこまで自分たちを始末したいのか。かつての仲間すら蹂躪してまで。

「アナタたちは……望まれない世界を創る……」

再び開かれた通信回線から聞こえてくる音声は滑らかな女性の声。その声は聞く人に恐怖を与えるほど冷えきっていた。

しかし、彼女と何度も対峙したアクセルはその声に恐怖を感じることはない。

彼の戦意をより高めるだけだ。彼女の世迷言を吹き飛ばすように宣言する。

「だが俺はその世界と決別する。この敗北の先に、勝利を得るために！」

その前に貴様との決着もあるがな。そうアクセルは心の中でつぶやいた。

しかし、彼女には心中どころか、紡いだ言葉すら通じていないようだ。

「勝利…敗北…そこに意味はない……破壊されるか…創り出されるか……創造は破壊……破壊の創造……アナタは方舟と共に朽ちなさい……！」

『エルケーニヒ』の速度が上がる。彼女の背後で赤みを帯びた桃色の粒子が散った。

それを見たアクセルは理解が追いつかなかった。

距離を詰める？あの『エルケーニヒ』が？

彼女の戦術の基本は砲撃戦だ。距離を取って戦うのが前提。接近戦を果敢にするほど得意ではないはずだ。それなのに。

どうやら、奴自身は夢の中らしい。いいだろう。後悔させてやるうじゃないか。

まずは、現実の世界へ引き戻してやる！

「寝言はそこまでだあ！！」

叫びながらソウルゲインのブースターを点火。『エルケーニヒ』を迎え撃つ。

（第2話 「蒼い戦神」）

激突は一瞬だった。その勢いはすさまじく、その際に生まれた衝撃波で砂塵が舞う。

ソウルゲインは右手でストライクカノンの砲身を、左手でレイジングハートのブレードを掴んでいた。どちらも魔力で強化されているのか、砕くつもりで握りしめている砲身も刃もその形状を歪めるとすらない。

相変わらず、挑むのが馬鹿になるくらいの魔力量だとアクセルは思う。

彼女に匹敵する量の持ち主は、今現在この世界にはどこにもいないだろう。

だが、例え相手がああ『エルケーニヒ』だろうと、このソウルゲインは接近戦に重きが置かれた機体。この距離ならその性能を十全に発揮することが可能だ。

「なめるな！パワーなら……！！」

傍目からは拮抗しているようにも見えるが、徐々にこちらが押していることをアクセルはその身で感じていた。

いける　このソウルゲインならば！

しかし、その希望すら食い尽くすのが目の前の悪魔だった。

「ブラスター……2！！」

暴虐な笑みのまま、キーコードを叫ぶ。大気が揺れ、魔導の胎動が始まった。

ブラスターシステム。限界を超えた強化を行う、彼女たちの切り札だ。

今までの手応えが消え失せ、抵抗が一気に高まる。両手が段々と押され始めている。

「何！？ならば……青龍鱗！！」

一度距離を置く必要がある。そう感じたアクセルは両手に力を集中させ、解き放った。

青龍鱗。接近戦に特化したソウルゲインの数少ない遠距離への対処法。

元々遠距離への撃ち出すために集束されたエネルギーだ。

それをゼロ距離で使えばどうなるか。

「うあぁっ！？」

目の前の彼女がいい例だ。愛杖と突撃槍が砕け、その余波で『エルケーニヒ』も苦悶の声を上げる。

その間にアクセルはバックステップを踏み、態勢を立て直した。

「まずは、デバイス二基……頂いたぞ！」

これで振出しに戻った。魔力量では負けているが、それを撃ち出す砲身一つと彼女の要を破壊した。

だが、その安心も長続きはしなかった。

破損したストライクカノンの砲身。そこから緑色の触手が飛び出してきたからだ。

「なっ?!」

それは左腕に限ったことではなかった。傷ついた右腕を包むように、ヴァイスリッターを覆うように、フォートレスを取り込むように触手は伸び、『エルケーニヒ』の身体を変異させていく。

やはりな、とアクセルは苦言を漏らす。

いくらかは予想していたが、ここまで人間でなくなっていたとは。

「魔王というよりは外道にすぎるぞ……『エルケーニヒ』!!」

変異を終えたからなのか、過剰ともいえる魔力をその身体から溢れさせている。

ヴァイスリッターであった全身を包む装甲は禍々しい意匠へと変貌したり、背中のウイングは文字通り四枚の蝙蝠のような翼となっていたりと、以前の清廉さを失っていた。ところどころから覗く、植物の蔓のような触手はおそらく筋繊維なのだろうが、それがより不気味さに拍車をかけている。

右手で構えているのはオクスタン・ランチャーだろうか。砲口が獣を思わせる意匠だ。また、フォートレスの一番小型だった実体剣を備えたビットが右腕に融合している。

腰にはフォートレスの残りのビット二基が左右対称のバインダーと

なっている。おそらくはプラズマ砲と大型粒子砲も健在だ。破損していたストライクカノンは左腕を取り込んで再生されていた。正直言つて、今の『エルケーニヒ』は異常だった。人間を辞めたところではない。

これではただの

怪物だ。

「アナタたちは純粋な生命体に成りえない……」

盛大に顔を歪ませて『エルケーニヒ』は叫ぶ。

胸部が上下左右に開き、ボディスーツで覆われた豊満な胸が露わになる。

そこにはレイジングハートのエクシードモードに似た装飾が施されていた。

いや、それ自体がレイジングハートなのかもしれない。事実、胸の中央には紅い球体が光を反射し、その存在を知らしめていた。

「ワタシが……そう、ワタシこそが……！」

その光球へ力が集束していく。変化を終えた際、大気へと放出した魔力を利用している。

それは星の光の名を冠した、断罪の一撃。『エルケーニヒ』の代名詞とも言える一撃。

あれは、まずい！アクセルは反射的に回避行動を取っていた。次の瞬間、レイジングハートから荒ぶる光の柱が放たれる。

回避するには十分な距離と時間があったにも関わらず、アクセルは自身の右脇腹に熱を感じた。

と、同時に爆音。振り返ると研究所の一角が黒煙を吐き出している。

「搬入口が！」

舌打ちを忘れず、再び『エルケーニヒ』へと視線を戻す。すでに第二射の準備を行っていた。

この距離で砲撃。先ほどの意趣返しか。大規模な砲撃で視界を埋め、逃げ場を無くすつもりだ。

えげつないことこの上ない。だが、目の前の心配ばかりもしてられない。

「あのまま奴が力を得れば、俺たちにとって脅威……いや、それ以上になりかねん……今ここで倒すしかない」

例え無理だとしても、差し違える覚悟はできている。だが、死ぬ気は全くなかった。

それに奴を打倒する手も思いついた。だが……

モニターを呼び出す。表示されるのはカウントダウン。

「残り時間は127秒。奴を倒し、転移するには……やれるか、俺に……」

モニターを切り替え、起爆装置を作動させる。

「認証コードOK。起爆時間セット。タイムラグは5秒……」

そのあまりの無謀さに自嘲する笑みが浮かぶ。

見様によっては楽しんでるようにも見える笑みではあったが。

「ただの博打だな、こいつは」

胸部へと集まる光が強まる。どうやら向こうも準備が整ったらしい。さあ、シヨウダウンだ！

「静寂を乱すもの……修正する！」

「よく狙え……『エルケーニヒ』！！」

気が付いていたか？『エルケーニヒ』。

大地を抉る一撃が放たれる寸前、ソウルゲインが跳躍する。

先ほどの一撃の瞬間、その反動を支え切れなかったことを。

夜空に輝く衛星を背に宙返り、彼女の頭上をとる。

例え変異を遂げたとしても、貴様が人間だったことは否定できない事実。

それを追って彼女も空を見上げる。

あれほどの一撃だ。衝撃をデバイスで補正するのは並大抵のことではない。

当然、照準を定めるのに僅かながらもタイムラグが発生する。

貴様は気にしていないのかもしれないが、それが命取りだ。

照準の補正が完了し、スターライト・ブレイカーが放たれた。

ここだ！

砲撃がすぐそばを通るのを感じつつ、ブースターを点火。

「奈落へ落ちろおおおおお！！！」

『エルケーニヒ』の両肩を掴み、ブースターの出力をさらに上げる。砲撃の反動とブースターによる驚異的な加速は難なく彼女を地下ドックへと通ずる扉へ押し込んだ。

そのまま重力に従って地下へと急落下し激突。

ダメージは無かったのかすぐさま起き上がり、態勢を立て直すと辺りを見渡した。

ここには彼女が探す方舟があるはずだったが、奥に用途も分からない装置があるだけで他は何もない。

「静寂を乱す方舟は、どこ……！」

理解できないような彼女の耳に、聞きなれた声が響く。

「転移したのさ」

「転移………？」

そつだ、という肯定が研究所に響く。彼女の疑問に答えるように。

『エルケーニヒ』の瞳が天井に空いた穴を見つめる。自分が落ちてきた穴を。

そこに蒼い戦神が立っていた。青白い光を背にソウルゲインが彼女を見下ろしている。

その姿に動きを止めた。決して彼女が目の前に立ち塞がる者に恐れを感じたわけではない。ただ、動けなくなった。そんな姿を視界に収めつつも、アクセルは言葉を紡ぐ。

「そして俺も行く。新たなフロンティアへ。だが、貴様はここで終わりだ」

これがないあ！！

ソウルゲインのブースターを噴かせる。『エルケーニヒ』の頭上目がけて。

アクセルが狙うは一撃必殺。最大の攻撃を至近距離で放つ。

「リミット解除！コード・麒麟！！」

腕を前へ交差。ソウルゲインの各所の光球が光を放ち、肘のブレードが伸びる。

『エルケーニヒ』も動き出す。右手の銃口が、左腕の砲塔が、両腰の射出口が、胸部の紅球が、ソウルゲインを向いた。その全てが必殺の光を放つ。

スターライト・ブレイカーとはまた違った意味で、視界を埋め尽くす弾幕。それぞれ質が違う弾丸だ。質量を持つ弾。エネルギー弾。プラズマ砲弾。粒子ビーム。赤みを帯びた桃色の閃光。

その中をアクセルは防御することなく突貫する。あえて回避するよりも最短距離を突っ切ることを彼は選択した。ある意味賭けだった。それもなかなか分の悪い。

肩のアーマーを粒子ビームが貫く。バラバラになった破片が『エルケーニヒ』に降りかかり、魔力障壁によって弾かれる。

顔面を弾丸が掠める。片方のセンサーが砕け、態勢が崩れる。だが、再び『エルケーニヒ』へと向かう。その瞳に宿る闘志は決して砕けていない。

「ソウルゲインよ……俺を……」

物言わぬ相棒。ソウルゲイン。それでも俺の為にその力を示してくれる、意思に応えてくれると信じている。新天地への旅立ちに向けて。

脅威を目前にして、出力が上がる。肘のブレードに力が集まった。そうだ、ソウルゲイン。だから、俺を……

「俺を勝たせてくれえ!!」

腕を回し、振りかぶる。ここはアクセルの距離だ。

「でいいいいやつ!!」

アッパーカットにも見えるブレードの一撃は狂いなく『エルケーニヒ』を切り裂いた。

その滑らかな白い曲線の腹部から右肩にかけて、縦一文字に傷が入っている。胸部装甲も砕け、光球が露出している。致命傷ではないが、万全に戦闘を行えるとは言い難い。

その一撃に仰け反った『エルケーニヒ』の頭上を越えて、ソウルゲインが着地し、膝をつく。

この攻防でソウルゲインはほぼエネルギー切れだ。身体も悲鳴を上げ始めている。

だが、アクセルは生きてここにいる。転移装置の中央に。

「『エルケーニヒ』……俺の、勝ちだ！」

アクセルの声に呼応するかのように、リュケイオスが起動を開始する。

青白い光がまばゆく放たれ始めた。彼は振り返り、『エルケーニヒ』を睨む。

そう遠くない距離に彼女はいる。だが、今は万里も彼方に感じた。そうだ、『エルケーニヒ』。貴様との因縁もここまでだ。

「俺はこの世界と決別すると言った。貴様はそこで吠えている……リュケイオスが燃え尽きる、業火の中で!!！」

光が強まる。転移が始まろうとしているのだ。

それを見て『エルケーニヒ』は顔を歪めた。その表情は憎悪と憤怒に包まれている。

「アクセル アルマアアアア!!！」

背中を翼を羽ばたかせ、アクセルへと一直線に向かう。砲撃のチャージはしていないが、すでに彼女の攻撃準備は終わっている。

A・C・S・ 瞬間突撃システム。彼女が出せる最高速。

しかし、それよりもアクセルの方が速い。右腕を腰だめに構えた。

「行きがけの駄賃だ……もらっていくぞ」

ソウルゲインの右腕が回転を始める。

眼前の脅威を打ち砕くために。多くの仲間を踏みつぶした敵を討つために。

「貴様の首をだ！

ナノハ・タカマチ！！」

玄武剛弾。最大まで回転したソウルゲインの腕が撃ち出される。敵を打ち倒すため放たれた螺旋の弾丸は左腕の砲身を叩き折り、『エルケーニヒ』の胸部に寸分変わらず食い込んだ。

「あぁっ！！！」

『エルケーニヒ』の苦悶の声を最後に、アクセルの姿がこの世界から消え失せる。

転移が成功したのだ。

直後、リュケイオスが施設ごと爆発を始める。地下ドックへと瓦礫が落下してくる。

研究所が倒壊する中、『エルケーニヒ』の姿も業火に包まれた。

無人世界。この世界で発生した音は、巨大な爆音と付随する衝撃波で終わりを告げた。

第2話 「蒼い戦神」 (後書き)

燃え尽きた……流星の如く。

さて、次話から『こちら側』の世界の話に。

そして、アホセルさんとなります。

彼の口調が一番手強かったり……

それでは、次話で会いましょう。

第3話 「墜ちてきた男」 (前書き)

第1章の開始です。

タイトルはスーパーロボット大戦Aのスーパー系第1話から。

ついにアホセルの登場です。

それでは、どうぞ。

第3話 「墜ちてきた男」

ミッドチルダ。エイリ山岳丘陵地帯。

近くにはモノレールが通っているのだろうか。線路が断崖絶壁に沿って敷かれている。

その崖が上がっていくと、クレーターが一つ出来上がっている。

その中央に一人、男性が仰向けに倒れていた。

誰が見てもこの男が空から墜落してこの様な現状に至っていると思うだろう。

赤い癖のついた髪。耳にはピアス。整った顔つき。

「うう……アリ、シア……」

男が目覚める。何者かの名前をつぶやきながら。ゆっくりと上半身を起こし、辺りを見渡す。

「ん……ここは……」

だが、その視界に移るのは大地か大空。それから立ち上がった。それでも景色は同じ。

「俺は……うっ……俺は、誰だ……どうしてこんなところに……？」

軽いパニックに陥りながらも、記憶を辿る。

だが、どうも霧がかかっているようにはっきりしない。

「ちっ……落ち着け。まずは、情報を整理するんだ……」

自身の体を見る。体についた土埃を払いながら、身に着けているも

のを確認した。

情報が得られないことに落胆しながら、首から下げられたペンダントをいじり、空間にモニターを投影する。

「パワーチェック……けっこう消費してんな……デバイスにも若干の損傷。まだ動けるレベルにはあるか……ん？」

そこで疑問を感じた。自分がたった今、取った行動に対してだ。俺は今、何をした？

どうして、これの操作の仕方を知っている？

どうして、これがデバイスであるということを知っている？

「くそ……思い出せない……記憶喪失というやつか？」

先ほど同様、頭の中が霧に包まれているようだ。

忌々しげに舌を打った。自分のことなのに自分が分からないとは。

「シャレにならんぜ。一時的に記憶が混乱してるだけだと思いたいが……なんだ!？」

一人悩んでいると、どこからか聞こえた爆音を耳が捉えた。

見上げると空のはるか先に、水色の飛行機が編隊を組み、白と黒の影と対峙している。

クレーターを抜け出し、目を細める。

間違いない。片方は機械のようで、もう片方は人影だ。

「……戦闘? くそ、状況が把握できねえ!」

ただでさえ、自身が置かれた状況すら曖昧であるのに、周りは戦闘地帯。

これ以上、事態をややこしくしないでほしい。そう思った。それが悪かったのだろうか。突如、編隊の一部が進路方向をこちらに変えた。

全部で五機。間違いなく、狙いは自分だ。

「こつちに来る！」

やられる訳にはいかない。自分にはやるべきことがある。何故かは分からないが、そう感じた。それに……

「記憶喪失のまま死ぬのはごめんなんだな、これが！」

それを実戦の中で記憶が戻るかもしれない。そう思った男はペンダントに力を集中させる。

それに応えるように光を放つ。次の瞬間には男の身体が蒼い装甲に包まれた。

ソウルゲイン。脳裏にその名がよぎった。おそらくこのデバイスの名だ。

「いくぜ、ソウルゲイン！」

迎え撃つために構えてから、奮起するように叫ぶ。

それに応えるようにソウルゲインのセンサーアイが輝いた。

「第3話 「墜ちてきた男」

飛行機下部の砲門から連続して閃光が放たれた。

だが、ソウルゲインには当たらない。着弾地点にその姿はない。彼の取った行動は単純明快。跳躍して接近。編隊の先頭と目線が同じになる。

先頭の機体はその事態にフリーズした。

機械に困惑という感情はない。そもそも感情すらない。

だが、それが最もぴったりの表現だった。

事実、目の前に目標がいるのに、何もすることが出来ず固まっていたのだから。

そんなことを知らないアクセル。両手に蒼い光が集まる。

「白虎咬！おりゃあ！」

連撃。先頭の機体が、原型を留めないほど装甲をへこませ、一瞬遅れて爆散。

破片が飛んできてきても気にしない。アクセルはすぐさま編隊の中央に狙いを定める。

両手の光が再び強まる。体の前でそれを撃ち出すように構える。

「くらえ！青龍鱗！」

放たれた蒼い奔流は二機を纏めて貫いた。

残った二機は自分たちが不利だと判断。ソウルゲインを挟み撃ちしようとして左右に別れた。

アクセルは追い打ちをかけることもせず、ただ重力に従って落下を続ける。

それを好機と見た二機。ブースターの出力を上昇させる。特攻だ。

「スマートに行こうぜ……！」

アクセルがポツリとつぶやいた。それを聞いてソウルゲインの両腕が回転を始める。

二機はそれを見て、この行動が判断ミスという結論に至った。だが、もう遅い。回転はすでにトップギアだ。

「ブツ飛べ！玄武剛弾！！」

螺旋を描いて撃ちだされた拳は、二機の胴体を正確に貫いた。爆発による閃光を背景にしてソウルゲインは着地する。両腕も回収済みだ。

あつという間の出来事。誰かが見ていたら感嘆の言葉を口にするだろう。

ふう、とアクセルは装甲の中で息を吐く。

そして空を見上げ、思い浮かべる。先ほどの戦闘を。

身体が勝手に動いた。記憶喪失の男性というには異常すぎる。

咄嗟の判断力。ソウルゲインを手足のように操る戦闘技術。

……俺は軍隊か何かにいた経験がある？

「くそ。あまりにも断片的すぎる……俺は、何者だ？」

思考の海に落ちかけたアクセルの視界に黒い影が映る。

現実に意識を戻すと、自分の目の前に輝く金髪を持つ美女が浮いていた。

あまりにも唐突な出来事に思考が停止する。

つい今しがた、現実に戻ってきたばかりだというのに。

「こちらは時空管理局執務官、フェイト・テストロッサ・ハラオウんです……あの、聞こえますか？」

「あ、ああ。聞こえてるよ。で、なんだっけ。管理局？」
金髪の美女 フェイトというらしい の言葉で再び現実に戻ってくる。

どうもこちらを訝しんでいるらしい。瞳は疑念の色に染まっている。それも当然だ。彼女の目に映るのは蒼いロボットのような外見で、あつという間にガジェットを撃墜できる攻撃力を持っている正体不明^{ワン}。

「貴方は何者ですか……それが貴方の本当の姿ですか？」

「いや、違う。少し待ってくれ……ソウルゲイン」

そつと呼びかける。身体が光に包まれ、ソウルゲインが待機状態へと変化する。

それから、フェイトを見上げる。やはり、綺麗だ。陽光に照らされた金糸がなびいているその一瞬を切り取って絵画にしたいくらいだ。きつと歴史に残る名作になる。

フェイトの方は驚いているようだ。

無理もない。蒼いロボットが光ったかと思うと、赤髪の男性が現れたのだから。

彼女の記憶にはない技術だ。おそらくどこの世界を探しても見つからないだろう。

そのことに驚きつつも彼女は自分の仕事をこなそうと口を開く。

「えつと……とりあえず、お名前は？」

「君みたいな美人がキスしてくれたら、教えてもいいかな」

その言葉にフェイトは一瞬呆けて、少し遅れて顔を真っ赤に染めた。

初心なんだな。『あいつ』と違って。アクセルはくすりと笑ってから、疑問を感じた。

『あいつ』って、誰だ？女性、なのか？

やはり断片的すぎる。まるで性質の悪いパズルだ。

「ふ、ふざけないでください！」

「冗談だよ。といっても、名前は教えられない。いや、思い出せないってのが本当かな、これが」

固まっていたフェイトが激昂する。それにのりくらりと返すアクセル。

今度も冗談だろうと構えていたが、アクセルの顔を見て表情を変えた。

どうやら記憶喪失だと信じてくれたらしい。地面に降りて、アクセルの前まで近づく。

「本当に、思い出せないんですか？名前も？」

「……ちょっと待ってくれ……そうだ。アクセル。アクセル・アルマー」

フェイトが目の前まで来た時、誰かがその名を呼んだのを思い出した。

誰かまでは分からなかったが、その声はフェイトによく似ていた。

その記憶も、もう霧がかかってしまい、それが誰だったのかは思い出せなくなる。

自分の記憶に苛立ちを感じる。自分自身が分からないのが、ここまですらないとは。

「それが、貴方の名前ですか？」

「そうらしい……よく分からん。あとはさっぱりだ」

「そうですね……詳しい話は移動してからにしましょう。私たちの隊舎に案内します」

少し突き放した言い方だったが、フェイトは気にしていなかった。自分を見失ったことのある彼女は、痛いほどその気持ちが分かるからだ。

アクセルを促すフェイト。だが、彼はその前に疑問を口にした。

「なあ、隊舎って？管理局のか？」

「はい。正確には私たちの部隊の、ですね」

古代遺失物管理部、機動六課の。

それを聞いたアクセルの心中に安堵がよぎる。

俺は、この時を待っていた……？

疑問を感じたままアクセルは、こちらへ近づいてくる輸送へリを見上げていた。

第3話 「墜ちてきた男」 (後書き)

いやはや、文の構成って難しいですね(汗

さて、次回はアホセルの本領発揮……となるのか？

次話をお楽しみに！

第4話 「ファーストコンタクト」(前書き)

機動六課主要陣とのファーストコンタクト。

そのままですね(汗)

それでは、どうぞ。

第4話 「ファーストコンタクト」

あれから少し経って。

機動六課隊舎。その部隊長室にアクセル・アルマーはいた。

五人の女性に囲まれて。

(勘弁してくれ……)

一般的な男性に話せば、羨望の声上がるだろう。

アクセルにしてみれば、ぜひとも代わってほしかった。

だが、たとえ他の人が代わりに来ても、アクセルに再びその座を返すだろう。

五人の女性に囲まれる。確かに羨ましくはある。

だが、状況が状況なのだ。順に説明していこう。

まず、八時の方向。赤毛のツインテールの少女。

腕を組み、アクセルのことが気に食わないとばかりに睨みつけている。

正直、アクセルの精神を削っている原因の七割が彼女の殺気だ。

続いて十時の方向。栗毛のサイドテールの女性。

手を後ろ手に回し、柔和な微笑みを浮かべている。

最もその視線は、向かいの女性に向けられているが。

次は、十二時の方向……を飛ばして二時だ。

金髪の女性。フェイトだ。彼女は視線を床に向け俯かせている。

その顔は赤く染まっていた。

ちなみに耳まで赤いので、顔を下に向けていてもバレバレである。

原因はおそらく保護された時のアクセルの台詞だ。

何故、ここについた時に思い出したのかは分からないが……
これでは、そういう方向でからかうことは控えた方がいいだろう。
いや、控えめにした方がいい。

次に、五時の方向。ピンクのポニーテールの女性。

こちら赤毛の幼女……じゃなくて、少女ほどではないが、こちらに熱い視線を向けている。

まるで、獲物を狙う狩人だ。何か、嫌な予感がする。

彼女がアクセルの精神を削る原因の二割。

そして、最後にまわした、十二時の方向。茶髪のショートヘアの女性。
最後の二割が彼女だ。

その笑顔が原因だ。確かに、見る者に安心を与える笑顔だ。

だが、アクセルはどうにも怪しさを感じていた。不確定要素満載の
笑顔に。

「さて、と。初めまして。私がこの部隊長やっとなる、八神はやて
や。階級は二等陸佐。横の二人が高町なのは一等空尉と、フェイト
執務官は知ってるんやっとな。それから、そっちの二人がシグナム
二等空尉とヴァイータ三等空尉。まあ、詳しい自己紹介はあとでして
な」

特徴的な方言。すらすらとこの部屋にいる人を挙げていく。

改めて聞くとそうそうたる面々だ。

自己紹介の旨を告げて、いったん言葉を切る。本題に入るのだろう。
これは記憶喪失者に対する事情聴取ではなかったか？尋問に思えて
仕方がない。

本当に勘弁してほしかった。

「第4話 「ファーストコンタクト」」

「それじゃあ、まずは君のことについて教えてもらおうか、アクセル・アルマーさん?……例えば、出身地とか、その出所不明のデバイスとかな」

「……出身は思い出せない。こいつもソウルゲイン、という名前しか覚えてないんだな、これが」

優しくペンダントヘッドと化している待機状態の相棒を撫ぜる。

本来ならば、デバイスマスターとやらに預けることになっていたが、こいつを他人の手で触ってもらいたくない、とか何とか言い訳をして没収は無しにしてもらった。

代わりに多対一の事情聴取に文句を言えなくなったが。

だが、安いものだと思った。他人にソウルゲインを引き渡すよりは、それには理由があった。

(他人にこいつを触らせちゃいけない……そんな気がする。それに、こいつは記憶を取り戻す、唯一の手がかりなんだ)

アクセルは自分の直感に従った。まあ、後悔していないと言えば嘘になるが。

はやてはアクセルの言葉にふむ、と相槌をうった。

「おい、お前。あんまふざけてんじゃねえぞ。自分の立場、分かってんのか?」

会話が途切れたその瞬間に割り込む赤毛幼女。その姿に似合わず乱

暴な言葉遣いだ。

親は何を教えてんのかねえ。アクセルは心の中で養育者の怠慢に嘆いた。

「おい！変な顔すんな！真面目に答えろって言ってるんだ！」

どうやら顔に出ていたらしい。おお、こわいこわい。

だけど、そんな喧嘩腰じゃ、喋りたいものも喋りたくなるって。

「いやあ、こつちとしては大真面目なんだな、これが……というか、いつから尋問に切り替わったんスか？確か、詳しい話が聞きたいっていつから俺は来たんスけどね」

「てめえッ！！」

激昂するヴィータ。隣にいたなのはがアクセルを庇うように間に立った。

「ヴィータちゃん、落ち着いて」

「そうやで、ヴィータ……申し訳ないなあ。ちよつと君の持っているデバイス、君がいた状況っていうのが特殊でな？疑う人もおるねん」

謝罪はいいとして。状況？どういうことだろうか。

あの飛行体が何か関係しているのだろうか。

「はやて二佐、でしたっけ？できれば、その状況ってのを教えてもらえませんか？あの飛行機みたいなのについても」

駄目もとで聞いてみることにした。

何か聞ければ記憶の霧が少しは晴れるかもしれない。

「かまわへんけど……軽くしか教えてやれへんで。君がスパイでないって誰も保証してくれへんからなあ」

「はやて、そんなに疑わなくても……」

「まあ、そうだな……あ、それでもいいです。少しでも情報が欲しいんで」

はやては少し考えて、納得してくれたのだろう、空間にモニターを投影した。

そこには水色の飛行機、それから同色のカプセル状をして細いアームを伸ばしているものと、大型の球体をしたものが一緒に映し出されていた。

「これらは数年前から活動が確認されている自立行動型の魔導機械でな。管理局ではガジェット・ドローンって呼んどる。大昔の遺跡の品々やら、高いエネルギーを持つロストロギアなんかを狙っとるみたいや」

「ロスト、ロギア……？」

「過去に滅んだ超高度文明から流出する、特に発達した技術や魔法を総称して、ロストロギアと呼んでいるんです」

フェイトが疑問に答えてくれた。優しいなあ。

なぜなにフェイト、とかコーナーを作ったらどうだろう。

いや、それは置いておこう。ロストロギアか。

……何か、気になる。考えるんだ。頭を回転させる。

その時、何かが脳裏によぎった。紅い宝石……？

だが、それもまた白い靄に包まれる。どうやらこれもキーワードらしい。

紅い宝石の、おそらくロストロギア。覚えておこう。

「続けるで。こいつらを操つとるのはある科学者や。ジェイル・ス
カリエッティっていう名前のな」

映像が切り替わり、一人の男の写真が映された。

紫色の頭髮。金色の瞳。今にも笑い出しそうなその表情。

こいつは記憶が反応しない。本当に知らないんだろう。

「彼は生命操作や生体改造、精密機械に通じている科学者で、ロス
トログリア関連以外にも数多くの事件で広域指名手配されている次元
犯罪者でもあります」

「そういう経歴もなく、違法研究に手を染めなきゃ、間違いなく歴
史に残る科学者やったろうけどな」

何故だろう。そのフレーズ、どこかで聞いた覚えがある。

だが、知り合いにそういう関係の人物がいたのだろうか。

分からない。思い出せない。

「機動六課は彼の逮捕と搜索指定ロストログリアの確保を優先して活
動しとるんや。それで、今日もそのロストログリアが運搬されていて、
ガジェットの襲撃にあつたから出撃したんや」

「……それで、その途中でソウルゲインを使っている俺を発見した、
と。そういうことっすか」

その通りだとばかりに頷くはやて。

確かに、疑われても仕方がない。

ガジェットの出現場所にいた、謎のデバイス（ロボット似）を使う
男。

十人に八人がスパイか何らかの関連性を疑うだろう。

「でも、はやて。彼はガジェットに襲われていたんだよ？しかも、

記憶を失ってる。スカリエツティに狙われてるのかも」

……どうやら、フェイト執務官は残り二人の内一人らしい。
っていうか、一応執務官だろう。あんたが一番疑ってかかるべきな
んじゃないのか？

『あいつ』はそこまで甘くなかったぞ。

(……まただ)

たびたび、自分はこの中の人物を誰かと比べている。

『あいつ』というのが特定の一人なのか、それとも複数『あいつ』
と呼んでいた人物がいるのか。

それすら分からないが、どうやら自分はその『あいつ』を中々信
頼しているらしい。

「そうやけど……そうや、こうしたらどうやら、アクセルさん」

「はい、何スか？」

何か考え付いたのだろう。

……まあ、大体は読めているが。

「民間協力者として雇われるってのはどうやる？」

「……やっぱり。そんな気がしたんだよな」

ふっ、と軽く笑う。分かっていたとばかりに。

それにはやても笑いを返した。ばれていたかとばかりに。

「俺ほどの男を、二佐みたいなべっぴんさんが放っておくはずがな
いか」

「つてえ！全然、分かってへんやんか！！それにべっぴんさんって、

「ちょっと古いで！」

「いいツツコミだ。それだけの技量なら世界を狙えるんじゃないか？
ま、顔を赤くするのを直せたらの話だけだ。」

「おい、てめえ！はやてをからかってんじゃないやねえよ！そもそもなあ
！」

「分かってますって。監視の意味もあるわけでしょ？……逆にほっ
ぽり出されても、記憶がないんじゃないか、どうしようもないしね」

「……分かってんならいい。もう、はやてをからかうなよ？」

へいへいと頷くアクセル。その軽い調子に呆れながら舌を打つヴィ
ータ。それをなだめるのは。微笑みを浮かべるフェイト。
アクセルへの疑惑の念は徐々に薄れつつある。

だが、唯一彼に鋭い視線を向ける人物がいた。シグナムだ。
今まで傍観者に徹し、その様子をじっと見つめていた彼女は、先ほ
ど発した彼の言葉について考える。

（素人の考え方ではないな）

普通なら監視という結論には至らない。
管理局や何かしらの軍隊にいた経験のある者なら別だが。
記憶喪失を名乗る男。アクセル・アルマー。
シグナムは彼への疑いを少しばかり強めた。

「ごほん！……話を戻すで。それで納得してくれたんか？」

その顔はまだ赤いままだが、それは気にせず、アクセルへ問い掛け
る。

アクセルは少し悩んだ。断る道理はない。だが、しかし。

「……もちろん。その代りといつては何ですけど……」

「もちろん身の安全は保障するで。衣食住はもちろん、記憶を戻すための情報も積極的に提供する」

「わお。豪勢っスね。それで？俺は何をすれば？」

そこまでするには、結構ハードなんだろうか。

アクセルは少し心配になってきた。

「とりあえず、戦力提供やな。ガジェットとの戦闘も難なく終わらせたみたいやし、問題はないやろ。あとは……新人への教育にも少し関わってほしくはある」

教育と来たか。やってやれなくはないだろうが。

まあ、大丈夫だろう。メインというわけでもなさそうだ。

はやてへと近づき、右手を差し出す。握手だ。

「分かりました。これからよろしくお願いしますよ。部隊長殿」

その言葉に満足したように微笑み、同じように差し出した手を握る。

「はやてでええよ。アクセル君」

「あらら。そっちはもう切り替えてんのね……じゃあ、よろしく。はやて」

「……はやて。アクセルを医務室に連れて行こうと思うんだけど。手を放してもらえるかな？」

差し出した腕に絡みつく人物。……フェイトだ。何故かは知らないが、怒っている？

というか、いつの間に呼び捨てに？

「あ、ああ。ええよ。もちろん。あは、あはは……」

フェイトが放つ黒いオーラに押されてか、引きつった笑みを浮かべ、ゆっくり離れていくはやて。

「ま、待って。フェイトちゃん。私も行くよ！」

「な……じゃあ、あたしもついていくぞ！」

なのはが慌てたようにアクセルに近づき、フェイトが抱き着く腕とは逆の腕を取る。

ヴィータも慌てて、それに続き、掴む腕がないことが分かると、とりあえずといった感じで隣に立った。

アクセルは突然の状況に困惑を隠せない。

一体どうなっているのか。いつの間に彼女らの好感度を上げた？

残ったシグナムはシグナムで、傍観者のままだった。

「何や？早速、モテモテやな。アクセル君？」

回復したのか、にやにやと笑いながらからかうはやて。

確かに、女性に囲まれるのは嫌いじゃない。

「だけど、なんか納得がいかないんだな、これが」

二人に引きずられ、一人を伴って、アクセルは部隊長室から出て行った。

第4話 「ファーストコンタクト」 (後書き)

ちなみにラストのなのはさんの慌てぶりはフェイトへの心配から、
ヴィータの場合はなのはさんへの心配と監視のためです。

次回はフォワード陣との出会いです。

訓練か出撃も入れたいと思っております。

次話にご期待ください！

第5話 「訓練と疑念」 (前書き)

帰省先から投稿。

少しばかりのんびりしすぎました。

それでは、どうぞ。

第5話 「訓練と疑念」

「検査の結果だと、本当に記憶喪失みたいね」

二人の女性に引きずられ部隊長室をあとにしてから少し経った。

アクセルは医務室で診察を受け、そして今、白衣を着た金髪の女性から結果を聞かされていた。

やはり記憶喪失。聞く限りはしばらくこのままのことだ。

「そうつスか……記憶喪失に効く薬とか、ありませんかね？」

「残念ですけど、聞いたことありませんね」

につこりと返す医務官 シヤマルという名前らしい に対して、

そいつは残念、とばかりに肩をすくめるアクセル。

もちろん本気じゃなかったが、少しは期待してもバチは当たらないだろう。

「……なあ。お前、ずいぶんとお気楽だな。自分が何者かも分からなくて、不安じゃないのか？」

その姿にヴィータが口を開く。どうも心配してくれているらしい。

あまりにも軽い調子なのは、空元気だと思っっているのだろう。

案外、面倒見がいいのかもしいな、この子は。

「不安になったからって、記憶が戻るわけじゃないし。名前が分かっただけで、もうけものさ……心配してくれんのかい？嬉しいねえ」「なっ！？ちげーよ！何バカなこと言っただ！」

ふいっと顔をそむける。耳は赤くないが、間違いなく顔は赤く染ま

っている。

それを眺めていたなのはが微笑む。

「ふふっ、前向きだね」

「そういうこと。もちろん、戻るにこしたことはないけど……えっと、確か……」

言いよどむアクセルになのはの手が差し伸べられる。
それを握り返して、椅子から立ち上がる。

「改めて、高町なのはです。よろしくね、アクセルさん」

「よろしく……ん？」

引つかかる。キーワードにぶつかったか？

高町、なのは……何か、違う。

突然、難しげな顔をしたアクセルを心配してなのはが覗き込む。

「？……どうかしました？」

「あ、いや……なのは一尉の名前、ファミリーネームが先なんスね」

「なのはでいいよ。うん、私が生まれた土地はそうなんだ。はやてちゃんも同じだよ」

なぜだろう。何か、違和感がある。彼女は、そう、確か……

務空尉。

『隊長のナノハ・タカマチ。階級は特

「っ！？」

何だ、今のビジョンは。人形のような表情のなのはが一瞬脳裏をよ

ぎり、消えた。

(俺は、なのはを知っていた、のか?……駄目だ、思い出せない)

「大丈夫?アクセル君」

「突然どうしたの?眉間にしわが寄ってるよ?」

シヤマルとフェイトも寄ってくる。

そんなに難しい顔をしていたのだろうか。

これ以上心配させるわけにはいかない。ただでさえ、迷惑をかけているのだし。

両手を体の前で振って、問題ないことをアピール。

「いや、大丈夫。検査も終わったし、次は何の時間かなと考えてただけさ」

「そう?……じゃあ、次は新人のみんなに紹介するから、移動しようか」

そのなのはの言葉で診察はお開きとなった。

アクセルはシヤマルに礼を告げて、医務室をあとにした。

今回は自分の足で歩いて。

〈第5話 「訓練と疑念」〉

「それじゃあ、アクセルさんとフォワードメンバーで、模擬戦いつてみようか!」

どうしてこうなった。

落ち着くんだ、アクセル・アルマー。

記憶喪失の俺でも理解できるように、分かりやすく整理しよう。
えっと……

新人の四人と挨拶しよう。

訓練施設へ到着。立体画像によるビル群の中に四人の人影を発見。

なのは（以下な）「みんな、集合〜！」

な「新任教官のアクセル・アルマーさんです」

アクセル「ども、記憶喪失のアクセルです」

オレンジツインテ「ティアナ・ランスター二等陸士です！」

青髪ハチマキ「スバル・ナカジマ二等陸士です！」

赤髪少年「エリオ・モンディアル三等陸士であります！」

ピンク髪少女「えっと、キャロル・ルシエ三等陸士で、あります
！」

な「挨拶も終わったし、それじゃあ……」
冒頭へ。

……ダメだ。わけが分からんぜ。

アクセルの目の前にはバリアジャケットを展開した少年少女が四人
それぞれデバイスであろう拳銃、籠手、槍で武装し、一人は小さな
竜を従えている。

もう一度言っ。どうしてこうなった。

「あの、なのは一尉？ちょっと急すぎやしませんかね？」

「大丈夫だよ。みんなの方は準備万端だよな？今日の訓練はこれが締めだから、しつかりやろう！」

「……はい！」「……」

「……フォローなし、なのね」

四人が声をそろえて返事をする。

というか、何故この子たちは疑問を持たないんだろう？

それに、さっき出撃したばかりじゃないのか？

アクセルはがっくりと頂垂れた。どうやら諦めるしかなさそうだ。

……ここでは事情聴取と書いて尋問。自己紹介と書いて模擬戦と読むんだろうか。

そんなことはないはずだ。うん、そんなはずはない。

そのことはおいおい追求していくことにしよう。

「ハア……ソウルゲイン」

呼びかけに応え、ペンダントが光を放つ。アクセルの身体が爆発的な光に包まれると、次の瞬間には蒼い装甲が彼を纏っていた。

それを見たフォワード陣がそれぞれ感嘆の声を上げる。

特にスバルとエリオは目を輝かせていた。カッコいい、なんて口から漏れている。

「こら、スバル！集中しなさい！」

「ごめん、ティア……でも、カッコいいよね！訓練終わったら、どこのデバイスか聞かせてもらおうと！」

「スバルさん、僕も一緒にいいですか？」

「あ、エリオ君。私も……」

何やら盛り上がり始めた。

こういふ会話だけ聞いていると普通の子たちなんだが。

「えっと、みんな、準備はいいかな？」

「は、はい！いつでも大丈夫です」

様子を見かねたなのはが口を出し、ティアナが反応した。

この子がリーダーなのは間違いない。というか、委員長だ。

「ルールは簡単。デバイスが戦闘不可の判定を下したら、そこで自動的にデバイスが待機状態になるからね。アクセルさんの場合は、こちらで判定を指示します……フォワード陣の全滅か、アクセルさんの撃墜。どちらかの勝利条件が満たされたら終了……それじゃあ、十秒後にスタートだから」

ちらと、なのはがアクセルに視線を向ける。

要は、十秒間はじっとしていてくれ、ということだろう。

それに無言で頷く。柔和にはほほ笑むのは。

「それじゃあ、レイジングハート、カウントお願い」

《All right, master. Count start.
Tenn, nine, eight》

カウントが始まると同時にフォワード陣が全力で後退していく。

特にスバルは抜きんでて速い。よくみると足にはローラーシューズが装備されている。

残りは全員駆け足だ。おそらく飛行する術を持たないんだろう。

「となると、飛行もなしか」

《Four, three》

カウント終了間際、ある程度の距離を取った四人はとあるビルの中

で曲がった。
情報によると、狭い路地になっているらしい。あそこに誘い込むつもりなのだ。
戦力が分からない相手に対して取る戦法として、奇襲や待ち伏せは有効だ。

(こんな判断が普通にできる俺って……ますます謎めいた存在だな、こいつが)

いまは、そのことは置いておこう。

何せ、今後よく関わることになる新人たちとの初戦だ。
力量を知っておかないと、明日から困るだろう。

《One , zero . Let 's go !》

「了解。んじゃま、行きますか！」

ブースト。一気にビル街を突き抜け、曲がり角まで向かう。

迎撃準備。右の拳にエネルギーを集中させ、左腕は回転させる。
角を曲がる。見えたのは二つの影。

右拳を顔の横で構え、空間に作られた青い帯を渡って向かってくるスバル。

手首部分にある歯車状のパーツが回転して唸りを上げている。

槍を正面に向け、空気抵抗を受けないよう身を屈めて突撃してくるエリオ。

槍の穂先は電気を纏わせているのか度々光を放っている。

それにこのスピード。スバルはローラーシューズによるものだろうが、エリオは何らかの補助を受けた上での速度だろう。

一撃で倒す、もしくは大きなダメージを与えるつもりでの連撃。

「へっ、おいでなすった！」

だが、それは予想済みだ。アクセルはその可能性を考慮して迎撃の用意をしていた。

右の拳を突き出す。その動作と連動して放たれるのは無数の蒼いエネルギーギーン弾。

青龍鱗の拡散型。それが一種の弾幕と化して、スバルとエリオの視界を埋める。

「よいしょおっ！！」

「うそお！？」

思わぬカウンターに慌てて方向転換を行おうとする二人。

スバルは新たなウイングロードを作ること回避できたが、エリオはそうはいかない。

元々直線しか動けない上に、補助魔法による加速。

静止しようとしてもその速度では急には止まれない。

結果、その身体全体で青龍鱗を受け、大きく仰け反り倒れる。

出力自体は低いが、戦闘不能判定は免れないはず。

アクセルはエリオの無事を遠目に確認してから、方向転換して突っ込んでくるスバルに向き直る。

「リボルバー……シユートツ！」

先ほどから唸りを挙げていた歯車。その周囲に発生していた衝撃波を撃ち出す。

右手で青龍鱗を放ったばかりで、チャージは間に合わない。だが、左腕は既に最大まで回転している。

「こっちも……ロケット・ソウルパンチ！ってなあ！」

左腕を前腕装甲ごと撃ち出す。
螺旋状に放たれた剛弾は易々とスバルの放った衝撃波を貫き、そのまま彼女へ向かう。
スバルは狼狽しながらも右手を突き出してシールドを展開。玄武剛弾を受け止める。

「くうつ、重いい……!!」

それを視界に入れつつ、ソウルゲインが跳躍。延長されたウイングロードに着地した。
左腕が弾かれる。シールドにはひびが入っているものの破られてはいない。そのことに息をつくスバル。

そして、気が付く。眼前にソウルゲインが立っていることに。

自身が玄武剛弾を受け止めるためにその自慢ともいえる足を止めていたことに。

その驚いた瞬間。その隙が命取りだ。

「悪いな、いただくぜ！」

シールドを張ったままのスバルに肉薄。弾かれた左腕はあるべき場所に戻っている。

右の一撃がひび割れていたシールドを叩き割り、左の一撃が咄嗟に彼女が防御行動として交差した両腕にヒットする。

その衝撃に耐え切れず吹き飛ばされ、ビルに叩き付けられるスバル。スバルの様子を見ようと近づくと近づくアクセルの耳に、ソウルゲインが魔力反応を捉えたことを知らせる警告音が響く。

「クロスファイア、シュート！」

「フリード、ブラストフレア！」

見れば視界の端に四つの誘導弾と三つの火球。

身体をひねり、ウイングロードから降りることでそれを避ける。放たれて来た方向にはティアナとキヤロ、それにチビ竜がいた。

当初の作戦が失敗したことで、姿を隠す意味がないと感じたのか。

「なら、今度はこっちの番だな、これが！」

短期決戦に持ち込むつもりで、一気に距離を詰める。

その加速具合に顔色を変え、再び魔力弾と火球を放つ。

直撃コース。避けられるはずがない。そうティアナは思っていた。

だが、世の中そう上手くいくものではない。

「き、消えた！？」

「ええ？！」

「キユクルー！」

呆然とする二人と一匹。しかし、それも長くは続かない。

一陣の風が二人の間を通り抜けた。同時に響く撃墜判定のアラート。見るとバリアジャケットに一閃の裂傷。二人は遅れて振り向く。

そこには悠然と背中を見せて佇むソウルゲイン。肘のブレードが通常より伸びている。

それから模擬戦が始まる時と同様、爆発的な光がその蒼い装甲を包んだ。

「おっし、これにて今日の授業は終了！のびてる二人を連れて、反省会といきますか！」

振り返り、そう笑顔で告げるアクセル。

その戦闘の凄さとは逆の快活さに、二人は言葉を失った。

アクセルがフォワード四人を集めて、いまの模擬戦の反省会を行っている。

それを隊舎の屋上から見ているシグナム。その眼は鷹のように鋭い。

「どうしたんだよ、シグナム？」

うしろから聞こえた声に視線だけをずらす。

そこには訝しげに歩きよってくる仲間の姿。

「ヴィータか……」

「そんなにあいつが気になるのか？ シャマルが言うには、本当に記憶喪失らしいし、問題ねえと思うぞ？」

そう言いながら、隣に立つヴィータ。彼女もアクセルを見るため、身を乗り出した。

視線の向こうではアクセルが身振り手振りで何かを示し、スバルがティアナは眉間を押さえ、残った二人は呆れながらも楽しそうだ。

反省会はもう終わったらしい。今は雑談中だろうか。

あの軽さが若いフォワード陣にはちょうどいいのだろう。

「人格は問題ないだろう。新人連中にも好かれている。だがな、奴の技術には目をつぶれんものがある」

「ま、そこは同感だ。今日の戦闘。今の模擬戦。記憶喪失は別にしても、どこかで高度な戦闘訓練を受けてるはずだな」

「それに……覚えているか、四年前の観測指定世界でのことを」

突然、話が変わった。驚きつつもヴィータは頷く。もちろん覚えていた。

新暦71年。第162観測指定世界。初めてレリックが確認された事件。

二つの地点でレリックが確認され、跡形もなく消滅した。

その時、一方にはなのはやフェイト、はやてが。もう一方にはヴィータとシグナムが駆け付けた。

なのは達にはガジェットの影響があつたが、ヴィータ達の方にはなかった。

正確に言えば、駆け付けた時、全てのガジェットが破壊されていたのだ。

「あの時、現れた奴……あのソウルゲインとやらに似ていると思わないか？」

「そう言われると……けどよ、四年前の話だぜ？それにあれ以来、姿を見せてないし」

「可能性の問題だ。我らが主を脅かす危険がある……これだけでもアルマーに目を付けている理由にはなる」

鋭い視線の先。

そこには何かからかわれたのかティアナに詰め寄られているアクセスルがいた。

この短時間で随分と仲が良くなったものだ、とシグナムは呆れ半分で思った。

「……杞憂だといいが」

そうだ。あんな軽い奴が何かをすることは思えない。

それに四年前に出現した奴は様子からして無人の魔導兵器だったようだが、ソウルゲインはデバイス。

何も関係がないだろう。奴とは。

コードネーム『ソートマン』とは。

第5話 「訓練と疑念」(後書き)

ちなみに、スバルとエリオが仕掛けたあれは、ストライクドライバ
ー(未遂)、模擬戦ラストは舞朱雀(てかげん)のつもりです。
分かりにくかったかもしれませんが(汗

次話は、地球への出張か、戦闘狂シグナムとのバトルかで悩み中で
す。
それでは、次回お会いしましょう！

第6話 A 「汚れのない、その瞳に」 (前書き)

現在、帰省先から帰還中。

ですので、ちよつと趣向を凝らしてみました。

それでは、どうぞ。

第6話A 「汚れのない、その瞳に」

「……で、フェイト執務官に拾われたんだな、これが」

場所は機動六課隊舎食堂。

訓練が終ってから、夕食をとるために四人がけのテーブルにアクセルはいた。

同じテーブルにはティアナ、スバル、エリオ、キャロの四人。

フリードは何故か、アクセルの肩に乗っていた。

俺は止まり木かなんかかよ？とか何とか文句を言いつつも、振り払わずにいた。

ついだとばかりに食堂のおばちゃんから、リンゴをもらって与えていた。

それを見ていたキャロはおろかエリオも、アクセルを見つめる瞳が輝いていた。

その純真な瞳に、少し照れたのは心の内にしまっておこう。

「拾われたって……捨て犬じゃないんですから」

「いやあ、事実だから仕方がないんだな、こいつが」

呆れ顔のティアナに、笑顔で返すアクセル。

食事中、会話の議題は『アクセルさんのこれまで』ポロリはないよ』だった。

と言っても、記憶喪失の身。話すことは少ないし、面白味もない。だから、それを盛り上げるのもアクセルの腕にかかっていた。

そして、それは成功した。

「それを自慢げに話すのもどうかと。というか記憶喪失ってこと、普通はそんなに気楽に話せませんよ？」

「ふう、ティアナは若いのに、難しく考えすぎなんだよ。そんなじゃ将来、ハゲるぞ？」

ハゲません！と顔を真っ赤にしテーブルを叩いて立ち上がる。それをスバルとキャロがいさめた。エリオは苦笑いしている。

「それに記憶喪失っていつてもなあ……服も一人で着れりゃあ、トイレだって行ける。戦闘もな」
「そこまで忘れられても……」

エリオが苦笑いのままつつこみを入れる。確かにその通りだ。というか、そこまで忘れていたら、最悪の場合、この場にいらない。本当によかった、とアクセルは自分の欠片ピースの足りない記憶パズルに感謝した。

「第6話A 「汚れのない、その瞳に」」

夕食を終え、アクセルはエリオに連れられて部屋に向かっていた。何でもルームメイトがエリオらしい。内心、ホツとしていた。

「いやあ、エリオと一緒によかったよ。見知らぬ誰かだと、また事情を話さなきゃならないからな、これが」

「あはは、僕もアクセルさんが一緒によかったです。一人だとあの部屋、少し広くて……それに」

尻すぼみになるエリオ。

どうした？とエリオの前に立ち、膝を折って顔を覗き込む。目を逸らしつつ、ポツリとつぶやいた。

「アクセルさんって、その、何だか……お兄さんみたいで

言ってから、恥ずかしそうに顔をそらした。

アクセルはそれを見て、にやりと笑う。

「はは〜ん。そういうことか」

「い、いいんです！忘れてくださいー！」

「まあ、待てよ。好きに呼んでいいぜ」

早足で先へ進もうとするエリオの肩を掴み、そう告げる。

それを聞いて振り返るエリオ。首を痛めるんじゃないかってぐらいの勢いだった。

「ほ、ほんとにいいんですか？」

「ああ。悪い気はしないね。兄さんでも、兄貴でも、師匠でも好きに呼んでいい」

両手を広げ、大歓迎ということアピール。

記憶を取り戻すことも大事だ。だが、それだけに執着して、新しい関係を作ることをおろそかにしてはいけない。

そう考えていたアクセルにとって、この申し出は嬉しかった。渡りに船、とはこういうことを言うのだろう。

「最後はちょっと……兄さんで、いいですか」

「おう、もちろんだ。敬語もなくていいんだな、これが」

そして、手のひらをエリオに向ける。

やや間を置いて、その意味を理解し、手を挙げる。

「よろしくな、我が弟よ」

「うん、よろしく。兄さん」

廊下に手と手が打ち合わされた音が響く。

それから、二人の笑い声が響き渡った。

翌朝。仲良く談笑している、アクセルとエリオ。

食堂に来る時も、朝食時も。訓練に向かう時も。そして今、準備運動中も。

それを不思議がっているフォワードメンバーを代表してスバルが尋ねた。

「ねえ、エリオ？アクセルさんと昨日、何があったの？」

「え？何もありませんよ、これが……ね？兄さん」

「そ。ちよっと仲良くなっただけなんだな、これが」

呼び方が変わり、口癖が移っているのに、何もない、ちよっと仲良くなっただけとは、これいかに。

頭を抱えるティアナとスバル。それを見かねてかキャラ口が近づく。

「エリオ君！！」

「きゃ、キャラ口。どうしたの？怒ってる？」

そうだってやれキャラ口、このままじゃ訓練ができないって、とばかりにティアナとスバルが見つめている。

「ずるいよ、一人だけ抜け駆けして！私も、お兄ちゃんって呼びたかったのに！」

「っつて、そっち！？」

二人のツッコミが響く中、アクセルが身を乗り出す。

「キャロも好きに呼んでいいぜ。お兄ちゃんでも、にーにーでも、師匠でも、な？」

「……兄さん、師匠って好きだね」

「じゃあ、お兄ちゃんです」

少し顔を赤くしながら、手を差し出す。

ボケをスルーされながらも、アクセルはその小さな手を握った。

フリードが昨夜のようにアクセルの肩に乗る。気に入ったのだろうか。

懐かれているのだ、悪い気はしない。

「記憶喪失から二日……俺に弟分と妹分ができた！並みの記憶喪失者じゃ、体験できないことなんだな、こいつが」

「というか、記憶喪失って体験自体がまずできませんよ。それより、早く訓練を始めましょう。なのはさんも待ちかねてます」

「にやはは……仲良しなのは、いいことだよ？」

ティアナが促す先には、バリアジャケットを展開済みののが苦笑していた。

悪いことをしたか。訓練が終わったら、謝罪と共に昼飯をご馳走しよう。

まずは、訓練だ。

「それで、今日はどうします？なのは一尉」

「それじゃあ……」

「すまん、高町。少しいいか？」

なのはがその声に振り向く。

そこには騎士甲冑を展開し、納刀されている愛刀を左手で持つシグナムがいた。

「シグナムさん、どうしました？急な任務が入ったとか……」

「いや、違う。アルマーに用があつてな」

鷹のような視線が向けられる。事情聴取（という名の尋問）の時と同じ視線。

それに何やら嫌な予感を感じたアクセルは、言い訳を考える。

「お、俺っスか。いやあ、シグナム二尉にその気があるなんて。でも、俺には多分、記憶が戻ったら超べっぴんの彼女が……」

「私と、闘え」

有無を言わせない口調。その気迫が真剣だということ物語っている。

肩に乗っていたフリードは、気迫に押されたキャロの傍に戻っている。他のメンバーも似たようなものだ。

どうやら諦めるしかないらしい。心の中で溜め息をつく。

「……分かりました。なのは一尉、早朝訓練は中止ってことで。あとは頼みますわ」

「うん……じゃあ、みんなは戻ろうか」

なのはに事後を頼み、シグナムに向き直る。

視界の端には駆け足のフォワードメンバー。全員が心配そうな視線を向けてくる。

ということは、目の前の彼女の實力は、相当のものだということ。

(こいつぁ、やべえな……)

アクセルは眼前の恐怖への対処法に、頭を悩ませた。

第6話A 「汚れのない、その瞳に」 (後書き)

エリオとキャラコがお兄ちゃん子に。

アホセル、最大のピンチ。

そして、シグナムの真意とは。

第6話B 「その瞳に、うつるもの」

次話もお楽しみに！

第6話B 「その瞳に、うつるもの」(前書き)

故郷から帰還してから初投稿。

シグナムの回想から始まります。

彼女の回想に出てくる『ソードマン』の正体とは？
それではどうぞ。

第6話B 「その瞳に、うつるもの」

Side シグナム

もう四年も前の話になる。

初めてレリック絡みの事件が起こったのは。

観測されたのは第162観測指定世界。反応はニヶ所。

主やテストロッサ、高町が一方の確保に向かい、私はもう一方をヴァイータと共に担当することになった。

主たちは同窓会の気分だったと言っていたな。

だが、あの事件を思い返すと私はとてもそんな気分にはなれない。

あの正体不明 アンノウン 『ソードマン』のことを思い出すと。

発掘現場に辿り着いた時、私たちは眉をしかめた。

どうやら戦闘があったらしい。ガジエットの残骸が辺りに散らばっていた。

地面に降りて調べてみると、妙なことが分かった。

ガジエットと対峙していたのは魔導師ではない。少なくとも管理局員ではないということだ。残骸の傷跡がそれらを物語っている。

鋭い刃物で一刀両断されたもの、爆発により中枢部分を露出させたもの、三本の爪痕が残されたもの。

最初の事例だけならば、魔導師の仕業と言えるが、それにしても私のように剣を使う局員は数少ない。

その上、爆発など質量兵器レベル。局員の仕業ではないのは確実だ。

それを確認してから発掘箇所へ歩みを進める。

その時だ。紅い影が躍り出たのは。驚きながらも身を逸らす私とヴィータ。その間を影は通り抜けた。振り向き、姿を目で捉える。紅かったのはマント。全身をすっぽりと覆っていた。テスタロツサを連想させたが、その考えを一瞬で振り払う。今は目の前の相手に集中しなければ。

相手はそのマントをひるがえして、左手に持っていた剣を構える。一見、居合の構えにも見えるが、何らかの力が刀身に渦巻いている。二対一の状況で交戦を選ぶ。余程自信があるのか、身の程知らずの馬鹿か。

私は直感で前者だと思った。何か、考えがあるのだ。この状況を打破できる何かが。

おそらく、あの剣に集まる力だ。

発揮される前に片を付ける。

レヴァンティンのカートリッジをロードし、居合の構えを取る。

接近しての紫電一閃。その一撃で沈める。それを見たヴィータも構えた。

踏み込んだ瞬間。相手が跳躍する。……跳躍？

理解が追い付かず、空を見上げた。そして、相手の狙いが分かった。

太陽を、背にしたのだ。

光に目がやられる。追って見上げたヴィータも同様だ。

目を細めつつ、相手の姿を見つけた。

剣を抜き、その刀身に集まっていた力　風だ　を解放する。

それは一種の竜巻となって私たちに襲いかかった。

周りの砂塵も巻き上がり、視界を覆う。砂ぼこりに目を潰され、開くことはできない。

そして、殺気。一瞬遅れて、レヴァンティンを抜いた。甲高い金属音が響く。

無理やり瞼を開く。見ると、相手の剣の切っ先をレヴァンティンの刀身は捉えていた。その真下は私の心臓。相手が固まる。勘に頼った私に驚きを隠せないのだ。

その隙を狙って剣を弾き、返す刀を振り下ろす。

紫電一閃。何の変哲もない無骨な一撃。それ故に威力は保障されている。

相手の黒い装甲に大きく傷を残すことはできたが、無理やり開けていた瞼が閉じて追撃が出来ない。

視界が元通りになった時にはすでに奴の姿はなかった。

魔力反応もなし。というより、私たちが現場へ到着した時から妨害電波が発生していたため、追尾はおろか通信回線すら開けなかったらしい。

つまり、奴の手掛かりは皆無ということだ。

管理局は奴を、ガジェット・ドローンを扱う組織に対抗する組織。

そいつらが扱う新型の人型魔導兵器に分類。

コードネームを『ソードマン』とした。

だが、奴は本当に無人なのだろうか。

思い返す。太陽を背にする策。真正面から斬り合うのではなく、風により砂嵐を起こす奇策。

何よりも私が一撃を受け止めた際に、驚いた。機械は感情を持たない故に驚かない。

しかし、確信がない。だから報告するわけにもいかず、記憶の片隅に置いていた。

そして、四年。記憶を失った男が現れる。

使用するデバイスは『ソードマン』とよく似ていた。

全身装着型デバイス。その可能性を私は考えていなかった。
新人の一人に拳装着型のアームデバイスを愛用している者がいる。
ならば、全身装着型の新型デバイスという可能性は否定できない。

それに、あの時と同じもの。『ソードマン』を初めて見たとき感じ
たもの。

それを目の前のこいつから感じる。

アクセル・アルマー。そして、ソウルゲイン。

シグナムはその鷹の目に炎を灯し、愛刀レヴァンティンを抜いた。

Side Out .

〈第6話B 「その瞳に、うつるもの」〉

「うおりゃっ！……お、避けれるもんだ」

シグナムとの対決が始まってから数分。アクセルは逃げに徹してい
た。

理由は簡単。彼女の一撃、その全て剣呑な気配を放っているからだ。
まともに受けたならば……考えたくもない。

「どうした！逃げてばかりでは、こちらは倒せないぞ！」

「そりゃあ、ご親切にどうも！ですがね、シグナム二尉！制限時間
内に、逃げ切れれば、俺の勝ちなんだな、これが！」

斬撃の合間を縫ってアクセルが返す。

そつだ。この模擬戦が始まる前になのはが決めたのだ。制限時間の設定。それを超えたら、引き分けにすると。アクセルは、それまで逃げ切るつもりだった。逃げるが勝ち。少々みつともないが、彼女を相手取るよりはマシだ。プライドと命。どちらが重いか、ということだ。

「フツ、今日決着がつかなければ、明日つけねばいい」

「……もしかしくなくても、無限ループってわけですかい？」

分かっているならばいい、とばかりにさらに笑みを浮かべる。

どうやら彼女からは逃げられないらしい。

……それにしても自分が何かしただろうか。

始まる前にたたいた軽口ならば謝罪するが、関係はなさそうである。気に入らない点でもあったのだろうか。

フェイトとの仲か？ そんなに親密に見えただろうか。

「もらったぞ！」

そんな風に思考の海に潜っていたアクセルは隙だらけ。

シグナムは悠々と彼の懐に入り込む。構えは居合抜きのような。

「しまっ?!」

「ハアツ!!」

右脇から左肩。ソウルゲインの装甲に傷をつける。

対するアクセルは体が動くままに右膝を繰り返す。反撃はシグナムの腹を捉えた。

苦悶の表情を浮かべてその場を離脱。その様子を見ると、ある程度深かったらしい。

その間にアクセルはソウルゲインの簡易チェックを行う。どこか慣

れている手つきで。

「薄皮一枚……まだまだ」

「くっ……やはり、な。……アルマー、お前の正体。何となくだがつかめたぞ」

「な……」

その発言に、愕然とする。

まさか今の攻防で思い至ったとでも言うのだろうか。

「お前は根っからの戦士、もしくは兵士だ。しかも熟練の、な。先ほどの一撃に対して起こした行動が、それを物語っている」

「……どういう、ことスか」

「お前も心のどこかで感付いているのではないか？普通なら一撃を受ければ、一度退いて態勢を立て直そうとする。今の私のように。しかし、お前は踏み込み、私に一撃を加えた……リーチは短いが大きなダメージを与えられる膝で、だ」

剣を突き付けられ、そう言った。その切っ先に居心地が悪くなる。違う。俺はそんな人間じゃない。それではまるで戦闘狂バイサーカーみたいなものではないか。

だが、彼女の言うこともまた事実。俺はいつたい、何者なんだ……俯くアクセルを見て、シグナムは切っ先を下ろし、口を開く。

「アルマー。私は何も、毎日お前と剣と拳を交わしたいわけじゃない。私は、私の中の疑念を払拭したいだけだ。記憶を失っているお前を付き合わせるのには申し訳なく思うが、だからと言って、止める理由にはならない」

アクセルが顔を上げる。シグナムと視線が交わる。

彼女は薄く笑うとレヴァンティンを構えた。

「私にも護りたいものがある。だが、私は不器用だ。護るためには
剣を取る、それしか方法が思いつかない。そんな……バトルジャンキー戦闘狂なのさ」

護りたいものがある。そのために剣を取る。

何故だろう。その言葉はアクセルの胸によく響いた。

記憶を失っている俺が護るべきものは。

そんなものは決まっている。プライドか、命か。

俺は、俺たちは。

「へっ。なら仕方がないスね……シグナム二尉。少し、本気でいきますぜ」

「フッ。見えるぞ、アルマー……今のお前は、とても良い眼をしているな」

プライド
信念を取る。

「……この切っ先、触れれば斬れるぞ」

口について出た言葉。記憶がふいに出てきたのか。

体勢を低くするアクセル。ソウルゲインのブレードが伸びた。そして、大地を蹴る。

迎え撃つシグナム。カートリッジを排莢。剣に炎が宿る。

ある程度の距離まで来たソウルゲインの姿がいくつにも増えて消え

る。シグナムの目では捉えられない。

驚く彼女に正面から斬撃が走る。ソウルゲインだ。

と言っても、その姿が確認できたわけではない。ブレードが振るわれ起きた剣閃が彼女の視界で光っただけ。

一撃を受けたと気が付き、その剣閃が向かった先。つまり、背後へ視線を向けようとするシグナム。

その前に肩口から斜めに一閃。思わず身体が変に仰け反る。

「ぐうっ!!」

一撃の重さに声が漏れる。

その瞬間に、また一閃。今度は真横から。段々と速度が増してきている。

シグナムは考える。おそらくアクセルは自身の身体を中心としてすれ違いながらブレードで斬りつけている。

その動きはフェイト以上。彼女ですらこんな芸当は不可能だろう。

為す術もなく斬りつけられる。勘にも頼ろうも何も、感じた瞬間にはそこにはいないのだから役には立たない。

さらに全身が一瞬で斬り刻まれる感覚。そして、間隔が空く。

……とどめの一撃が来る。

(ならば　　上か!)

シグナムは直感で空を見上げた。そこに、拳を振り上げた蒼い戦神がいた。

装甲とは対象に、その眼が赤く尾を引き閃く

間に合わない。そうシグナムは思った。だが、体は空を目指し、腕は勝手に動く。

「紫電

」

「舞朱雀

」

ブレード同士が交差する寸前、互いの視線が合った。そのことに、シグナムは唇の端を上げ、アクセルはソウルゲインの中で薄く笑った。

「一閃!!」

「うおりゃあつ!!」

剣戟の音が大気を震わせる。

レヴァンティンが振り切られ、ソウルゲインは地面に着地した。

一瞬の沈黙。そして、時が動き出す。

飛行魔法が機能しなくなったのか、シグナムが落下してくる。

ソウルゲインは、アクセルはそれを両腕でしっかりと受け止めた。

「疑いは晴れましたかね、シグナム二尉」

「ああ。一応はな……最後の一撃、素晴らしかったぞ。アルマー」

その言葉に少し反応したアクセルは、空間にモニターを呼び出す。

ソウルゲインの簡易チェック。数値を確認している。

アクセルはまめな男なのだ。

「装甲は抜けてない……やれやれ」

「案外、丈夫なのだ。これなら、毎日本気でやっても心配はなさそうだ」

「勘弁してくださいよ。修理しにくいんすから……」

「安心しろ。六課のデバイスマイスターは優秀だ」

互いの冗談（シグナムの言葉は本気かもしれないが）に微笑みを交わす。

そうやって談笑していると、視界の端に人影が見えた。おそらくフォワード陣が駆け付けてきたのだろう。そして、アクセルは今の状況に気が付いた。わけもなく冷や汗が出る。嫌な予感がする。

「あ、あのですね、シグナム二尉。もう下ろしても大丈夫スカね？」
「ん？どうした……まさか、重いとか言うんじゃないだろうな。私も女だ。その言葉には少々、心を痛める」
「そうじゃなくて……困ったな、こいつは」

何とか、言い訳を考える。だが、フォワード陣が辿り着く方が早かった。

見るとフォワード陣の他になのは、そして何故かフェイトがいた。嫌な予感の正体はこれだったか。

「……シグナム。何しているのかな？」

フェイトが怖い。とてつもなく怖い。というか、黒いオーラが出ている。

フォワード陣なんか、模擬選前のシグナムにビビっていた以上だ。フリードなんか、地面に落ちて泡を吹いている。

「何とは？模擬戦が終って、今は……いま、は……」

ようやくシグナムも今の状況に気が付いたようだ。

アクセルは思う。この人は鋭いのか、鈍いのか。いったいどちらなのか。

今の状況。落ちてきたシグナムをアクセルは両腕で受け止めた。

アクセルの右腕は彼女の背中に、左腕は彼女の膝裏に。

そして、シグナムは落ちないようにアクセルに身体を預けている。

この状況。

人それを、お姫様抱っこと言っ。

第6話B 「その瞳に、うつるもの」(後書き)

コメディな終わり方になってしまった。
何故だろう、手が勝手にw

感付いていた方もいらっしやるでしょうが、『ソードマン』はブア
イサーガです。

もちろん、パイロットは……

まだ、明かしませんw

ついに舞朱雀(本気)が登場しました。

カッコいいと思っただけなら幸いです。

あと、うちのフェイトさんがなぜか嫉妬深いです。

まあ、そのうち治るでしょう。多分……

次話は出張を考えております。

そして、ついに『影』の尖兵が登場。

それでは、次回をお楽しみに。

第7話 「現れた『影』」(前編)」「(前書き)

ついに登場する、のか？

何となく、前・後編に分割してみました。

少々、オリキャラも登場。

それでは、どうぞ。

第7話 「現れた『影』（前編）」

「おーい、大将！待ってくれよ」

自室へ入ろうとするアクセルを呼び止める声が聞こえた。

シグナムとの模擬戦から二日。

彼女と僅かながら和解し、二人してフェイト（ザンバーモード）に追いかけられたのもいい思い出。

その間にも新人と訓練を続けていた。

スバルやティアナの突撃思考を抑え、エリオやキャロには咄嗟の判断力を学ばせた。

また、二度ほど出撃要請がかかった。どちらもガジェット絡みであったが、レリックの存在は確認されなかった。

先ほどの会議中のはやて曰く、段々とガジェットの動きが活発化しているらしい。

レリックではない“何か”の反応を辿って現れているのだと彼女は推測していた。

そして、いま、部屋へ入り眠ろうとする彼は呼び止められていた。

どこかで見たとような男性局員。確か、名前は……

「えっと、グラビリオン陸曹だっけ？」

「誰が大型機動兵器だ！俺はグランセニック！ヴァイス・グランセニックだよ」

「あゝ、すまんすまん。最近、出撃が多くて疲れてたんだな、これが」

両手を合わせて謝罪する。

それにしても、どこから流れてきた電波だろう。

「……まあ、いいさ。それよりも大将。聞きたいことがある。二日前の模擬戦の話だ」

その言葉にがつくり来る。またその話か。シグナムを抱きかかえた話だろう。

実はフェイトはもちろん、はやてやシャマル、スバルからも聞かれたのだ。

さらには驚くなかれ、なのはも聞いてきた。だから、もう飽きるほど話してきたのだ。

「あゝ、疲れてるんで。その話はまた今度つてことで……」

「待て待て！二日待たされたんだ、いいだろう少しくらい！……それで、シグナム姐さんの感触はどうだった？」

「か、感触つて……」

経緯じゃなかったのか。

まあ、男ならばそういう方向の話が聞きたいのも当然か。

しかし、感触か……

「ふむ。そうだな。鍛えてあるだけあって、普通の女性にしては硬め」

「ふんふん。それで？」

「しかし、その硬さの中にも柔らかさがあるのも確か……例えるなら、そう。しなやかな鋼といったところなんだな、これが」

「ほう！……」

「それに、こう体を寄せられた時に、ほのかに漂ってくる女性らしい香りが、これまた何とも……あ」

「なるほどなあ……ん？どうした、大将。顔が青いぜ？」

「そ、そういうわけだから！エリオを起こすと悪いし！俺はもう寝る！んじゃ、頑張ってくれ！」

青い顔に冷や汗を流し、アクセルは自室へと大急ぎで入った。
ヴァイスは不審に思いながらも、先ほどの話で妄想を膨らませた。

「硬さの中の柔らかさか。やっぱなあ、姐さんも女性らしいところがあるんだよな」

「ほう。ということとは、女性らしくはないと思っていたわけだな、お前は」

背後から響く、どすの利いた声に、ヴァイスはその身体を硬直させる。

錆びついた金属を思わせる動きで、ゆっくりと振り向いた。

そこには……

「し、シグナムの姐さん……どうして、ここに？」

「いや、なに。もうすぐ消灯だというのに、不審な男が二人見えたのでな」

「し、仕事熱心っすね。そ、それじゃあ、俺もこの辺で」

立ち去ろうとするヴァイス。

だが、阿修羅はそれを逃がさない。肩に手が置かれる。

その手はアクセルの言うとおり、硬い中に柔らかさが感じられる。

だが、皮肉にも、待ちわびていた感触をヴァイスは堪能することはできなかった。

「見たところ、まだ元気だろう？ どうだ、私の深夜訓練に付き合わないか？」

「えっと、拒否権は……？」

「ない」

その夜、訓練施設に男性の叫び声が響いたが、誰もが聞かぬふりをした。

〈第7話 「現れた『影』」(前編)〉

「出張、スか？」

翌朝、早い時間にもかかわらず、隊舎全体に響くほどの呼び出し放送で起こされたアクセルは、呼び出されるままに部隊長室にいた。途中、寝惚け眼のエリオに謝るのも忘れない。早朝訓練までは寝かせておいてやろうと、毛布を掛けてやる。アクセルはまめな男なのだ。

「そうや。場所は第97管理外世界。名称『地球』……私らの故郷や」

「え、そうなんスか？」

「三年くらい前まで住んでたよ……まあ、それは置いといて。昨夜、聖王教会から連絡があつてな。ロストロギア反応があつたらしいんよ」

「聖王、教会……」

その言葉が記憶を刺激する。また、キーワードにぶつかった。古代ベルカに実在した聖王。それを崇める宗教団体。……時間がある時に調べておこう。今は任務に専念しなければ。

「それで、出発はいつで？」

「今日、早朝訓練が終わったあとや」

早っ！そりゃあ、早すぎませんか隊長！というか、訓練は前提なんすね！

心の中でつつこみを入れつつ、了解しましたと敬礼。アクセルは部屋をあとにした。

あれから、数時間。訓練を終えて、支度をし、機動六課の面々は地球へと赴いていた。

集団転送ポートの先には青い湖、緑輝く森林が広がっていた。視界の先にはコテージらしきものも見える。

どうやら誰かの個人敷地内らしい。はやてのものだろうか。そんなことを考えているアクセルを置いて、フォワードメンバーは感嘆の声を漏らしている。

それを聞いて、確かに美しい光景だと改めて思う。それに、これだけの自然は懐かしい。

俺の『世界』じゃあ、こんな光景は少なくなっ……

(ん？俺の、『世界』……？)

何だ、今のは。

また、何かキーワードにぶつかった。

俺の『世界』ということは、俺は別世界から来たのか？

……駄目だ、あまりにも断片的だ。

「しっかりしてくれよ、くそ……」

「兄さん？難しい顔してるけど大丈夫？」

この自然に呆然としていたエリオが近寄ってくる。どうやら考え事をしていたのが顔に出ていたらしい。

心配しなくていいと、頭を強めに撫でる。エリオは少し驚きつつも、されるがままになっていた。

エリオを安心させた後、はやてに問い掛ける。

「はやて隊長。ここは具体的にどこなんすか？湖畔のコテージって、もしかして隊長の私有地すか？」

「ちやうちやう。ここはな、現地協力者の別荘で捜査員待機所として貸してもらっとるんや」

行く前に見た資料にあった、現地協力者のことか。

コテージどころか、土地を貸すとは、ずいぶん金持ちで気前がいい協力者だ。

そんなことを考えていると、車のエンジン音が聞こえてくる。

見ると、こちらへ近づいてくる一台の乗用車。見るからに、高級車っぽい風体だ。

「あ、自動車。こっちにもあるんだ」

「ティアナ、自動車くらいはあるさ。隊長や一尉が生まれた世界だからな、こいつが」

「ですよね。あは、あはは……」

そんなやりとりをしているうちに、車はアクセルたちの近くに停車中から、金髪でショートヘアの女性が降りてくる。勝気そうだが美人だ。

笑顔で駆け寄ってくる。なのは達も嬉しそうだ。

なるほど、友人でもあるわけか。ところどころ聞こえる会話からそう判断する。

リインフォースにも挨拶しているのを見ると、こっちの事情も知っているらしい。

一応の挨拶を終えたようで、こちらへ視線を向ける。

「アリサちゃん、紹介するね。彼は、アクセル・アルマーさん。教官役をやってもらってるの」

「どうも。ご紹介に預かりました、アクセルです。記憶喪失でもあるんで、そこんところよろしく!」

「記憶がない割には、ずいぶんと陽気ね……私はアリサ・バニングス。なのは達とは幼馴染よ。よろしく」

しっかりと握手する。彼女とは仲良くやれそうだとアクセルは思った。

しかし、幼馴染か。ということは……

「つかぬことをお聞きしますが、なのは一尉達は、昔からこうなんですか?」

「いい質問するわね。ん、なのははわりと鈍くさかったし、フェイトはぽけぽけしてたわね。はやては……変わらないわ。昔から、あんな感じよ」

それを聞いた三人娘が憤る。

反応がいいということは、身に覚えがあるのだろうか。

なのはが鈍いというのは、なんとなく意外だった。

「ちょ、ちょっとアリサちゃん!それはひどいと思うの!」

「ぽけぽけ……」

「あんな感じって、どんな感じや!ちゅーか、アクセル君も何聞いてんのや!」

「純粹な興味ですよ、部隊長殿」

「アクセル君！その好奇心！今から矯正したる！！」

のらりくらりと隊長たちが掴みかかってくるのを躲す。完全に置いてけぼりをくらったフォワードメンバーは、隊長たちが諦めるまでそのままだった。

現地協力者との挨拶を終え、一行は街中へサーチャーを設置する作業へと移行した。

「さて、どうするべきかな、こいつは」

そして、今現在アクセルはたった一人で街中を歩いていた。分かりやすく言えば、迷子である。

この年齢で迷子というのは非常に恥ずかしい。記憶喪失者で、初めての土地だということを加味しても、穴に入りたいくらいだった。

だから、通信で助けを呼ぶことも出来ず、ただ道なりに進んでいた。途中、不可視のサーチャーを設置することも忘れない。

「さて、覚悟を決める時かね……気が進まないんだな、これが」

流石に連絡すべきだろうか。すでに、空は夕暮れに近い。

夕方を知らせるためだろうか、何やら音楽も聞こえ始めた。道行く人も減っている気がする。というか、周りには人ひとりいない。

「ん？あれは……子ども、か？」

訂正。視界の先に小さな人影が見えた。こちらの姿を見つけてまっすぐ向かってくる。

少女だ。年頃は十代に届くか届かないか。服は白を基調としているが、赤い頭巾がその存在を主張している。

迷子だろう。大人が誰もいないので、たまたま通りかかったアクセルに助けを求めるつもりなのだ。

だがしかし、アクセル自身も迷子なので、結果は迷子が二人になるだけ。

やれやれとため息をついたアクセルの目の前で少女は止まり、その小さな口を開く。

「隊長。連絡がつきませんでしたので、直接来ましたよう」

「は？」

にこやかに笑いかける少女の言葉に、アクセルの思考が停止した。停止せざるを得なかった。

いつ、こんな少女と俺は知り合いになった。

俺にそっちのケはないはずだ。多分。

というか、ここは初めて来た場所だ。知り合いなんているはずがない。

となると……

「ちょっと、嬢ちゃん？人違いじゃないかな？」

「さっすが隊長、抜け目がないですねえ。これ、どーぞう」

だが、少女はアクセルの予想の斜め上をいく発言をし、さらには得体のしれないメモリースティックを渡してきた。

黒い一般的な記憶媒体。しかし、製造社名はおるか製造番号すら刻印されていない。

「なにこれ？……っというか、人違いだっ」

「アリシア様からですよ。次の動きについてのデータだとしか聞かされていません。でっは、これにて！」

「おいっ！……っ、速っ！！」

スバル以上のスピードでアクセルが歩いてきた方向へ消えていく少女。

あまりにもほればれとする速度に、少女を追いかけるどころか呼び止めることすら出来なかった。

「行っちゃった。なんだ？隊長……アリシア……？サツパリだが……なんか、引つかかるな。あれは俺の知り合いなのか？」

落ち着こう。あまりにも突然すぎた。ひとまず、情報の整理。

アクセルを隊長と呼ぶ、知り合い（仮）の謎の少女。

怪しさマックスの黒いメモリースティック。

そして、アリシアという女の名前。

……そこで、アクセルは疑問を感じた。

「女？……っどうして俺は女の名前だと思った？」

アリシアという男の名前はあまりないだろう。

だが、可能性はないにしても、アクセルは意識して女の名前だと認識していた。

「俺は、アリシアという女を知っている……？」

疑問に頭を悩ませる。分からないことが多すぎる。

数分後、フェイトが通信でこちらに呼びかけてくるまで、アクセル

は頭を抱えていた。

第7話 「現れた『影』」(前編) 「(後書き)

詳しいことは次話のあとがきで。
後編へ続く。

第8話 「現れた『影』」(後編)「(前書き)

後編です。

前回現れた赤頭巾は後々でも登場します。

決して一発キャラではありませんw

それではどうぞ。

第8話 「現れた『影』（後編）」

そこは戦場だった。

「テメコラ、スバル！それは俺が焼いてた肉なんだな、こいつが！」

「アクセルさんが遅いのが悪いんですよ！」

「くっ、言うねえ。だったら……その肉、貰い受ける……！」

「つて、ああああ！ね、狙ってたお肉があ……！」

「ふっ、甘いでえ、スバル、アクセル君。バーベキューの網の上は常に戦場や！周囲を警戒し、尚かつ自分の領分をしっかりと守る。それがバーベキューの基本中の基本やな」

「了解です！部隊長！」

「ヴィータ。少し食べるすぎだぞ……っ！貴様！私の焼いていた肉を全て取りおつて！」

「ハッ、あめえんだよシグナム。はやても言ってたたる？バーベキューの網の上は常に戦場、だつてな！」

……ものすごくアホらしい争いではあったが。

サーチャーが感知する前に腹ごしらえをしておこうということ、始まったバーベキューだったが、結果はこのとおり、白熱している。むしろ体力を削るんじゃないかと思っただ。

隣ではフェイトやエリキヤロ、シャマルにアリサ。それに新たに加わったエイミイ・ハラOWN提督夫人、なのはの姉の高町美由紀、フェイトの使い魔アルフ、なのはたちの現地の友人である月村すがが平和に網を囲んでいた。

「もしかしなくても俺、テーブル間違えたかな……」

「……否定はできませんね」

隣で黙々と肉や野菜を焼くティアナが賛同するようにため息をついた。
バカみたいに食べるスバルとヴィータ、実は負けず嫌いのシグナム、そして、たぬきのはやて。

確実に選択ミスだったのは間違いない。
さつきから食べているのは少量の肉とその二倍の野菜。

「俺はベジタリアンじゃないんだな、これが」

「……あ、アクセル君。その様子だと、あまり食べてないみたいね？」

ぐったりしていると、うしろから声が聞こえた。

振り返るとシャマルの姿。手に持つ大皿には何やら奇怪な塊が鎮座している。

「あ、あの？シャマル先生？そ、それは何でしょう？」

「あ、私が試しに作ってみたの。いかがかしら？」

敬語のアクセルに疑問を感じず答えるシャマル。

その言葉になごやかな空気が止まる。

なるほど。それほどの代物なわけか。

事情が分からないのだろう、フォワードメンバーは首を傾げている。

……ここで断るのは簡単だ。

だが、その矛先が次に向くのはおそらく、新人たち。

教導官（仮）として、それは防がなくてはならない！

「……っ、じゃあ、一口だけ」

「……あ、アクセル（さん）（君）?!」「」

「アクセル……骨は拾ってやるからな」

「アクセル、貴様……いや、何も言つまい」

まさかと驚愕する三人娘。

見ていられないと顔をそむけるヴィータ。

心情を悟ったシグナム。

それを視界の端に収め、アクセルは口へその異物を運ぶ。

口の前で動きが止まる。やはり無謀だったろうか。後悔の念が胸を占める。

永劫にも似た時間が過ぎ、ついにアクセルが意を決し……食べた。

「!!!?????」

そして、アクセルは意識を失った。

〈第8話 「現れた『影』」 (後編) 〉

「……………ん？」

目を覚ます。視界は暗闇。どうやら、コテージの中らしい。

身体を起こすと、腹部に激痛が走る。今まで感じたことがないほどのレベルだ。

「あたたたた………いったい何入れたらこんなに腹が痛くなるんだ？」

ようやく思い出した。シャマルが作ったという塊。あれを食べて、意識を失ったのだ。

見た目からしてやばいというのは分かっていたが、これは予想以上

だ。

「くそ、美人だからって料理がうまいとは限らないってわけね……
ああ、やっぱり料理のうまい娘がいいんだな、これが」

腹を抑えつつ外に出る。人の気配はない。

どうやらサーチャーにひっかかったらしい。

ソウルゲインにデバイスの反応を探索させる。

「あたた、とりあえず作戦が始まっちゃう……治りしだい出なきや
な」

アクセルは再びコテージの中へと、頼りない足つきで入って行った。

S i d e ティアナ

「我が乞うは、捕縛の檻。流星の射手の弾丸に、封印の力を」
「シーリング、シュート！」

封印の効力を持った弾丸が対象へと命中する。

あちこちを跳ねていたスライムのような物体はたちどころに姿を消した。

「作戦終了！お疲れ様ですう！」

リイン空曹長の明るい声が聞こえ、私はほっと胸を下ろした。

ぶつつけ本番の封印魔法。それが成功したのだから、当然のことだ
と思う。

それに、自身のレベルが向上していることに、安堵を感じていた。

着々と、一歩ずつ。階段を上るように。

(アクセルさんのおかげ、かな……)

今までは夢を叶えようとするあまり、急ぎすぎていた。

だけど、アクセルさんが来てからはそれが減ったように思う。

だからといって、成長が遅くなったわけでもない。むしろ進んでいる。

突撃思考もなくなり、地道な反復練習にも面白味が見いだせた。

彼の教導方針は一歩ずつ確実に、だと思つ。軽いノリでいつつ大事なこととはしっかりと教えている。

だからこそ、今も成功させることが出来た。

「それにしても、大丈夫かしら……」

今はコテージにいるだろう彼を思う。

しかし、その心配を打ち破る声が夜の大気を響かせた。

「復活!!」

「あ、アクセルさん!？」

空からソウルゲインが降下してきた。

両手でVサインを作っているが、正直ソウルゲインのままではやらないでほしい。

「心配かけたな、みんな！解毒剤を調合して、もう完全復活なんだな、これが！」

「げ、解毒?」

キャラが顔を青くした。実はあの後、フリードが塊を食べようとし

ていたのだ。

もし、キャロが止めなかったら……想像はよそう。

そんな二人を放って、ライン曹長がアクセルさんを叱りつけている。

「遅いですう！作戦のキモ、ロストロギア封印は終わっちゃいました！」

「あらら、そうなのか？……だからといって何もしないのもね。さてと！後片付けをしますか！」

ソウルゲインが張り切る。近づいてきたヴィータ三尉がそれを見て、呆れながら笑っている。

「ま、なにはともあれ、元気になってよかったな。あとは辺りに影響がないか調べて……ん？」

笑顔から一転、険しい表情をする。

どうしたのかと思ったアクセルさんもまた違和感に気づき、遅れながら私も感じた。

他の面々も感付き始めた。何やら、空間がねじれているような感覚。

「……ううっ、この感じ！？」

「何でしょう！？この感覚……」

「空間が歪んでる？一体何が？」

「……いい予感はいねえな」

皆が口々につぶやき辺りを見渡す。私も周囲を睨む。

ふと見ると、アクセルさんだけが視線を上げていた。そこには漆黒の空。

だが、彼は気が付いていたのだ。

「来る……間違いない……この違和感は！」

『影』がそこから現れることに。

Side out .

空間を歪ませて現れた五体の『影』。

突然の事態に全員が身構え、ヴィータが声を荒げる。

「リイン！反応は！どうして分からなかったんだ?!」

「わ、分からないですう！ロングアーチからも転移反応は確認されなかったって……」

「そんなの、ありえんのかよ……」

こちらをずっとモニターしていたロングアーチからも情報はない。

目の前の集団はどうやって現れた？

全員が困惑するなか、アクセルは何となく理解していた。

(空間、転移……何故だ。何故、俺は分かったんだ?!)

「っ！来るぞ!!」

ヴィータが再び声を荒げる。仁王立ちしている一体を残して『影』たちが躍り出た。

数は四体。その全てが同じ青いアーマーを着用していた。

バイザーで顔を覆い、流線形の頭部の横にはウサギ耳のようなアンテナ。突き出た肩装甲に、これまた流線形の手甲。左腕には三本の突起が見える。脚部は滑空用のスラスター類が詰まっているのだから。さらに、背中には翼とブースター。どうやら空戦にも対応し

ているらしい。そして、右腕には大型のライフルを携行していた。戦闘の二体がライフルを構えた。銃口から桃色にも似た光線が放たれる。

ティアナはキャロを伴い、右方向へ。ヴィータはリインを連れて左方向へ。

そして、アクセルはというと。

《聞こえる、アクセル?》『こちら側』に来てから報告がないから、アリシアが怒ってるわよ。わざわざW11どころか、ゲシュペンストを動かすくらいにね」

唐突に開いた通信回線と、そこから聞こえる女性の声に驚き、動けずにいた。

(通信が……女?)

その回線は戦闘にも連絡にも使えなかった規格外だったはずだ。だが、今はこうして機能している。

疑問が渦巻く。だが、まずは相手が誰かだ。

「……おい、あんた誰だ?!」

《は?なに言ってるの?……これ、傍受される心配はないわよ?》

「人違いじゃないのか?この土地に知り合いはいないんだな、これが」

一瞬間が空き、再び音声が響く。何やら不機嫌そうだ。

奥にいた人影が前へ歩み出る。長い金の髪を持っている。

女性だ。どうやら彼女が通信相手らしい。

その顔は口元が大きくあいた鬼の面のようなもので隠されており分らない。服装はベージュのチャイナドレスにも似ている。横に深

いスリットが入っており、間違いなく戦場には似合わない。手には抜身の日本刀。腕に着用している薄い手甲が唯一の装甲だ。

《……ふーん。あくまで任務に忠実ってわけ……さすがは隊長さんねえ。ま、それでこそ、倒しがいがあるってもんよ》

「なんだか知らんけど、ここに来てからモテるね、俺も」

《……それじゃあ、アクセル。久しぶりに、行くわよ!!》

女性が刀を構え、大地を蹴る。ソウルゲインも右手を前に突き出して迎え撃つ。

(俺が隊長……？何のだ？それにアリシア、W11、ゲシユペンスト。全部知ってる……このキーワード……なんだ?)

疑問が山積みになる中、謎の女性とソウルゲインの刃が甲高い音を響かせた。

力は互角。そのことにアクセルは苦悶の表情を浮かべる。

考えてみてほしい。アクセルはソウルゲインというデバイスを纏って戦闘している。

だが、眼前の女性はどうか。女性らしい細腕には何の補助もない。この重さは日本刀のものだともいうのか。そうだとすれば、彼女の腕力はすさまじいものになる。

「くっ、この……」

「どうしたの?! 力を出し惜しみする必要はないわよ! この程度じゃ、この私は止められないわ!!」

その言葉に偽りはないだろう。だが、目の前だけでも集中してられない。

ちらとセンサーを横に向ける。他のメンバーはどうなっているのか。

ティアナとキャロで二体。リインとユニゾンしたヴィータで二体。妥当な組み合わせだろう。

だが、少々旗色が悪い。特に、キャロが集中的に狙われている。ティアナがフォローにまわっているものの、いつかはぼろが出るだろう。

このままでは……

「飛びなさい！飛燕の如く……！！！」

いつの間にか、女性との距離が離れていた。大きく日本刀を振りかぶっている姿が目に入る。

見ると刀の形状が違う。グルカナイフにも似たその形は、アクセルにブーメランを想起させた。

(まさか、それを投げるつもりじゃあ、ないよな……)

「大！車！りいりいん！！！」

「嘘お！！！」

あるうことが本当に投げた。ブーメランのつもりだろうが、唯一の武装を投げてきた。

その豪快さに、アクセルは驚愕を隠せない。それどころか直撃を受けてしまう。

「うわああ！！！」

「お兄ちゃん！！！」

「アクセルさん！？」

ティアナとキャロが悲鳴にも似た声を上げる。

回転する刃で何度斬られたか、何度目かの斬撃を防御し、その刀を弾いた。

それから、心配ないということのアピールし、女性に向き直る。彼女はすでに弾かれた刀を手に、こちらへ非難する様な視線を向けていた。

「そういう態度……もしかして、様子見？あんたらしくないわね」

一体、何のことを言っているのだろうか、目の前のこいつは。

あなたらしくない？らしいってなんだ？今の状態は違うというのか？さっきから断片的な情報を次々と詰め込まれて頭が痛いというのに、これ以上混乱させることを言わないでほしい。

（まあ、いいさ。つかまえて全部聞き出してやるんだな、こいつが）

そう奮起して再び構える。それを見た彼女はにやりと不敵に笑い、腰だめに構えた。

だが、ふと顔をしかめる。そして、構えを解いた。

何が起こったのか、つかめずにいるアクセル。すると、彼女の横に『影』が現れた。

先ほどまでティアナたちと戦っていた連中だった。それを見て焦燥感に駆られたアクセルは振り返り、全員の安否を確認する。

傷はあるものの、全員無事だ。そして何故、突然戦闘が終わったのか分からないという顔をしている。

その時、例の通信回線から音声が入った。

《どうやら、増援みたいね。あんたはこれを待っていたわけ？……さっきの言葉、取り消すわ。これはあんたらしいから》

聞き捨てならない発言に再度振り向く。

『影』たちが次々と離脱していく中、彼女が最後まで残っていた。

《ここに追加のデータ、置いていくわね。じゃあね、アクセル》
「おい、ちよつとあんた!……おい」

そして、それを最後に消えた。まるで初めからいなかったように。だが、彼女はここにいた。それだけは間違いがない。

うしろでリインがロングアーチに連絡を取っている。だが、おそらく何も分からないだろう。

アクセルはゆっくりと足を進める。先ほどまで彼女が立っていた場所へ。

地面には今日受け取ったものと同じメモリースティック。

「いったい、何なんだ。あいつらは……」

うしろを向くと、なのはやフェイト、その他のメンバーの姿が見えた。

あいつらはこのことを言っていたのか。

アクセルは手の中の情報を握りしめる。

今日は分からないことだらけだが、一つだけ分かったことがある。

全ての答えは、俺の記憶にある。

俺はいったい、何者なんだ……

Side ????

「いま戻ったわよ」

窓はなく、用途も分からない装置が雑多に置かれている部屋。

どこかの研究室だろうか。彼女は足場がほとんどないその部屋を悠々と歩く。歩きなれているかのように。

途中、顔に着けていた仮面を外した。仮面を着けたままでは失礼だ。そして、辿り着く。この部屋の主のもとへ。自らの主のもとへ。

椅子に座っていた女性は、戻ってきた女性を見て微笑む。

「おかえり。どうだった？アクセル君は」

「相変わらず、任務に真面目よね。ただ……」

「ただ？」

「偽装にしては手が込みすぎて、つていう印象を受けた。口調まで変える必要があると思う？」

そう問い掛けられ、女性の主はその長い髪をいじりながら考える。

その自慢の頭脳で。

そして、一つの答えを導き出した。

「今までと『今回』は違うから。彼なりの誠意の表れじゃないかな？自己暗示とか使っている可能性も否定はできないし」

「なるほどねえ。そういうことにしておくわ……それよりも、お腹空いた」

「あ、私も。何か食べに行こっか」

互いに微笑みながら、部屋をあとにする二人。

自動で開いた扉は、二人がいなくなると再び閉じる。

部屋はそこらにある装置から放たれる光源によってぼつぼつと照らされていた。

その中に部屋をよく照らしているスポットライトがあった。

なぜスポットライトかと言えば、この部屋の主が自身の製作物にとつともない愛情を注ぐ性格だからである。

それが照らしているのは蒼い人型機動兵器。

もし、機動六課の人間がここにいたならば、誰もがこういつだろう。

ソウルゲイン、と。

S i d e
o u t .

第8話 「現れた『影』」(後編)「(後書き)

ついに登場した『影』。

アリシア、赤頭巾、ゲシユペンスト。

形状を変化させる日本刀を持つ、金髪の女性。

彼女が主と呼ぶ、女性研究者。

そして、ソウルゲイン。

謎ばかり増えていく、機動六課に再び任務が。

次回、「ホテル・アグスタ攻防戦」。

お楽しみに。

第9話 「ホテル・アグスタ攻防戦（前編）」（前書き）

構成に納得がいかず、またもや前・後編に……

まあ、いいか！

それでは、どうぞ。

第9話 「ホテル・アグスタ攻防戦（前編）」

「さて、今朝の議題は地球での件についてや」

第97管理外世界『地球』から帰還後、就寝したのが五時間前。

アクセルは早朝にも関わらず、再び部隊長室へと呼び出されていた。
……勘弁してくれ。

「アクセル……その、無理しなくていいよ？ コーヒー淹れようか？」

「わお……まるでこの地獄に舞い降りた女神なんだな、これが。ありがたくもらうよ」

女神という言葉に反応してか、顔を赤くしてコーヒーを淹れに向かう。

……その背中に既視感。

そう、何故かフェイトに対してだけ、決して少なくはない既視感を覚える。

書類をまとめている時、笑顔で隣を歩いている時、そして、今のようにコーヒーを淹れている時。

思い出せないが、フェイトによく似た人物がそうしているビジョンがたまに見える。

彼女は、もしかして……

「アクセル君、フェイトちゃんのうしろ姿に見惚れてるのはいいんやけど、会議にも集中してくれへんかな？」

「は、はやてー！！」

「あゝ、スンマセン。最近は疲れがたまってます……こついう癒しがないと、ツライんですわ」

コーヒーを淹れる姿を見つめて考えていると、それをはやてに見咎められた。

フェイトがさらに顔を赤くし、アクセルはさも疲れているというポーズを取る。

「仕方がないよ。最近は連日任務だし、それに分からないことが多いすぎる」

「そっやな。ガジェットの活発化、転移反応なしに現れる集団、ソウルゲインと同等の力を持つ女性……」

「あゝ、ちよつといいスか？」

はやてが言ったその言葉に、アクセルは拳手した。まだ、話していないことがあったのを思い出したのだ。

「ん？どうぞ、アクセル君」

「昨日言い忘れてただけけど、あの女性と話した」

はやてが椅子から落ち、フェイトがコーヒーでむせた。なのはは目を丸くしている。

「な、なんやって!?!」

「ちよ、ちよつとアクセルさん?!」

「アクセル!! それ、どういうこと?!」

三人娘に詰め寄られる。

両手に花以上の状況だが、アクセルはそれに嬉しがるところではなかった。

「ちよ、ま、落ち着いてくれ。順序良く話すから」

なだめる様に両手を前に突き出す。

三人が元の位置に戻ってから、ごほんと咳払い。

「あいつが言うには、周りにいた四体。あれの名称はゲシユペンストっていうらしい。それと任務がどうたら言っていたから、組織に属しているっぽい。ゲシユペンストに関しては、俺の見た限りじゃ、ソウルゲインみたいな全身装着型のデバイスだと思うんだな、これが」

三人娘が机に集まる。アクセルの情報の分析にかかるとらしい。

「ゲシユペンスト……幽霊か。言িয়েて妙やな、それ」

「私の方で調べてみるよ。新型デバイスの可能性も否定できないし」

「私も手伝うよ。顔はけっこう広いから」

三人が話し合うなか、アクセルの手がポケットのメモリースティックに触れた。

このことは話さない方がいい。立場を悪くするだけだろう。

赤頭巾のロリ娘から受け取ったには、とあるオークションに出品されるロストロギアの詳細と、それを奪取する手はずが書かれていた。仮面の女性から受け取ったものには、ソウルゲインの自己修復装置を向上させるためのデータが入っていた。

まず間違いなく、記憶があったころの知り合いだ。

(アリシアっていう女性の件とか、ほかにも色々あるが……まずは俺自身で確認して判断しなけりゃ)

言えないことが多すぎる。

そのことにアクセルは罪悪感を覚えるが、今日という日はそれを意にせず始まる。

「第9話 「ホテル・アグスタ攻防戦（前編）」」

あれから数日後。アクセルは輸送ヘリに揺られていた。

周りにはフォワードの四人、三人娘にリインフォース？、そして、珍しくシヤマルが同乗していた。

つまり六課のほとんどの戦力がこのヴァイスが操縦するヘリに搭乗していることになる。

「さて、もうすぐ到着するみたいやから、今回の任務のおさらいをしておくで」

全員が一望できる席にいたはやてが空中にモニターを投影する。

そこには眺めが良いだろうホテルの全景。CMに使われそうな映像だ。

ここが今回の任務先だ。名前はホテル・アグスタ。

「骨董美術品オークションの会場警備と、人員警備。それが今回のお仕事ね」

「取引許可の出ているロストログアがいくつも出品されるので、それをレリックと誤認したガジェットが出てきちゃう可能性が高い…」
「…ということでした」

「この手の大型取引だと、密輸の隠れ蓑になったりもするし、油断は禁物だよ」

なのは、リインフォース、フェイトと順に説明していく。

すでに現場にはシグナム、それにヴィータを代表として何人かが昨日から警備を行っているとのことだった。

「配置としては、私とフェイトちゃん、はやてちゃん。それにアクセルさんが中の警備。シグナムさんにヴィータちゃん、フォワードメンバーが外の警備にまわってもらおうから……みんなは副隊長の指示に従って行動してね」

「え、俺も中の警備っすか？てつきり外だとばかり……」

意外な配置に驚くアクセル。中に戦力を割きすぎではないだろうか。フォワード陣も驚きはしないものの、少しばかり意外だと感じているらしい。

「それについては私から。実は目的地にはあまり局員が配置されてなくて。中の警備もごく少数……だから、アクセルさんには避難誘導の指揮を執ってもらいたいんです」

「避難が早く終われば、私らも応援に行けるしな」

「それに外には副隊長の二人がいるから、戦力不足ではないと思うよ」

なのはが詳細を話、はやてが付けたし、フェイトが安心するよう告げる。

そうまで言われると納得せざるを得ない。

敬礼してフォワードメンバーに視線を向ける。

何だろうと、全員がこちらを見返してくる。

「……誘導が終わったら、いち早く駆けつける。だから、それまで防衛線に徹すること。無茶して怪我でもしたらお仕置きなんだな、これが」

軽い口調であっても、その中身には気づいてくれたらしい。全員が力強く頷いた。

それを見て笑顔を浮かべるアクセル。心配はいらないだろう。

「ところで、気になってたんすけど。シヤマル先生、その箱は？」

「ああ、コレ？」

シヤマルの座席の下。そこには衣装を入れるような白い箱が四つ。良いことに気が付いたとばかりに笑顔を向けてくるシヤマル。その唇が言葉を紡ぎだす姿に、何故か冷や汗が垂れる。

……嫌な予感がするなあ、こいつは。

「これはね、はやてちゃんたちとアクセル君の、お仕事着」

嫌な予感は的中した。

「ふう、楽しかったわ。アクセル君……どうかしら、みんな？」

「あ、アクセルさん……」

「わぁ……」

「兄さん。すごく似合ってるよ！」

「お兄ちゃん、かつこいい！」

「……一応、礼は言っておくよ。ありがとう」

いま、着ているのは黒のスーツ。

くせのついた髪はワックスで纏められている。いわゆるオールバックというやつだ。

どういうわけか伊達メガネまでかけさせられていた。

いつものような軽さは微塵も感じさせない。正直、十人が十人振り向くだろう姿。当の本人はぐったりしていたが。どうも落ち着かないのだ。いくら任務とはいえ、こういう格好は。そんなアクセルたちのもとへ、この場にいなかった三人。つまり、なのは、フェイト、はやてだ。警備ということ悟られないための仕事着。三人ともそれぞれにあった色のドレスを着ている。

「どうしたの？」

「あ、アクセルも着替え終わったんだ？」

「へえ。けっこう似合ってるやないか」

「でしょう？それにみんなもよく似合ってる。やっぱり、シャマル先生の見立てに狂いはなかったわね！」

笑顔で何度も頷くシャマル。確かに三人は似合っている。

何だろう、こういう姿をみると彼女たちも年頃の女性なのだろうと思う。

「三人ともよく似合ってるな。俺は何ともいえないけどな、これが」

社交辞令……でもないが、ほめるアクセル。

それを聞いて三人とも頬を赤く染めた。

「そ、そんなことないよ！アクセルさんも似合ってるよ？」

「そっだよ！アクセルも、その、カッコいいよ？」

「そ、そうやで！なんちゅーか、ホストみたいなの？」

「……はやて、ホストってというのは褒め言葉じゃないと思うんだな、これが」

褒め言葉を素直に受け取らないアクセルを見て、頬を膨らませる三

人。

それに軽く微笑み、腕時計を確認する。これもシャマルが用意したものだ。

何がしたいのか、あの人は。

「つと、そろそろ時間なんじゃないか？」

「あ、せやな。じゃあ、全員持ち場に向かおか。私たちは会場の中、アクセル君は出入り口とロビーや」

「フォワードのみんなはホテルの表側。反応があつたら連絡してね」
「了解」「」「」

フォワードメンバーが敬礼をして部屋を駆け足で出ていく。シャマルもそれを追った。

それから、アクセルも三人を伴って向かう。ホテル・アグスタの警備が始まった。

「しかし、広いなあ……こんなところ俺だけで警備できるのか？」

ぶつくさと文句を並べつつ、不審物や怪しい人影がないか確認する。

結局、任務には真面目なのがアクセルだった。

ただ気になるのは、時折女性の横を通り過ぎると、何やらひそひそ声が背後で聞こえるのだ。

振り返っても、すぐに顔をそむけられる。わけが分からない。

……だから、こんな恰好はしたくなかったんだ。似合わないと思われているに違いない。

「あの、少しよろしいでしょうか？」
「え？」

ため息をつき、俯いていたアクセルに声がかけられる。
顔を上げると、そこには女性が立っていた。

透き通るような髪の色は純白。青い瞳はサファイアか何かを思わせる。

いまは薄く微笑んでおり、間違いなく美女の分類に入るだろう。

「あ、ああ。すみません。それで、何か御用で？」

身だしなみを軽く整える。

先ほどの姿を見られていたとしても、少しはきちんとしておきたかった。

そんなアクセルに目を細める女性。その小さな唇が開く。

「少々、お尋ねしたいことがあります」

「どうぞどうぞ。俺でよければ、何でも聞いてください」

「では……」

そう言うと、女性はアクセルに身を寄せてきた。

両肩に手をかけ、口を耳元へと近づける。胸が押し付けられていた。慌てるアクセルを尻目にまた微笑み。

「予定通り、B1西搬入口から侵入します。隊長は陽動部隊の相手を、とのことです」

そう、先ほどと打って変わって冷たい口調で告げた。

「！？」

「では、ありがとうございました」

アクセルが驚愕に身を固める。

その間に女性は離れ、元の口調で礼を告げて、早足で去っていく。正気に戻った時にはすでに彼女の姿は人ごみに紛れていた。

「……また、隊長か」

一体自分は何者なのか。いや、今はそれよりも彼女の言葉だ。

彼女は予定通りと言った。B1というのは地下一階、その西側の搬入口から侵入するとも。

そこで思い出した。先日受け取ったメモリースティック。あの中にあったオークション襲撃の計画。

あれは今日のことを言っていたのだ。だとすれば、ゲシユペンストがまた現れる可能性がある。

「ティアナたちが危ない?!」

正面玄関に視線を向ける。その瞬間、爆発音が聞こえた。

ガラスが衝撃波で揺れ、ロビーにいた女性客が悲鳴を上げる。

戦闘が始まった。

Side ????

彼女は外の空気を吸うために正面入り口に足を向けていた。

年齢は十代半ば。くせのある茶髪。白いショートドレスを着ている。

今はその姿に似合わず、苛立っているように前髪をいじりながら、ため息をついた。

「全く、なんでこんなところに……」

彼女はさも心外だとはかりに首を振る。

彼女はとある企業の代表取締役社長であった。

この年齢でその地位に就いているというのは非常に稀だ。故に他からは甘く見られる。

だからこそ、こういうところに積極的に赴き、自身の名を売ってこいと言われているのだが、彼女はそういったことが好きではなかった。

というか、はっきり言って嫌いであった。彼女は根っからのインドア派で、好きなことは読書と機械いじりだった。

「はぁ……最悪」

口から出る言葉はほぼ呪詛ばかり。猫背で三白眼の彼女にはとてもはまっていた。

ぶつぶつと呟きながら、入口の自動ドアをくぐる。

瞬間、爽やかな風が吹き、彼女の髪を撫ぜ、体を冷やす。

「……たまには、外もいい」

少女の心変わりは早かった。

ふと、視界の端に警備の管理局員が見える。案外、若い人が多いんだなと思いつつ、自分も同じ年齢だということを思い出す。

大人の中で働いていると、たまに年齢が周囲と同じになった感覚に陥る

……それは自分だけだろうが。

人の邪魔にならないよう脇に寄り、ポケットから板状のものを取り出して、中身を外にさらした。

チョコレート。いわゆる板チョコだった。

これを食べながら、開発中の『あの子』の様子を見る。それからでもオークションには間に合うだろう。

「いただき……?」

顔に似合わず大口を開けてから、何やら警備員が慌ただしくしていることに気が付く。

何か、問題でもあったのだろうか、首を傾げた。

すると、オレンジ色のツインテールをした局員がこちらへ向かってくる。

自分は何もしていないと、ゆっくりと両手を挙げる。左手には板チョコ。

「私は無実です」

「はい? って、そんな暇はないんだっ! ……あなた、早く中に入っ!」

「え、でも、まだ……」

チョコレートを食べていない。そう言おうとした次の瞬間。

爆音。そして、衝撃波が彼女らを襲った。

「　　つ、大丈夫!! 怪我は?!」

「……ダメ」

オレンジ髪の管理局員が彼女を押し倒し、爆風から庇ってくれたおかげで怪我はない。

だが、彼女は絶望に襲われていた。

左手を見る。そこには何もなかった。
頭を横に傾ける。そこには泥にまみれた茶色の板。

「チョコレート、落とした……もうダメ」

「って、子どもかつ!!」

フレモント・インダストリー社代表、マーチ・フレモント。
彼女は今日初めて、ツッコミというものを経験した。

第9話 「ホテル・アグスタ攻防戦（前編）」（後書き）

アクセル（正装ver.）とか見てみたかったからやった。後悔はしていない。

赤頭巾（W11）に続き、白髪美女が登場。

そして、F I社代表とティアナとの出会いは何をもたらすのか……？

次回、「ホテル・アグスタ攻防戦（後編）」。

お楽しみに！

第10話 「ホテル・アグスタ攻防戦（後編）」

小高い丘。そこに二人組の女性が立っていた。

一人は先日、アクセルと戦闘した仮面の女性。腕を組み、明らかに不満げな表情だ。

もう一人は、透き通るような緑色の長髪を持つ女性。直立不動で、じっと視線の先にあるものを見つめている。

彼女の視線の先には白い建造物。名を、ホテル・アグスタと言った。

「まったく。たかが陽動に、なんで私まで。あんたがいれば十分だったんじゃない？……W17」

「確かに。ですが、雇われの身でありながら仕事に従事しない、というのもどうかと思われませんが」

W17と呼ばれる女性の冷静な切り返しに、言葉を詰まらせる。

彼女の言うとおり、仮面の女性は雇われている。W17と同じ組織に。

しかし、出来ることといえば戦闘以外ほとんどない。頭脳労働も得意だが、自分以上の人間が複数いるなら、別にやらなくてもいいと思っていた。

であるから、つい先ほどまで彼女は惰眠を貪っていた。

そこを隣に立つ女性にたたき起こされたのだ。

「……いいじゃない。この間、アクセルに届け物したし。それにしても、あんたも気の毒よね。帰ってきて早速お仕事だなんて」

「今まで任務をこなせなかった、その清算をするいい機会です。それに我々は、そのために生まれてきた。従わない道理はありません」

冗談も通じない。真面目な切り返しに面白くない顔をする。

だから、こいつらと……Wナンバーと一緒に嫌なのだ。
どうも人間味に欠ける。何かと言えば任務だ。

(そのために生まれてきたのは分かるけど、それだけに生きろってわけじゃないでしょうに)

「W12から連絡。隊長に接触したとのことです」

「了解。フルギア隊、及びガジェットに攻撃命令を」

そんな会話が、思考の海から彼女を引き上げた。どうやら任務が始まるらしい。

傍らに立つW17はすでに愛機を起動させていた。

紅のマントが風に揺れる。その手には鞘に納められた大剣。

「ヴァイサーガ、出る!!」

W17。ラミア・ラヴレス。

四年の歳月を経て、再び彼女は戦場に立った。

〈第10話 「ホテル・アグスタ攻防戦(後編)」〉

Side ティアナ

今、ティアナは足止めを余儀なくされていた。

「アナタ、銃型デバイスを使う人？」

「ええ！そうよ！……このっ！」

それも傍らにいる少女のせいだ。

何故か彼女は避難せず、ティアナにしがみついている。しかも、戦闘中だというのに質問ばかりしてくるのだ。

答えるティアナもティアナだが……

「見たところ陸戦。ランクと得意な魔法は？」

「そこっ！！……えっと、陸戦B！射撃と、幻術が少し！！……ああ、もう！！！」

今すぐ彼女を避難させたいところだが、飛来するミサイルが多すぎる。撃ち落とすには両手でなければ間に合わない。

しかし、彼女を抱えるにしろ、手を引くにしろ、その間は片手で対応するしかないのだ。それではやられる確率が高い。

応援も難しいだろう。スバルは？型二機を相手取っているし、エリオはスバルを援護しつつキャロを守るので手一杯のはずだ。

副隊長やザフィーラも正体不明のホバータンクや今までとパターンの違うガジェットの戦術に苦戦している。

つまり、ティアナは自身の力だけで、この状況を打破しなければならぬ。

(アクセルさんと約束した！無茶はしない、確実性をとる……けど)

このままではギリ貧だ。いずれやられる。

ふと、少女が袖を引っ張った。視線だけ向けると、何やら空色の縁取りがなされたカード状のものを、無言のまま差し出している。

誘導弾を六つ生成して、撃ち出す。操作はクロスミラージュに任せろ。これなら少女に向き合う時間は作れるはずだ。

「これは!?!」

「戦況を変える可能性。適合性は分からないけど、一応アナタは条件をクリアしてる。どうする?」

ティアナの目の前でそのカードを振る。あくまでティアナの判断に任せるらしい。

一瞬考えて、決めた。

「分の悪い賭けは好きじゃないけど……乗ったわ!!」

ティアナはカードを受け取った。それを見た不機嫌そうな少女の顔がほころぶ。

だが、それも一瞬。何かに気づいたように目を見開いた。何事かと思うと、こちらへ飛来するミサイル群。数は六つ。

(迎撃は……間に合わない?!)

せめて少女だけでも、と覆いかぶさるティアナ。

その時だ。衝撃に耐えるため、閉じかけた瞳が蒼い影を捉える。

「狙いはばつちりなんだな、これが!!」

聞き覚えのある声が響く。

どこか軽い印象を与えるその声に、ティアナは安心感を覚えた。同時に爆音。見ると、空間に青い粒子が尾を引いていた。

放たれた方向に顔を向ける。そこにはやはり、見慣れた蒼き巨人。

「アクセルさん……!!」

ソウルゲインをまとう、アクセル・アルマーその人だ。

「つと、無事か？ティアナ……と見知らぬお嬢さん」

避難誘導を近くにいた男性局員に任せ、アクセルは迎撃に出た。命令違反だが、この場合仕方がないだろう。

青龍鱗でミサイルを撃ち落とし、ティアナたちに近づく。

ほっとしたティアナとは対照的に不機嫌そうな少女。

「助けていただき感謝します。私はF I社代表取締役社長、マーチ・フレモント。失礼は承知ですが、そのデバイスは何処製で？見たところまだ試作段階の全身装着型のようにですか？」

ティアナの陰に隠れながら、そう一気に捲し立てるマーチという名の少女。

だが、アクセルが口を開く前に、ティアナが驚いた顔をしてマーチを向いた。

「え、嘘？！あなた、F I社の社長だったの？チヨコ落として落ち込んだのにな？」

「……甘いものは頭脳労働に欠かせませんから……じゃなくて」
言葉を切り、アクセル……ソウルゲインを睨む。

どう答えようか悩んでいると、ソウルゲインが熱源を感知する。

「悪いけど、説明している時間はないみたいなんだな、これが」

「えっ……あれは！」

森から影が現れる。その数は五体。その内、四体は知っている。仮面の女性とゲシュペンストだ。だが、残りの一体は見たことがない。まるで西洋の騎士を思わせる風貌。真紅のマントがその存在をより強調している。手に持った剣を引き抜き、鞘を捨てる。地面に落下する前にその形を崩し、光となって消えた。

《聞こえますか、アクセル隊長。こちらはW17、ラミア・ラヴレスです》

(また、あの回線から……)

先日、仮面の女性が繋げてきた通信回線。それが再び開いた。若い女性の声。おそらくは西洋騎士からだろう。

どこことなく、シグナムに声が似ているのは気のせいか。しかし、W11だのW17だの、何を指している番号なんだ？

《聞こえてるけどな、あんたら何者？俺と何か関係あるわけ？》

そう返すアクセル。ティアナたちに感付かれないよう、同じ回線を使う。

すると、仮面の女性が肩をすくめた。

《……ほらね、言った通りでしょ？自己暗示か何か、使ってるって》
《フフ、それでこそ、隊長。疑われないための偽装も完璧。ならば、私も自分の任務を遂行するまで！》
《あんたって、任務が関わると途端に熱くなるわよね……ハア……あんたたちは他の相手をしなさい》

西洋騎士が剣を構える。それを見て仮面の女性もため息をつきつつ、日本刀を構える。

三体のゲシュペンストは同じ道を引き返した。おそらく他の場所に向かったのだろう。

シグナムたちには悪いが、数が減ってほっとした。

とはいえ、以前苦戦した相手と正体不明の騎士。厳しい戦いになることは免れない。

「ティアナ。お前はマーチちゃんを連れて退避しな。その分の時間は、きつちり稼いでみせるさ」

「でも！」

「いいから！それに隊長たちを呼んでくれれば、こっちが有利になる……行け！」

「……っ、はい！」

ティアナがマーチの手を引いて駆け出す。

それを視界の端に収めつつ、アクセルは眼前の二人に向き直る。

どれだけの時間が稼げるかは分からないが、それでも。

「やるさっ！」

ソウルゲインのブースターを噴かす。同時に両手にエネルギーを集
中。

狙いは仮面の女性。西洋騎士と違い、彼女は身を守る装甲がほとんどない。

ゼロ距離での一撃。例えばパワーが同等だろうと、これならば。

「目標行動パターン、予測……自己暗示をかけていようと、やはり動きは変わりませんね、隊長」

「な、にっ！」

途端、西洋騎士が前に出る。剣を横なぎに振るう。とっさに防御行動を取るアクセル。左腕に衝撃が走る。何とか間に合いはしたが、無理な拳動で態勢が崩れた。そこを逃すものはここにはいなかった。

「その隙は、逃さない！」

日本刀を上段で構え、接近してくる。その踏み込みの速さは尋常ではない。

右腕を上方にし、その一撃を受け止める。

片手では支えきれない重さだが、ここは耐えなければ。

左右両方からこちらを両断しようと、すさまじい重量がかかる。

すでに両者の顔がほぼ目の前という超接近した状況だ。

「ずいぶんとなれなれしいな。もしかして、あんたらのどっちかが、俺の恋人とか？」

軽口をたたいて相手を苛立たせる。

いわゆる口撃というやつだが、期待はしていない。

何となくだが、そんなものが通じる相手ではない気がする。

「余裕、ということか、隊長。しかし、あなたにはアリシア様がいらっしゃる。冗談でもそのようなことは言うべきではありません」「そうよ、隊長さん。アリシアが怒ると怖いのは、身に染みてるでしょ？」

（くそ、こいつらといい、あの美女といい……なんで俺を隊長って呼ぶんだ？）

考え事はあとだ。今はこの状況をどうにかしなければ。

ソウルゲインに命じ、両腕を回転させ始める。

初めは弾かれないようにさらに力を込めていた二人だが、やがてト
ップスピードとなった回転にはかなわない。

自ら身を引き、再び構える。

アクセルは腕を回転させたまま、こちらから攻めようとする。
だが、その時だ。

「ハルバートランチャー、シュート!!」

そんな女性の声が背後から聞こえた。

振り向く。その顔の横を放射状に放たれた閃光が通り過ぎる。

輝く閃光は西洋騎士たちに降り注ぐ。

だが、アクセルはそちらに目を向けていなかった。

その瞳は上下に別れた銃身を構える、人型の機動兵器に向けられて
いた。

(あれは、あの機体は……!)

「無事ですか、アクセルさん!助けに来ましたよ!」

一瞬、記憶の靄が晴れそうになったが、そんな声に現実を引き戻さ
れる。

声は目の前の機動兵器から聞こえた。しかも、聞き覚えがある。

「てい、ティアナ?!おま、なんでそんな?」

アクセルがよく知る少女。

ティアナ・ランスターがその機体を駆っていた。

時間は少し戻る。

アクセルの指示通りにマーチを連れて退避したティアナだったが。

「いいの？」

そんなマーチの一言に、足を止める。

「……そんなわけないじゃない。私だって、あの人を、アクセルさんを助けたいわよ」

だが、自分にはそこまでの力はない。

理解している。例え援護に向かったとしても、足手まといになるだけ。

昔の自分からは成長した。だが、それだけだ。彼らの戦闘に入れるレベルには達していない。

「だったら。これ、使えば？」

「え……あ、それって、さっきの」

マーチは再びカードを差し出してきた。それは日光に照らされ、輝いていた。

その輝きにティアナは見惚れる。そして、確信した。

これがあれば……

「マーチ！」

「了解よ。ティアナ、あなたのデバイス貸して」

言われた通りに相棒を待機形態にして渡す。

マーチはクロスミラージュとカードを重ね、ティアナにそれを返す。

それから、空間にディスプレイとパネルを投影する。

「……クロスミラージユ、だったわね？アナタの方でもこちらとの調整をして」

《OK・Connect start》

「フィードバック開始。システムを対象へ適合。全武装チェック……」

空間に映し出されたパネルを尋常ではないスピードで打つ。

ティアナは啞然として口を開けた。

チヨコを落として沈んでいた少女とは程遠い。

これが彼女の本当の姿。F I社代表の姿。

「リンク終了。全システムオールグリーン。『アシユセイヴァー』、起動……！」

マーチの指がエンターキーに触れた。甲高い電子音が聞こえたと同時に、ティアナの身体が光に包まれる。

次の瞬間には彼女の姿はなく、代わりに人型をした機動兵器が佇んでいた。

「私はここでモニターしてる。武器の説明は順次するから。行って」

「……ありがとう！」

「礼はいい。行って」

向きを変え、滑空走行を始めるアシユセイヴァー！

ティアナは気が付いていた。お礼したとき、ほのかに顔を赤らめていたマーチのことに。

やはり年頃の少女。顔には出やすい。

「よし、行くわよ！クロスミラージュ、アシュセイヴァー！」
《Yes, sir!》

クロスミラージュが応え、アシュセイヴァーが代わりにその瞳を輝かせた。

そして、先ほどに戻る。

ティアナはマーチに指示された通り、ハルバートランチャーという武装を目標に向けて放っていた。

「てい、ティアナ？！おま、なんでそんな？」

「質問もお叱りもあとでお願いします。今は、敵に集中しましょう！」

その言葉にソウルゲインが振り返る。

そこにはマントで仮面の女性を庇っている西洋騎士の姿。

見る限りダメージは少ないらしい。あのマントは何製なのだろうか。

「へえ。まさか『こちら側』に稼働段階までいつてる機体があったなんてね。しかも、ASK系か……」

「ソードブレイカーを装備している指揮官仕様。搭乗者はティアナ・ランスター、か」

「こういうのを運命っていうのかしらね」

よく分からない話が聞こえてくる。

あの機体のことを知っているようだ。その上、ティアナのことまで。

(どういうことだ。俺が関係あるのは分かる。だが、何故ティアナまで？)

疑問が浮かぶアクセル。その間にも相手の話は進む。

「 …… W12 から連絡。目標の奪取に成功したようです 」

「 ふん。じゃあ、もう用はないわね …… アクセル！ また会いましょう！ 」

「 隊長。貴重な戦闘データが取れました。感謝します 」

「 おい！ 待て！！ 」

仮面の女性を抱きかかえる西洋騎士。空中へ浮かび、そのまま高速で去って行った。

あつという間だった。何時の間にか周囲の爆音も消えている。

任務が完了したのだ。無駄に戦闘を長引かせるほど愚かではないということか。

アクセルはソウルゲインを待機させ、座り込む。

「 ふん …… 」

「 …… 大丈夫ですか？ 」

アシユセイヴァーを待機させたティアナが近寄ってくる。

隣に体育座りする。どことなく申し訳ないという表情をしている。

俯きながら、遠慮がちに口を開き始める。

「 あ、あの。すいませんでした …… 指示を無視して。結局、何の役にも立てませんでしたね 」

「 …… そんなことはないんだな、これが 」

えっ、と驚き顔を上げる。そんなに驚くことだろうか。

確かに指示無視はどうかと思うが。

「ティアナは奴らの不意を突いた。おかげで、困惑させることが出来たし、それに結果として撤退させたじゃないか」

「で、でも……」

「それに、俺も命令違反したしな……実は避難誘導、ほっぽり出てきちゃったんだな、こいつが」

ティアナと同じだろ、と笑って見せる。

ぽかんとするティアナ。間を置いて吹き出した。

「あははっ。駄目じゃないですか、仕事を放りだしたら」

「お、言うねえ。俺の指示を無視したくせに」

お互いに軽口をたたき、同時に笑う。

二人は副隊長やフォワードメンバーがやってくるまで笑い合っていた。

Side ????

「ん〜、やっぱりいいなあ」

小高い丘。数時間前までラミアらが陣取っていた場所。そこに少女はいた。

長い髪は蒼く、それを所謂ツインテールにしている。つり目の瞳はルビーのように真っ赤だ。

着ているものは黒のボディスーツに、青いベルト。

背中にはベルトと同色のマントを羽織っている。

少女は丘の端に座り、崖から両足を出して揺らしていた。

その視線はやはりホテル・アグスタに向いている。

正確に言えば、敷地内の広場。そこに集まっている機動六課の面々だ。

「あの騎士つばいのもカッコいいけど、やっぱりあのロボットが一番カッコいいね」

視線の先では正座しているアクセルとティアナ、それにマーチがいた。

前二人は仕方がないという表情だが、マーチはなんで私までとばかりに不機嫌そうだ。

「あの筋肉……僕も鍛えれば、手に入るかな？」

「馬鹿言わないでください。鍛えても成長するわけないでしょう」

背後から聞こえた声に蒼い少女は顔をほころばせて振り向く。

そこには栗毛のショートカットをした少女がいた。まっすぐにこちらへ歩いてくる。

暗い紅を基調としたその服の中央には薄紫のリボンがつけられている。

少女は立ち上がり、歩み寄ってくる彼女に抱き着く。

抱き着かれた彼女はため息をつきつつも、優しく抱き返した。

「シユてるん！今日のお仕事は終わり？」

「ええ。ですから呼びに来ました……王はまだ昼寝中シユスタですけど」

「あれは昼寝じゃないよ、もう半日くらい寝てるじゃん！」

「落ち着きなさい、レヴィ。まあ、その通りですが……」

仲睦まじく抱き合いながら会話を続ける。
仲良し姉妹、という言葉がとてもよく似合っていた。

「じゃあさじゃあさ！帰った時に起きてなかったら、砲撃ぶちかまして起こせばいいんだよ！それくらいしなないと起きないって！」

「……それはいい考えです。私も乗りました」

「急いで帰ろ！くうく、楽しみだなあ！王様の唾然とした顔が目には浮かぶよ！」

レヴィという名の少女は急ぐように飛び上がる。

シユテルと呼ばれた彼女は、レヴィを追う前に視線をちらと六課の面々に向ける。

彼女の視線は一人のみを映していた。自身と同じ、栗色の髪を持つ女性。

「舞台が整うまで……あなたと魔導を競うのは我慢しましょう。タカマチナノハ」

早く早くく、とレヴィが叫んでいる。手足をじたばたさせ、シユテルをせかす。

もう少し落ち着くことを覚えなさい、とため息をつき彼女を追った。

小高い丘。そこにはもう誰もいない。

第10話 「ホテル・アグスタ攻防戦（後編）」（後書き）

ついにラミアさんが登場！

ティアナが手に入れた剣の力は？

そして、謎の二人組。シュテルとレヴィがもたらすものは？

次回、「過去、そして彼方より」。

次話もお楽しみに！

SRWOGsの能力値設定？ 『機動六課』編（前書き）

次話から第2章に入るので、息抜きにやってみました。

後悔も反省もしておりません。

アクセル隊長はOGから抜粋です。

SRWOGS的能力値設定? 『機動六課』編

アクセル アクセル・アルマー

格闘：147

射撃：140

回避：197

命中：202

防御：148

技量：165

SP：49

精神/必中・不屈・気迫・熱血・直撃・覚醒：連撃
技能/底力、アタッカー、気力限界突破、援護攻撃、援護防御、力
ウンター

友情2：ティアナ、スバル、エリオ、キャロ 友情1：なのは、フ
エイト、はやて、ヴィータ ライバル1：シグナム

なのは 高町なのは

格闘：140

射撃：155

回避：122

命中：200

防御：175

技量：168

SP：60

精神/不屈・必中・鉄壁・熱血・直撃・狙撃：魂
技能/天才、底力、援護攻撃、援護防御、集束攻撃、ガード
友情3：フェイト 友情2：はやて、ヴィータ

フェイト フェイト・テストロッサ・ハラオウン

格闘：1 4 2
射撃：1 3 9
回避：1 8 2
命中：1 8 4
防御：1 0 2
技量：1 4 5
S P：4 9
精神 / 加速・ひらめき・信頼・熱血・感応・再動：かく乱
技能 / 援護攻撃、インファイト、集中力、見切り、気力+（回避）
友情 3：なのは 友情 2：はやて ライバル 2：シグナム 恋愛 1：
アクセル

はやて 八神はやて

格闘：1 2 1
射撃：1 4 9
回避：1 5 6
命中：1 7 6
防御：1 3 5
技量：1 3 6
S P：6 7

精神 / 集中・必中・気合・熱血・激励・愛：絆

技能 / 指揮官、援護攻撃、援護防御

友情 2：なのは、フェイト 友情 3：シグナム、ヴィータ

シグナム シグナム

格闘：1 4 8
射撃：1 2 9
回避：1 6 6
命中：1 8 1
防御：1 3 0

技量：155

SP：55

精神/必中・不屈・直撃・直感・加速・気迫：戦慄

技能/アタッカー、カウンター、インファイト、見切り、

友情3：はやて、ヴィータ ライバル2：フェイト ライバル1：
アクセル

ヴィータ ヴィータ

格闘：137

射撃：135

回避：176

命中：178

防御：131

技量：141

SP：60

精神/必中・熱血・突撃・てかげん・加速・不屈：魂

技能/底力、リベンジ、アタッカー、戦意高揚

友情3：はやて、シグナム 友情2：なのは

ティアナ ティアナ・ランスタ

格闘：129

射撃：138

回避：179

命中：177

防御：118

技量：135

SP：47

精神/努力・必中・集中・直撃・狙撃・覚醒：予測

技能/援護攻撃、連携攻撃、ヒット&アウェイ、気力+（撃破）

友情2：スバル 恋愛1：アクセル

スバル スバル・ナカジマ

格闘：135

射撃：129

回避：160

命中：175

防御：140

技量：128

SP：62

精神/ド根性・加速・熱血・不屈・鉄壁・友情：闘志

技能/底力、援護攻撃、援護防御、気力+（ダメージ）

友情2：ティアナ 友情1：アクセル

エリオ エリオ・モンディアル

格闘：136

射撃：124

回避：175

命中：178

防御：109

技量：120

SP：60

精神/加速・ひらめき・根性・必中・熱血・再動：連撃

技能/カウンター、援護攻撃、

恋愛1：キャラ 友情2：アクセル

キャラ キャロル・ルシエ

格闘：113

射撃：133

回避：174

命中：165

防御：118

技量：118

SP：80

精神/集中・祝福・偵察・応援・信頼・激励：大激励

技能/SP回復、SPアップ、ラーニング、

恋愛1：エリオ 友情2：アクセル

S R W O G S 的能力値設定？ 『機動六課』 編（後書き）

いかがでしたでしょうか？

管理局の白い魔王は天才科学者を参考にしましたw

白い悪魔も涙目の能力値じゃないっすかね？

それでは、次回。

第2章「交差する世界」をお楽しみに。

第11話 「過去、そして彼方より」 (前書き)

結構、間が空きましたが、やっと投稿できました。
ついに第三の敵登場。

一体、最後はどうなるのやら、作者も分かりませんw
それでは、どうぞ。

第11話 「過去、そして彼方より」

Side ????

赤く澄みかかった世界。

「問題……あり……」

生命のない静寂な世界。

「宇宙……監視……静寂……で……なければ……」

周囲にはストーンサークルや紅い結晶体がいくつも漂っている。

「憎み合う……望んでいない……世界……」

ここは広大で、果てを感じさせなかった。

「混乱……混沌……世界の……修正……」

古き頃より監視者はここに存在していた。

「……完成する……新たな生命……」

過去も、現在も、未来も、その全てがここにある。

「……失敗……やはり……ニンゲンは……」

ここは無限の“刻”が交わる場所。

Side out .

〈第11話 「過去、そして彼方より」〉

《Schlange form》

「行け！シュランゲバイセン！」

ホテル・アグスタの任務を終えて一週間が経った。

あの時現れた西洋剣士。あれは四年前にもシグナムたちによって確認されたという。

管理局で付けられた名称はソードマン。今までは新型のガジェットとして認定されていたが、その情報は改められることになる。

あれを使用していた人物と会話した、あれは全身装着型のデバイスである可能性が高いということをアクセルが証言したからだ。

はやてはこのことを近々、上層部へ報告しに行くらしい。それが正しい判断だろう。

“ガジェットの活発化の裏には、未だ試験段階にある新型デバイスを複数所持する謎の集団が関わっている”という可能性。

これは六課だけでは手に負えない事件となってきたのだ。

六課隊長陣が忙しく情報収集に奔走するなか、フォワードメンバーたちは変わらず、任務がない時は激しい訓練で自らの技術を研鑽している。

いや、訂正しよう。あの日から一人だけ、日常の訓練が変わってし

まった者がいる。

「ガンレイピアを！それからファイアダガーでかく乱！タイミングは任せるわ！」

《Yes, sir. Fire dagger, set》

そう、ティアナ・ランスターだ。

アクセルの目の前では、シグナムとアシュセイヴァーの戦闘が繰り返されている。

ティアナは今日で三日連続、シグナムと模擬戦を繰り返していた。傍らには、マーチ・フレモント。投影されたパネルにはアシュセイヴァーのパラメータやらティアナの情報などが所狭しと列挙されていた。

(アシュセイヴァー、か……)

アクセルは思い返す。一週間前のことを。

あの日、ティアナが使った新型デバイス『バイオメトリクスアサルト・ドラグーン』。あれを動かすため、機体には彼女の生体認証が登録された。

試作機故に変更という融通も利かず、事実上、彼女しか扱うことのできない専用機となってしまうのだ。

緊急時とはいえ、F I社の所有……しかも、世に公表されていない新型試作機のデータを上書きしてしまったことを六課部隊長、八神はやては謝罪した。

《いえ、あの時は仕方ありませんでしたから。データ収集に協力していただけるとは、今回は不問にしましょう》

が、F I社代表から返ってきたのはそんな言葉だった。会社としてもせつかく得られたデータを消すことはできれば避けたいとのこと。

だがしかし、社長自らがデータ収集のため出張してくるという、前代未聞の対応にはやては驚いた。

曰く、こうして研究に没頭している方が楽しい、とのこと。

社長がこれでよく会社が成り立っているな、と思わずつつこみたくなる話ではあった。

そんなこんなで、ティアナは六課にいなながら、F I社製試作機のテストスターを務めていた。

「やはり、彼女は優秀。アルマーさんもそう思う？」

「まあ、それは否定しないけどさあ。何でいっつも俺の隣に来るわけ？」

「貴方の機体、ソウルゲインが気になるから。是非とも貸してほしい。ちゃんと元通りに組み立てる」

「……そんなこと言われて貸し出すやつはいないと思うんだな、これが」

モニターしながら、表情を変えずさらりとそんなことをのたまうモニター。

そうなのだ。ここ三日間ほどティアナの様子を見に来るたびに、アクセルは彼女に付きまとわれていた。

ソウルゲインに興味を持ったらしい。彼女が言うには、未だ試作段階にあるはずの機種が、すでに実戦向けとして稼働していることがおかしいという。

そんなことを言われても、アクセルには記憶がない。故に返す答えもない。

だから今までも、そして今日も、答えをはぐらかす。

「お、そろそろ決着みたいだな」

「ん……」

上段からシユベルトフォルムのレヴァンティンを振り下ろすシグナム。

炎を纏わせているところを見ると、紫電一閃だろう。対するティアナは左手のレーザーブレードを横にして構える。どうやら受け止めるつもりらしい。

激突。火花が散る。

一瞬の拮抗の後、レーザーブレードが途中で切断され、レヴァンティンがアシュセイヴァーを両断しようと頭上に迫る。

「なっ！」

だが、それは止められた。右手に持つハルバートランチャーによって。

シグナムはもちろん、アクセルもマーチも驚く。その使い方に。

その銃身は上下に別れる構造となっている。そこでシグナムの右手を捉えたのだ。

「ソードブレイカー射出！！」

《Yes, sir!》

レヴァンティンを振り下ろさせないために力を入れていたティアナが叫ぶ。

肩に搭載された飛行砲台六基のうち四基が離れ、シグナムの周りを取り囲んだ。

ソードブレイカーもハルバートランチャーと同じ構造をしており、隠されていた銃身が露出している。

勝敗は誰の目からでも明らか。

「……チエックメイトです。シグナム副隊長」

「フッ、ああ。よくやった、ランスター」

シグナムがレヴァンティンを下ろす。ティアナも指示を出して、ソードブレイカーを回収。アシュセイヴァーが光に包まれる。光が収まると訓練着のティアナが現れ、地に足を付けた。瞬間、彼女は膝をついた。シグナムが珍しく慌てて駆け寄る。

「どうした?!」

「いえ……腰が抜けちゃいました」

あはは、と苦笑するティアナ。見れば、手も僅かに震えているし、訓練着は水につけたように汗で濡れている。

確かに、彼女からすれば先ほどの戦法は分の悪い賭けみたいなものだったのだろう。

ブレードの刀身がどこまで持つか、砲身でシグナムの手を受け止めるタイミング。

この三日間でシグナムの手はある程度理解していたとしても、運任せには違いない。

何よりも、目の前まで迫る死の恐怖を乗り越える度胸が必要だった。それを乗り越えたのだ。これくらいは普通だろう。

ほっとしたシグナムは、ティアナの肩に手を回し、彼女をかついだ。

「あとでその機体の報告書。忘れるな」

「……シャワー浴びてからでいいですか……」

そんな会話をしながら、隊舎へと戻る二人。

アクセルとマーチも労いの言葉をかけるために隊舎へと戻った。

「いやあ、さつきは凄かったぜ、ティアナ」
「あ、ありがとうございます」

隊舎食堂。四人がけのテーブルに彼らはいた。

あの後、シャワー室から出てきたティアナを、アクセルはご褒美と言つて昼食に誘つたのだ。時間帯もちょうど正午だった。

それを聞いたティアナは何故か顔を赤くして遠慮したが、直後鳴つた腹の音に更に顔を赤く染め、アクセルの申し出を受けた。

「確かに。貴方のあの機転はすばらしい。ASK-AD02は中・遠距離戦を重視している。その弱点を見出すためにシグナム二等空尉に模擬戦を依頼したけど……まさか、あんな方法があるなんて」
「……マーチ。なんであんたまでここに。というか、食堂で板チョコを並べるな！」

ティアナの左隣。そこに彼女は座っていた。テーブルには五枚ほど、板チョコが重ねられている。

何故か食堂の入口をうろろしていた彼女はアクセルたちを見つけると、一緒に食事しようと言い出した。

本当はさびしかったのだらう。彼女は内向的で進んで話をする人間ではない。

故に知っている人間、つまりアクセルとティアナの傍にいたいのだ。

「ここはものを食べるところ。私が何を食べていても問題ない」

「……まあ、そうだけど」

「いいじゃないか。人数は多い方がいい……あっちと一緒にカンベンだけだな」

アクセルの視線の先にはスバルとエリオ。その前にはうず高く盛りだされたスパゲティ。

それを食べ尽くす勢いの二人に、同じテーブルのキャロは苦笑いしていた。

「もう、見慣れちゃいましたよ。あいつとパートナー組んでから結構経ちますから」

「そんなもんかねえ……ところでさ、ティアナ。なんで髪を下ろしてるんだ？」

そう、シャワー室を出てきてから彼女はツインテールではなかった。何時ものような快活さではなく、大人っぽい姿である。

「あゝ。ちょっと億劫でしたから。何なら、いま結びますけど？」

「……いや。もうちょっと、そのまま置いてくれ」

「え……は、はい……」

ティアナが頬を染めていたが、すでにアクセルは思考の海に潜っていた。

どこかで見たことがある。どこか大人の雰囲気を持ったティアナ。そして、アシユセイヴァーを装備した彼女。

ひっかかる。これもキーワードだ。ティアナとアシユセイヴァー。そう言えば、あのW17とかいう奴もアシユセイヴァーのことを知っていたようだった。

だが、ティアナと何が関係しているのか、それがさっぱりだ。

(いったい、何なんだ?)

「さん、アクセルさん？聞いてますか？」

「あ……すまん。少し考え事をして。どうしたんだ？」

「もう……Aランチ、来てますよ。食べないんですか？」

見ると、目の前には頼んでいた定食。

ティアナはすでに食べ始めていたようで、いくつかおかずが無くなっている。

よほど腹が空いていたようだ。まあ、それも仕方がないだろう。

「おし、じゃあ、頂くとしますか！」

アクセルが食べようとフォークを伸ばす。

その切っ先が触れた瞬間。

《聖王教会から連絡！ガジェット出現！スターズ、ライトニングは出撃準備を！》

けたたましいアラームと共にそんな放送が隊舎に響いた。

その意味は、一級警戒態勢。

「……ナイスタイミングなんだな、こいつが」

「ご愁傷様です。それと、ごちそうさまでした」

ティアナの皿は綺麗にカラとなっていた。

《もうすぐ目的地上空ですぜ！降下準備、大丈夫すか？！》

ヘリの格納庫内にヴァイス陸曹の声が響く。出撃から三十分ほどというところか。

今回の出撃メンバーはアクセルを始めとして、フォワード陣、スターズ両隊長の七名。

そして、今回はアクセルとティアナは別働隊という説明を受けてい

た。

何でも目標施設は地下に造られたエネルギー研究所らしく、ガジェットとの襲撃によって全システムのフェイルセーフが発動。それに伴い冷却用の発電施設も停止し、内部は非常に高温になっているとのこと。

魔法による防御が万全であれば、生身でも突入可能なのだが、周囲にはガジェットにより発生したAMFがある。

そのため、装甲を持ったデバイスの出番というわけだ。

「じゃあ、予定通りに……アクセルさんとティアナは施設突入を最優先に。私たちは先行して周辺のガジェットを掃討後に突入します」

「了解だ。援護は頼むぜ、ティアナ」

「もちろんです。任せてください」

へりの後部ハッチが開かれる。先になのはとヴィータが空中へ躍り出る。

続いて、スバル、エリオ、キャロが。飛ぶ前に、三人が振り返った。

「アクセルさん、ティアアのことお願いします！」

「兄さん、気を付けて」

「お兄ちゃん、ティアナさんのことを守らなきゃダメですよ？」

「分かったから、早く行けって！俺らが出られないだろ！」

少し不満そうにしながら三人が飛び降りた。

そして、残った二人の番。席から立ち上がり、風が吹きすさぶ後部へと移動する。

「すみません、スバルが余計なことを……」

「いや、見た限り事前に相談してたと思うんだな、これが……気を取り直して。行くぞ、ティアナ！」

「はい！」

開かれたハッチの上に立ち、二人は互いの相棒を装着する。片方は蒼い戦神。もう片方は青い機人。

「ソウルゲイン、出るぞ！」

「アシュセイヴァー、行きます！」

大地に穿たれた黒き孔へと、二つの青き彗星が舞い降りる。

Side なのは

「二人は無事に施設に突入したみたいだね、レイジングハート」

《Yes, master》

誘導弾でガジェットをけん制しつつ、なのはは愛機に確認を取る。視線を上げるとスバルが足場の悪い地形であることを見越してか、ウイングロードをいくつも作り、味方の足場代わりとしている。

エリオはそこを起点として、周囲のガジェットに対して雷撃を落としている。傍らにいるキャロのブーストを受けているため、ガジェットの数がどんどん減っていく。

後方ではヴィータがハンマーを振り回して、ガジェットの数を削っているはずだ。

これなら予想よりも早く援護に向かえそうだ。フォワードメンバーも思ったより成長している。

度重なる実戦のおかげもあるだろうが、アクセルの存在が大きいだろう。

スバルが作ったウイングロードはただ適当に作ったのではなく、味方が攻撃しやすく通りやすいような工夫も施されている。

エリオもただ突撃するだけではなくなった。斬撃と雷撃を交えたヒット&アウェイが上手くなっている。

キヤロはブーストの判断が早くなった。何を、いつ、かけるか。要点をしっかりと押さえられている。

全て、アクセルの教えだった。正直、なのはたちだけではこうはいかなかっただろう。

(それに、一番影響を受けているのが、ティアナだろうなあ)

指揮官としての才能が芽生えている。元々、フォワードの指揮を執っていたから資質はあったのだろう。

アクセルの指導を受けてからは大胆かつ繊細な作戦を立てるのもしばしば。

そして、大きな要因が新型機のテストだ。

あの機体……アシュセイヴァーだったか。あの機体はティアナに非常に合っている。

戦闘スタイルはもちろん、彼女の手札を増やすものとしては最高だ。彼女が一体、どれほどのレベルに達するのか。なのはにも分からない。

もちろん不安ではあるが、以前の自分のような無茶はしないだろう。お目付け役がいることだし。

「なのは。どうやら片付いたみたいだぜ。思ったよりあっけなかったな」

「え、うん、そうだね」

気が付けば、すでに周囲のガジェットは残骸と成り果てていた。

フォワードメンバーも集まっている。どうやら予想以上の成長を遂

げているらしい。

(リミッターの解除もすぐかな……)

「なのはさん！早く突入しましょうー！」

スバルが急かすように口を開いた。どうもヒートアップしている。突撃思考はそう簡単に治らないようだ。まあ、スバルらしいといえ
ばらしいが

「落ち着けよスバル。とりあえず、周囲を確認してから」

《ロングアーチより各員へ！周囲に異常重力反応確認！警戒してく
ださい！》

「何?!」

スバルを諷めるヴィータ。だが、唐突な通信に全員が色めき立つ。
異常重力反応とは？

見渡すと、青い何かを纏った影が視界に現れる。

その影は地面にできた穴から這い出してくるように次々と増えてい
く。

よく見るとそれは異様な姿をしていた。

どうやら二種類に区別らしく、一種類は骨で出来た怪物、もう一種
類は鎧をまとった植物と表現できる。

「何ですか、あれ!?!」

「見た目は骸骨に植物……ガジェットじゃない!」

「かといって、ゲシュペンストを使ってる奴らとも系統が違うよう
だしな」

「正真正銘の正体不明……まさか地下にも?!」

地面に視線を向けるのは。

その瞬間を狙ってか、紅い光線を次々と放ってくる異形達。スバルとヴィータが前に出て、シールドを張る。威力はそれほどでもないようだが、数が多すぎる。

(ごめん、アクセルさん、ティアナ……少し援護が遅れるかも……)

なのはは砲撃をチャージしながら、悔しそうに心の中でつぶやいた。

Side out .

くり抜いて作られた洞窟。そこに建造された灰色の建物の内部に二人はいた。

ガジェットの侵入口でもあった縦穴を無事、降下し終えたアクセルたちは研究施設に侵入。

通路に湧いているガジェットを撃破しつつ、最深部にある発電施設へと急いでいた。

《Route retrieval end . It arrives within three minutes》

「ありがとう。アクセルさん、こつちです」

「了解だ……しかし、想像以上に入り組んでるな、こいつは」

そつなのだ。ただの研究施設にしては構造が複雑すぎる。

情報では普通の研究施設となっていたが、どうやら違つようだ。

対侵入者用のセンサーや監視カメラなども設置されている。最もこの暑さによって機能がやられているが。

「ええ。おそらく、違法研究施設でしょう。とりあえず、発電機を動かして事態を収拾したら、調査に移りましょう」

「ああ。そして、ここの責任者をとっつかまえて、お仕置きしてやるうぜー！」

「ふふ、そうですね……つと、ここから先が発電施設みたいです」

目の前には大きな両開きの扉。横にはキーパネルが取り付けられている。

カードキーと数桁の暗証番号で開く仕組みのようだが、二人は疑問を感じた。

「……おかしいですね」

「ああ。これは間違いなく開いてる……どうなってるんだ？」

パネルの小型モニターには『OPEN』の文字が緑色のライトで輝いている。

考えられるのは職員か、ガジェットの仕業かが考えられるが、まず前者はない。

ガジェットの襲撃により職員はフェイルセーフ発動と同時に避難した。故にわざわざここに訪れるはずがない。

後者もあまり適切ではない。ガジェットならば扉のロックを解除するより、扉を破っていくだろう。

といことは、可能性は一つ。

「中に、誰かいるってことか……」

《That's right. A movement reaction perception》

クロスミラーシユが動体反応を確認したことを告げる。

ティアナに視線を向け、援護を頼むことを伝える。

それを理解した彼女は、その手にガンレイピアを構えた。アクセルが一步踏み出す。ドアが自動的に開かれた。その先には、彼の考えていたことと全く違う光景が広がっていた。

「な、何だ、これ？」

室内へと足を踏み入れる。そこは発電施設などではなかった。あるのは楕円形のカプセル。それが部屋のいたるところに設置されている。

「え、何……嘘でしょ……」

続いて入ってきたティアナも愕然としていた。

カプセルの中は液体で満たされ、そこに人が浮いていた。全て金髪の少女。いや、少女というには幼すぎる。年齢は4、5歳といったところか。

「人造、魔導師……」

アクセルはつぶやく。

そうだ。この光景に似たものを彼は知っていた。失った記憶の中にこれがある。

だが、彼の記憶ではカプセルの中は成人した女性が

これが計画の要、聖王の器か……どう思う、アクセル？

途端、そんな言葉がアクセルの脳裏をよぎった。

誰だ。今のは。知っている。だが、覚えていない。

黒装束の男。名前は分からない。だが、“あいつ”はいつも黒を好んで着ていた。

“あいつ”。そうか。“あいつ”とはこの男のことか？
断定するのは早いが、またキーワードが手に入った。

「アクセルさん！大丈夫ですか！！」

「あ、ああ。大丈夫だ、何ともないさ、こいつが……とりあえず、周囲を探索しよう。何か分かるかもしれない」

立ち上がり、周りを見回ろうとしたその時。奥の方から声が聞こえた。

この数は二つ。何やら話しているようだ。

ティアナを伴って慎重に近づくと、空のカプセルの前に二つの人影が見えた。

いや、人影というのは適切ではない。その姿は機動兵器のものだったからだ。

「ん〜。もう運び出された後なんて、無駄足だったよう。ねえ、シユネー？」

「文句を言わないのよ、ロート。任務なのだから。それに、これはこちらのミスではないから、処罰も少ないはずだわ」

一機は赤い重装甲。やや古臭い外見で、言うなれば戦車を無理やり人型にしたかのような姿。肩はシールドを兼ねているのか分厚く、足回りも太くキャタピラのようなものが見える。頭部はキャノピーそっくりだが、使用者の顔を見ることはできない。

もう一機の説明は必要なかった。なぜならアクセルの傍らにいるのと同じの姿をしていたからだ。青と白の装甲。両肩には飛行砲台を積載している。

「嘘……なんで、アシユセイヴァーが……」

ティアナが驚愕している。それも無理はない。

F I社にあるアシユセイヴァーは三機。その内の一機をティアナが使用しており、残りの二機は会社でデータ収集のために保管されているはずだった。

普通に考えれば、奪取されたと思うだろう。事実、ティアナは思っているはずだ。だが、アクセルはそうではなかった。

（そうだ……あいつらが使っていても違和感を覚えない。むしろ、『こちら側』にあることが……ん？）

『こちら側』。何だろう。まるで、『向こう側』があるような思考。気になるが、今は目の前のことに対処しなければ。考える事ならいつでもできる。それよりも。

「お前ら、こんなところで何してる!」

アクセルが前に飛び出す。一応、拳にエネルギーを集中させて構えている。

だが、いま大事なのは情報を集めることだ。無理な交戦は避けたい。

「あゝ、お久しぶりです隊長! W11、ロート・ケプフェン、ただいま任務遂行中ですよう!」

「慎みなさい、ロート……ホテル・アグスタ以来ですか。W12、シユネー・ヴィツテ。ただいま、聖王の器回収の任を受け活動中です、隊長」

「あの時の赤頭巾に、アグスタの時の!……Wナンバーか……!」

赤い装甲の機体からは赤頭巾　　ロート・ケプフェンの音声が、

アシユセイヴアーからは白髪美女　　シュネー・ヴィツテの音声が、それぞれ聞こえてきた。共にW11、W12と名乗ったことから、W17とは何かしら関係があるのだろう。

アクセルの記憶は知っているようだが、今の状態では分からない。

「アクセルさん！不用心です！」

遅れてティアナがソウルゲインの傍らに寄る。

ガンレイピアの銃口を向こう側のアシユセイヴアーに向けた。

だが、それに対して彼女らは何の行動も起こさなかった。

「その声、ランスター“三尉”ですか……いえ、『こちら側』ではまだ二等陸士でしたね、失礼……」

「！……何のこと、何を言っているの？」

「それは、アクセル隊長が良く知っているでしょう」

アシユセイヴアーの顔がこちらを向く。その向こうでは、ティアナの瞳が見開かれている事だろう。

だが、アクセルにしてみればそのことについての回答などない。

「いや、何も知らないんだな、これが……それより、聖王の器って言ったな？」

だから話を逸らし、情報収集へと戻る。

それに気になってはいた。ここが器を製造する研究所ならば、何故あれだけ並んでいる少女たちを運び出さないのか。

そして、運び出されたというのは、どういうことか。

「ええ。出来がいい素体が完成したという情報を受けて、赴いてみ

ればすでに搬出された後……」

「だから、無駄足って言ったんですよ。それにあと数分でここは爆破されますし〜」

「！！！？？」

ここが爆破されるということを知り、アクセルとティアナは顔を青くする。

自分たちだけならば、脱出できるだろう。

だが、なのはらが突入していた場合、最悪の事態を考えなければならぬ。

「ティアナ、急いで脱出するぜ！それと、なのは一尉との回線を繋いでくれ！」

「は、はい！でも、この人達は？！」

「こいつらを捕まえても、俺たちがお陀仏になっちゃったら意味がないんだな、こいつが！急げ！！！」

うしろ髪を引かれているティアナを急かして、アクセルは来た道を逆走する。

一度振り返った先には、転移を行い消えかけていたルートとシユネーの姿。

アクセルは再び前方を見据え、なのは達が突入していないことを祈った。

「というわけで、あいつらは聖王の器……おそらく人造魔導士を回収しに来たけど、すでに運び出されたあとって言うってたんだな、これが」

あれから数時間。大急ぎで脱出したアクセルたちを迎えたのはたちは、どうしたのかと口々に尋ねてきた。

それを遮って爆発物の危険と即脱出を伝えて、ダッシュでへりに戻り離陸した瞬間。

黒い縦穴から火柱が上がった。

一体どんな威力の爆薬を使ったのだろうか、その威力に全員が顔を青くした。

六課隊舎に戻ってからは中で何があったのかの状況説明が始まった。そして、いまに至る。

「なるほどね。もし、私たちが突入していたら、危なかったところだね」

「あの穴からの脱出には結構な推進力が必要になる。ソウルゲインやアシユセイヴァーだからこそ出来たこと」

マーチが淡々と述べたことばに、フォワードの若いメンバーが顔を青くした。

確かにぞつとする話ではある。あんな火柱に呑みこまれたらと思うと……

「それと、確認して分かったことがある。敵のアシユセイヴァー。あれはウチの社のものじゃない。」

「F I社とは別に造られたものってこと？」

いつもと変わらぬ調子で、ティアナの言葉に頷く。

表情にこそ出していないものの、おそらく心中では怒っているはずだ。

何せ、アシユセイヴァーを我が子と同じくらいに大事にしているのだ。その子供を勝手に盗られたようなものだろう。

「あと、私の方でも分かったことが。例のゲシユペンストだけど」
「何か分かったのか？」

フエイトが前に出てきた口を開いた。

ゲシユペンストの件に関しては、アクセルは聞き逃せないことだったため食いつく。

「うん。ゲシユペンストはマオ・インダストリー社っていうデバイス会社が考案していた全身装着型の試作機みたい。でも、十分な資金源の確保が出来なくて、開発は難航。それに社長一家が不慮の事故で亡くなったから会社も倒産して、そのデータだけはある研究所に流れたみたいだね。でも、開発には着手していないって話だよ」
「うーん。謎が解けたと思ったら、深まるばかりやな……それに今回現れた、こいつら」

はやてが空間モニターの画像を変える。ゲシユペンストから骸骨の怪物へ。

こちらはアクセルの記憶も反応しなかった。本当にアンノウンらしい。

「アンノウンの解析状況はどうなっとるんやろうか、マーチ社長？」

「現時点では生物……のようなものと推測」

「生物のようなもの？」

「はい。魔導兵器特有の熱源反応や金属反応はなく、かといって生物でもない。まさにアンノウン。詳細は調査中……でも、分かるところはもうないと思う」

解析にかけては絶大な自信を持つマーチですら悩ませるアンノウン。また、六課が立ち向かうべき謎が増えた。

しかし、アクセルはそれ以上に難問を抱えていた。

時刻は午前零時。ちょうど今日から明日へと変わる時刻。海沿いの道。海と地上の境界に作られた手すりにアクセルは背を預けていた。

「アクセルさん」

「ティアナか……遅くに呼び出して悪いな」

遅れて現れたティアナに向き直る。

会議が終わってから、アクセルは夜中にここへ来るように伝えていた。

ティアナに面倒をかけてしまったからそのお詫びにと。

「礼を言っただけだったな。黙っててくれてサンキューな」

「いえ。アクセルさんが言わなかったなら、報告すべきではないことだと判断しただけです」

そう、アクセルはシユネーたちとの会話を報告していない。

彼女たちの会話を盗み聞いたと全員には説明していた。

そのことを話した時、ティアナは何も言わなかった。

アクセルは彼女に内心で感謝した。このことは自分で片を付けたい。だが、そんなことを言っている場合ではないのかもしれない。

何せ、アクセルがあちらの組織の関係者であることはほぼ確定だろう。

六課側からすれば、アクセルも危険人物には違いないのだから。

そういうことを考えると、ここを離れることも考えなければ……

「アクセルさん。一つだけ言わせて下さい」

「ん？どうした、何か改まって……」

不安に駆られるアクセルの目の前まで、彼女は近づいていた。

躊躇しながら視線を泳がせていたが、決心したように顔を上げる。

何を言われるのか見当もつかないアクセルにティアナは言った。

「……アクセルさんがどんな人だろうと、私は、その、アクセルさんの、味方ですから……あう」

段々と尻すぼみになり、顔を真っ赤にさせて俯くティアナ。

アクセルはそんな彼女を見て、安堵に包まれた。

「ありがとうな、ティアナ……」

俯いている彼女の頭を撫でる。優しく、けれど力強く。自分の感謝の気持ちが伝わるように。

一瞬、驚いたように体を震わせ、あとはされるままの彼女は、どこか猫を思わせた。

長い時間、彼らはそのままだった。

次の日、その二人が寝坊したのは言うまでもない。

第11話 「過去、そして彼方より」(後書き)

ついにラーズアングリフの登場。戦闘は次回に期待。

テイアナとアシユセイヴァー、そして、聖王の器。

『向こう側』ではいったい何が？

そして、アインスト。物語にどう食い込むのか？

次回「剣神現る」。こっご期待！

第12話 「剣神現る」(前書き)

この場を借りて毎回ご愛読くださっている、くらすた様、YUU様、sein様には深い感謝を申し上げます。

あと、最近更新が遅くて申し訳ないです(汗
さて今回はやっとスカさん登場回です。

お楽しみに！

第12話 「剣神現る」

薄暗い部屋。研究室として使われているのか、大きい室内には様々な計器類がそこかしこに鎮座している。

男はその中央でコンソールを叩いている。

白衣を着た男はその姿通り、ドクターと呼ばれていた。

「……素晴らしい。素晴らしいね、この部隊は」

男は巨大なモニターを見上げながら、薄く笑っている。

いや、もしかしたら、これが彼の素の表情なのかもしれない。

「エース・オブ・エース、夜天の主、プロジェクトFの遺産、タイプゼロ……それに」

映像が切り替わる。映し出されているのは、蒼い戦神。

魔法をほぼ通さないガジェットを軽々と拳で打ち、あるいは肘で切り裂いている。

「……ソウルゲイン、でしたか。ここ最近、ドクターはその機体に
ご執心ですね」

背後から声がした。どうやら女性のようだ。

ドクターと呼ばれた男は声をかけられるまでその存在に気が付かなかった。

考え事していると周りが見えなくなってしまうのは彼の悪い癖だった。

「おや、ウーノ。どうしたのかね……そちらの方々はお客様かな？」

ウーノと呼ばれた女性の背後に二つの人影があった。

一人は男性のようだ。黒い短髪に始まり、全身が黒装束。ロングコート、ハーフフィンガーグローブ、コンバットブーツ。全てが漆黒に染められている。その顔はこれまた黒いバイザーをかけているため分からない。しかし、その口元はドクター同様、笑っているように吊り上っている。

もう一人は女性。といっても、胸のふくらみからそう判断したのであって、それ以外からは女性という要素が見つからない。紺色の陣羽織にも似た軍服で身を包み、手には鞘に納められた刀。反つているところを見ると、日本刀に近い部類だろう。その頭部は鬼と鎧兜が融合させた意匠の覆面で覆われ、黒装束の男性以上に不明だ。唯一露出した口元は固く閉じられている。

「はい。お連れする前に連絡をしたのですが、出られなかったの……」

「それは、すまなかつたね。考え事をしていたから……申し訳ない、お待たせしてしまったようだ」

ドクターは訪問者に歩み寄る。その顔に笑顔を張り付けたまま、右手を差し出す。

黒装束の男性はそれに応え、手を握り返す。

「いいや、とんでもない。こちらが急に申し込んだ会談だ。そちらに迷惑をかけているのだから、謝罪することはない」

「そうかい？ そう言ってもらえると助かるよ。ミスター……」

「クロノスだ。クロノス・ハーヴェイ。こっちはヴァルフ・アズル。私の護衛、と理解してもらって構わない」

クロノスが促すと、ヴァルフという女性は前に出て会釈。

再び一步下がり、あとは沈黙を守っていた。

「すまないな、無愛想なやつで」

「構わないさ。それよりも聞いていいかい？顔を出してくれたわけを。今までは通信機ごしか、シユネー君といったか、彼女が連絡に来ていたというのに、今日に限っては突然の会談を開いて、こうして最高指揮官の君がわざわざ赴いてくれた……何かあるんじゃないかと、こちらは勘ぐってしまうよ」

「……聖王のクローン。まともなのが出来上がったそうだな？」

一瞬の沈黙。そして、ドクターと黒装束が互いに笑う。

その笑みはどこか共通のものがあつた。

「耳が早いね。さすがは特殊部隊の長、ということかな？」

「情報は戦いにおいて最重要だからな。収集には力を入れているのさ。それで、どうなんだ？」

ドクターがこちらを向いたまま、後ろ手にコンソールを操作する。すると、ソウルゲインの戦闘映像が地図に切り替わつた。

その中央あたりに赤い光点が点滅しており、そこへ五つの青い点が移動している。

「今、ガジェットが回収に向かっている。何事もなければ、あと小一時間もしない内にこちらへ到着する予定だ」

モニターへ視線を向けるドクター。青い点は順調に目的地へと接近している。

ついに青い点が赤い点に重なつた。その瞬間、全ての反応が消えた。

「……どうやら、“あたり”のようだな」

「どうやら、そのようだね。ウーノ、ガジェットに追撃を指示してくれたまえ」

「分かりました。失礼します」

ウーノが一礼して、そのまま退室する。入れ違いになるように、赤色のシヨートヘアーの少女が入ってきた。

少女は室内に見知らぬ人物がいたことに少し驚き、気を取り直してドクターへ駆け寄る。

「ねえ、ドクター。“あたり”が出たんだって？それなら、私も出たいんだけど」

「ノーヴェか。駄目だよ、君の専用武装はまだ調整中だから……」
「今回の“あたり”なら自分の目で見てみたい」

引き下がらない様子のノーヴェに苦笑いする。

オリジナルの血を引き継いでいることは疑いようもない。

「行かせてやればいい。そうだろうか？」

説得しようとしたドクターを遮り、クロノスが口をはさんだ。

ノーヴェは思わぬ援護に目を丸くしている。彼はそんな視線を向けられ、軽く笑った。

「武装については私のMk-?を貸そう。君は見たところ接近戦が得意のようだ。違うか？」

「……まあ、そうだけど」

ならば問題はないと言って、青い光沢を放つドッグタグを差し出す。恐る恐るそれを受け取るノーヴェを見ながら、ドクターは尋ねる。

「いいのかい？こちらとしてはありがたいが」

「気にすることはない。普段、こちらに協力してもらっているのだ。これくらいの援助はしなければ……お前も行って、彼女を見てやれ」

「……承知」

短く答え、踵を返す。ドアの手前まで来てから振り返った。

「小娘。来るのならばさっさと来い」

「……分かってるよ。ドクター、行ってくる」

駆け足でヴァルフを追う。二人が退出してから、クロノスはドクターに視線をやる。

「他にも待機指示を出しておく。そちらからは何人出すつもりだ？」

「そうだね、クアットロ、セイン、デイエチ……後詰にトーレの四人。指揮はウーノに任せるから彼女に聞いてくれ」

「了解した。それでは、私も戻るとしよう。準備ができ次第、連絡をする」

そう言つて反転。出口へと向かう。

その背中へドクターが声をかけた。

「また会えるときを楽しみにしているよ」

「私もだよ、ドクター・スカリエッティ」

バイザーが輝く。空気の抜けるような音をたてて、ドアが自動的に閉じた。

一人になったスカリエッティはモニターへ向き直る。

そこにはゆっくりと移動を始めた赤い光点。それはまぎれもなく“あたり”ということを示していた。

「さて、友人諸君にも動いてもらおうか。手駒は多い方がいいからね」

再びコンソールを叩くスカリエッティ。
その無機質な音が室内を支配していた。

〈第12話 「剣神現る」〉

「はい、今朝の模擬戦と訓練も無事終了！お疲れ様でした！」
「お疲れさん」

ほぼ実戦そのものの模擬戦を終えたフォワード四人は、息も絶え絶えに地面に腰を下ろしていた。
まあ、確かに。今朝は仕方がないと思う。

「今日はいつもより厳しくしたんだけど、疲れたかな？」
「ええ、と……はい、かなり」
「今日はなにかあったんですか？」

回復が早かったスバルが尋ねる。
なのは少し悪戯っぽく笑った。

「実は今朝の訓練が第二段階クリア見極めテストだったの。ごめんね、言っただけ」

「……ええっ!?!」「」「」

四人が一斉に驚く。
最近の訓練のせいか、妙に体力の回復が早い。
くすくすと笑って、隊長陣に視線を巡らせる。

「どうだったかな、フェイト隊長？」

「うん、合格」

「早っ！！」

即答にスターズ二人がツツコミを入れる。

アクセルも、少しはもったいぶらせてもよかったのではないかと思
った。

「ま、こんだけみつちりやってて問題あるようなら、大変だったこ
った」

「不合格だった時はアクセルを伴って、私がいちからより厳しくし
ごいてやるつもりだったのだがな」

「あ、あはは……」

副隊長二人の言葉に、エリオとキャロが苦笑いを漏らす。

何故かアクセルが強制参加の予定だったことに、ため息をついた。
せめて本人に了承ぐらい取ってください。

「あはは……まあ、それは冗談としても、私もいい線行っていると
思ったし、これにて第二段階終了！！」

そんな言葉に四人は一瞬間を置いてから、思い思いに歓声を上げ始
める。

特にティアナは人一倍喜んでいた。まあ、この結果が今までの訓練
の成果とも言えるのだから、当然と言えば当然か。

「デバイスリミッターも一段解除するから、後でシャーリーのところに行ってきたね」

「明日からはセカンドモードを基本形にして訓練すつからな」

「……はい！……って明日ですか？」「」「」

何で、四人そろえて同じこと言ってるんだ？

そこまで疑問に思うことなのだろうか。

休みが貰えてうれしくらい言っても、罰は当たらないだろうに。

「ああ、訓練再開は明日からだ」

「今日は私達も隊舎で待機する予定だし」

「皆、最近はずっと訓練漬けだったしね」

隊長陣が言っていることの意味が分かっていないのか、全員が顔を見合わせている。

そんな四人を見て、アクセルはその様子におかしくなって笑った。

隊長陣も同様だ。

「つまりだ。第二段階終了のお祝いってことで、今日は一日休みなんだな、これが」

「街にでも出かけて、遊んでくるといいよ」

「……！」「」「」

テスト合格よりも大きい歓声が上がる。

一応はみんな子どもなんだからな。こうこなくては。

「へ？……尾行？」

「そうなんですよ、アクセルさん！あなたになら頼めると思いで
て」

残りの時間、何をして過ごそうかと廊下を歩きながら悩んでいたア
クセル。

聖王教会関連の調べものでもしようかと思いついた時、駆け足で寄
ってきたシャリオに捕まった。

息を整えさせてから要件を聞くと、何でもエリオとキャロがデート
(?) をするらしいから、それを尾行してくれというのだ。

「ようするに、デバガメなんだな、こいつが」

「うっ……それはそうなんですけど、だめですか？」

シャリオ自身は仕事を立て込んでいて忙しいとのこと。他に頼める
人もいなさそうだと言う。

少し迷ってから、久しぶりに休日を満喫するのもいいかもしれな
いと考え直した。

「いいですね。今度、晩飯をおごってくれるならね」

「本当ですか、ありがとうございます！！じゃあこれ、私謹製の高
感度カメラです！」

そこまでのことなのか、こいつはと嘆きつつ了承する。

シャリオは夕食の件についても笑顔で頷き、再び駆け足で去って行
った。

どうやら忙しいのは本当らしい。

「さて、街までどう行くこうかねえ」

とりあえず、ヴァイスにでも当たってみるか。

それから小一時間。

アクセルはティアナとスバルに挟まれ、サード・アヴェニューにいた。

「どうして、こうなった」

目の前にはエリオとキャラロが仲良く歩いている。

少し、時間を戻そう。あの後、バイクでも借りにヴァイスがいる倉庫へ向かった。

すると、そこには先客としてティアナとスバルがいた。

久しぶりに二人してシヨップिंगに出るという。

こっちはエリキャラロの尾行だと言うと、何故かティアナが一緒にしてもいいですか、と聞いてきた。

スバルと二人で楽しんで来たと言ったのだが聞かず、結局スバルも面白そうと言って同伴を許可したのだった。一人で少年少女を尾行するというのはどうかと思っていたところだ。

そこまではいいのだ。問題は……

「……何も二人して俺と腕を組まなくても」

そうなのだ。ティアナが先に腕を回し、振りほどこうとしたところ、もう一方の腕をスバルに取られた。

スバルはまだいい。いつもの笑顔で、父親に甘える娘みたいな顔をしているからだ。

だが、ティアナはどうか。頬を薄く染め、こちらを窺う眼差しは若

干潤んでいる。上目づかいがそれを際立たせていた。アクセルとしては非常にやりづらい。というか、これでは写真を撮ることも出来ない。

どうするか。と言っている間にもエリオはキャラロに手を差し出して。キャラロもおおずおおとそれを握り返していた。

マズイ。これはシャッターチャンスだ。アクセルはポケットの中のカメラを四苦八苦しなから取り出し、腹のあたりで構える。

そして、連射……じゃなかった、連写する。

出来栄は、神のみぞ知るといったところか

「……なあ、二人ともそろそろ」

「あ！アイスクリーム屋さん！ほらほら、アクセルさんも行こう！」

「ちよつ、ひつぱんなつて！」

そろそろ離れてほしいという言葉はスバルの歓喜の声に遮られた。

アクセルの静止を聞かず、ずんずん進んでいくスバル。一体どれだけの力があるのか。

しかも、ティアナは言いかけた言葉を察してかアクセルの腕を自身の胸に押し付ける。

……アクセルの受難はまだ終わりそうにない。

ティアナ、アクセル、スバルの順でベンチに腰かけ、アイスクリームを食べている、そんな光景。

傍から見ると、どう見えるのか気になるところではあったが、そんなことを誰かに聞く勇気などなかった。

途中、ティアナの鼻に付いたアイスをアクセルが指ですくって舐め、

彼女が真っ赤になるなど楽しそうに過ごしてはいたが。

「……見失った」

「すいませんでした」

そう、アイスに夢中になっていたため、エリオとキャロの姿を見失ってしまったのだ。

しかも時間帯はちょうどお昼時。このサード・アヴェニューの人通りは先ほどの二倍。

アクセルは知らなかった。この近くに最近“謎の食通”と呼ばれる天才料理人が店を構えたことを。

そのせいで平日でも休日でも、ランチの時間はもちろん、ディナーの時間もここは人通りが激化するのだ。

「……仕方がない。手分けして探そう。ティアナは西、スバルは東を頼む。見つけたら連絡、三十分後にはここで落ち合おう」

「でも、アクセルさん。写真もそれなりに撮ったし、あとは若い二人に任せては？」

ティアナがそう言った。それよりも一緒にショッピングしましょう、みたいな顔をしている。

その申し出に頷きたい。だが、アクセルもこの尾行任務を辞められない理由があった。

「ティアナ。これ、シャーリーから頼まれたって話はしたよな？」

「ええ。それが？」

「たぶん、黒幕はフェイトだ」

「「!!??」」

まず間違いがない。あの二人（と一匹）がデートするというのに、

あの親バカのお嬢様が気にならないはずがない。

それをアクセルは身を以て知っていた。エリオと同室になってから、週に一度は様子を聞いてくる。

何か悩み事はないかとか、最近背は伸びているかとか、エトセトラエトセトラ。

しかも、子細報告しなければならぬのだ。正直、下手な報告書を書くよりもつらい。

「考えてみてくれ、二人とも。三人でアイス食べてたら見失ったんだな、これが……なんて報告でもしたら」

「スバル！行くわよ！！」

「オツケー！東側は任せて！！」

言い終わる前に走り出す。金色の雷神の姿でも思い浮かべたか、その走りは鬼気迫るものがあった。

しかし、人混みの中をあれだけのスピードで走り抜けられるとは。

これもあの厳しい訓練の成果か……

……しみじみとしている場合じゃない。俺も探さないとな。

アクセルも人の合間を縫って走りだす。周囲を見渡すのも忘れない。

(しっかし、よくまあ、平日だって言うのにこんな人が……ん?)

五分ほど経って、いいかげんこの人混みに苛立つてきた頃だった。

アクセルの耳がこの日常には似つかわしくない音を捉えた。

鉄製の何かを、コンクリートの上で引きずったような鈍い音。

ちょうど今しがた通り過ぎた、薄暗い路地から聞こえた。

引き返して、路地の奥を見据える様に目を凝らす。

すると、奥のマンホールが徐々に開きつつあった。

アクセルは慎重に近づきつつ、現れつつある影を見定めようとする。最初に見えたのは、薄汚れつつもその存在を強調している金紗。

「……！！」

それを視界に収めた時、アクセルはすでに駆け出していた。自身の直感に従って。

素早く今にも力尽きそうな影をマンホールから引き上げた。

「やっぱりか……」

引き上げた影は小さな女の子。その身体は下水を通ってきたため薄汚れ、纏っているのは衣服としての機能を果たしていないボロ布。腕には鎖が巻かれ、その先には黒いケースが繋がれていた。薄く開かれた両目が、アクセルの直感が正しかったことを告げている。

（右目が緑、左目が赤……古代ベルカにおける聖者の印、だったか）

その色違いの瞳はアクセルの姿を捉えていたが、果たして正しく見ることができていたかは定かではない。

だが、少女は弱々しくも目の前の彼にこう告げた。

「た、すけ、て……」

そのあまりにも弱った姿にアクセルはかける言葉を失う。だが、今は彼女を安心させなければ。

「……もう大丈夫だ。安心して眠っていい」

そう告げると、ホッとしたような顔をして全身を弛緩させる少女。気を失ったようだ。

少女の身体を確認する。擦り傷以外に目立った外傷はない。着ていた上着を少女にかけ、自身の身体に引き寄せる。

（まず間違いない。Wナンバーが探していたのはこの少女……あの施設は聖王の器を生み出すプラント、か）

謎が一つ、解けた。とはいえ、まだ奴らの正体も目的は不明だ。

『こちら側』に来てから何度目になるか分からないため息を吐き、アクセルはロングアーチに連絡を取った。

S i d e アクセル

「ウロコ砲、発射あつー！」

蒼いエネルギーの奔流がガジェット数機をまとめて飲む込み。爆発によって破片が下水に散らばった。

あれから数十分後。アクセルは海上に現れたガジェットを迎撃していた。

少女を引き上げたマンホール、先に駆け付けたのはフォワード四人。キャロにはケースの中のレリックに封印処理を施してもらった。

そして、合流したなのは、フェイト、シャマルに少女の様子を説明。フェイトが休日だというのに任務で、と何故か謝罪したが、アクセルはそれに問題ないと答えた。

他の面々も同様に頷き……ティアナだけは、どこか不満そうだったが。

（なんでだろうなあ……まあ、薄々は分かっちゃいるけどさ）

そして、ガジエットの反応を受けて、いまに至る。

フォワード四人は下水道へと探索に向かった。

少女の腕に巻かれた鎖の先には、どうやら二つのケースがあったらしい。

しかし、引き上げた際には一つしかなかった。

ということは下に残っている可能性が高い。

だが、ガジエットは下水道だけでなく海上方面にも出現。

仕方なく、アクセルは単独迎撃に向かっていた。まあ、スバルの姉の捜査官が合流するらしいから問題はないだろう。

(ギンガは優秀だからな……ん？俺、何でスバルの姉のことを知っている？)

？型から放たれたミサイルを回避しつつ、アクセルは疑問を感じた。ギンガ・ナカジマ二等陸尉……じゃない、陸曹。

“あいつ”は優秀な分隊長……違う、捜査官だ。

(くそ、またキーワードか。なぜ、スバルの姉が……)

ソウルゲインの顔の横をミサイルが通り過ぎる。

見ると、？型の編隊がこちらへ向かってくる。

今は、戦闘に集中しなければ。再び構えるアクセル。

すると、目の前の編隊が横からの砲撃によって消し飛んだ。

「どや！これが、機動六課部隊長の本気や！！」

驚くアクセルの耳に届く声は、間違いなくはやてのもの。

声の聞こえた方向へ視線を向ける。

そこには見慣れない服装に身を包んだはやてがいた。おそらくあれ

が、彼女のバリアジャケット。

「アクセル君！遅くなってすまん！ここは私に任せて、廃棄都市区画に向かつて！」

「何かあったのか？」

「大型の召喚反応を確認したそうや！ヴィータもいるんやけど、何か嫌な予感がするんや！私もこっちを片付け次第、駆け付ける！」

はやての反応を見る限り、非常に危険なだろう。

アクセルは無言で頷き、急いで目的地へと急ぐ。

背後ではガジェットが爆散する音が聞こえた。

Side out .

ここは廃棄都市区画。その一角に巨大な甲虫類が鎮座していた。その角からは断続的に放電が起こっている。

崩れかかったビル群。その一棟の屋上で、紫の髪をした少女がその甲虫 地雷王を見下ろしていた。

「ダメだよルールー！これはマズイって！！埋まった中からどうやってケースを探す？あいつらだって局員とはいえ、潰れて死んじやうかもなんだぞ！？」

その傍らでは30センチほどの少女が騒いでいる。どうやら彼女は少女を止めようとしているらしい。

だが、少女は頑として譲らない。彼女の目的のためにも止まることはできない。

「あのレベルなら、多分これくらいじゃ死なない。ケースは、クアットロとセインに頼んで探して貰えばいい」

少女　ルーテシア・アルピーノは地雷王に命令を飛ばす。

それに応えた地雷王は角から放たれた雷撃を更に強める。そして、直後。

「ああ……やっちゃまった」

地雷王を中心として廃棄都市区画の道路に円形の窪みが出来上がる。それはその区画、つまりティアナたちがいた場所を崩し終えた、ということを示していた。

ルーテシアは隣に浮かぶ少女　アギトにごめんねと呟き、反対側を向く。

そこに佇んでいるのは長身の異形。限りなく人に近いが、どこか昆虫を思わせる。

「ガリユー。怪我、大丈夫？」

尋ねられたガリユーは体を見下ろす。斬撃と打撃のあとが残っているものの、問題ないとばかりに頷いた。

ルーテシアはその様子に安心する。

「戻っていいよ。アギトがいてくれるから」

そう告げると、ガリユーは虚空にできた穴に姿を消した。彼女はそれを見届けると、今度は地雷王へ視線を向ける。

「地雷王も……！」

声をかけようとしたその時。

地雷王の真下に桃色の大型魔法陣が現れ、周囲から多数の鎖が飛び出す。

それらは雁字搦めに地雷王の巨体に巻きついた。

「何だ!?!」

「召喚……!!」

動揺する二人。一方は突然の事態に、もう一方は自分と同じ召喚魔法に対して。

だが、驚きに固まっている暇はなかった。

彼女らに色違いのウイングロードを駆けるナカジマ姉妹とその間を縫って飛ぶヴィータが迫ってきている。

それに気づき、動き出そうとした彼女らにミサイルが迫る。その数、十六。

見れば、向かいのビルの屋上には胸部ハッチを解放したアシュセイヴァー。

「ちいっ!」

舌打ちをするアギトが火炎弾を、無言のまま眉を顰めるルーテシアがダガーを撃ち出す。

だが、それは牽制にしかならず、アシュセイヴァーに身を包んだテイアナはおるか、ヴィータ達にもあたることはなかった。

それに対し再び眉を顰め、アギトを伴って近くのビルへと飛び移る。だが、それはお見通しだったようだ。

「悪いけど詰みだよ、これがね」

着地と同時にルーテシアは首筋に冷たい感触を覚える。見れば、高速で移動してきたエリオが槍の穂先を突き出していた。視線を移動させると、アギトもまた氷でできたダガーで囲まれている。

「ここまでですよ」

リインフォース？がそう告げ、二人にバインドをかける。

観念したように俯くルーテシア。何とか抜け出そうとアギトはもがいていたが、周囲にティアナ達が集まってくるのを見て無駄な抵抗を止めた。

そんな彼女らの近くに降り立ったヴィータが、ため息をつく。

「子供を虐めてるみてえで、いい気分はしねえが……市街地での危険魔法使用に公務執行妨害、その他諸々で」

逮捕する。そう告げるはずだった。

「
待てい！！」

だが、ヴィータの言葉は突然の大声によって、遮られる。

どこかで聞いたことのある声に全員が周囲を見渡す。

一番顕著に反応したのはヴィータ。次いでティアナだった。

「この声……」

「どこかで……」

「あそこです……」

エリオが声を荒げる。その顔は、信じられないという顔をしている。その先にはこの廃棄都市区画の中でも一際目立つ建造物。周りの群を抜く高さを誇るそのビルは今にも崩れそうな雰囲気醸し出している。その崩壊間際の屋上に“闘神”がいた。

「我が名はヴァルフ！ヴァルフ・アズル！！聖王の剣なり！！」

全身装甲。見る者に恐怖を与えるその姿は、ソウルゲインともゲシユペンストとも違う系統だった。頭部には真つ赤な突起。大きくせり出した巨大な肩に、爬虫類を思わせる反った爪先。背中には螺旋を描いた突起が二つ積載されている。腕を組み、自身の名を告げるその姿は尊大としか言いようがない。

「聖王と我らに敵対する者は、全て破壊する！！」

背部のドリルが回転を始め、同時に跳躍する。その衝撃でビルはもろくも崩れ去った。二本のドリルの回転によって生み出された推進力を使って、こちらへと接近してくる。

「っ！全員、散開！」

ヴィータが慌てて指示を下す。それは正解だった。肩のアーマーの先を取り外し、それを手元の引き寄せるヴァルフ。瞬間、装甲の一部だったそれは柄を伸ばし、巨大な刀身を形成した。自身よりも巨大なその刀をヴァルフは軽々と振りかぶり

「一意専心！！」

ウィータ達がいいたビルは一刀両断された。

そんなことが可能なのかというほどの一撃に誰もが驚きを隠せない。すでにルーテシアとアギトの姿はない。おそらくヴァルフ襲撃時にバインドを解除して逃げおおせたのだ。

レリックのケースも消えている。どちらがやったかは分からないが、やったほうの手癖は悪いようだ。

轟音を立てて崩れるビルを背後にして剣神が振り返る。

「フツ、我が斬艦刀を避けたか。そうでなくては、な」

巨大な刀　　斬艦刀を肩に担ぎ、ヴァルフは面白いとばかりに笑う。

その形状はフェイトが使うザンバーにも似ているが、威力はけた違いだ。

一撃でも受ければ、間違いなく命はない。

「だが、戦いの最中に余所見とは甘いな」
「え？」

誰がつぶやいたかは分からない。おそらく誰もが思ったことだったからだ。

それに一番初めに気が付いたのはスバルだった。

突然、自分の頭上に影が差したのだ。雲がかかったのだろうと思い、見上げるとそこに人のような影があった。

「究極ウー!!!」

その人影　　ゲシユペンストMk-?・タイプSが叫ぶ。

全員が振り向いた時にはもう遅い。スバルへ一直線に向かってきた。

「ゲシュペンスト、キイイイック!!!」

スバルはシールドを張る。瞬間、ゲシュペンストの脚とシールドが激突する。

拮抗。その間にスバルは反撃の準備を整える、はずだった。

「どんな装甲シールドだろうと……」

「う、嘘っ?!」

しかし、スバルのシールドは段々と罅割れていく。

強度には自信があった。だが、バリアブレイクの機能を備えているのか、シールド全体にひびが走る。

「蹴り破るだけだあ!」

「きゃあああつ!」

「スバル!!」

ついにシールドが破られ、ゲシュペンスト渾身の一撃がスバルへと直撃した。

ゲシュペンストは地上を削りながら着地。そして、スバルへ視線を向ける。

彼女はあの一撃で吹き飛ばされ、近くのビルへと叩き付けられていた。

それを追うティアナとギンガ。ヴィータはすべての元凶であろうヴアルフへと憎しみのこもった瞳で睨む。

「テメエ……!」

「言っただけだ、甘い。そして、安心しろ。貴様らもすぐ後を追うことになる」

ヴァルフが再び斬艦刀を構える。背中のドリルが回転を始める。グラーフアイゼンを横に構えシールドを重ねて張る。ヴィータは害虫を噛みつぶしたような表情だ。正直、受け止められる自信などない。だが、ここで止めなければ全員やられる。

「我が斬艦刀によってな！」
「くっそおお！！」

目の前まで迫る死の恐怖にヴィータは瞼を閉じた。その時、蒼い何かが横切ったような気がした。甲高い金属音。まるで刀と刀がぶつかり合ったような音だ。だが、ヴィータには何の衝撃もない。ゆっくりと目を開く。目の前には蒼い背中。

「くっ！貴様！」
「世の中、うまくいかないもんさ。これが」

そこには肘のブレードを伸ばし、斬艦刀を受け止めている蒼い戦神。ソウルゲインは腕に力を込め、ヴァルフを押し返す。たたらを踏み、再び斬艦刀を構えなおすヴァルフ。

「……大丈夫かい、ヴィータ三尉？」
「へっ、遅えんだよ、このバカ野郎」
「ハイハイ、すいませんね……それじゃあ、遅れてきた分は働くとしますか！」

ソウルゲインが構える。ヴァルフもにやりと笑った。

「フツ、ソウルゲインか。相手にとって不足なし！」
「ッ！お前は、まさか、Wナンバーか！！」
「いかにも。我が名はヴァルフ・アズル！！ソウルゲインよ！我が
斬艦刀の鎧となるがいい！！」

アクセル ヴァルフ
戦神と剣神の戦いが幕を開く。

Side ????

「アクセルとW14が戦闘に入ったみたいよ」

「そうか……そろそろ出るとするか。アギユイエウスの稼働テスト
にもちょうどいい」

「ええ、そうね……W11、W12。貴方たちもね」

「はいっ！アリシア様」

「了解しました、アリシア様」

「さて、アクセル……迎えに行くわよ」

Side out .

第12話 「剣神現る」(後書き)

どうもぐだぐだ感がありますが、ご了承ください。

ついにそろい踏みオリジナルWナンバーズ。

ラーズアングリフ、ロート・ケプフェン(W11)。

アシュセイヴァー、シュネー・ヴィッテ(W12)。

そして、スレードゲルミル、ヴァルフ・アズル(W14)。

W13は?と思うかもしれませんが、それについては悩み中です。

それでは、次回「揺れる心の異邦人^{エトランゼ}」。

お楽しみに!!

第13話 「揺れる心の異邦人」 (前書き)

はあ、やっと投稿できました。

ずいぶんと長々となりましたが、まあ、勘弁してやってください(汗
それでは、どうぞ。

第13話 「揺れる心の異邦人」

廃棄都市区画。

臨海第八空港の閉鎖に伴い放棄された市街地。

魔導士試験の会場や訓練演習など、多目的に使用されている。

現在は剣神と戦神が空中で戦いを繰り広げていた。

「ぬおおおおおっ!!」

鋼の剣神が両腕を撃ち出す。先端には背部に装着されていた真紅のドリル。

甲高い風切り音をたてながら、それは敵対する者を貫かんと飛翔する。

「ちよいなあ!!回避成功!!」

その間を縫うように避けたのは蒼い戦神。

下手すれば重傷を受けるであろう行動にヴァルフは笑った。

戦神、ソウルゲインは真っ直ぐにこちらに突撃をかける。

ヴァルフの両腕部装甲は撃ちだされたばかりで、防御する術はない。白虎咬の連撃。拳の一つ一つがスレードゲルミルの装甲を捉える。

「ハートを狙い撃ち、とかいってな!!」

トドメとしてゼロ距離からの一撃を胸部に加える。

空中では踏ん張ることも出来ない。様々な演習によって亀裂の走ったビル街へと急落下していくスレードゲルミル。

落下の衝撃で粉塵を巻き上げながら倒壊するビルの下敷きになる。並の魔導士ならば、これで幕引きだろう。

「はは……やっぱ、そう、うまくいかないか」

落下場所の中心。うず高く積まれた瓦礫の山から、ゆっくりと起き上がる剣神。

その装甲には傷一つない。あれだけの乱打を喰らったのにも関わらず。

「流石というわけか。だが、必殺の一撃でなければ、意味はない！」
「ったく、しつこいんだってばよ！」

自己修復能力。スレードゲルミルにはそれが備わっている。

しかも、ソウルゲインのそれよりも修復速度ははるかに上だ。

すでに有効打ともいえる攻撃を三度は与えている。

だが、その全てが驚異的な修復能力で無効化されていた。

「さすがにマズいな、こいつは……」

《アクセル！聞こえるか！》

悠然と立つスレードゲルミルへ攻めあぐねていると、ヴィータから通信が入った。

自分がヴァルフと交戦している間に、格闘戦を好むゲシユペンストはティアナとギンガが担当し、ヴィータはエリオとキャロを伴い気絶したスバルをへりに移送した後、アクセルと合流することになっていた。

もう移送が終わったのだろうか。直接聞いてみた。

《ああ、だけど合流は難しいな……このー！！》

「何かあったのか!？」

《例の異常重力反応と一緒に、アンノウンが出てきやがった。今は、

巨大な穴。そこから、いくつもの影が姿を現した。

最初の一体は、仮面の女性。日本刀を携え、ゆったりと着地する。隣にはソードマン……いや、ヴァイサーガだ。マントをはためかせ地面に降りる。

どこか、女性的な振る舞いが感じ取れるため搭乗者はW17だろう。まあ、当然だ。

“ 奴はアリシアが傑作の一体。駆る機体もその性能に合わせた専用機を用意している”。

(くっ、何だ……今の……)

アクセルの記憶が勝手に語った。ヴァイサーガについて、W17について。

そして、彼女に対する“ 傑作の一体” という表現の仕方。それが正しい言い方であるかのように。

それではまるで、自身が内部事情を知っている人間ということではないか。

苦しむアクセルをよそに穴からは新たな影が現れる。

その姿を目にした時、アクセルの記憶が顕著に反応した。

(……あ、あれは!?)

その姿を一言で表すなら天使。背中には純白の翼が一对。豊かな胸部は搭乗者に合わせたためか。白色と桃色で塗装された装甲がさらにそれを際立たせている。こちらを視界に入れながら大地に降り立った。

そして、もう一体。こちらは巨人という表現が正しい。伝説の悪魔のように捻じれた角を有し、装甲のあちこちは鋭利な形状を取っている。腕組みをして、悠然と降臨した。

(このデカイ奴……どこかで……どこかで……)

アクセルの記憶が反応している。だが、今の記憶がまるで思い出さないようにとばかりに食い込んでくる。

そんな風に苦悩するアクセルを置いて、現れた一団が会話を始めた。

「通常転移は安定しているか……」

「ええ、特に問題はないみたい。これならあっちの機能も、どうにかなりそう」

「ヴァルフ。久しぶりね、元気してた？」

「姉上か。特に問題はない。いや……ソウルゲインとの闘いを邪魔されたな」

「W14。与えられた任務を誤解していないか。確かに貴様の任務は強敵の撃破、その一点に尽きるが、それは任務中のアクセル隊長ではない」

「そこまでだ、W17。そのことは帰還してからにしろ。今は……アクセル、私だ。任務とはいえ、ご苦労だな」

突然、会話の矛先を向けられたアクセル。

相手はどうやら目の前の巨人かららしい。

「は？ 悪いけど、あんた誰だ？」

いや、俺は知っている。この男を。

「この通信が傍受される恐れはない……見ての通りだ。ツヴァイザーゲインにあの装置を組み込むことに成功した。通常転移は安定している。次は……」

巨人を駆る、クロノス・ハーヴェイ。『向こう側』のク

ロノ・ハラオウン。

「ちょ、ちょっと待ってくれ！ 人違いをしてるんじゃないかなんだかわけがわからないんだな、これが」

いや、解っているんだ。ただ『今』の俺が認めたくないだけ。

「何？まだ、その状態なわけ？」

仮面の女性。アリサ・ローウェル。『向こう側』のアリサ・バニングス。

「アクセル隊長……おそらく自己暗示などで、完全に別人格となっているのだと思われます」

いや、俺は記憶喪失だったのだ。“今までは”。

「なるほどね。アクセルは半端なことは嫌いな人、だから」

アリシア・テストロッサ。Wシリーズの生みの親。

「まあいい……W14。お前は撤退しろ。W17。器の確保へ向かえ」

「……承知」
「了解」

スレイドゲルミルとヴァイサーガが飛び立つ。
アクセルはそれに対して反応が出来なかった。
違う、反応する必要がなかったのだ。彼女らは、同じ部隊の……

(俺は……時空管理局……特別任務実行部隊……シャドウミラーの……！)

「W11とW12から、配置に付いたと連絡が来たわ」

天使のような機体 アンジュルグを纏ったアリシアがそう報告した。

「よし……実践テストも兼ねて、ここまでやってきたからな。アクセル、つきあってもらう」

「クロノス！なにを言っているのか、俺にはわからん！！空間転移装置が、その機体に装備されているなん……ううっ！？」

(クロノス・ハーヴェイ……アリシア・テストロッサ……空間転移……シャドウミラー……！俺は……俺……は……！！！)

アクセルの記憶が加速アクセルを始める

〈第13話 「揺れる心の異邦人」エトランゼ〉

Side ティアナ

「つたく、やってらんないわ！」

「それは、こっちの台詞だ！」

構えたガンレイピアから連射される弾丸が骨のような怪物を貫く。

ゲシュペンストの胸部から放たれる熱戦が植物のような異形を撃ち抜く。
アシュセイヴァーとゲシュペンストは背中を合わせて、アンノウン達と対峙していた。

(どうしてこうなったのかしら)

アンノウンとの交戦から数分が経つ。ティアナは背中越しに視線を向ける。

大事なパートナーを潰した、敵であるはずのゲシュペンストを。数分前を思い返す。ティアナはあの場から離脱したゲシュペンストを追った。

ギンガも同様に追っていたはずだが、アンノウンの出現の影響ではぐれてしまった。

(やっぱり、私が原因かなあ)

出現したアンノウンに対応していると、ふとゲシュペンストを狙っていた骨の怪物を見つけた。

自身の身体の一部を投げつけたそれに、彼女は気付いていなかった。ティアナは無意識のうちにそれを撃ち落とし、怪物も撃ち貫いた。

彼女はマスクの向こうで驚いていたようだった。ティアナ自身も驚いていたが。

何故か、スバルが狙われているような感覚に陥ったのだ。彼女のスタイルが接近戦向けだからだろうか。

それからだ。何故か、一時的なコンビを組むようになったのは。即興の作戦を指示してみると、これが思いのほか上手くいった。

スバルと組んだ時のような感覚になり、ティアナらは次々と敵を撃破していった。

(あそこで調子に乗ったのが、まずかったのかも)
「おい！次はどうする？つーか、全然減らねえな」

ゲシュペンストの女性から声をかけられて、ティアナは自分の思考から戻ってきた。

見れば、数は最初の頃と変わっていない。増えているようにも思える。

「あゝ、こんなだったら、外に出るなんて言わなきゃよかった……」

ついには愚痴り始めた。思ったよりも子どもなかもしれない。さつきから、なんだかスバルを相手にしているような気になる。

……だったら。

「へえ、もうバテたわけ？案外、根性なしなのね」

「なっ！んなわけねえだろ！！ほら、次どうするんだ！！」

スバルに対してやる挑発(ちょっと悪意+)をしてみれば、簡単に乗ってきた。

やはり、単純だった。そこなくては。

「じゃあ、行くわよ！」

「ああ、いいぜ！」

再びアシユセイヴァーとゲシュペンストMk-?が動き出す。

Side out .

S i d e ? ? ?

ソウルゲインが空間転移してきた相手と問答している頃。
正反対の方向。高層ビルの屋上に彼女たちはいた。

「デイエチちゃん。ちゃんと見えてる？」

「ああ、遮蔽物もないし、空気もよく澄んでる。よく見える」

一人は白いケープを羽織り、メガネをかけた二つ結びの女性。
もう一人は自分の身長ほどもある巨大な何かを持ち、首の後ろで髪を一つに纏めている少女。

二人とも同じようなボディースーツを着ており、それぞれの胸の上あたりには、それぞれ『？』と『？』の刻印が入ったプレートが光っている。

その視線の先には機動六課の輸送ヘリ。肉眼では確認できない程に距離が開いていたが、デイエチの目はそれを捉えていた。

「でも、いいのかクアットロ。撃っちゃってさ……ケースは平気だろうけど、マテリアルの方は破壊しちゃう事になる」

「それについては問題ありませんよう。器が本物なら、それくらいじゃ死にませんし」

クアットロへ向けられた質問は、突然聞こえた少女の声に遮られる。二人同時に振り向く。すると、そこには赤い重装甲。おそらくこれが声の発信源だ。

何時の間に、そこに現れたのか不明だが、とりあえずとばかりにデイエチは携えていた己の武器を外気にさらす。

狙撃砲、イノーメスカノン。取り回しは難しいが、その分威力は折り紙つき。

その砲口を向けられた重装甲を纏った少女は慌てて、両手を振る。

「ちよつ！連絡いつてないですか？！私は協力者ですよ！」

「デイエチちゃん、ストップ！そちら様の言う通りよ……ごめんなさいねえ。外見を聞いていなかったものですから。」

デイエチ狙撃砲を下げると、ホツとしたのか肩を下ろした。

そして、気を取り直したのか、俯いた状態から背を直す。

「いいえ、こつちの連絡ミスですから。それよりも、そろそろ時間ですよ？」

そう。彼女たちは共通の任務を与えられていた。

三人の視線が輸送へりを向く。その少し離れたところには飛行する白と黒の魔導士。

「ええ、そうね。さあて、デイエチちゃん、狙撃準備よ！」

「ん……IS・ヘヴィバレル発動」

「よし！ラーズアングリフ、バレル展開！」

イノームスカノンの砲口に魔力が集まる。

それを見た、重装甲の少女、ロートも自身の愛機に指示を出す。

折り畳まれていた長大な砲身が展開され、本来の姿へと変わった。

火薬庫と擲弾されるラーズアングリフ。その中で最も威力の高い兵装、フォールディング・ソリッドカノン。

「カウント、5、4、3……」

「照準よし！」

二つの砲身のエネルギーが高まる。おそらく敵側でも確認されたは

ずだ。

だが、もう遅い。臨界点は過ぎている。

「発射よおし!!」

「……発射!」

言葉のタイミングこそずれたものの。

発射のタイミングは全く同一だった。

殺傷能力を秘めた異なる弾丸がへりに向かう。

「うふふ。もらったわね……さつてと、回収に行きましょう」

クアットロの言葉と同時に轟音を放ち、爆発した。

もはや確認するまでもないとばかりに彼女は引き上げる準備にかかった。

しかし、砲撃手の二人は最後まで確認を怠らなかった。

「破片が落ちてこない……あれを、防ぐなんて……」

「……目標の撃墜、失敗ですよ」

「へ?……嘘っ!」

砲撃手の言葉にクアットロは振り返り、未だ爆発の煙が立ち込める一点を見つめる。

晴れない煙を裂いて、一機のへりが飛び出した。

そして、伴うように白い魔導士がそこにいた。

「『エルケーニヒ』……あなたは、『こちら側』でも邪魔をしますか……」

ロートがつぶやいた言葉には重い響きがあり、憎しみの感情がこも

っていた。

Side out .

Side なのは

「ギリギリ、間に合ったね」

《Yes , my master》

高エネルギー反応を感知してから、なのはは限定解除を行った。どうにか砲撃を防御できたが、実際受けてみて危険な威力だった。あと少し遅かったらへりは直撃を受けていただろうし、運が良かったとしか言いようがない。

今頃、呆然としている砲撃手の元へフェイトちゃんが到着しているはずだ。

自分も急がなければ。再び、桃色の羽を広げる。

《Caution! The abnormal gravity reaction is confirmed》

「えっ!」

異常重力反応。例のアンノウンが出現する際に確認されるものだが、一体どこから来るのか。

周囲を見渡す、その目の前の空間に穴が開いた。驚くなのはをよそに影が出現する。

数は二体。いや、二人が正しい。

「再びお会いできましたね。タカマチナノハ」

「ヤッホー!十年ぶりくらい?」

だが、ここに存在しているはずがない存在だった。
その少女たちは十年前に、なのは自らの手によって消滅した。
そのはずだった。

「あなたたちは……闇の書の、マテリアル……」
「いいえ、その認識は若干違います。確かに私は構築体^{マテリアル}です。しかし、今の私は闇の書との繋がりは全くと言っていいほどありません」
「そう、ボクらは生まれ変わったんだよ！新しい存在として！」

姿形は十年前と同じ。子どもの頃のなのはとフェイトに似ている。
だが、どこか生き生きとしている。確かな何かを得たように。

「改めて、私はここに名乗りを上げます。私の名はアインスト・シユテル。そして、愛機のルシフェリオン」
「ボクはアインスト・レヴィー！こっちはバルニフィカス！カッコいいだろ？！」

レイジングハートとバルディッシュ、それぞれと同じ形状のデバイスを構えて彼女たちは宣言する。
シユテルは淡々としていながら、その口調はどこか熱を帯びている。レヴィーは以前にも増して、その元気の良さがあふれんばかりだ。そして、その身体からは十年前とは比べ物にならないほどの力を感じる。
なのははレイジングハートを構え直す。正直言って、苦戦するだろう。

「さあ。タカマチナノハ。私の魔導を受け止めてみせなさい！」
「ボクの究極の一撃！……止められるもんなら、止めてみる！」

十年の時を超えて、再び彼女達マテリアルの魔導が胎動を始める。

Side out .

Side アクセル

廃棄都市区画の一角。その通りで剣戟の音が鳴り響く
ソウルゲインのブレードと、ツヴァイザーゲインの大剣が何度も打ち合わされているのだ

「お前とも久しくやりあっていたな！遠慮はいらな！この機体を破壊するつもりでかかってこい！」

(……クロノス！やっと思いついた……お前は！)

いく度目かの鏝迫り合い。ソウルゲインが相手の腹を蹴り、距離を取る。

ツヴァイザーゲインはたたらを踏んではいたが、ダメージはほとんどないだろう。

「ふっ、やはり接近戦ではお前の方に一日の長があるか」
(俺は……)

クロノスの褒め称える声も彼には届かない。
今は己のことを考えるだけで精一杯だった。

「……試運転としては上々か」

「そろそろ、撤退しましょう。へりも撃墜できなかつたみたいだし。アンノウンも出てきた」

「クロノス、アリシア。俺は……」

呆然としながらもアクセルは“仲間”の名をつぶやいた。それを聞き取った二人はアクセルに視線を向ける。

「……待っている。もう少しだ。『向こう側』の世界でなし得なかったこと。こちらでは可能にしてみせよう。次の指示を待て」

「私も動いていることだしね。アクセル……気を付けてね」

「アリシア……」

自身が連れ添っていた女性の名を嘆く。

同時に二人の周囲に球体型の力場が広がり、瞬時に二人の姿をかき消した。

空間転移。どうやら安定してきているのは間違いないらしい。計画の要ともいえるあの装置の修理が順調という証だ。

「ねえ、アクセル？」

「……アリサか」

建造物の壁に腕組みをして寄りかかるアリサが声をかけてくる。

「あんたってさ、ホントは記憶喪失だったんじゃないの？」

「どうして、そう思う？ 貴様が言った通りに、自己暗示をかけていたのかもしれない、これがな」

アクセルの言葉を鼻で笑って、アリサはこちらへ近づいてくる。チャイナドレスのような服から見える太腿が艶めかしい。

『こちら側』の彼女とはあまり似ていないのかもしれない。

そんなことを考えているうちに、彼女は目の前まで近づいていた。

「そう言っている時点で、嘘だつて事がバレバレよ。私を誰だと思ってるわけ？」

「どうやら通じていいらしい。

仕方がなく、認めようとしたその時だ。

空間転移のフィールドが形成され始めた。

「ん〜？何、忘れ物でもしたのかしら？」

アリサの言うとおりアクセルも初めはクロノスかとも思った。

だが、どうも様子がおかしい。球状のフィールドが段々と揺らぎ始めている。

「転移反応が安定していない……これは」

「そこを退け、塵芥ども」

聞き覚えのある声。だが、その声音はひどく尊大だった。

上空を見上げる。そこには思い描いていた姿とは若干違う姿。

外見は八神はやてにそっくりだが、細部が異なっている。

髪の毛は白、バリアジャケットは黒という対照的になっており、頭部にはチャームポイントともいえる帽子がない。

「貴様は……」

「アンタ、何者よ！いきなり現れて命令、って調子乗ってんじゃないの?!」

アクセルの質問にアリサの問い詰める声が被さる。

まあいい。記憶の中の彼女は大体こうだった。

それよりも今はやてに似た少女だ。

「王である我が退けと言ったのだ、疾く去るのが礼儀というものではないか。魔導人形よ」

「!.....どうして、それを」

「王と自称するには、名乗りをあげていないぞ。それに、この空間転移は貴様の仕業だな」

アリサが狼狽している間に質問を続ける。

転移反応が強まっている。手間取ってはられない。

「言うではないか。おまけに、王たる我に問うとは.....本来であれば首を飛ばすところではあるが、まあいい」

少女はゆっくりと大地に降り立つ。

その尊大な姿ははやてとはかけ離れており、どうにも妙な違和感を醸し出している。

「我が名はアインスト・ディアーチエ。覚えておくがいい。魂を獲する者よ」

ソウルゲインのことだろうか。

どういう意味合いでそう呼んだのかは分からない。

「『ゆらぎ』は確かに我らが引き起こしたもの。先ほど開かれた『扉』を利用してな.....疑似的に『扉』と『扉』を繋いでいる」

「何.....?!」

それは聞き逃すことのできない言葉だった。『扉』がツヴァイザーゲインに搭載された『アギユイエウス』を指しているのならば、それにつながるもう一つの『扉』とは、一つしかない。

「アンタ、正気！あれを『こちら側』に呼び込むってことよ、それ！」

アリスも予想が付いたらしい。あの時、『リユケイオス』の付近にいたのは、まず一人しかいない。

史上最悪の存在。魔王『エルケーニヒ』だ。

「それがどうした。“かの者”は我らが同類。故に我らにとっては脅威となりはせぬ」

「……アインスト、とやらの同類か。納得のいく話だ、これがな」

あの再生能力と不可思議な変異がアインストの特性によるものだとすれば、『エルケーニヒ』はやはり人間ではなくなっていたのだ。ならば、納得だ。とすれば、『向こう側』の管理局も……

「そろそろ頃合いか。扉が開かれる……」

「……させん！！」

ディアーチエが宣言した瞬間、アクセルは飛び出していた。

あいつが転移してくるというのなら、それを始末するのは俺の役目だ。

フィールドに拳をぶつける。拮抗の後、弾き飛ばされた。

「下郎が、無駄なことを。貴様らは“かの者”に始末されるがいい。我は多忙故な、貴様ら如きにかまっている暇などない」

ディアーチエが魔方陣を展開もせず、一瞬にして転移した。

すぐに追跡を始めれば、追うことも出来ただろうが、最悪の敵が現れるかもしれないのに、他に目を向けることなどできなかつた。

フィールドが解け、転移してきた存在が姿を現す。

それは予想とはだいぶ違った。だが、状況が悪いことに変わりはないかった。

「な！……こいつは」

「うそ、なんで……あの時、あそこにはいなかったはずでしょ……」

その色は青。頭部には角、両肩にはコンテナ。

そして、右腕にはその象徴たる杭打機^{スチーク}。

開発コード名、アルトアイゼン・ナハト。正式名称、ゲシユペンス
トMk-?。

……搭乗者はスバル・ナカジマ陸曹長。

またの名を、鋼鉄^{ペーオ}の孤狼^{ウルフ}。

鎮圧部隊『デイザスターズ』の突撃隊長である。

S i d e o u t .

第13話 「揺れる心の異邦人」(後書き)

六課の前に現れたアンノウン。

なのははかつて戦ったマテリアルたちと再び対峙する。

そして、ついに記憶を取り戻したアクセル。

だが、それは今の彼にとって、望まぬものだった。

しかし、それに苦悩する暇もなく、新たな脅威が現れる。

『向こう側』のスバルが駆るゲシュペンストMk-?にアクセルはアリサと共に立ち向かう。

次回、「赤い衝撃」。お楽しみに！

第14話 「赤い衝撃」 (前書き)

近々、キャラ紹介をのせようと思います。

作者もそろそろ人間関係が把握できなくなってきたので(汗
それでは、どうぞ。

第14話 「赤い衝撃」

廃棄都市区画、上空。

管理局が誇る、エース・オブ・エース、高町なのはは苦戦していた。赤みを帯びた橙色の誘導弾が周りを囲み、水色の雷槍が体をかすめる。

元々、彼女の飛行速度はそれほど速いわけではない。

防御で耐えて、砲撃で仕留める。それが彼女の基本戦術。

しかし、今は回避を続けている。それは何故か。

「何でえ！？こらあつ、キミは動くなよ！弾が外れるから！！」

「それはっ、できない、相談……だよっ！」

次々と放たれる雷槍をギリギリで避ける。

全てはフェイトに似た少女　レヴィの放つ攻撃が原因だった。

彼女の攻撃は全て電気を伴う。オリジナルであるフェイトの魔力変換資質をも模倣しているためだ。

それだけならば、問題はない。

問題は彼女の攻撃が、シールドを抜けてくるということだ。

新しく得た能力なのだろうか。魔法障壁を無効化して通過してくる。よって、防御は意味を為さない。

そして、その攻撃は電撃を伴う。

初めに受けた麻痺は解けかけてきているが、これ以上当たるとまずい。

「避けてばかりでは、勝利は得られませんよ……タカマチナノハ」

「え！？」

それに、相手は一人ではない。

背後から声に振り向く。自身に似た少女　　シュテルがそこにいた。
杖から上下左右に放たれた誘導弾が、放射状にこちらへ向かってくる。

《Protection EX》

無意識に左腕を突き出した。それに合わせてレイジングハートが自己判断でプロテクションを張る。
半球上の防御膜に誘導弾が衝突した瞬間、全てが爆発。
とてつもない衝撃がなのはの身体を襲う。

「　　ッッ！！」

声にならない叫びが上がる。左腕にはしる嫌な痛み。ひびが入ったか。

シュテルの誘導弾は爆発する性質を持っているようだ。
こちらはこちらで厄介な能力だ。
痛みで力を込められない左手からレイジングハートが落下しかかる。それを右手でしっかりと保持して構える。
その先にはシュテルとレヴィ。なのはと違い、ダメージらしいものもない。

「……………ねえ、どうやって貴女たちは生き返ったの？」

荒い息遣いを整えつつ、彼女たちに問うた。
戦況を打破するための時間稼ぎでもあるが、単純な疑問でもあった。
あの事件後、残滓の反応は確認されなかったはずだ。だというのに、彼女たちはこうして自分と戦っている。

「……なるほど、時間稼ぎというわけですか」

「へへん。生まれ変わったボクらの力に、恐れ入ったってことだね」
「どうやらお見通しらしい。シユテルはそれも一つの戦術ですなんてつぶやきながら頷いており、レヴィは自分の力が上がっていることに満足している。」

「まあ、上手くいくことも答えが返ってくることも期待はしていなかったが、少し悲しくなった。」

「まあ、いいです。語って差し上げましょう。私たちが目覚めた、その時のことを」

「といつても、あんまり覚えてないんだよね、これがさあ」

「……覚えて、ない？」

「なのはの心情を読み取ったかのように、不意に語り出す彼女たち。だが、覚えていないというのはどうということだろうか。」

「突然、ここに現れたというわけでもないだろう。」

「そんな状況の人はアクセル一人で十分だ。」

「はい。私たちの意識が再び目覚めたのは一年ほど前のことです。」

あの“始まりの地”で」

「そこでボクらは受け取ったのさ、種子を。そして、意思をね」
「……………」

「理解が追い付かない。始まりの地が海鳴だとして、種子と意思とは？彼女たちを蘇らせたものかを指している？」

「なのはには分からなかった。だが、話は続いている。」

「そして、私たちは行動を始めた。静寂なる世界を目指して……………」

「望まれない世界を創る者を修正する。それがボクらの役目……………」

二人が瞳を閉じてつぶやく。何やら纏う雰囲気が違う。どうしていいものかと悩むのは。再び瞼を上げた時、その雰囲気はどこかへ失せていた。

「今回は『こちら側』へ“かの者”を呼び込むため行動を起こしたのですが……」

「あゝ、シユテルも気づいてた？なんか違う感じがするんだけどさ……王様も確認しないで帰っちゃったし、どうする？」

「……帰ったら一発撃ちますか」

「あ、いいね！ボクも付き合おうよ！！」

「え、つと。あの……？」

そちらで勝手に話を進めてもらっても困る。

さつきから分からない単語のオンパレードな上、自身が空気になっている気がする。

声をかけられて、やっと二人はこちらに気づいてくれたらしい。

「申し訳ありません、タカマチナノハ。急用が出来ましたので、今日はこの辺りで。次回までに負傷を直しておいて頂けると嬉しいです」

「じゃあね！今度はちゃんとキミの本気を見せてね！そしたら、ボクがさらにカッコいいところを見せてあげるから！」

「え、あ、ちよつと！！」

なのはの制止を聞かず、二人は足元にできた穴へと消えていく。穴が閉じると、あたりが静かになった。

一人取り残された気分だ。なのはは久々にため息をついた。シユテルとレヴィ。蘇ったマテリアルの少女。

彼女たちを蘇らせた存在。それに関する難解なキーワード。

問題は山積みだった。

「第14話 「赤い衝撃」」

なのはがシユテルとレヴィに苦戦していた頃。

アクセルも苦戦を強いられていた。

二対一であるのは同じだ。しかし、なのはとは状況が逆だ。

「何をやっている！前に出すぎるな、迂闊だぞ！」

「何言ってるの?!前に出なきゃ、攻撃できないでしょうが！」

アクセルの隣には、鬼のような仮面を着けた女性、アリサ・ローウエル。

つまり、こちらが二、あちらが一。

しかし、数が多いことが、必ずしもプラスにつながるわけではない。今の彼らはまさにそれだった。

完全突撃思考のアリサ。記憶が戻ったばかりで軽く混乱中のアクセルは抑えることができない。

「……………」

相手は一体だが、かつての仇敵の一人、ゲシユペンストMk-?。

その姿は『向こう側』で対峙した時となんら変わらない。

その左手に備えた五連チェーニングガンが火を噴く。

ひび割れた道路を削りながら迫る弾丸を左右に別れてかわす。

「ああ、もう！ブーストオ！」

焦れたアリサが左腕を正面に向ける。その先にはMk-?。アリサの両腕には籠手が装着されている。それ自体はただの装甲。だが、アリサの両腕はソウルゲインと同じ、いわゆるロケット・パUNCHの機能を備えている。

遠距離には確かに有効な手段の一つと言えるだろう。だが、Mk-?に対してそれは悪手だ。

「止める、アリサ！」

「ナツクルウ!!!」

制止をかけるアクセルの言葉を聞かず、左腕が撃ちだされる。速度も申し分ないが、相手は『ディザスターズ』突撃隊長。

「……一撃……必中」

右腕を構える。そこには刺突杭、リボルビング・ステーキがある。カウンターのように腕を突き出し、ブーストナツクルの拳を正面から捉えた。

衝突と同時に、リボルバーが回転。炸薬の撃発により杭が撃ち出される。

直後、ブーストナツクルは爆散。破片がその重装甲に散らばる。それを無視して、爆炎の中をMk-?は突撃を仕掛けてくる。

見事なカウンターで腕を破壊されたことにより愕然としているアリサは、突撃に反応できなかった。

「しまっ

」

「手間を、かけさせるな!!!」

アクセルは彼女を庇うように前に出る。差し出された両手をこちらも受け止める。いわゆる力比べだ。拮抗し、動きが止まるMk-?。額の角が伸びている基部で、紅い宝石をあしらったティアラが怪しい光を放っている。アクセルはこの状況に笑った。同じ状況が『向こう側』の世界で『エルケーニヒ』と起こったのを思い出したのだ。奇しくも同じゲシュペンストの発展型を纏っている。上司と部下はそこまで似るものだろうか。

「しかし、『こちら側』で貴様と出会うことになるとはな！」

「……静寂を……乱す者」

「ふん、貴様も相変わらずというわけか……『こちら側』のスバルが見たら、悲しむだろうな」

「……違う……存在……違う……ルーツ」

こちらの質問に答えているのか、答えていないのか曖昧な回答。だが、それは仕方がないのだろう。彼女はあの『エルケーニヒ』の部下だ。

それにこんな問答をしている暇もない。こいつが、いつ変異するのか分かったものではないのだ。

アクセルは無防備なMk-?の腹に膝を繰り出す。防御する術を持たない彼女は吹き飛ばされて、たたらを踏む。

その間に呆然とするアリサを回収し、Mk-?から距離を取る。

「アリサ。戦闘の継続は可能か？」

「……右腕一本でも刀は持てるわ、甘く見ないで」

路地を曲がり、さらにMk-?から離れる。

いったん態勢を立て直す必要があると感じたからだ。

「だったら、先ほどのような無様な姿を晒すな。援護する身にもなれ」

「っ！分かってるわよ……」

瞳の端にキラリと光るもの。涙だろう。それを流すわけをアクセルは知っていた。

シャドウミラー隊の中でもアリサと彼女の主とはそれなりに付き合いがあり、彼女たちの主従関係についても知っていた。

テスラ・ライヒ研究所の所員でもあった彼女の主が幼い頃に作った自動人形。

魂のみの存在であったアリサ・ローウェルは、幼い頃に救われてその体を貰った。

彼女は貰った体を大事にしている。だからこそ、自分の不用意な行動によって腕を失ったことを悔いて涙しているのだ。

「心配するな。必ず家まで送り届けてやるさ、これがな」

「……状況、考えなさい。『方舟』に戻るのは無理でしょう。アンタにも任務があるし」

周りには六課部隊員、後ろにはゲシユペンストMk-？。

アリサにとって抜け出すには難しい状況ではあるが、何とかしてみよう。

自身の友人が涙している。それを助けられない選択肢はアクセルにはなかった。

「まず奴を仕留めないとな」

六課に見つかる前に彼女を逃がす。

それには第三軍的存在である、Mk-？をどうにかしなければならぬ。

「アリサ、何か策はあるか？」

「アンタねえ……大見得切っておいて、他に意見求めるって、おかしいでしょ」

アクセルの腕の中で肩を揺らしている。どうやら笑っているようだ。やはりこいつには、笑顔が似合うとアクセルは声に出さず言った。

「まあ、あるにはあるわ。とっておきのがね」

「……すまん、やはり聞いたのは間違いだった。自分で考える」

すっかり調子を取り戻したアリサが腰に手を当てて（片腕だけだが）、尊大な前振りを言った。

それで理解できたのだ。こういう場合、大体アリサは悪手が多い。ここ一番というところで、何かドジをする。それがアクセルの記憶しているアリサ・ローウェルだった。

だから、アクセルは彼女の意見を聞かないことにしたのだ。

それにアリサは不満があるようだ。腕の中でジタバタと手足を暴れさせている。

「いいから！聞きなさい！上手くいけば、あいつの動きを止められるわー！」

「はあ……言ってみる。実行に移すかどうかはこちらで判断するが」
そう言うと、ようやく暴れるのを止めて、再び自信満々の顔をこちらに向けてくる。

「聞いて驚きなさい。作戦はこうよー！」

アリサの口から作戦が語られる。それを聞いてアクセルはこう思っ

た。

やはり聞かなければよかったです。

敵対していた者を追って、ゲシュペンストMk-?に身を包んだスバル・ナカジマは周囲を探索していた。背部の大出力バーニア・スラスタから生み出される推進力で目標を追う。

「……………」

しかし、どうにもおかしい。そろそろ追いついてもおかしくはないはずだ。

だが、どこにも敵の姿はない。

ということは、どこかで待ち伏せしている可能性が高い。

「始まりの地に至る血……………純粋な源流……………脈々と……………受け継がれてきた……………」

自然と口をついて出た自身の目的。

それを成就させるためにも、彼女はここで止まっていられなかった。

「それを……………手に入れる……………までは……………」

大きな十字路へと出る。かつては多くの人で混み合っていたのだろうか。

横断用の白いペイントは剥げかけており、コンクリには亀裂が入っている。

ちょうど中心を通ったその時だ、頭上に影がかかった。彼女は素早く空を見上げる。

「私の行く手を阻む者は

」

そこには。

「
全て打ち砕くだけよ!!」

身の丈以上の刀身を持つ大剣を構える敵がいた。

「あいつも無茶をする……」

アクセルは先行するアリサの背中を見つめながら、そうつぶやいた。彼女の考えた作戦はこうだ。

この四方をビルで囲まれた十字路で待ち伏せて、中心にMk-?が侵入したら屋上から降下・突撃する。

それだけ。初めに聞いた時は何を言っているんだろうと呆れたものだった。

だが、彼女が付け足した情報が、アクセルを分の悪い賭けに乗らせた。

(いい、アクセル。彼女の動きを止めるなら、額のティアアラを狙いなさい)

先ほど接近した時を思い出す。

確かに額には紅い宝石が輝くティアアラがあった。

（あれには何かの思念が集まっているわ。そう感じるの）

元々魂だけの存在であるアリサ。そういう霊的なものに敏感なのは知っていた。

だが、それが今回役立つとは思ってもいなかった。

（あれを壊せば、たぶん動きは止まるはずよ……私が困になるから、アンタがやって）

理由を聞けば、自身の戦闘スタイルではあんな小さなものを壊すのは無理だと言う。

だからって、アクセルもあまり変わりはないと思うのだが。

確かに、アリサの戦闘スタイルでは無理だろう。というか、その得物ではまず無理だ。

「斬艦刀

」

参式斬艦刀。通常時は日本刀型だが、鰐を展開し、そこから出る液体金属で刀身を覆うことによって超大型の両手剣となる。

『向こう側』にいた頃からの、アリサの愛刀だ。

それを右腕だけで保持している。ビルの屋上からの奇襲はそれを補うためだ。

重力がプラスされる。これで片腕だけによる力不足を解消できる。

「疾風怒濤！！」

気合と共に振り下ろされた斬艦刀。その刀身はMk-?の左腕を捉えた。

いや、違う。左腕に装備されたシールド、そして五連チェーンガン

を両断しただけだ。腕を切り落とすには至っていない。さすがに回避されたようだ。やや離れたところで態勢を整えている。だが、直撃を与えることがアリサの目的ではない。しかし、そんなことは知らないMk-?が反撃を開始する。

「……出力……上昇」

Mk-?の装甲が真っ赤に染まると同時に両肩のハッチが開いた。そこには膨大な数の炸裂徹甲弾が積み込まれている。

レイヤード・クレイモア。その嵐のような脅威がアリサに向かって放たれる。

とっさに斬艦刀の幅広な刀身を盾にする。いくつかは防御できず、両足に、そして顔面に命中。

彼女の妹分とお揃いにした仮面がが砕け、その素顔が露わになる。

「……撃ち……貫く！」

それでも満足できないのか、接近しMk-?はステーキを右腕に撃ち込んだ。

リボルビング・ステーキからすれば紙のような手甲はもろくも砕かれ、右腕も破壊される。

保持していた斬艦刀と一緒に落ちる腕。そして、ステーキを撃ち込まれた衝撃で後ろへ弾かれるアリサ。

空を見上げたアリサの口が何かを紡いでいる。

あとは、任せたわよ

「ああ……任せろ！」

上空でソウルゲインのブースターを噴かせる。

真下には未だ装甲の赤いMk-?。
この構図もまた、『向こう側』での最後の瞬間を彷彿させた。
だが、一点だけ違いがある。

「貴様には、もう反撃する術は残っていない!!」

そつだ。アリサの一撃によりチェーンガンとシールドクレイモアは
両断。

両肩のクレイモアも全弾撃ち尽くした。ステークも空中へは届かな
い。

「アリサの分まで、借りを返す!!ソウルゲイン、フルドライヴ!
」

アリサが吹き飛ばされていたことが幸いした。この距離ならば彼女
を巻き込まない。

拳にエネルギーを集め、それをいくつもの弾丸にして撃ち出す。

雨あられとなって押し寄せる蒼いエネルギーはゲシュペンストMk

-?へと命中し身動きを取れなくさせる。

「でやあつ!!」

逸れた弾丸によって立ち込めた砂塵の中へソウルゲインも突入する。
幾度かの連撃音の後、そこからゲシュペンストMk-?が飛び出し
てくる。その装甲には拳の痕。

「はっ!!」

ソウルゲインも後を追う。まずは腹部に一撃。

「せえいつ！」

仰け反るMk-?に左右二連撃。両肩ハッチ中段がはじけ飛ぶ。

「でええいつ！！！」

更に連撃を加える。クレイモアのコンテナが意味を為さなくなるほどへこむ。

そして、一回転しての踵落としが、防御のために上げた右腕へと直撃。

象徴であるステーキが砕ける。これで、Mk-?の武装は残り一つ。

「……………伊達……………じゃない！」

彼女もやられてばかりではない。

残った頭部の角、ダレイズホーンに電撃を纏わせ、振りかぶる。

予測していたアクセルはそれに合わせて回し蹴りを繰り返した。

横からの衝撃に角は耐え切れず、基部あたりで折れる。

これで、全武装が無力化された。

「うおおおおっ！！！」

更なる乱打。ソウルゲインの拳がゲシユペンストMk-?の全身を打つ。

そして、再び回し蹴りで弾き飛ばす。為す術もなく無抵抗のMk-?。

「コード・麒麟ー！！！」

腕を交差させる。両腕の光球が光を放つ。

それを振りほどくように、腰だめに構える。
連動するように肘のブレードが伸びた。

「この一撃で極める!!」

ブースターを噴かせる。目標は決まっている。

ゲシユペンストMk-?。その額のティアラに埋め込まれた宝石。

「でいいやつ!!」

腕をアッパーカットの要領で振り上げ、ブレードが胸部装甲を切り裂き、そして延長線上に宝石を破壊する。陽光を受けて、破片が散らばるのが見えた。

そして、着地。振り向き、Mk-?の様子を見る。

「あああああああつ!!」

頭を抱えて絶叫するスバル・ナカジマ。

その額からは、何やら赤黒い奔流が四散している。

あれが、アリサの言う思念とやらか。しかし、あれでは思念ではないか。

思念が散り散りになると、彼女は膝をつき、そのままうつ伏せに倒れる。

同時にMk-?が待機形態となり、本来の姿が現れた。

しばらく見ていても、目覚める様子はない。どうやらうまくいったようだ

「……やったわね、アクセル……痛っ！」

振り返ると足を引きずりながらアリサがこちらへ歩み寄ってくる。

右腕はもう一方の腕同様、無くなっていた。やはり、接着は不可能のようだ。

ふらりと倒れかかった彼女を、急いでアクセルは抱き留める。ソウルゲインは待機形態へと移行させた。

「アリサ、無理をするな。至近距離からのクレイモア……並の奴なら死んでいる、こいつがな」

「私を誰だと思ってるの？頑丈さだけだったら、ギンガにも負けなかった。でしょ？」

「それもそうだったな……ふっ」

そう言つて笑つて見せた。彼女もつられて笑みを浮かべる。

それから、彼女を逃がそうとアリサをしつかと抱きかかえた。

「アクセル！怪我はない……その人は？」

その時だった。上空から声が近づいてきた。

振り返ると、アリシア……ではない。フェイトだ。

しまった。彼女にアリサを見られた。これでは彼女を逃がすことはできない。

(どうする……この場を乗り切るには……)

「あゝ、私？私はアリサ・ローウェル。よろしくね」

ぎよつとしてアリサを見る。こいつは馬鹿なのかと本気で思つてしまった。

今から逃げる算段を立てていたのに、名前を明かしてしまつてどうする。

フェイトはフェイトで地球にいるはずの知人(正確には違う)がここにいることに驚愕している。

「あ、アリサ?!なんで、ここに……それに腕が!？」
「ん。まあ、それはおいおい話すから。行きましよう、アクセル？」
「あ、ああ……いいのか？」

勝手に話を進めるアリサに小声で問い掛ける。
それにアリサは笑って答えた。

「いいのよ。腕がこれじゃあ何もできないし、それに足のアクチュエーターがいかれたみたいで、もう動かないのよね」

笑顔ではあるが、どこか影がある。
やはり無理をしている。それもそのはずだ。

身体はボロボロ。愛する主にも会えない。
これから数日は確実につらい日々が待ち受けているだろう。

「……貴様の世話くらい、俺がしてやるさ、これがな」
「あり、がとう」

アリサをしっかりと抱きしめ、フェイトに向き直る。
どうやらアリサがここにいたという驚きから解放されていないようだ。

「重要参考人を隊舎へ連行する。そっちに倒れている女性を連れてきてくれないか」

「え?……あ、うん。分かったよ……って、スバル?!どうして、こんな……」

スバル・ナカジマにも驚いている。

まあ、理解はできるが、できるだけ早く戻りたい。

アクセルは参式斬艦刀を拾ってから、フェイトに催促をかける。

「フェイト執務官、経緯は戻ってから説明する。早くしてくれ」

「あ、うん。ごめんね……」

再びソウルゲインを展開し飛び立つ。

フェイトも後を追ひ、隣に並ぶ。

口をもごもごさせていたフェイトが、意を決したように口を開いた。

「ねえ、アクセル。なんか口調がいつもと違うね？」

「なに？……っと、気が立っているだけなんだな、これが」

いかな。我ながら、おかしな喋り方をしていたものだ。

アクセルはしばらく口調には気を付けることを心に誓った。

だが、自身の正体が明かされるその時は……

Side ????

「アリサちゃんが、戻ってきていない？どういうこと、W17」

とある船内の長い廊下。そこでアリサの帰りを待っていた彼女の主は、目の前の報告してきたラミアに食いつく。

黒いオーラが放たれているにもかかわらず、ラミアは顔色一つ変えることなく淡々と報告する。

「おそらく六課に連行されたものの思われます。申し訳ありません、スズカ様」

「六課に……アクセル君がいるはずだよ。連絡は？」
「いいえ。それに、こちらからは連絡を取ることはできませんので、状況を確認することも難しいかと」

スズカ・ツキムラは悩む。家族が捕らわれている。
連絡も状況確認も難しい。ならば、残された手は……

「分かりました。連絡があつたらすぐに教えてください」
「了解しました」

ラミアが去る。それを確認してから、急ぎ足で自身のラボへ向かった。

部屋に入ると、壁に設置してある小型ハンガーのパネルにコードを打ち込む。

ハンガーに待機していた蒼い人型兵器が起動を開始する。

「さあ、起きて。アークゲイン」

スズカの言葉に反応してか、その瞳に光を灯す。
それを満足げに確認して、彼女は部屋を見渡す。
今から大急ぎで荷造りをしなければならぬ。何が必要だろうか。
部屋にあるものを片っ端から鞆に詰め込みそうな勢いのスズカ。

（まず。リペアキット。プロペラントタンク二、三基。四肢の予備パーツはもちろん……アーク用のカートリッジを三ダース。あとは、何だろうか？必要なのは……）

よくよく確認してみると、それはアリサやアークゲインのものしかなく、スズカの私物は下着の一つもない。

それもそのはず。彼女は今、ここを抜け出し、アリサの下へ向かう

ことしか考えていないのだ。

「待っててね、アリサちゃん。貴女のスズカが今、行くから……」

スズカ・ツキムラ。元テスラ・ライヒ研究所主任である彼女は、家族を助けるためならば、地位を捨て、巨大な組織すら敵に回すことを厭わない人間だった。

S i d e o u t .

第14話 「赤い衝撃」(後書き)

アリサ・ローウェルと機動六課の邂逅は一体何をもたらすのか。

そして、『向こう側』のスバル・ナカジマを見て、スバルは何を思うのか。

一方、記憶を取り戻したアクセルは、その記憶と『こちら側』で得た記憶と板挟みになりながら、新たな問題に直面する。

次回、「忘れ得ぬ記憶」。

お楽しみに！

登場人物紹介Part? (前書き)

「????」3

「????」2

「????」1

「????」どこああああん!

「????」わぁーいーい!

「????」『なぜなに機動六課』

「タヌキはやて」おい、みんなあ!集まりい!

「のろいうさぎヴィータ」……集まれ

「タヌキはやて」『なぜなに機動六課』の時間や!

「フェイトお姉さん」魔法少女リリカルなのは So close, yet so far をお読み下さっている皆さん。初めまして、それから、こんにちは。解説のフェイト・T・ハラオウンです。今日はSAIHALさんの依頼により急遽、このコーナーを始めることになりました。アシスタントはこちらの二人……

「タヌキはやて」みんなのマスコットアイドル、タヌキはやてと!

「のろいうさぎヴィータ」のろいうさぎヴィータがお送りします……

ホントにやらなきゃダメなのか？はやて……」

タヌキはやて「もちのろんや！こんなに面白そうなこと、めったに
でへんしな！それと、ちゃんとタヌキはやてちゃん って呼んで
や！」

のろいうさぎヴィータ「……誰か、助けて……」

フェイトお姉さん「今回は、先ほど申しましたように、SAIH
Lさんからの依頼に沿って、登場人物紹介を行います」

タヌキはやて「なあなあ、フェイトお姉さん。何で、この段階でこ
の企画なん？別に、終わってからでもええんとちゃうかな？」

フェイトお姉さん「説明しましょう。それはSAIHALさんのモ
チベーションを上げるため、らしいです。彼は友人から『プロッタ
ー』とあだ名されるほどの、プロット作成大好き人間です。これま
でに、プロットだけ練って、放置された作品は両手両足の指で数え
ても足りないほど……」

のろいうさぎヴィータ「それって、ただの妄想人間じゃないか？」

????「ドグシャアツー！ SAIHALに150000のダ
メージ」

????「SAIHAL撃墜 強化パーツ『SAIHALの思念
入手』」

タヌキはやて「うわあ……いらん、強化パーツやなあ」

フェイトお姉さん「思念っていうより執念のほうが正しいのかも…
…まあ、それは置いといて、早速本題に入りましょう！登場人物紹介、パート1！！」

タヌキはやて「いええええいつ！！」

のろいうさぎヴィータ「……このコーナー、やる意味あったのか？」

登場人物紹介Part?

- ・ アクセル・アルマー

言わずと知れた本作の主人公。愛機はソウルゲイン。

シャドウミラー特殊処理班隊長。新暦75年、『向こう側』から『こちら側』へ転移するシャドウミラーの後詰に回り、『エルケーニヒ』と対峙。大型転移システム「リユケイオス」を自爆させることで『エルケーニヒ』を葬った……

しかし、無理な転移を行ったために記憶喪失となって『こちら側』へと到着。以後は民間協力者として機動六課に在籍し、新人の教育を主にしている。

廃棄都市区画でツヴァイザーゲインを目にすることで記憶が回復し、『こちら側』の記憶と『向こう側』の記憶と板挟みとなっている。

- ・ 『エルケーニヒ』

特殊鎮圧部隊「ディザスターズ」隊長。本名、ナノハ・タカマチ。愛杖「レイジングハート・エクセリオン」の他にCW-AEC00X「フォートレス」、CW-AEC02X「ストライクカノン」、PTX-007-03C「ヴァイスリッター」など数々の装備を身につけている。

本作のキーパーソン。彼女の存在は何人もの人生を大きく狂わせた。その影響がこれ以降、どう現れるのか。

そして……

- ・ ティアナ・ランスター

アクセルの影響を強く受けた人物。着々と成長を遂げている。マーチと「アシユセイヴァー」に出会い、彼女の人生は一変。管理局員として働きながらF.I社のテストパイロットを兼任している。アクセルを想う心は日々大きくなっており、その心が彼女の人生を更に変えることになる……

また、『向こう側』のティアアナもアクセルと関係がある模様。

・ エリオ・モンディアル

アクセルの影響を受けた人物。全距離対応型の騎士として成長中。「〜なんだよ、これがね」という口癖はもちろん、彼が兄さんと呼ぶあの人から。

・ スバル・ナカジマ（『向こう側』）

「デイザスターズ」の突撃隊長。次期量産機候補「ゲシュペンスト Mk-?」を使用。

何の因果か、『こちら側』へと転移。直後、アクセルとアリサと交戦。Mk-?を破壊され、六課に搬送される。

今後、彼女の存在はどのように関わってくるのか。

ちなみに『こちら側』のスバルより発育がいい（全体的に）。

・ ギンガ・ナカジマ（『向こう側』）

アクセルの記憶にあるギンガ。階級は二等陸尉で分隊長だった模様。

『こちら側』の彼女よりも感情の起伏が少ない人物だったようだ。

・ クロノス・ハーヴェイ

『向こう側』のクロノ・ハラオウン。管理局の腐敗具合に絶望し、クーデターを起こす。専用機はツヴァイザーゲイン。しかし、ナノハ・タカマチ特務空尉率いる特殊鎮圧部隊「ディザスターズ」によって次々と戦力を失い、並行世界へと転移することを画策。

・ アリシア・テストロツサ（『向こう側』）

シャドウミラーの幹部にして技術者。「Wシリーズ」と呼ばれる人造人間を生み出した他、シャドウミラー隊で運用されるデバイスの改良も行う。専用機はアンジユルグ。

また、「ゲシユペンスト」を始祖とする全身装着型デバイスの基礎理論を提唱したのも彼女である。

・ アリサ・ローウェル

『向こう側』のアリサ・バニングス。シャドウミラーの協力者。

刀身の形状を自在に変化させる『参式斬艦刀』を愛用する他、製作者の趣味により、両腕が『ブーストナックル』というロケットパンチとなっている。

ちなみに、顔の仮面のイメージは狂乱家族日記の死神三番。服装はバーニングアリサ。

現在、両腕を失い、両足も動かない状態。これは、強化フラグなのか……？

- ・ スズカ・ツキムラ（『向こう側』）

月村家当主にして、元テスラ・ライヒ研究所技術主任。

アリサのボディ（現在のもの）を製作した。ちなみに「ゲシュペンストMk-?」は彼女の作品。

- ・ ラミア・ラヴレス

Wシリーズの一体、W17でシリーズ最高傑作。Wシリーズに否定的なアクセルをして優秀と言わしめた。

『こちら側』に初めて転移してきた存在。『こちら側』のシグナムとヴィータと交戦した。その際に専用機であるヴァイサーガが故障。修理に時間がかかり、本隊に合流するのが遅くなった。

- ・ ロート・ケプフェン

Wシリーズの一体、W11。子どものような姿を持ち、潜入任務に長けている。シュネーを姉のように慕う。

専用機はラーズアングリフ。

外見のイメージはG・GENERATIONシリーズのカチュア・リス。

名前の由来は、赤頭巾のドイツ語訳“Rotk?ppchen”より。

- ・ シュネー・ヴィッテ

Wシリーズの一体、W12。美しい女性であり、諜報任務に長けている。ロートを妹のように可愛がる。

専用機はアシユセイヴァー。

外見のイメージはG - GENERATIONシリーズのエターナ・フレイル。

名前の由来は、白雪姫のドイツ語訳“Schneewittchen”より。

・ ヴアルフ・アズル

Wシリーズの一体、W14。斬艦刀という大剣を使用し、アリサを「姉上」と呼ぶ。

専用機はスレードゲルミル。

外見は女性体のウォーダン・ユミル。

名前の由来は、オーディンの数ある呼び名の一つ『戦死者の父』と言う意味の“ヴァルフアズル”から。

・ ノーヴェ

戦闘機人、ナンバーズの一人。接近戦主体の調整がされており、その遺伝子情報はクイント・ナカジマのものである。

廃棄都市区画での戦闘において、クロノスから借り受けたゲシュペンストMk-?・タイプSを使用。音声入力による「究極！ゲシュペンストキック」を成功させた。

今後、更なるマ改造……もとい魔改造が彼女を待ち受けている……

・ マーチ・フレモント

FI社代表取締役社長（空気）兼主任研究者（実質）。ティアナに「剣」を与えた。

外見のイメージはG・GENERATIONシリーズのシス・ミットヴィル。

名前の由来は、『スーパーロボット大戦64』における自軍名“マーチ・ウインド” + 日産・マーチ。

・ アインスト・レヴィ

雷刃の襲撃者。何者かに地球・海鳴の地で回収され、擬人型アインストとして復活。

放つ攻撃はシールドブレイクの効果を兼ね備えている、らしい。

・ アインスト・シュテル

星光の殲滅者。レヴィと同様に復活。なのはとの決着を望んでいる。放つ攻撃は爆発の特殊効果を兼ね備えている、らしい。

・ アインスト・ディアーチェ

闇統べる王。他の二人と同様に復活。寝てばかりのぐうたら王で、他の二人に砲撃で叩き起こされることもしばしば。

「アギユイエウス」が引き起こした空間の「ゆらぎ」を利用して、『こちら側』と『向こう側』の扉を不完全で不安定ながらも形成した。

・ ヴィヴィオ

アクセルが救助した人造魔導士の少女。

今後のキーパーソンであり、次話からは騒動を引き起こす存在。
作者は彼女のマ改造……じゃなく、魔改造を予定中。

登場人物紹介Part? (後書き)

フェイトお姉さん「というわけで、人物紹介パート1でした!」

タヌキはやて「ドンドンパフパフ!」

のろいうさぎヴィータ「……わあい(泣)」

フェイトお姉さん「それでは次話予告を!」

タヌキはやて「保護した少女。彼女が引き起こす騒動により、六課は騒然となる!」

のろいうさぎヴィータ「そんな中でも敵はやってくる。しかも、今回の敵は見慣れた蒼い機体で……」

全員「次回、忘れ得ぬ記憶……お楽しみに!」

第15話 「忘れ得ぬ記憶」(前書き)

テス勉とバイトの合間を縫って投稿なう。

お待たせしました。

本当に限界です。俺頑張った。褒めてもいい。

ぐだぐだ感は仕方がない。

では、どうぞ。

第15話 「忘れ得ぬ記憶」

聖王教会。それは古代ベルカに実在した聖王を崇める、次元世界最大規模の宗教団体。

本部はミッドチルダ北部・ベルカ自治領にあり、管理局と同じく危険なロストロギアの調査と保守を使命としている。

「……これは、大変なことになっていますね」

「……ええ、想定外の事態ですよ」

その教会本部の一室。いかにも、偉い人が居を構えていそうな執務室。

窓脇に用意された椅子に男女二人が腰かけていた。目の前の小さいながら装飾が施された丸テーブルの上には、これまた上品なカップ。その上空には半透明のパネルが投影されていた。

そこには機動六課の隊員が廃棄都市区画で奮戦する様子が複数流されていた。

「ガジェットと行動を共にする未確認戦闘機……開発途中の全身装着型デバイスを多数運用する謎の部隊……」

女性 教会騎士団騎士兼時空管理局理事官、カリム・グラシア
少将が眉根を下げつつ嘆く。

彼女が見ている映像はシグナムと交戦するソードマン、はやてが戦闘機を多数撃墜している姿。そして、スバルがゲシュペンストによって撃墜された瞬間。

ソードマンは六課のヘリが撤退すると同時に自らも後退。同じころ、ゲシュペンストはスレイドゲルミルと合流し撤退した。

ゲシュペンストの一撃を受けたスバルは全治一週間の怪我を負った

ものの、搬送後に意識は回復。現在はここ隣の、聖王医療院にいた。

「異常重力反応を伴って現れるアンノウン……復活した三人のマテリアル……」

男性　次元航行部隊XV級艦船「クラウドディア」艦長、クロノ・ハラウン提督はあからさまに眉をひそめている。

彼が凝視する映像は次々と現れるアンノウンを迎撃するヴィータ、エリオ、キャロ。なのはと苦戦させる二人のマテリアルの姿だ。

アンノウンはマテリアルが消えると同時に現れた時同様に重力反応と共に転移した。

ちなみに、なのはは攻撃を受けた衝撃で腕の骨に罫が入ったらしく、しばらく戦闘は控えるようにとのことだった。

「おまけに、アリサ・バニングスとスバル・ナカジマ二等陸士に酷似した人物か……」

パネルをタッチして映像を切り替える。二つの病室を映す監視カメラの映像だ。

一つは横たわり身動き一つしない女性。その容姿はスバルそのものだ。もう一つは上半身を起こし、外の景色を眺めている女性。アリスそっくりで、着ている服の袖を見て分かるように両腕はない。

二人はあの直後に病院へと搬送され今に至る。

「……問題は山積みですね、騎士カリム。それに新しい予言が意味することも気になります」

「確かに、あの予言を無視することはできませんけど、これ以上六課に負担をかけるのは……」

《心配いらへんよ。カリム》

俯いたカリムの耳に慣れ親しんだ声が聞こえた。特徴のある方言。慌てて顔を上げると、目の前のパネルには友人の顔がアップに映っていた。

「は、はやて?! どうして……」

《いや、なんか六課が噂されてる気がしてな? そしたら、ドンピシヤヤ》

カリムも人が悪いなあ、なんて言いながら笑うはやてに、カリムは頬を膨らませた。

クロノもそんな彼女の姿を見てか、微笑ましそうにしている。

「も、もう! 二人とも、私は真剣にですわ……」

《あはは、冗談やって。分かつとる。カリムが私らを心配してくれてるんは。でもな、私らかていつまでも子供やない。少しは、頼ってくれても、ええんや》

はやての真剣な顔にカリムは言葉をうまく紡げなくなった。そして、ため息をついてから、微笑みを浮かべる。

「分かりました。ところで、今日はどうしたのですか?」

そんな顔をされたら話すしかない。だが、まずは彼女の要からだ。はやてへ問い掛けると、真剣な顔を崩して笑顔になる。

《あゝ。入院中のなのはちゃんとスバル。それに重要参考人の二人を六課に連れて行くから、連絡したんや。こつちから三人ほど迎えに行かせたで。多分、もう着いてる頃やろな》

「それなら大丈夫です。シャツハに案内させていますから……あ! それと、はやて。お願いがあります」

《なんや、改まって？》

突然、話が変わったことに訝しんだはやてだったが、カリムは両手を振って、大したことではないと否定した。

……本当は、大したことであるが。

「いえ、ただ貴女の部隊に民間協力者の男性がいたでしょう。確か、アルマーさんでしたか？」

《アクセル君がどないしたん？》

「機会があつたら、会わせていただきたいんです……ダメでしょうか？」

唐突なお願ひごとではあるが、カリムは引き下がるわけにはいかなかった。

自身のレアスキル『プロフェーティンシュリフテン預言者の著書』。それが新たな予言を弾きだした。

それに関わっていると思われる存在。その第一候補がアクセル・アルマーだった。

《なあ、カリム……》

「あ！機会があつたら、でいいんです。近いうちであれば！」

《いや、そうやなくて……》

身を乗り出し、珍しく熱くなっているカリム。クロノは目を丸くしている。

はやてはそんなカリムを見て、何度か口をもごもごさせた後、ようやく口を開く。

《迎えに行ったメンバーにアクセル君、入ってるで？》

それを聞くが早いか、カリムは執務室を飛び出していった。のちに、クロノとはやては語る。「あんなに速く走れたのか」と。

〈第15話 「忘れ得ぬ記憶」〉

時間は少しさかのぼる。

場所はスバルの病室。ここにはベッドに腰掛けた彼女と、ティアナとアクセルがいた。

もう一人、フェイトが来ていたが、彼女は案内役のシスターと共になのはを迎えに行っていた。

「それで？調子はどうなのよ、スバル」

「ばつちり！……なんだけど、運動はまだしちゃダメだってさ」

「当たり前だ。それより、あの一撃をまともに受けて、それだけで済んだことを喜べ」

そうだ。あの格闘戦に特化したゲシユペンスト。

あれは三機存在するMk-？オリジナルの一機。タイプSだ。

Sとはストレングスの意味で、その名の通り強力な内蔵火器を装備し、装甲を強化されたパワータイプの機体。

そして、あの一撃は最大出力から放たれるもので、シールドブレイク機能をも兼ね備えている。

技名はアレだが、威力は信じられないほど高い。今回は使用者の練度の低さ故にこれだけで済んだが、下手をすれば命を落としていただろう。

『究極』の名は、伊達ではないのだ。

「す、すいませんでした……あの、アクセルさん？」
「……どうした？」

スバルがびくつと身を縮ませてから、上目づかいになってアクセルを見る。

どこか捨て犬のようだったという感想は、心の中にしまっておこう。

「なんか、いつもと違います？ 雰囲気ってというか、口調ってというか……」

別に変ってわけじゃないんですよ、と言って手をパタパタと振る。どうやらスバルにも疑われているほど、違和感があるらしい。

確かに記憶を失っていた時の口調からすれば、今は固く冷たい印象を与えるだろう。

「……そんなことはないんだな、これが」

無理やり笑顔を作って、口調を元に戻す。

すると、一応は安心してくれたのか、笑顔を返してくれた。

しかし、隣に座るティアナは横目でこちらを見ている。

いわゆるジト目だ。その視線に耐え切れず、アクセルは口を開く。

「さ、さてと。俺は重要参考人の病室に向かう。ティアナとスバルは、フェイトと合流後、昏睡状態の参考人を迎えに行ってくれ」

また後で、と足早に病室を抜け出す。背中に突き刺さる視線が痛かったが、今は気にしないでおこう。

白いリノリウムの廊下を早歩きで進み、目的の病室へと辿り着く。ネームプレートはない。それはそうだ。彼女は非公式の入院なのだ。

ここに居ることは、病院のスタッフのほとんどは知らない。開け放たれた扉の先には、一つのベッド。そこには上半身を起こし、外の景色を見ている女性がいた。窓から入る風が彼女の金の髪を揺らす。

「……迎えに来たぞ、アリサ・ローウエル」

静かに病室に入り、その声をかけた。すると、すばやくこちらを向き、太陽のような笑顔を見せた。

「待ちくたびれたわよ、アクセル！さあ、行きましょう！」

肘から先のない両腕を振って、アクセルを急かす。

どうやら暇を持って余っていたようだ。その様子に苦笑し、傍らに立て掛けてあつた折り畳み式の車椅子を用意する。

それから、アリサの背中と膝裏の下に両腕を通し、車椅子に移したが、その時、顔を赤らめたのは何故だろうか。廃棄都市からへりまで移動する時も、彼女を抱きかかえてきたというのに。

「アンタって……まあ、いいわ。さっさと行きましょう。私、病院って嫌いなものよ」

「……分からなくもないが、もう一人迎えに行かなければならんのだ、これがな」

「ふん？誰よ？……スバル・ナカジマ？」

それはティアナとスバルの役目だ。我ながらひどい役割を押し付けたものだが、いずれ正体を明かさなければならん。

ならば、早い方がいいだろう。アクセルはそう思って、彼女たちにスバル・ナカジマを迎えに行かせた。

「いや、違う。迎えに行くのは」

今後の計画の鍵となる存在。
古代の遺伝子を受け継ぎし器。

「
聖王の少女さ」

S i d e なのは

「ねえ、ティア。私の目が変なのかな。私がベッドに寝てるよ……」
「スバルの目は正常よ。だって、私も同じ光景が見えてるもの……」
「ふ、二人とも大丈夫？」

呆然とする二人にフェイトが心配になって声をかけている。
フェイトに連れられたなのは、シスターのシャツハ・ヌエラと共にスバルの病室へと向かった。
そこにはスバル、それからティアナがいた。アクセルもいたらしいのだが、参考人の人を迎えに行ったらしい。
そういえば、どんな人たちなのか聞いていなかった。フェイトにその話をして、微妙な笑顔を見せるだけ。
確かにこれを見てからでは、どう答えていいか分からないだろうとなのはは思った。

「でも、本当にそっくりだね……」

ベッドに寝かせられていたのは、スバルとよく似ている人物。
ただ、胸部のふくらみが本人より大きかったり、どことなく大人っ

ばい雰囲気を醸し出していたりしているが。
昏睡状態らしく、心電図の機械音が部屋の中に響いていた。

（詳しく調べないと分からないけど、同じ遺伝子から生まれた人なのかも……）

スバルは戦闘機人だ。考えたくはないが、同じ方法で生まれた存在がいてもおかしくはない。

その辺りは彼女や姉のギンガの定期検診を行っているマリエルにでも聞けば分かることだろう。

「あ、あの！とりあえず、ベッドごと移動させちゃいましょう！移動許可は取ってありますから！」

見かねたシャツハが口を挟んだ。どうやらこの部屋の空気に耐えられなかったらしい。

何故か目のハイライトが消えているティアナとスバルに、わたわたしているフェイト。

（……うん、カオスだ）

ちなみに、シャツハ視点からだとして上記三名の他に、なのはが笑い顔をしているので、なのは以上のカオスを感じていた。

そんな状況を打開したのは震動音だった。いわゆるバイブレーション音である。

それに気が付き、いち早く現実に帰ってきたティアナがポケットに手を入れる。取り出されたのは携帯用の個人端末。

件名を見もせずに通話ボタンを押し、耳に当てる。

心なしか嬉しそうなのはなぜだろう。それは次のティアナの言葉で理解できた。

「はい！ティアナです！アクセルさん、どうしましたか？！」

それを聞いてシャツハ以外の全員が驚く。

どうして、アクセルから連絡が来るのか。

どうして、ティアナがアクセルの番号を知っているのか。

そもそも、アクセルが端末を持っていた事実には驚きを隠せなかった。

「え、あ、はい……ええ！ほ、ホントですか！」

今度はティアナが驚いている。尋常じゃない驚き方だ。ここは病院なので静かにしなさいと注意したいくらい。

しかし、常識人のティアナがそんなに大きい声を出すとは、何が起きたのだろうか。

「分かりました。こちらでも探してみます、では……大変です、なのは隊長、フエイト隊長」

通話を終えたティアナの表情は真剣そのもの。
その様子に焦りを隠せない。

「ど、どうしたの」

「アクセルさんからだったみたいけど？」

「はい、実はですね……」

どういえばいいのだろうか、という表情。

しばらく思索した挙句、ティアナは諦めたように口を開き……

「……保護した少女が消えたそうです」

何の飾りもつけず、そう言った。

再度うるさい声が響いたのは仕方のないことだろう。

そして、看護師の方が来て怒られたのは言うまでもない。

ただ一人、スバル似の女性だけが、我関せずとばかりに眠っていた。

Side out .

「はあ……」

さて、どうしたものか。アクセルは車椅子を押しながらため息をついた。

ここはおそらく中庭。アクセルたちは無駄に広い病院の敷地の中を彷徨っていた。

いわゆる迷子である。

（前にもあったな。あれは記憶を失っていたからだという言い訳は、もう通用せんか）

再びため息。どうも、記憶を失ってからため息が癖になっている気がする。

それは傍目から見たら、駄目な奴なのではないだろうか。

「ダメよ、アクセル。幸せが逃げていくわよ？」

原因が何を言うのか。そう、ここまで来たのはアリサの意見からだっただ。

アリサを伴って聖王少女（仮）の病室まで来たが、ベッドはもぬけ

の殻。

途方に暮れるアクセルにアリサはこう行つた。

（「私の直感ではこっちよ！着いてきなさい！」……押ししているのは俺なんだがな）

そして、十数分後。今に至る。

仕方なく、ティアナに連絡を入れ、散歩に洒落込むことにした。だが、いま思うと、さっさと連絡をしなかった自分も自分だ。

アリサのこれは今に始まつたことではないと言つのに。まだ、記憶が完全に戻っていないからだろう。

（大まかには戻つたのだがな。まだ虫食いのように穴だらけか）
「アクセル、アクセルってば！」

記憶に頭を悩ませていたアクセルの腹に衝撃。
下を向くとアリサがこちらを見上げている。

頭を振つてこちらに注意を向けさせようとしていたのだ。

「どうした？喉でも渴いたか？」

「そういう気遣いは嬉しいけど……じゃなくて、あっち。見なさい」

アリサが視線で促す。見れば、緑の草むらの中に、金色の物体。よく見れば、しゃがんでいる子どもにも見えなくはない。もっとよく見れば、こちらを見つめる瞳の色はそれぞれ違う。

「……ビンゴ、というわけか？」

「ふっふっん。お礼はお姫様抱っこでいいわよ？」

「あとでな……ここで待っている。すぐ戻る」

車椅子から手を離し、慎重に隠れている少女へ近づく。最初の一步を踏み出した時、動揺したように草むらが揺れた。だが、反応はそれだけだった。逃げようともしていない。数歩近づいてようやく全身が明らかになった。あの時の少女だ。今は病院着に身を包み、ウサギのぬいぐるみをしつかりと抱きしめている。

「……………」
「……………」

二人とも無言で向き合う。アクセルは何と声をかけていいか分からずに、少女は警戒心故に。だが、最初に口を開いたのは少女だった。

「……………助けて、くれて……………ありがとう」

一瞬、何のことかと思ってしまうが、おそらくマンホールから引き揚げた時のことを言っているのだろう。

そういえば、柄にもないことを言っていたような気がする。安心していいだの何だの。

本当に、記憶を失っていた時の己の言動は、いったい誰から影響されたものだったのか。今となっては分からないが。

「……………気にしなくていい。俺がしたくてしたことだ」
「でも……………うれしかった」
「そう、か……………」

再び黙り込む。そもそもアクセルは子どもと話すのは慣れていない。『向こう側』だとせいぜいW11くらいのもだった。いや、Wナンバーは例外か。

この少女ほどの年齢の知り合いは……
そこで一つ思いついた。

「名前は？」

そう。アクセルは少女の名前を知らなかった。

人造魔導士である少女に名前を聞くのはタブーだったかとも思ったが、何となく聞きたかった。

昔のアクセルでは考えられない思考である。だが、それに彼自身は気付いていない。

「……ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオか……良い名だ。俺は、アクセル。アクセル・アルマ」
だ。よろしくな」

視線をヴィヴィオに合わせ、優しく微笑み手を差し出す。

これも、昔の彼では考えられない行動だ。

ヴィヴィオはおずおずと差し出された手を握り返した。

「よつと……」

「ひゃっ……わぁ……」

そのまま優しく引つ張り、ヴィヴィオの身体を引き寄せる。

そのまま片腕だけで、少女の小さな体を肩に乗せた。

突然のことに最初は驚きの声を上げたが、肩に乗せられたことで視線が高くなり、その風景に目を奪われている。

嫌がっている様子はないようだ。このまま六課に連れて行こう。

「さて、行くか……アリサ、待たせたな」

「……どうしよう、冗談だったのに……いやでも、アクセルなら……」

…」

アリサの下へ戻ると、彼女が顔を俯かせていた。よく見ると耳は真っ赤。顔も同じくらいだろう。

「アリサ、どうした？」

「ふえ?! な、なんでもないわよ! 早く行きましょう!」

勢いよく顔を上げ、それからそっぽを向く。

忙しい奴だ。いったい目を離している間に何があったのか。

「まあ、いい…… ヴィヴィオ、この人はアリサ・ローウェルだ」

「アリサ、お姉ちゃん？」

「え、ええそうよ。よろしくね、ヴィヴィオ」

ヴィヴィオはアリサの身体をまじまじと見つめてから、こくりと頷いた。

その様子に安堵した。どうやら人見知りはしないようだ。

再び車椅子を押し始める。とはいえ、ヴィヴィオが落ちないように手を添えているため、片手で押さざるをえず、少々つらい状態だ。だが、ヴィヴィオはアクセルの頭に両腕を回し、抱えているような体勢。その笑顔をからすると、降りる気はないだろう。

「ハッ……この状況。傍から見たら、仲良し一家に見られるんじゃない

……」

(……まあ、いつものことだ、これがな)

妄想を膨らませるアリサを見て、アクセルは今日、何度目になるかわからないため息をついた。

Side ティアナ

「あ、ティアナ！そっちにはいた？」

「いえ、いませんでした……」

アクセルの連絡を受けてからティアナとなのは、シスター・シャツハは消えた少女を探して病院中を駆けずりまわっていた。フェイトとスバルは協力してスバル似の女性をへりに運び、今頃は捜索に加わっているだろう。

それとシャツハもこの場にはいない。おそらく、一般では入れないところを探してくれているはずだ。

「どうしよう……外に出ちゃったのかな」

「それも考えられますけど……っと？」

不意にポケットの中に震動を感じた。携帯端末に連絡が入ったようだ。

すばやく取り出し、耳に当てる。

このタイミングでかけてくるのはまず一人しかいない。

《出るのが早いな、ティアナ》

「アクセルさん！今どこにいるんですか?!」

《それはこっちの台詞なんだが……目標を確保した。今は正面玄関にいる》

それで通話は切られてしまった。

ティアナ個人としては、そっちに向かうまで繋いでいてくれてもいいじゃないかと思っただけだ。

「どうだったの？」

「あ、ええっと、見つけたそうです。正面玄関にいるそうですから、行きましょう」

ここから正面玄関までの道順なら覚えていた。それほど時間をかけずに着くだろう。

なのはを促しつつ、ゆっくりと、しかし駆け足で向かう。

病院内であり、なのはは負傷中。それほど無理をさせるわけにもいかない。

数分で目的地にたどり着いた。玄関を出た先には車椅子を押すアクセル。

「アクセルさん……これは一体どういう状況で？」

「聞くな、俺にも分からん、これがな」

車椅子に座る女性は頬に手を当て、体をよじらせている。頬は妙に染まっていた。

アクセルの肩の少女はにこにこ笑いながら彼の頭を抱きしめている。その手にはウサギのぬいぐるみ。

「なんとなく予想はつきますけどね……」

「そうか……なら、何も言わないでくれ」

無言で頷くティアナ。その脇からなのはが歩み出る。

それに少女が気付く。笑顔を消し、なのはに怯えた視線を向ける。

なのはは困ったような笑顔をしながらも、ウサギのぬいぐるみを指さした。

「それ、気に入ってくれたかな？」
「……………うん」

どうやら、気に入っているようで、それを渡したのには対しての視線が和らいだ。

というか、いつ渡したのだろう。また無理して病室を抜け出したのだろうか。

「そっか、良かった。初めまして、高町なのはって言います。お名前、言える？」

「……………ヴィヴィオ」

「ヴィヴィオか。良いね、可愛い名前だ。ヴィヴィオはどこか行きたかったの？」

そう問われ、アクセルに顔を向けた。それに、何だ？という表情をする。

数秒ほど顔を合わせて、またなのはに戻す。

「……………パパとママ、いないの」

「それは大変だ。じゃあ、みんなで探そっか」

「……………うん」

なのはの笑顔につられて、ヴィヴィオも微笑を返す。

どうやら万事解決のようだ。この後は……………

「ん？あれ、『エルケーニヒ』……………じゃないんだっけ。じゃあ、高町空尉でいい？」

「……………そう呼ぶってことは、ホントにアリサちゃんじゃないんだね」

「あゝ、私に似た人は知ってるんだ。へえ」

どうやらまた新しい問題が発生したようだ。

二人の間で、探り合いにも似た空気が流れている。

アクセルはため息をついているし、ヴィヴィオは彼の髪の毛を握りしめている。

「あの、なのはさん。詳しい事情は隊舎に戻ってからにしませんか？ほら、ヴィヴィオちゃんも怖がっているようですし」

仕方がなく、ティアナは前に出た。

本当ならばこの一触即発の空気の間には入りたくなかったのだが、それでは收拾がつかなくなると感じたのだ。

最悪、高町式 O H A N A S I にまで発展するかもしれない。

「……………そうだね。その時はちゃんと聞かせてもらいますよ。アリサ
“さん”」

「ええ、良いわよ……………それにしても、助かったわ。ありがとう、ティ
アナ」

「……………私も知っているんですか」

まあね、と言いつつ寂しげな笑顔を向ける。

どうしてそんな顔をするのか、とても疑問だった。

「じゃあ、そろそろ……………」

「待っていただけますか！」

ティアナがヘリへ戻ろうと促した時、女性の声が響いた。

それに驚いて、視線を声の聞こえた方向へ向ける。

だからこそ、私は見逃したのかもしれない。

アクセルさんも、悲しげな表情だったことに。

Side out .

「貴方が、アクセル・アルマーさんで、間違い、ありませんか」

息を切らしながら、女性はアクセルに問い掛ける。

肩で息をするその度に、長い金の髪が揺れる。手は膝に置かれ、相当疲れているようだ。

「騎士カリム！？どうしてここに？」

「ええっと、すみません。彼をお借りできますか？お時間は取らせませんから」

どうやら用があるのは自分らしい。

なのはがちらと眼を向ける。それに軽く頷き、肩にいるヴィヴィオを見る。

「すまない、ヴィヴィオ。あそこのお姉さんと少し話さなければならぬから、降りてくれるか？」

「えっ……うう、分かった」

「ありがとう。じゃあ、アリサ。頼んだ」

ヴィヴィオの両脇を抱え、アリサの膝元へ下ろす。

特に嫌がることもなく、大人しくしているヴィヴィオから目を離して、カリムの方へ歩み出る。

「それで、どんな用件だ？」

「……聞かれるとまずいですから、少し離れましょう」

こちらへ、と彼女が促す。少し歩いて、声が届かない距離へ。

そして、再び彼女に向き直る。

……聖王教会と管理局のパイプ役ともいえる、カリム・グラシア。

一体、俺に何の用だ？

「いきなりで申し訳ありません。実は、貴方に質問したいことがあります」

ローブに手を入れ、羊皮紙にも見える一枚の紙を取り出した。

そこには古代ベルカ語で何やら書かれている。

「私のレアスキル、プロフェーティンシユリフミン『預言者の著書』をご存知でしょうか」

「……噂程度ならば耳にしている、これがな」

いわゆる予言。その中身は古代ベルカ語で書かれており、解釈によつて意味が変わることもある難解な文章は、世界で起こる事件をランダムに書き出すという。

ただし、そのうち大規模災害や未曾有の重大事件に関しての的中率は高く、信頼度は高いらしい。

『向こう側』でも何度か目にしたことがある。結果的には役に立たなかったが。

「全てを伝えることはできませんが、その中に気になる一文がありました」

世界に穴を穿ち現れるは、魂を獲する者。

その言葉に先日ディアーチェに言われた言葉を思い出す。

我が名はアインスト・ディアーチェ。覚えておくがいい。魂を獲する者よ。

ソウルゲインを指している言葉だとすれば、この一文はアクセル自身、ひいてはシャドウミラーがどこから来たのかを指している。まさか、ここまでのものとは。これが公になれば、アクセルが一番に疑われる。

「この後半部分はおそらく貴方のデバイスのことでしょう。他の文に何か、心当たりはありますか？」

「……いや。聞いているとは思いますが、俺は記憶を失っている。何も分からない、んだな、これが」

動揺を隠しつつ、記憶喪失であることを強調する。

これならば、この瞬間だけは誤魔化すことができるはずだ。

だが、近いうちに全容を把握しなければならぬ。

俺が疑われないために……

(……違う。任務のためだろうか？どうしてしまったんだ、俺は)

昔ならば、任務を優先させた。だが、今はどうだ。

俺は任務のことを考えず、六課に疑われないために、という理由で考えていた。

どうも、情が移ってしまっただけ。なまじ顔見知りが多いからだ。

「そうですか。お時間を取らせてしまい、申し訳ありませんでした」「いや。俺の記憶に関わることだ。新しい情報をくれて感謝している」

その言葉に笑顔で返し、深く礼をしてカリムは去っていく。どうやら、このことは本隊に報告すべきことに違いない。

俺が、どちらにづくにしても、な。

「さて、話してもらいましょうか。アリサ・ローウエルさん？あなたが所属している組織や、あなたの身体のことも」

あれから約二時間。スバル似の少女をへりから降ろし、ティアナにヴィヴィオを預けてアクセルは部隊長室にいた。

ヴィヴィオは頭に抱き着いたまま若干渋っていたものの、すぐに戻るといふ約束をさせて、何とか離してもらった。

そして、今はアリサの尋問中だ。周囲にははやて、フェイト、なのは、シグナム、ヴィータ、リインという、いつかの尋問風景を思い出させる。

……やはり、ここでは事情聴取と書いて尋問を読むらしい。

「そうは言ってもね。私が話せることなんて微々たるもんよ？」

はやての威圧にも飄々としているアリサ。いつも通りだ。

例え、両腕を失い、下半身を動かさなくなっても彼女のスタンスは変わらない。

それは、アリサ・ローウエルだ。

「それに、私が話して何の得があるのかしら？」

「……状況が分かっていないようですね。今のあなたは犯罪者扱い

なんです。取引ができる立場じゃないんですよ？」

「だとしても。何の見返りも無しに、話す馬鹿はいないわ。そうでしょう？……失礼。アンタはそう思ってるのよね」

そんな挑発にヴィータが飛びかかろうとする。それをシグナムが諷めた。彼女の目つきも鋭い。

はやても眉をしかめている。なのはやフェイト、リインの顔も険しかった。

彼女たちからすれば、友人に似た人物からそんな言葉をかけられるのが苦痛なのだろう。

確かに、似ているどころか瓜二つだからな。

「まあ、いいわ。結構参っているみたいだし。少しくらいなら教えてあげる。でも条件が一つ」

「……聞きましょう」

「私の世話係。そこにいるアクセルにしてもらうから」

室内にいたアリサ以外全員の視線が集まる。十の瞳に見られるというのは非常に遠慮したい。

アリサに避難の視線を投げつける。だが、彼女は計画通りとばかりに口の端を釣り上げている。

「アクセル君。彼女と何があつたんや？」

「私もそれ、聞きたい。あの時、初対面にしては随分親しそうじゃなかった？」

「病院でだって、私の病室に来る前にアリサさんのところに行っただし……」

「それは聞き捨てならないな、アルマー」

「詳しく聞かせてもらおうじゃねえか」

「ですですう！」

勘弁してくれ。なぜ、アリサから俺に尋問対象がシフトするのか。理解に苦しむ。ため息が自然と漏れる。

だが、心のどこかでは、この状況を楽しんでいる自分がいた。

昔はこんな仲間関係など希薄だった。精々、アリシアかティアナ、ギンガくらいか……

一体、自分はどうしてしまったのだろうか。これほどまでに甘い人間だったか？

「アクセル君！聞いてるんか?!」

「っ……すまん。アリサとの関係だったな。特に深いものはない。共同戦線を張っただけの関係さ、これがな」

「本当に？」

フェイトが覗き込んでくる。さっき、アリシアを思い出していたからか、口が滑りそうだが、出しかけた言葉を呑み込む。

「ああ、本当だ。病室に向かったのも特に意味はない」

「ふん……まあいいわ。じゃあ、アリサさんのお世話は引き受けてくれるんか？」

「……ああ。引き受けよう」

まだ疑いの眼差しは向けられているものの、一応は納得してくれたらしい。

再び視線がアリサに集まる。

「それじゃあ、話してもらいましょうか」

「いいわよ。私が所属している組織は」

「

今まさに、アリサが言葉を紡ごうとした時。

隊舎にアラーム音が響き渡る。同時にはやての目の前にディスプレイが表示された。

ロングアーチ01、シャリオ・フィニーノだ。

《部隊長、敵襲です！隊舎、十二時方向の海上から接近中です！》

「?!……数は？大部隊なんか?!」

《いえ、反応は二！しかし、内一体のランクはおよそAAA相当！》

はやての顔が歪む。数は少ないが、移動時だけでAAAとは間違いなく機動兵器の類だ。

その時だ。アリサが微妙な表情を浮かべる。何かに気が付いたのか。少し遅れてアクセルも勘付いた。このタイミングで反応が二つ。嫌な予感がした。

「あゝ、もしかして……」

「アリサ。まさかとは思いが……」

「多分。当たってるわよ、その予想」

小声で会話をする。他は突然の襲撃に身構え、こちらに注意が向いていなかった。

はやての机の周りに集まり、ディスプレイを覗いていた。

アクセルも車椅子を押して様子を窺う。

《映像、出ます！！》

次の瞬間。全員の顔が驚愕に染まり、全員の視線が再びアクセルに集まる。

アクセルはため息をつきながらも、横目で映像を見た。

そこにはソウルゲインに似た機体が海上を疾走している姿。
右肩には紫色の髪をたなびかせた女性が腰かけていた。

海上を疾走していた紺碧の機兵 アークゲインは六課特設
の陸戦用空間シミュレーターに上陸していた。

膝をつき肩に腰掛ける女性に腕を差し出す。それを伝って、優雅に
地面に降り立つ。
それから、背中に背負った巨大なリュックサックの中から大型拡声
器を取り出す。

《あゝ、本日はお日柄もよく……機動六課の皆さんに告げます。私
はスズカ・ツキムラ。あなたが保護しているアリサ・ローウェ
ルの主人です》

スズカはそんなことをのたまった。アクセルとアリサは部隊長室で
頭を抱えながら、映像を見続ける。

というより、あれを背負って直立不動の姿勢を取り続ける彼女は、
本当にただの研究者なのか。
今更ながらに彼女の異常性を認識した。

《こちらの要求はただ一つ。アリサちゃんの引き渡しです》

彼女らしい真つ直ぐな伝え方だ。

正直、彼女は敵に回したくない。アリサのためならば何でもやっつて
のける執念。

下手をすれば六課の半分が吹き飛ばす。あのリュックサックの中身が

分からない以上、それは十分にあり得る可能性だ。

「あれ……すずかちゃんやない？」

「ううん。多分そっくりさんだよ」

「そうだね。私もそう思う……」

三人娘が何やらごにごによと会話している。丸聞こえだが。

まあ、彼女は『向こう側』の月村すずか。動揺するのは仕方がない。これで彼女らにとって、そっくりさんは三人目ということになるか。そんな風に議論を交わしていた三人だったが、ここで驚くべき発言を耳にする。

《取引に応じる場合、こちらは私の身柄を引き渡す用意があります》

「あんの馬鹿！！アクセル、あそこに連れてって！！」

そんなスズカの言葉にアリサが激高する。

アクセルとしても向かいたいところではあるが……

はやてに視線を向けると、渋々と言った感じで頷いた。

「仕方ないやろ、この場合。アクセル君はアリサ、さんの護衛で」

「了解だ……なのは一尉。頼む」

なのははそれに頷き、レイジングハートを起動。

転移魔法を作動させて、アクセルとアリサを転移させる。

一瞬、光に包まれ、次の瞬間にはシミュレーターの上に。

眼前にはスズカとアーケイン。

……しかし、この機体をこんな形で目にするとは思っていなかった、これがな

「アリサちゃん！大丈夫だった？！」

スズカが駆け寄り、アリサに抱き着く。アリサは二の腕を回し、抱擁を交わす。

しかし、その顔は若干怒っているように見える。

「スズカ……アンタねえ、無理しすぎよ」

「何言ってるの、アリサちゃんのためならどんなことだってするよ。例え火の中、水の中ってね」

顔を正面にして、アリサをまっすぐ見つめる。

それから、こちらを向いて、笑顔になる。

《ありがとだね、アクセル君》

《……気にするな。知らない仲でもないだろう》

機密回路越しの会話。こちらが見られていることを分かったの行動。相変わらず隙のないことだ。さすがは元テスラ研主任。

「貴方が六課からの交渉人でいいのかな？」

「ああ。と言つても、俺が交渉するわけじゃない」

《その相手は私が。スズカ・ツキムラさん……私は機動六課部隊長、八神はやてです》

上空にディスプレイが現れる。そこにははやて。

スズカは最初驚き、表情を戻す。おそらく六課部隊長のことだ。

「へえ。やっぱりそうなんだ……それで、用件は呑んでくれますか？」

《少し疑問が残ります。アリサさんの身柄を貴女に渡して、でも貴女はこちらに来る。少し矛盾してませんか？》

確かに、それはそうだ。

アリサの身体を修理できる技術を持っているのは『こちら側』ではスズカか、もしくはアリシアくらいだろう。

だと言うのに、彼女は自分の身柄を差し出す。裏があると思われるもおかしくない。

だが、彼女は予想の斜め上をいく発言をする。

「それでいいんだよ。私とアリサちゃん、それにアーケゲイン。全員が六課に保護されるのが目的なんだから」

「何……?」

《ど、どうということや!?!》

アクセルも驚きを隠せない。はやてに至っては素の口調に戻っている。

アリサは、何やら想像がついたようだが。

そんな状況を気にせず、スズカは最後の爆弾を投下する。

「私、組織を抜けてきちゃったもん。脱走するために、ウィルスばら撒いちゃったから、もう戻れないし」

てへつと頭を小突くスズカ。絶句し言葉も出せないはやて。頭を抱えるアリサ。

そして、アクセルは復旧に勤しむアリシアを想像して、不憫だと思った。

第15話 「忘れ得ぬ記憶」(後書き)

謎の組織からの訪問者。スズカから明かされる事実とは。

そして、ヴィヴィオを巡って六課では争いが起こる。

世界を超えて交じりあう人のなか、アクセルは何を思っているのか。

次回、「背負った十字」。

お楽しみに。

第16話 「背負った十字」 (前書き)

テスト試験後にバイト五連勤を終えた作者が通りますよつと。

……ホントにきつかったツス。腕がプルプルしてますもんw

それはさておき、やっとこさ16話目です。

もうすぐ第3章に入れるんじゃないかなあと考えていたり(ニヤリしかし、OGサーガEXCEEDを買ったんで、それに嵌ってたり
(汗

そんなこんなで始まります。

第16話 「背負った十字」

「全く、とんでもないものを置き土産にして……」

シャドウミラー隊旗艦『方舟』の艦橋。そこに設置された巨大モニターを見つめながら、そうアリシアはつぶやいた。

件の彼女が脱走してから一週間が経った。

十中八九、機動六課にいるだろうが、直接姿を確認したわけではない。

それもこれも、彼女が逃げ出す際にこの艦の制御システムにワームクラスターをばらまいたせいだ。

艦のメインシステムはダウン。彼女が脱出ポッドを使ったことはラミアの報告で確認できたが、それを追うためのシステムなども落ちていた。

たまたま航行中でなかったから良かったものの、下手すれば墜落の可能性もあった。

まあ、そんなことをするほど彼女は博打好きではない。テスラ研主任を数年続けていた彼女が、何も考えていない訳がない。

……もしかしたら、何も考えていなかったかもしれないが。

アリシアはそのことについて、深く考えないことにした。

そして、現在。

シャドウミラーは潜伏中だった第3管理世界『ヴァイゼン』で復旧を続けていた。

パネルの操作を続けていると、背後で空気が抜けるような音をさせて扉が開いた。

振り返った先には全身黒尽くめの男性。目元には同色の偏光バイザー。

クロノス・ハーヴェイ、元時空管理局提督。この部隊の長だ。

「どうだ。状況は？」

「復旧率は約80%……まあまあつてところ。通常運行には問題はないけど、武器管制系に不安が残るよ」

「そうか……まあいい。この際だ。全ての箇所メンテナンスを指示しておけ」

「……第三段階に移るの？」

その問いにクロノスは唇の端を釣り上げて、肯定の意を示した。

もう、そこまで進行していたのかとアリシアは感慨深げに視線を落とす。

『こちら側』での計画を遂行するための段階。

第一段階。敵対組織への内部潜入及び協力組織の発見。これはアクセルを代表にした作業員、そして協力者であるスカリエッツィの戦闘機人により達成された。

第二段階。次元転移装置の安定化、その試験運用。これも聖王の器奪取時において成功。器確保こそ達成できなかったものの、概ね安定稼働に入った。

そして、第三段階。次元転移による主要施設への奇襲・制圧。

そのためには、まず『こちら側』の聖王の器を確保しなければならぬ。

『方舟』一つでは勝てない。それは『向こう側』で思い知っている。

「で、器はどうするの？今、アクセルを動かすのは得策ではないと思っけど？」

「それは、単独での話だろうか？ならば、我々も動けばいい」

「……呆れた。物量で押そうって訳。まあ、これ以上長引かせれば『向こう側』以上の戦力を持ちそうだしね」

第二の『ディザスターズ』となることも否定できない。

『こちら側』の六課には『エルケーニヒ』やスバル・ナカジマもい

るのだから。

白銀の墮天使、鋼鉄の弧狼……また相手取るのは遠慮したい。

「その通りだ。ツキムラ嬢のラボを確認させてみたところ、アークゲインやアリサ・ローウエル用のパーツはもちろん、予備のゲシユペンストまで持ち去られている」

それはシャドウミラーの主戦力の手の内が知られてしまったということ。

おそらく、他の機体のデータも持ち出しているはずだ。そういうところに抜け目がないのは重々承知している。

「……作業を急がせるよ。それと、仕掛ける前に誰か向かわせた方がいいと思う」

「誰をだ？手が空いていて、調整が済んでいる奴などいたか？」

そういった任務に長けているW11やW12は現在調整中だった。

W17　　ラミア・ラヴレスはCW社に潜入中。

量産型Wシリーズならば何人かは空いているが、それも心もとないならば、任務には向いていないが……

「W14……さつき調整が済んだところだし、威力偵察として考えれば適当じゃない？」

「奴をか……やむを得ないか。ならば、スカリエツィにも協力を依頼するか」

「そういえば、彼を慕ってるナンバーズがいたね」

確か、？9　　ノーヴェと言ったか。

初出撃時、W14の戦う姿を目の当たりにし、憧れでも抱いたのだろう。以来、『師匠』と呼んでいた。

W14 自体は何か思うところがあるようだ。そんなノーヴェを引き離したりもしていない。かと言って、別に教えを説いている訳でもないが。

せいぜい模擬戦をする程度だ。独自行動を許しているW14はあの作戦以来、毎日スカリエツティのラボを訪れては模擬戦をしているらしい。

スレイドゲルミル対ゲシュペンストMk-?・タイプS。それに幾人かの戦闘機人。

それは壮観な眺めに違いない。

昨日もやってきたそうで、直後に無理やり調整を敢行した。

お遊びで潰れてもらっては困る。仮にも『切り札』の一枚なのだから。

「久しぶりに赴くとするか。それで、奴は今どこにいる?」

「調整が済んだからね……」

ならば、彼はあそこにいる。この『方舟』の中枢。

元は『聖王のゆりかご』だった、あの玉座に。

「今は『聖王』様と仲睦まじく、会話の最中だよ」

〈 第16話 「背負った十字」 〉

早朝。訓練が終わり、アクセルは朝食を取っていた。すると、彼の下へ近づくと軽い駆け足の音。

「おはよう、アクセルお兄ちゃん！」

「ああ、おはよう」

見ると、そこにはヴィヴィオ。アクセルはその手に持ったコーヒークップを掲げながら挨拶を返す。

ヴィヴィオが六課に来てから既に一週間が経っていた。

最初はアクセル、アリサ、なのは、フェイト、ティアナにしか懐いていなかったが、今は随分と六課の雰囲気馴染んできたように思う。

特にエリオとキャラ口とは年齢が近いこともあってか、仲良くやっているようだ。

「今日はいつ遊べる？」

「そうだな、なのはお姉ちゃんに聞いてみるか……というわけなんだが、いいか？」

向かいのテーブルにかけていたなのはに許可を求める。笑顔で頷いている。

「どうやら今日も訓練は免除か。」

この一週間のほとんどは訓練よりもヴィヴィオの相手が多かった。といっても、することと言えば、外でエリオやキャラ口を伴って遊んだり、スズカ作のゲームに付き合ったり、教導用の映像（幼い頃のはとフェイトの模擬戦）を見せたりがほとんどだったが。

今日はなにをするか。スズカが作ったあのゲーム 『英雄戦記』

だったか。は完成度が高いのだが、ヴィヴィオの年齢に合っているものかどうか。やっている様子は楽しげだからいいのだが。

そう悩んでいると、なのはが席を立て近づいてきた。フェイトも一緒だ。

「あ、そうだ。ヴィヴィオにお話があるんだけど」

「なに〜?」

フェイトが何やら説明をしている。

話を聞くに、ヴィヴィオの保護責任者になのはが、後見人にフェイトが付いたらしい。

それをヴィヴィオに話したところで理解はできないだろう。事実、首を傾げている。

「簡単に言うとなね、私とフェイトちゃんがヴィヴィオのママになるってこと、かな?」

「……ママ?」

「そうだよ、ヴィヴィオ」

……話が飛躍していると思うのは俺だけか。
周りを見るに、どうやらそうらしい。

「なのはママ、フェイトママ……」

「「なあに、ヴィヴィオ」」

笑顔で返事をする二人に、ヴィヴィオもご満悦のようだ。

まあ、喜んでいるのならいいさ、これがな。

アクセルは手に持つカップを傾け、ブラックコーヒーを飲む。

「じゃあ、アクセルお兄ちゃんがパパだね!」

「ブフウツ!!」

ヴィヴィオの発言にアクセルは口に含んでいたコーヒーを全て吐き出した。

その姿は最近、凜々しくなっていた彼のイメージを破壊するには充分であった。

「ちよつ、アクセルさん！大丈夫ですか？」

ティアナが席を立ち、アクセルの傍に駆け寄る。その手には真新しいハンカチ。

大丈夫だ、と断ったが、彼女はそれを聞かず白いハンカチでコーヒーを拭き取る。

それより、コーヒーを真正面で受け止めたフリードを気遣ってほしいところではあった。

キャロが慌てて茶色に染まった竜を抱えて、食堂を抜け出していくのを横目で見つつ、ヴィヴィオに向き直る。

「……ヴィヴィオ。どうして、そうなるんだ？」

「えつと、何となく！」

何とも、子供らしい意見だ。

別にアクセル自身はどんな呼び方でもいいのだが、先ほどは唐突すぎた。

それになのはやフェイトも様子がおかしい。

二人とも頬に手を当て、何やら想像している。

……朝早くから、こんなことになるとは。

だが、ヴィヴィオは彼の想像を遥かに上回る発言をする。

「でも、アクセルパパのお嫁さんはティアナお姉ちゃんだよね！」

「……何？」

思わずアクセルは聞き返してしまった。誰の嫁が誰だって？

だが、周囲から見てそれは納得だった。誰よりもティアナはアクセルの傍にいる。

今もハンカチ片手に立っているのが何よりの証拠だった。

すると、ティアナがヴィヴィオの前でしゃがむ。ヴィヴィオの頭を撫でながら、彼女は言った。

「ヴィヴィオ。私も、ママって呼んでいいわよ？」

「……ティアママ？」

ええ、と母性に満ちた笑みを浮かべる。

スバルが、ティアってあんな顔も出来るんだとつぶやいているのが聞こえた。

なのはとフェイトはティアナに対抗心を燃やしているのが軽く睨んでいる。

……どうしてこうなった。

「アクセルパパ！ママが三人になったよ！……でも、アリサお姉ちゃんはやんは？」

「アリサが、何か言っていたのか？」

アクセルは眉間を押さえながら言った。今度は何をしでかしたのか。アリサはことあることに何やらヴィヴィオに吹き込んでいたような気がする。

そして、最大の爆弾を彼女は投下した。

「アリサお姉ちゃんは、アクセルパパのアイジンだって！……アイジンって何？」

「少し待ってろ、ヴィヴィオ。アリサとお話をしなければならなくなった、これがな」

アクセルが席を立つと同時に、なのは、フェイト、ティアナの三人が詰め寄る。

それぞれがいい笑顔をしていた。どことなく黒いオーラが出ている

ような気もしなくはないが。

「……アクセル（さん）、どういふこと（）ですか（）……！」
「」

「……これは、俺が悪いのか」

アクセルが三人を宥めるのに、三十分を必要としたことをここに明記しておく。

Side スズカ

薄暗い室内。ここは機動六課隊舎の第二保管室。

過去の資料や普段は使うことのない備品などを保管している、いわば物置である。

その中に陽気な鼻歌が響いていた。発信源はこの部屋の主、スズカ・ツキムラ。

彼女は六課と敵対する組織『シャドウミラー』の情報を提供する代わりにこの第二保管室を手に入れた。

ただし、条件を満たすまでは全てを明かさないことにしていた。

それはアリサのボディの修復。そして、アクセルが動きを見せるまでである。

一応、シャドウミラーにはこちらに連れてきてもらった義理もある。そんな彼らの計画を少しばかり乱したのだ。これ以上は邪魔するわけにはいかない。

「そろそろ、動きを見せる頃かも……ね、アリサちゃん」

作業台に横たわる女性、アリサ・ローウェルに言葉をかける。しかし、彼女は眠っているため返事はしない。ようやく修理の目処がついたので、スリープモードに入ってもらい、ここ二日間は徹夜で彼女の修復作業に没頭していた。彼女は指先を微細に動かしつつ作業をこなしていた。

「……………失礼するぞ。スズカ」

突然、背後からかけられた言葉に、振り返る。そこには見知った姿。アクセル・アルマーだ。

「びつくりした。ノックぐらいしてよ。仮にも女の子の部屋なんだから」

「……………ノックはした。それと、普通はこんな部屋を女の子の部屋とは言わない」

「それでも、女の子の部屋だよ！アクセル君！」

呆れながらスズカに歩み寄ってくるアクセル。その姿にややむっとしながらも、仕方がないと割り切った。

確かに、この部屋の状態では女子の部屋とは言えないだろう。六課の資料や備品などは部屋の隅に追いやられているものの、部屋の中央には作業台。

端には持参した様々なパーツが乗せられた簡易ベッド。

反対側には直立するアーケゲイン。

女子の部屋というよりは技術者の部屋といったほうがいいか。

「今日は、どうしたの？監視はないとしても、少し無用心じゃない？」

「別にそういう類の話をしに来たわけじゃない。アリサに言いたいことがあっただけさ、これがな」

そう、この部屋には監視の類は置かれていない。それも条件の一つだった。
しかし、それを呑む六課部隊長もよっぽど切羽詰まっているのだから。

普通はこんな条件を提示されたら、尋問か拷問で聞き出した方が早いと思うはずだ。

「アリスちゃんは、見ての通りだよ。今は脚部の修理と強化の最中だから、眠ってもらってる。最低でも明日の夜には目を覚ますけど？」

「それまで、お預けか。なら、伝言を頼めるか？」

「いいけど、なんて？」

あの任務に対しては実直なアクセルが、わざわざこの部屋にまで赴く様な内容。

対人関係にそれほど興味のないスズカでも気になった。

どれほど任務に関係のある内容なのか。

だが、彼女の予想は大きく外れることになる。

「ヴィヴィオに余計なことを吹き込むなど。さっきも女性陣に誤解を招いたからな」

「……え？……そんなこと？」

ありえない。あのアクセルが？

シャドウミラー特殊処理班隊長、アクセル・アルマーが？

任務を最優先にし、任務中は他の事柄にさほど興味を見せなかった人物が？

潜入先の対人関係を壊すようなことはするかと解釈することはできる。

だが、彼が言っているのはそういうことではない。

「……変わったね、アクセル君」

「……………」

「昔は、『向こう側』にいた頃は、そんなことは言わなかった。もちろん任務中は、ってことだけど」

アクセルは黙ったままだ。スズカはその態度にも疑問に思った。昔ならば、くだらないといって一笑するところだ。だが、今は黙って、自分の言葉に耳を傾けている。

「何が、そこまで貴方を変えたの？」

「……俺にも分からん、これがな」

ようやく口を開いた彼から紡がれる言葉はひどく苦悩に満ちていた。その眼は閉じられており、今までのことを思い返しているようにも見える。

「俺が転移の衝撃で記憶を失ったことは、アリサから聞いたな？」

「……………うん」

「この部隊は他に比べて甘すぎる。記憶を失っていた俺に、それはあまりにも甘美すぎた……言うなれば、楽園の林檎さ、これがな」

スズカに彼の『こちら側』での生活は分からない。

だが、彼がこれほどまでに褒めるのならば、よほどすばらしい生活を送っていたのだろう。

「こちら側に付くのは簡単だ……この甘さに全てを委ねればいい。

確証はないが、全てを打ち明ければ、受け入れてくれるとも思えてしまっ

そこまで甘いとなると、自分という存在も受け入れてくれる組織かもしれない。

かつて迫害された自分をも受け入れてくれるのではないかと一度、シャドウミラーという場所を裏切ってしまった彼女はそう考えてしまう。

そんな思考はアクセルの次の言葉でかき消された。

「だが、俺が背負っている十字架は……あまりにも重すぎる」

そうだ、彼はおそらくシャドウミラーの中で、最も多くのモノを背負っている。

彼の信頼する戦友は、戦場で再会した生き別れの妹の手で殺された。彼の有能な副官は、彼を逃がすために囚になり彼の腕の中で死んだ。他にも『向こう側』で失った戦友は数多くいる。

蘇った記憶が、今の記憶を責め続けているのだ。

「変わったというのなら、確かに変わったんだろう。もう昔の俺には戻れん」

彼は言葉を紡ぐ。スズカに向けてというよりは、自分自身に向けて残っている昔の自分へ。変わってゆく今の自分へ。

「だがな。全てを捨ててまで、散っていった思いを裏切ってまで……新しい自分になりたいとは思わん、こいつがな」

そう言い切ったアクセルを見て、スズカは思った。

ここにいるのはアクセル・アルマーであって、アクセル・アルマーではない。

戦いの輪から抜け出そうともがき、新しい一歩を踏み出すべきか迷

い苦しんでいる、ただの優しい人だ。

「……なるほどね。分かったよ。もう何も言わない」

「む？どうした、突然……」

「理解できたから。これからも、私とアリサちゃんをよろしくね？」

純粹に笑いかけてみると、アクセルは顔を背けた。

困ったような表情をしている。

「……その言い方だと、また誤解を招くことになりかねん。他には言うな」

「ふふ……分かった。でも、本心だから」

それを止めると言っているんだがな、とアクセルは溜め息とともにつぶやいた。

その様子に自然と笑みがこぼれる。新しい彼もなかなか魅力的だ。

アリシアに少し申し訳なくなった。

彼の新しい一面を、彼女は目にしていないのだから。

彼女は昔の方が好みかもしれないけれど、そんな風に思えてしまうのは事実だった。

穏やかな空気が薄暗い部屋に訪れた、そんな時だった。

《聖王教会より入電！教会本部が襲われているとのことですよ！！》

警報と共に響く、焦りの色を帯びたシャリオの声。

スズカは驚いていた。『こちら側』ではどうかは分からないが、『向こう側』の聖王教会本部の警備は厚かった。

特に“あの戦い”を乗り越えた教会騎士団の練度は高く、シャドウミラーでさえ手を出すのは控えていた。

アクセルも同様に驚いており、今はロングアーチに連絡を取ってい

る。

「はやて二佐、状況は？」

《聞いての通りや。多分、調査用に保管してあるレリックが狙いやと思う。一応あつちには今朝方、騎士団員の様子を見に行ったシグナムがいるんやけど……》

モニター越しにはやてが口を濁す。どうも心配事があるらしい。耐え切れずアクセルが口を開いた。

「何か問題があるのか？」

《……襲って来てる相手が、アインストなんや。確認できただけで、ボーンとガラスが複数体。それにフェイトちゃんのマテリアルもいるみたいや》

誰かが息を呑む音が聞こえた。

『アインスト』。

例の異常重力を伴って現れるアンノウンを管理局はアインストと呼称することにした。

なのはの報告によれば復活したという闇の書の闇、マテリアルたちはそれぞれアインストと名乗った。そこから取られた呼称だ。

ボーンとガラスというのはアインストの尖兵である骨や植物のような構成物で出来た異形のことである。

そのアインストの集団が教会を襲っている上、幹部クラスも確認できている。

非常にまずい状況だ。交戦したことのないスズカでも分かる。

「……俺も出るぞ。シグナム一人では厳しいはずだ」

《そうしてもらえると助かるで。あと、ティアナと……》

「機動六課部隊長さん？ 少しいいですか？」

スズカは口を挟んだ。そろそろ動くべき時かもしれない。案の定、はやてが疑いを込めた瞳をスズカへ向けた。

《……なんや、こっちは忙しいんや》

「アークゲインを出撃させます。下手な魔導師よりは戦力ですよ」

予想通り、はつと目を見開いた。驚きの表情。

それもそつだ。今まで引き籠っていた自分が突然、協力を申し出たのだから。

アクセルも驚いているのはお約束だ。

《理由、聞いてええか？》

「アリサちゃんも明日の夜には目を覚まします。それに、そろそろ動こうと思ってましたから」

ちょうどいいタイミングでした、と笑って見せる。

はやては少し悩んで、首を縦に振った。

《お願いします、スズカさん……じゃあ、アクセル君。ティアナと、えつとアークゲインと一緒に出撃や》

「了解だ……スズカ。アークゲイン、借りるぞ」

「うん。乱暴には扱わないでね。私の護衛さんなんだから」

「……善処するさ、これがな」

ドアを開けるアクセル。それに続くアークゲイン。スズカはそれを見送る。

だがはやてが、あつ、という声を出したため、それは遮られた。

「……まだ何かあるのか、はやて？」

《忘れとった。実はな、アクセル君とティアナ。独自のコールサインが決まったんや》

そういうことは今、言わなくていいじゃないかとスズカは内心でツッコミを入れた。

それに、確かティアナのコールサインはスターズ4ではなかったか。部隊の再編が行われたのかもしれない。スズカにはそう予想するしかなかった。

「そういえば、俺にはなかったな」

《そうなんや。最近はごたごたしてきたからな。区別するために、勝手につけさせてもらったで》

ここにこしているはやて。考えるのが楽しかったようだ。

……確か、緊急事態だと思ったのだが。

同じことを考えていたらしいアクセルが頭を押さえながらはやてに言った。

「……はやて二佐、緊急出撃だったはずだが？」

《はっ！！そうや、えつとな、アクセル君のコールサインは》

のちにスターズ、ライトニングに並んで、機動六課の三分隊の一つとして語り継がれる分隊がここに生まれる。

《アサルト1、や》

Side out .

聖王教会本部正面玄関。普段は景観の良い場所だ。

だが今は、骨のような異形　　アインストクノツヘンと、植物のような異形　　アインストグリートによって埋め尽くされている。

「飛龍一閃!!」

その一角が螺旋を描いた衝撃波で吹き飛ぶ。十数体が巻き込まれて消滅した。

巻き起こしたのは烈火の将、シグナムが愛刀レヴァンティン。

連結刃となっていた刀身を基本の形態に戻して、彼女はアインストを睨む。

既に交戦から十分以上経っていた。まだシグナムには余力がある。だが、教会騎士団員の方は怪しいところだ。

待機していた団員総出で対応しているのだが、その半数が満身創痍の状態である。残っている団員も肩で息をしているものがほとんどだ。

外皮が固く、接近戦では脅威であるクノツヘン。

火力が高く、複数攻撃を仕掛けてくるグリート。

近接戦闘主体の騎士団員が苦戦するのも当然と言える。

「このままでは……」

シグナムは苦悶の表情を浮かべる。自然とレヴァンティンを握る力が強まる。

少し離れたところにいるシャツハも構えながら同じ表情をしている。六課からの増援が来るのはもうしばらくかかるだろう。それまで持つかどうか……

「流石は夜天の騎士、ヴォルケンリッターが長だね。一撃であれほどの数を減らすなんてさ」

焦るシグナムの耳がそんな声を捉えた。

見上げると、そこには見覚えのある姿。彼女のライバルであり友人、フェイト。

いや、シグナムの記憶にある姿とは少し違う。全体的に蒼い色調の服装を纏っている。

「……闇の書の、マテリアルか！」

「違う！ボクは、ボクらは新たな存在になったんだ！もう『闇の書の闇』なんて関係ない！！」

オリジナルと変わらない真紅の瞳で睨みつける。

その手に持つ杖を大剣へと変化させ、その切っ先をシグナムへと突き付ける。

「ボクは雷光^{レヴィ}！！閃の太刀にて君を斃^{たお}す者！！

いざ、参

る！！」

両の手で柄を携えて、こちらへと突撃をかけるレヴィ。

その速度にシグナムは回避行動を取ることが出来ず、結果防御することになった。

拮抗の衝撃で火花が刀身の間に散る。もはやそれは火花ではなく、放電ともいえるレベルのものだった。

あまりの眩さに目がくらむ。

「その隙、もらったよ！！」

その場で一回転。反対方向から刀身を薙いだ。細腕から繰り出されたとは思えない一撃は、容易くシグナムの身体を吹き飛ばす。地面を削りつつ直立の体勢を保つ。手が痺れていることにシグナムは気が付いた。これほどの一撃はアクセルとの模擬戦以来だった。苦戦していると見たシャツハが眼前のクノツヘンのコアを打ち砕き、声をかけてくる。

「大丈夫ですか！？今、そちらへ……」

「私に構うな！それよりも、騎士団の後退を援護してやってくれ！私がこいつを食い止めている間に！」

敷地内の侵入をさらに許してしまうことになるが、このままでは状況が悪い。

いったん態勢を立て直す必要がある。

そのためにも、シャツハは撤退の殿を務めてもらわなければ。

「しかし！いくら、貴女でも一人では……！」

「いいから退け！これ以上、犠牲は出したくない……！」

「ッ……！……分かり、ました」

すぐさまシャツハが立っている団員に撤退を促す。

騎士たちは力尽きている者を運びながら、シグナムへとすまないとばかりに視線を向けつつ撤退していく。

シャツハも念話で御武運をと告げ、迫りくるグリートの触手を払いつつ後退した。

残ったのは多数のアイNSTとレヴィ、そしてシグナム。

「へえ、その闘志だけは見上げたものだけど、状況は分かってる？」

この数とボクを相手に勝てるとても……」
「黙れっ！！」

レヴィの口上を遮り、一喝。その気迫にレヴィもたじろぐ。
機械音をさせて、レヴァンティンがカートリッジをロードする。
瞬間、刀身に炎が生まれ、シグナムはそれを纏わせた愛刀を構える。

「……そして、聞け。我が名はシグナム。ヴォルケンリッターが将にして、八神はやてが騎士！」

そうだ。私には護るべきものがある。主や仲間たち。そして、罪なき人々。

それに仇為す者たちを討つ剣。そうだ、私は……

「悪を断つ、剣だ！！」

「……カッコいい」

レヴィはその姿にうっとりため息をついた。
しかし、すぐにはつとなり、首を左右に振る。

「え、ええい！！いい気になるなよ！！全軍、突撃だあ！！」

その言葉に従い、クノツヘンが大地を蹴り、グリートが赤い光線を撃つ。

シグナムは気迫と共にその中を駆け抜け、すれ違いざまにクノツヘンを両断する。

狙うはレヴィ、ただ一人。こいつを落とせば、何とかなる。
そう思つての行動だった。

もちろん、レヴィもそれは予期していたことだった。

「甘い!!」

「はああああ!!」

炎剣と雷剣が撃ち合う。すさまじいまでのスパークが起こり、飛んだ火花がアインストを焦がす。

そこから両者の連撃。幾度なく打ち合い、剣戟の音が絶えず響いた。

「くっ!!」

しかし、レヴィの一撃はやはり重く、不利なのはシグナム。

シグナムはバックステップし、飛龍一閃の構えを取る。

「バレバレだよ!!」

だが、それは読まれていたようだ。

レヴィが手をかざすと同時に、四体のグリートが一斉に触手を伸ばす。

それはシグナムの四肢や身体に絡みつき、その動きを縫いとめる。

「ッ!!……レヴァンティン!!」

《Explosion》

だが、この状態からならば、まだ放つことが出来ると踏んだシグナムは再びカートリッジをロード。

空薬莖が吐き出され、レヴァンティンが連結刃へとその姿を変える。

「シユランゲバイセン・アンググリフ!!」

鞭のようにしなる連結刃はグリートの触手を本体ごと切り刻む。

四体のアインストグリートは切断された直後に灰になった。

身体が自由になったことを確認して、飛龍一閃へとつなげる構えを取る。

「そううまくいくと、思ったかい!?!」

しかし、構えたその時にはレヴィが目の前まで迫っていた。

対応しようにも、今の形態は近距離には向かない。

その間にレヴィは雷剣を薙ぐ。連結刃が根元から切断された。

「雷神拳!?!」

電撃を纏わせた左の拳によるボディブローが下腹部を打つ。

打撃と共に撃ちだされた衝撃と電撃がシグナムの意識を刈り取るうとする。

「零距离!」

レヴィの攻撃はまだ終わらない。打った拳の先に魔方陣が発生。

電撃によって生成された拳大の雷球が生み出される。

「空破・三叉槍!?!」

再び拳を打ち付けると、雷球から三本の雷槍が生まれて腹部を通過する。

その衝撃を全て受けたことよって、シグナムは吹き飛ばされ、壁に打ち付けられた。

壁は崩れなかったものの、大きくひび割れている。

彼女の意識はまだあるが、もはや指一本動かない。

レヴィの放った雷撃によって体は麻痺し、その上全身を強く打っている。

自慢のポニーテールがほどけて、はらりと腕にかかる。

「アハハ！何が悪を断つ剣だ！！君が悪と断言したボクは、こうして君を斃したじゃないか！！」

すごいぞ、強いぞ、カッコいい〜というレヴィの勝利口上が響く。シグナムの耳にはほとんど聞こえていない。だが、負けてしまったのは分かっていた。

「フフフ。けど、カッコよかったよ。だから、せめて一太刀で送ってあげる」

レヴィが静かに近づいてくる。一歩一歩確実に。

頭からの流血が視界を赤くし、その姿をおぼろげにする。

シグナムは何とか起き上がるようにするが、体は言うことを聞かない。

「ボクはここにある紅き結晶を回収しなければならない。『監視者』としての役目を果たすために」

とうとうシグナムの目の前まで歩いてきた。

彼女は心の中で、仲間たちに謝罪を述べた。

目の前には大剣を振り上げたレヴィ。その後ろにはアインストの大群。

逃げ場は、どこにもなかった。

……シグナムは覚悟を決めた。

「その障害は排除させてもらおう……静寂なる世界を実現するために
もね！！」

まさに大剣を振り下ろそうとしたその時。レヴィの耳が妙な音を捉

えた。

聞こえてきたのは左。その方向に顔を向ける。

その眼に飛び込んできたのは空を裂き、自分へと真っ直ぐに迫る真紅の螺旋。

レヴィは考えるより先に、自慢のスピードで後ろへ回避した。

避けることはできたものの、今まさにトドメの口上を述べたところで邪魔された。

それは彼女にとって何よりも腹立たしいことだった。

「誰だよ！邪魔する奴は！！」

螺旋を描いていたドリルが持ち主のところへと戻っていく。

その先には鋼鉄の剣神。レヴィが持つ大剣と似た刀を手に佇んでいる。

(あいつは……)

シグナムの記憶にまだ新しい。アクセルと戦闘を行っていた機体。

レヴィも思い当る節があるようで、疑問の表情を浮かべていた。

「キミは、確か異邦の人形……」

異邦とはどういうことか。なぜ、レヴィはその存在を知っているのか。

シグナムの朦朧とした意識では理解できなかった。

「我はヴァルフ・アズル！聖王の剣なり！」

スレードゲルミルは斬艦刀を片手で携え、石柱の頂上に立っていた。その彼女曰くカッコいい姿に惚れ惚れしつつも、レヴィは口上を述

べる。

「ふ、ふん！後から来ておいて、ボクの獲物を横取りするつもりだな！そんなことはさせないぞ！どうしても横取りするつもりなら、力づくで……」

「 推して参る！！」

ヴァルフはそれを最後まで聞かず、背部のドリルが生み出した推進力を使い接近、レヴィへと斬艦刀を振りかぶる。

レヴィはそれに驚くが、バルニフィカスを構えてそれを受け止める。斬艦刀と雷剣が撃ち合い、大気が震える。

「っこ、のお！！セリフは最後まで言わせるよ！！」

さすがのレヴィでも斬艦刀は分が悪いらしい。移動魔法を使い、後ろへと飛んだ。

その間にヴァルフはシグナムを庇う様に立つ。

ようやくまともな思考ができるようになった彼女はそれを疑問に思った。

「ヴァルフ・アズル……と言ったか。なぜ、私を助けるような真似をする？貴様は我々とは敵対する組織に属している者だろう」

その問いかけにヴァルフは首だけ後ろを向いた。

スレードゲルミルという鎧に包まれて、ヴァルフの表情は分からない。

だが、醸し出す雰囲気は決してシグナムと敵対するものではなかった。

「烈火の将、シグナム……貴様を打ち倒す者は、このヴァルフ・ア

ズルだ……貴様との決着はこのような形であってはならん」

シグナムはその言葉の真意が分からなかった。

そもそも、ヴァルフ・アズルとは全く接点のないはずだが、この口調からすれば何かあるらしい。

（いったい、こいつは何者だ……？）

「人形が戯言を！！」監視者』たるボクに逆らうつもりかっ！！」

痺れを切らしたレヴィは大剣を構えて吠える。

ヴァルフも斬艦刀を構え直して咆哮で返す。

「
アインスト・レヴィ！貴様の相手は、私がする！！」

第16話 「背負った十字」(後書き)

瀕死のシグナム。駆け付けたヴァルフ。

二人の関係とはいったい。

そして、悩むアクセルはいつたいの道を選ぶのか。
次回をお楽しみに！

P.S.

雷神拳……プラズマアーム

空破・三叉槍……トライデントスマッシュャー

零距离……そのまんま

厨二っぽいスけど、レヴィっぽいw

第17話 「Father& Mothers」(前書き)

お待たせしました、やっと投稿できました。

前回投稿時から随分と経ってしまいましたが(汗

タイトルは珍しくなのはStS 14話「Mothers& Children」15話「Sisters& Daughters」から。

話の内容は全く違いますけどね……

色々詰め過ぎた感はありませんが……

それでは、どうぞ。

第17話 「Father & Mothers」

剣の打ち合う音が響く。二人の女性が対峙していた。

一人はアインスト・レヴィ。

バルニフィカスの一形態である斬馬刀を模した大剣を振るっている。もう一人はヴァルフ・アズル。

スレードゲルミルの主武装である大型刀、斬艦刀を振るっている。そして、その戦いを見つめている視線があつた。

壁にもたれかかっているシグナムだ。思考ははつきりしているが、未だ体は麻痺しており、腕一本動かすこともままならない。

だが、その拳は大破している愛刀の柄を強く握りしめていた。

(……何が、悪を断つ剣だ)

彼女はひどく惨めな気持ちになっていた。

勇んで殿を引き受けたものの、結果はこのざま。

今は敵対しているはずのヴァルフに守られている。

どれほど自分が弱いかが思い知らされた瞬間だった。

そんな彼女に出来ることは、ただこの戦いの行く末を見届ける事だけだった。

「ああっ、もう！邪魔だな、キミは！！いい加減、倒れるよ！！」

「そうはいかん！奴を倒すのはこの私だ！！貴様などにやらせはせん！！」

微妙に会話がかみ合っていない気がする。

その間にも二本の大剣が打ち合う音が広場に響く。

その度に、空気が震え、震動がシグナムの身体に微震を刻む。

「チツ!!なら…… やつちやえ!!」

獲物を目の前にしながらトドメをさせないことに苛立っていたレヴィは腕を空へ掲げ、振り下ろす。

すると、今まで静観していたアインストクノツヘンが、それに合わせて一斉に自身の身体をヴァルフへと飛ばした。

斬艦刀を振るい、それを切り払う。だが、数が数だけに、一度では全て落とすきれない。二、三度目でやっと全てを叩き落とした。

それはほとんど一瞬のことであったが、レヴィにとっては十分な時間だった。雷光の如き速度でシグナムに接近し、彼女の身体を両断しようとして大剣を振りかぶる。

ヴァルフもそれを阻止すべく急ぐが、アインストの大群がその行く手を阻む。

そして、レヴィ必殺の一太刀が振り下ろされた。

「貰っ たあ?!」

だが、振り下ろされた大剣は鈍い金属音をさせて停止した。受け止めたそれは片刃の剣のような形状をしていた。

しかし、レヴァンティンではない。

そして、それを受け止めたのもシグナムではなかった。

「……………」

それは空中から現れた、紺碧の機兵。

着地と同時に、素早く腕を振り上げ、スザク・ブレードで斬馬刀を受け止めたのだ。

アークゲインは無言のまま、腕を振るいレヴィを弾き飛ばす。飛ばされたレヴィは空中へと逃げて、突然現れたアークゲインを睨む。

「くっ、次から次へと、カッコいい登場ばかりして！こうなったら全員纏めてだ！みんな、行けえ！！」

クノツヘンやグリートがそれに従い、進軍を始める。

しかし、突如飛来した二つの黒い物体が一団を両断し、二本の極太の粒子ビームが残った残骸を滅していく。

さらに、反対側では蒼い奔流と光り輝く閃光が一団をまとめて貫き、ミサイルが破片を残さず爆破していく。

レヴィはその放たれた先を睨む。そこには四人の女性と、二体の機動兵器がいた。

女性陣は空中に作られた黄色い道を足場にし、機動兵器はゆっくりとブースターを噴射しながら地上に降り立った。

「ヴァルフ殿。少々、独断専行が過ぎるのではないか？」

ヴァルフを咎める女性は紫色のショートヘアをしていた。

着ているのは身体にフィットする青いボディスーツ。

それは戦闘機人・ナンバーズのスーツ。

彼女は最も実戦経験豊富なナンバーズが？。その名はトーレ。

前腕に沿うように取り付けているのは新型装備、スザク・ブレード。両足にも同様のブレードが存在している。

「IS……スローターアームズ。動作良好。固有武装、スローターリッパーに問題なし」

桃色のロングヘアをし、頭にバンド上の装甲を付けた少女は、冷たい視線をレヴィに投げかけている。

新型ナンバーズが一人、？のセツテ。その手に持つのは大型の投擲兵器、スローターリッパー。

「いやあ、ヴァルフ姉は速すぎッスよ。もう少し、こっちにも気を使ってほしいッス」

赤い髪を後頭部でまとめた少女は、姉と呼んだ二人に苦笑していた。ナンバーズが一人、？11のウエンディ。多目的武装であるライディングボードを携えている。

「ウエンディ、師匠に失礼なこと言うな！……それにしても、やっぱり師匠は凄いよな」

最後の一人の容姿は分からない。全身を青い装甲で覆っているからだ。

ゲシユペンストMk-？・タイプSを身に纏う、ナンバーズ。？9のノーヴェ。

黄色い道は彼女の固有能力・エアライナーで作り出した、いわゆるウイングロードだ。

「W10。まさか、これほどの出力を持っていたとはな……いや、これはスズカの改造故、か」

反対側に立つのはソウルゲイン。操るのはアクセル・アルマー。

アークゲインと同時にヘリから出撃したはいいものの、あまりの出力さに引き離されてしまっていた。

アクセルはこれに合わせてソウルゲインの改修を行わなければと考えていた。

「アサルト2よりロングアーチ。現場に到着しました。シグナム二尉は重傷ながらも無事。これより救助活動に入ります」

隣にはアシュセイヴァーを操るティアナ・ランスター。

その手にはハルバートランチャーが握られ、胸部ハッチも展開されている。

早速アサルト2という新しいコールサインを使っている辺り、彼女の心情が図れそうなものだ。

レイヴィは颯爽と登場し、自分の配下を全滅させた者たちを宿敵のように睨む。

「何なんだよ、お前ら!! そんなカッコよく登場して!! ボクと張り合おうっていいのか!? 受けて立つぞ!!」

だが、その宿敵としての方向はどうやらカッコよさについてのようだ。

今度は自分が多対一の状況に追い込まれているというのにも関わらず。

ノーヴェはそんな反応を見て、隣にいるウエンディの脇腹を肘で軽くつついた。

「……おい、ウエンディ。お前みたいなのがいるぜ? ちょっと話しかけてこいよ」

「いいっ?! ノーヴェはあんなふうに私を見てたっスか?! 心外ッス! 私はアホの子じゃないッス!! そうッスよね?! トーレ姉、セッテ!!」

「……さてな」

「……回答を拒否する」

シクシクと泣きながら、ウイングロードに突っ伏すウエンディ。

みんなしてひどいッス、装備だって私だけ不公平ッス、という嘆きが聞こえてくる。

「どうします? アクセル隊長」

「……ティアナに隊長付きで呼ばれると、少しこそばゆい感じがするな」

「え……そ、そうですか？えへへ……」

（アクセル隊長か。何とも懐かしい響きだ、これがな）

反対側ではアクセルとティアナが何やら和やかな雰囲気醸し出していた。

この場の空気が、争いとは程遠いものになった。

「……なんか、しらけちゃったな」

レヴィはその手に持つ大剣を、バルディツシユに似た戦斧の形状に変えた。

すでに戦いを続行する意思は消えたようだった。

それを確認してヴァルフも斬艦刀を下ろし、アークゲインも構えを解く。

少し冷めた目でレヴィはシグナム、それからヴァルフを見つめる。

「烈火の将。決着はしばらく預けておくよ。それまでに悪を断つ剣にふさわしい実力をつけておくだね……そして、聖王の剣。君との決着もいずれ……」

言うが早いか、レヴィの足元に穴が出来る。

その先は赤い空間。そこから漂う空気は、ひどく穏やかな感じがした。

レヴィはそこへ沈んでゆく。

「……アインスト・レヴィ」

シグナムがその名をつぶやくと同時に、穴が閉じた。

この場に静寂が訪れる。誰も動かなかった。その中で最初に動いたのはヴァルフだった。スレードゲルミルを解除して、未だ立ち上がれずにいるシグナムへと歩み寄る。

彼女を護る形になっているアーケゲインであったが、ヴァルフが武装を解除したためか、ただじっと彼女の様子を見ていた。

「シグナム。貴様が言う、悪を断つ剣とは……その程度のモノなのか」

「！！」 撤回しろ、その言葉、ツ！！」

彼女の足元まで来たヴァルフは、必然と見下ろす形となる。

そんな状況下での侮辱とも挑発とも取れるこの発言は、例え重傷を負っていたとしてもシグナムを立ち上がらせるには充分だった。

なんとか叩き付けられた壁を利用して、震える脚に鞭を打って立つ。身体とは逆にはつきりしてきた意識は、その瞳に強い光を灯らせた。満身創痍でありながらも、交戦の意思を告げるその姿にヴァルフは頷いた。

「それでこそ、我が宿敵……だが、倒すべき敵としては、今の貴様
は脆過ぎる」

「クッ！！」

それに対してシグナムは言葉をつまらせる。

ヴァルフが拮抗していた相手、レヴィに敗れた身としては。

おまけに、自分を宿敵と呼ぶヴァルフに護られていたのだ。

何も返す言葉などありはしなかった。

ヴァルフはその様子にわずかだが口角を釣り上げ、そして踵を返す。

「いずれ相見える、その時まで。その名に相応しい力を、悪を断つ

剣を手に入れる。我々の勝負は、それからだ」

「…………ヴァルフ、アズル」

体力の限界か、崩れ落ちるシグナム。

地面に倒れかかった彼女の身体を、いつの間にか近寄っていたアクセルが受け止める。

呼吸は安定していることにほっと一息ついたアクセルは立ち去ろうとするヴァルフに目を向ける。

見れば、ヴァルフはアーケゲインの前で止まり、その巨軀を見上げていた。

「W10。貴様が機動六課と行動を共にしているということは、貴様の主も…………」

「……………」

「フツ、図らずも任務を達したか。何という僥倖」

そして、シグナムの方を再度向く。

だが、その視線は彼女へ向けられたものではない。

「……………まだ何か用か、W14」

「我が名はヴァルフ・アズル……………W14ではない」

その発言にアクセルは愕然とした。

Wナンバーが自身の番号を否定し、仮初に与えられた名前に固執する。

それは、自我が芽生えたことの証拠に他ならない。

元々、彼女は『エルケーニヒ』への対抗策として生み出された後発機。

だからこそ、アリシアが目指した、自我の確立。それがW14で確認できるとは思いもしなかった。

「私はW14ではなく、真の聖王の剣……ヴァルフ・アズルとなる。それが我が意思だ」

「意思……だと……」

驚くアクセルを見てか、更に続ける。

その発言にもヴァルフに自我があることを証明することが含まれている。

基本的に意思、というものをWシリーズは持たない。

だが、それをヴァルフは口に出してまで強調した。

これが自我の芽生えでないのならば、何だというのか。

「……アクセル隊長……本隊は器の回収を急ぐとのことだ」

そして、次に放たれた言葉もアクセルを更に驚かせるものだった。器とはつまり、ヴィヴィオのこと。

それを回収するということは、計画が第三段階を迎えようとしているのか？

「……決行は？」

「三日後。詳細は創造主が連絡する……では、その刻に」

言い終わると、再びこちらに背を向けて歩み出す。

その姿は武人の如く、雄々しいものだった。

〈第17話 「Father&Mothers」〉

「シグナム二尉の容体は安定しているそうだ。明日には目を覚まして、即退院も可能だろう」

アクセルがそう告げると、食堂に集まっていた六課のメンバーは揃って安堵のため息を漏らした。

あの後、立ち去るヴァルフとナンバーズは追わず、アサルト分隊は教会病院にシグナムを搬送し、六課に戻ってきていた。

優先すべきはシグナムの搬送、そして、教会の安否だったからだ。

それに、どんな意図だったにせよ、ヴァルフはシグナムを救ったのだ。

仲間を救った恩人を捕まえる、というのは気が引ける。

そんな理由ならば見逃したことも、責任は問われないだろう。

事実、その通りになった。部隊長には感謝の言葉すら述べられた。

(……やはり、甘いな。この部隊は)

そして、俺も甘くなった。さっきの理由は本心からだった。

咄嗟に出たとはいえ、我ながら馬鹿馬鹿しい理由だ。

思わず自嘲する笑みがこぼれてしまう。

「アクセルパパ！今日はどうする？」

そんなアクセルのもとに、とてとととヴィヴィオが寄ってくる。

そういえば、今日は遊ぶと言う約束を取り付けていたのだった。

ちら、となのはを窺う。朝方に許可を貰ったとはいえ、シグナムがない分を補う必要があるのでは、と思ったからだ。

「大丈夫ですよ、今日くらいは。アクセルさんも疲れてるでしょうし」

そう言つて、なのはは笑顔を向けてきた。アクセルの心配は無用だったようだ。

そんなに疲労はたまつていないのだが、彼女の言葉に甘えておくつもりだ。

「あ！でも、明日からはきっちり訓練に参加してもらいますからね、隊長さん」

「えっ！兄さんが隊長！？」

「ホントなんですか、なのはさん！？」

「私、聞いてないよ？なのは！」

なのはの発言に若いメンバーは驚きを隠せないようだった。

まあ、確かに昨日今日で作られたという話だから仕方がないのだろう。

だが、フェイト。何故、お前は知らなかったんだ？

「あれ？フェイトちゃんは知らなかったっけ？アサルト分隊の話」

「うん。初耳だよ」

「フーか、なのは。アタシも知らないぞ」

「まあ、俺も聞かされたのは出撃直前だったかな」

ちよつと待つて、となのはが空間モニターを呼び出す。

その様子は少し怒っている様だった。

呼び出したモニターは通信らしく、しばらくしてはやての顔が表示された。

《あれ。なのはちゃん、どないしたん？》

「はやてちゃん！アサルト分隊の話、まだしてなかったの？昨日、夜に話すつて言つてなかった？」

《あゝ……実はな、アサルトっていう名前が、いい出来やと思っ
な？そういうのって、こう、話すタイミングってあるやん？それで
な、話すのを勿体ぶってたら……》
「そのまま……とか？」

にこつ、と笑みを浮かべるのは。こめかみに青筋が立っていた。
背後からは黒いオーラ。まるで、魔王……
周囲もすっかり怯えきっている。

《その通りです、はい》

それをモニター越しとはいえ、受けたはやては冷や汗をたらたらと
流している。

部隊長と分隊長という立場の違いは、この場においては関係無いよ
うだった。

なのは、にこりと笑ってから、最終宣告を下す。

「あとで、お話なの」

《そんな、殺生な》

もはや問答無用、とばかりに通信を打ち切った。

食堂にいた全員が、はやてに合掌した。ヴィヴィオも真似ている。

やっとオーラを収めたなのは、別の画面を呼び出した。

それは六課フォワードメンバーのリスト。

スターズ1〜3は変わらずだが、4のところにはティアナ・ランス
ターではなく、ギンガ・ナカジマとなっている。

そして、新たにアサルト分隊の項目が増えており……

アサルト1 / アクセル・アルマー

アサルト2 / ティアナ・ランスター

アサルト3 / 未定
アサルト4 / 未定

……となっていた。

「俺とティアナ以外はいいってことか……何とも中途半端なりストだな」

「っていうか、え！ギン姉の名前があるんですけど！！」

「あ、そういえば、話してなかったね。今日からスバルのお姉さんと、それからマリエル技術官が六課に出向になるんだ」

そんな話、聞いてないという視線が向けられる。

先ほどのはやてのようになつたなのはだが、食堂に響いた声に助けられた。

「あの、なのは一尉？よろしいですか？」

「何かあつたんですか、なのはさん？」

なのははパツと振り向き、助かつたとばかりに笑顔になつた。

そこには件の彼女たちが来ていた。手にはキャリアケースを持っている。

部隊長のところに挨拶しに行く前に、食堂が騒がしくなつたので寄つてみた、といったところか。

未だ、疑問が解消されていない二人の下になのはは駆け寄つた。

「ううん！何でもないよ！……それじゃあ、早速だけど、こちらが陸士108部隊から出向した……」

「ギンガ・ナカジマ陸曹です。よろしくお願いします」

綺麗な敬礼をしながら自己紹介するギンガ。

そういう礼儀正しさは、『向こう側』と同じなのかとしみじみとしてしまった。

(……スバル・ナカジマが彼女を見たら、どんな反応をするのだろうな)

間違いなく良い反応はしないだろうな、とあたりを付けて、もう一人の紹介を聞く。

こちらの人物は全く知らない人物だった。『向こう側』では見たことがない。

聞くと、名前はマリエル・アテンザ。本局技術部の精密技術官。十年前から隊長陣のデバイスを見ているらしい。

なるほど。道理で知らないはずだ。本局技術部。それ自体『向こう側』には存在しないはずだ。

『向こう側』でパーソナルトルーパーの理論が提唱され始めてから、デバイス開発は民間企業や外部研究所に委託された。

その煽りを受けて潰れた部署の一つだ。少なくともアクセルが記憶している部署の中にその名はない。

(これも世界間での違いの一つか)

「アクセルパパ？こわい顔してるよ？どうしたの？」

「っ！いや、どうもしてないさ、これがな……」

「やゝ、もつと優しく〜」

誤魔化すようにヴィヴィオの頭を強めに撫でる。

嫌がっているようにも見えるが、顔は笑顔なので問題ないだろう。すると、マリエルがその様子を見て、近づいてきた。

「わあ、可愛いお嬢さんですね！お名前は？」

「う……ヴィヴィオ、です」

「……すまん、技術官。少し、人見知りか激しくてな」

いえいえ構いませんよと言いながら、キャリーケースをあさり始めた。

そして、大量の飴が入った袋を取り出す。

袋には『弾けるキャンディ』と書かれている。

「これ、ヴィヴィオちゃんにあげます」

「わあ！……いいの？」

「もちろん！」

「ありがとう！！なのはママ、フェイトママ、ティアママ！！飴貰ったよ〜」

大声で嬉しさを表現しながら三人へ手を振る。

その様子に何度も頷く技術官。

「元気でいいですね。さすが、なのはさんとフェイトさんがお母さんなだけは……って、ええええええええええ！！」

困惑するマリエル。それを宥めに入ったスバル。

だが、フォローがおかしい。何だ、ティアもママですし、アリサママもいますよって。

火に油を注いでいるようなものではないか。案の定、混乱し始めている。

ママと呼ばれる三人が一斉に説明を始めたが、どれも主観交じりで咬みあっていない。

「……フッ」

騒がしくも、和やかな日常。こんなにも心地よいものだとは知らな

かった。

昔は味のない日常を送っていた。“あの戦い”の後は、闘争と抗争が日常となった。

そして、腐敗していく日常を見て、俺はあいつの計画に乗った。

……けれど、今の俺はどうだ。

昔の決意など心の奥底に幽閉して、甘美な日常を享受している。

いつまでも、こんな日が続けばいいと思っている。

だが、現実はそう甘くはない。

三日後。この隊舎にシャドウミラー本隊が攻め込んでくる。

俺が任務に従ってヴィヴィオを差し出せば、おそらく六課は壊滅する。

裏切られたという気持ちから、力を発揮できず無力化されるだろう。そうなれば、裏切り者のスズカたちはどうなる？

シャドウミラーの仇敵、なのは一尉やスバル・ナカジマは？

「……だが、俺は……」

シャドウミラーを裏切ることなどできるのか？

俺を頼りにしているクロノス。家族を失ったあいつを裏切ることか？

俺を想ってくれているアリシア。数年来の恩を仇で返すのか？

そして、かつての戦友たちの想い。それを踏みにじるのか？

「俺は……」

静かに頂垂れる、アクセル。

それを心配そうに見つめる一対の蒼き瞳。

「アクセルさん……」

ティアナ・ランスターはそっと、自分の想い人の名をつぶやいた。

夕焼けの紅い光が窓を通って部屋に差し込む。

一日が過ぎるのは早いものだ、ほとんどの時間を思考に費やしたアクセルは嘆いた。

結局、決断することはできなかった。今も葛藤中だ。

「……………ん……………ふう……………」

腕の中で眠るヴィヴィオ。その小さな体から伝わる体温が心地よかった。

彼の心を落ち着かせている一番の要因だろう。

そんな悩み続けるアクセルは一つだけ、決めたことがある。

自分を父と慕う、この少女を護ることだ。

例え機動六課を裏切ろうとも、例えシャドウミラーを抜けようとも、彼女だけは護ってみせる。

「それが、父親としての義務さ、これがな」

静かに寝息を立てる愛娘を起こさないよう立ち上がり、彼女をベッドに寝かせる。

一瞬、身じろぎしたものの、起きるには至らなかったようだ。

そして、毛布を掛けたその時。扉をノックする音と同時に女性の声。

「アクセルさん。ティアナです……………入っていいですか？」

「ああ……………どうした？」

招き入れたティアナの雰囲気疑問を感じた。
何やら、真剣な表情をしている。

アクセルはその瞳にどこか見覚えがあった。

(そうだ、あれは……あの時の……)

「お話があつて……ここじゃないんですから、外に出ませんか？」

有無を言わさない口調で、外へ出るよう促す。

アクセルは大人しく部屋を出て、先に進むティアナの後ろを歩く。
どうも、こういう時のティアナには一種の凄みがある。

それは『向こう側』でも『こちら側』でも変わらないらしい。

そのまま、ずんずんと進んでいくティアナは隊舎正面玄関を抜け、
海沿いの通路までやってきた。

夕焼けが反射して、幻想的な空気を醸し出している。

「ここなら、たぶん……誰にも聞こえないし、見えなと思います」
「どづいつ、ことだ？」

監視はないと言いたいのか。ティアナは、自分に何を話させようと
している。

そう自問自答したが、もちろんアクセルはその答えは分かっていた。
元々聡明な彼女のことだ。随分前から疑っていたのだろう。

「……アクセルさん。私には、夢があります。兄の遺志を継ぐとい
う夢が」

「……………」

聞いたことがある。ティエダ・ランスター一等空尉。執務官志望の
エリート。ティアナ同様、銃型デバイスを使っていたという。

だが六年前、逃走違法魔導師追跡任務に従事し、魔導師と交戦した時の傷が原因で殉職した。

当時、彼の上官はそんな彼を無能扱いした。執務官に成れず、不名誉なレッテルを貼られた彼の遺志を継ぐため、ティアナは管理局への道を目指したとも聞いた。

つまり、ティアナの夢は兄と同様に銃使いで執務官になること、ということだ。

それが今、何の関係があるのだろうか。

「兄さんは夢を叶えることが出来なまま、亡くなりました。両親が早くに亡くなっていた私にとって、唯一と言える肉親。その願いを叶えてあげたい、兄の魔法が役立たずではなかったことを示したい。その一心で、私は今まで頑張ってきました」

ティアナは腕をもう片方の腕で抱きしめる。

その時のことを思い出しているのだろう。

少し、痛々しげだった。

「でも、それ以上に私はやりたいことを見つけたんです」

「……それは、何だ？」

さすがに口を開かざるを得なかった。

肉親の願いを押しつけてまで、やりたいことなどそうそうあるものなのか。

その考えは、次の発言によって粉々に碎かれる。

「アクセルさん。分かっているんです。貴方は、あの組織のスパイ

……しかも、幹部クラスですね？」

「……！」

いきなり脈絡もなく自分の正体の話になった。

そして、正鵠を射ている。確かに、他の六課のメンバーよりは情報が入りやすかっただろうが。

まさか、ここまで直球に来るとは。

「このことは誰にも話していません。そして、話す気も全くありません」

「……執務官志望の局員がやることではないな」

「いいんです。局員としては駄目でも、自分自身の夢にはつながってますから」

「……その、夢とは何だ？下手すれば、情報隠蔽で逮捕されることを承知の上で、叶えなければならぬものなのか？」

どうもつかめない。彼女がやりたいこととは何だ。

疑問ばかりのアクセルを前に、ティアナは一度深呼吸をして、口を開く。

「アクセルさん。私は 貴方のものになりたい」

その言葉に、アクセルの思考は凍結した。

S i d e ティアナ

「 貴方のものになりたい」

ついに言った。言ってしまった。

ともすれば告白。下手すれば隷属宣言。

もう少し、言葉を選べなかつたのかと自問自答しながら、想いを馳せる。

最初の印象は軽い人。からかってくるのは止めてほしかったけど、嬉しくもあった。

子どもに好かれる人。気軽に甘えられるエリオやキャロ、最近はヴィオオも羨ましい。

兄貴分、というのが一番しっくりくる人。面倒見がよく、教えられることが多い。

すぐくかつこいい人。普段はもちろん、正装すると王侯貴族に仕える執事に見えた。

でも、いつからかまったく真逆の人になった。

少し厳しげな口調になったが、にじみ出る優しさは、とても温かい。ぶっきらぼうだが、以前にも増して子どもに好かれている。

顔が凜々しくなった。さらにかつこよくなった。

ギャップ、とでもいうのか。それにやられた。

以前は、慕っていただけの感情が大きくなり、今ではもう抑えられない恋心となった。

だから、伝えなければならぬ。この気持ち。

そして、知らなければならぬ。彼の真意を。

そんな彼は絶句していた。

人の思考が読めないティアナには、それがどういった感情から起因したか分からない。

後悔の念に襲われるが、過去には戻れない。

あまりの恥ずかしさに、手足が震え、顔が熱くなる。

鼓動はすでに真つ赤な限界反応を起こしている。

「……それが、お前の夢か」

「ひゃ、ひゃい！」

そのため、彼の問いかけに声が裏返ってしまった。
おかしい。途中まで真面目な空気だったのに、これでは……
変な方向へと思考が流れているティアナだったが、それを気にせず
アクセルは続けた。

「……『お前』も、やはりそういうのだな。ティアナ・ランスター」
「え？それって、どういう……」

「『向こう側』の話さ、こいつがな……お前の言う通りだ。俺は、
シャドウミラーの、あの組織のスパイだ」

アクセルはティアナの問いかけに応えず、誤魔化すように自分の正
体を晒した。

そのことに、熱されていた頭が冷えていく。
予想していたこととはいえ、やはり愕然とする。

「やっぱりですか……シャドウミラーって名前なんですね」

「一応、聞いておく。どうして解った」

「貴方が隊長と呼ばれていたこと。あの二人と知り合い、のようだ
ったこと。装着型デバイスを使用し、なおかつアークゲインとの類
似性が多すぎる……他の皆さんは貴方を信じ切っていますから、
おそらくここまで深読みはしないでしょうね」

「それが、その甘さが、ここの良いところさ。“楽園の林檎”故に
な」

下を向き、軽く笑うアクセル。

だが、再び顔を上げた時、その笑みは消え、真剣な眼差しを向けて
きた。

少したじろぐ。無意識のうちに足が下がりそうになる。

「それで、お前は どうする……ティアナ・ランスター」
「……私は兄のために、ただひたすら走り続けてきました。士官学校も空隊にも挫折して、それでも諦めず陸士訓練校を卒業して、スバルと一緒に陸士部隊で活動して、六課に引き抜かれて……今思うと自分を顧みず、ただ走っていたと思います……そんな時、貴方に会った」

だが、逆に一步を踏み出す。ここで負けるわけにはいかない。
全て賭けたのだ。ランスターの弾丸、兄の遺志、夢。

さあ、シヨウダウンだ。

「アクセルさん……私を認めてくれた貴方は、私にとっての“楽園の林檎”。その味を知ってしまった私に、他の道は選べない」
「……………」

「私は貴方のためなら、何だってします。だから、私を信じてください」

一步、一步近づく。アクセルは動かない。
距離を詰め、ほぼ目の前で止まる。

「たとえば、貴方が六課の敵だとしても」

「……………」
そこで、一度言葉を切る。

ここから先は彼女の知らない深淵に、足を踏み入れることになる。
もう後戻りはできない。

それで、いいのだ。私は自分の意思でこの道を選んだ。
悔いはない。例え険しかろうと。

「……………」
私は、貴方の味方です」

「……………」

いつか言った言葉を繰り返す。ティアナにとって心からの言葉だ。それを聞いたアクセルは目を伏せて、思案している。再び目を開けた時、決心したようだ。笑顔を見せ、いつかのように頭を撫でてくる。

「すまん。ティアナ……………」

「……………どちらかというと、聞きたいのは感謝の言葉ですけどね、これが」

「フツ……………ありがとう」

そして、手を離す。少し名残惜しかった。

それから、アクセルは再び真剣な顔になり、口を開く。

「……………ティアナ。お前に話したいことがある……………心して、聞いてほしい」

「……………はい！」

シャドウミラーが六課を襲うまで、あと三日。

二人にとって、一世一代の大博打が、幕を開ける。

第17話 「Father& Mothers」(後書き)

ティアナ・アルマー……良い響きだ。

今回は、いよいよアクセル決別の時。

自爆……は、無理ですね。

作者なりの決別の仕方、とくにご覧あれ。

次回第18話「楽園からの追放者」。

お楽しみに！

P.S.

トーレノカルディア・バシリツサの武装、スザク・ブレード、ピアレス・アックス

セツテノスローターリップ……グラン・スラッシュリップ-人型サイズ。

無限のフロンティア、面白いッスね！

第18話 「楽園からの追放者」(前書き)

ついに選択の時。

アクセル・アルマーの大博打。

それでは、どうぞ！

第18話 「楽園からの追放者」

01:41 機動六課 陸戦用シミュレーター

ほとんどの隊員が眠りにについている六課隊舎。

そのため、誰もいない陸戦用シミュレーターの調整ハンガーにアクセルは佇んでいた。

彼の目の前には通信用モニター。そこに映る人物は長い金髪を持つ女性。

アリシア・テストロッサである。

「……………というわけ。理解してくれたかな？」

「ああ。聖王の器を確保し、それを人質に武装解除……………その後には本隊が制圧だな？」

「そういうこと。さすがに聖王の器が人質なら、中枢も楽に占拠できるし、動きも封じられる……………アクセルにとっては簡単だよな？」

「そうだな……………隊員には、気の毒な話だが」

内容は今日の作戦について。

シャドウミラー隊が機動六課を襲撃し、聖王の器を奪取するという、アリシアにとっては、ただ、それだけの作戦。

しかし、アクセルにとっては違う。

「……………ねえ、アクセル……………大丈夫なの？」

「……………なぜだ？」

「そんな口調だった？……………私は前の方が好きだよ」

彼の様子がおかしいことを感じ取ったのか、アリシアは疑問を投げ

かけた。

アリシアの記憶が正しければ、昔は相手のことを気に掛けるなんてことはしなかった。

闘争故に、戦争故に、と割り切っていたはずだ。

「気のせいだろう。こんなもんだ、これがな」

アクセルはかぶりを振って、否定する。

だが、彼女はそうではないと感じていた。

何か、あつたに違いない。だが。

「……まあ、いいよ。それから一つ聞きたいことがあるの。関係のないことだけど」

「……！」

「感付いた？さすがに分かつちゃうか……テストロッサの名を持つ者、いるんでしょ？」

「……ああ」

話しくそうに言葉を濁す。
言っでいいものが、どうか。

フルネーム
「名前は？」

「……フェイト・テストロッサ・ハラオウン」

「へえ……ハラオウン、ね……分かった」

アクセルが話しくそうにした理由に合点がいったらしい。

まさか、ハラオウンの養子になるとは思ってもしいなかったのだろう。

「……ようやく、だね」

「ああ。これで我々の……シャドウミラーの、望んだ世界が来る……」

…」

我々ではなく、シャドウミラー。そこを強調したアクセル。その物言いに不信感を募らせるアリシア。

「やっぱり……転移の影響が、まだ残ってるんじゃないの？」

これ以上、口を滑らせるわけにはいかない。アクセルの手が、通信切断のキーに伸びる。

「任務は了解した……切るぞ」

「ちよつと待っ」

有無を言わずに切断。

静寂に包まれた空気にアクセルの呼吸音だけが響く。

「ふう……いよいよ明日……か……」

明日。ここは、機動六課隊舎は戦場になる。

それは避けようがないことだ。

だが、最悪の事態を避けるための手は打った。

「やはり、これしかない……すまん、皆……」

男は護るべき小さな命のため、信じる仲間へ背を向ける。

マーチ・フレモントの個室。通常、F I 社出張研究室。

深夜ではあったが、その扉の隙間からは明かりが漏れている。

そこに近づく一人の女性。忍び足で廊下を歩き、部屋の前にまで来た。

そして、後付けで取り付けられた電子ロックを慣れた手つきで解除する。

空気が抜けるような音を立てて開いた扉をくぐり、彼女は部屋の主へと話しかける。

「ねえ、マーチ。相談があるんだけど」

ティアナ・ランスターはそう言った。

突然の訪問者にも驚くことがなかったマーチだが、彼女の言葉には驚かされた。

「珍しい。貴女が相談なんて……真面目な話？」

無言で肯定の意思を表す。

ティアナは意を決し、その言葉を紡ぐ。

「……管理局辞めたら、あなたの会社で雇ってもらえない？」

少女は大切な人の想いに応えるため、自分の夢を諦める。

シヨウダウンの時は近い。

「え、中止……ですか？」

スバルが呆けたような声を出す。

新メンバーのギンガ、エリオとキャロも同様の反応だ。

ティアナー人は考え込むような表情だったが。

それぞれの反応を見せられた、なのはは申し訳なさそうに苦笑した。

「うん、ごめんね皆。今朝から調子悪いみたいで」

「そうですか……」

しよげるスバル。何でもギンガが同じ分隊になったため、新しいコンビネーションを組んだらしい。

昨夜遅くまで考えていたら、いくつか出来たため、今日の訓練で試したかったという。

「しよげがないわよ、スバル。修理が終わるまではシャドーで我慢しましょ？」

「……うん」

激しい落ち込みようだった。なのはは申し訳なく思った。

しかし、疑問だ。あまりにも突然すぎる。

昨日までは何の症状も現れていなかった。それに点検もちゃんと行っていた。

それが今朝になって、エラーが続出なんておかしすぎる。
なのはには何かの予兆に見えて仕方がなかった。

「今は、シャーリーやマリーさんが見てくれているから、多分午前中には終わると思うよ」

「では、それまではデスクワークですか」

そうなるね、と質問してきたエリオに返す。
すると、落ち込んでいたスバルが膝をついた。

「ああ……もう駄目だ」

「「こら、スバル！しっかりしなさい！」」

「「「あ、あはは……」「」「」

ティアナとギンガが同じ言葉でスバルを叱咤し、なのは、エリオ、
キャラが苦笑した。

なのはの疑問は既に消えていた。

「……………ひとまず計画通りか」

それを遠目に眺めている双眸。

アクセルはぼつりとつぶやいた。

08:53 ミッドチルダ中央区画港湾地区 深度20

0m 『方舟』艦橋

「W14。貴様に聞きたいことがある。先日件のだ」
「W17。何のことだ」

薄暗い『方舟』の艦橋。そこで問答しているのは二体のWシリーズ。一体はシリーズ最高傑作のW17。もう一体はシリーズ中最高の力を持つW14。

「とぼけるな。貴様が命令違反を犯し、独断で聖王教会に向かったことだ」

「……任務は果たしたはずだ」

「間接的にはな……確かに貴様に与えられた命令は、強敵との戦闘。そのためならば独自行動が許可されている」

だが、トラミアは一度言葉を切った。

彼女からにじみ出る雰囲気は冷たく、残酷なまでに感情がこもっていない。

少なくとも味方に向けるものではない。

「なぜヴォルケンリッターの将を助けるような真似をした」

彼女が叱責するのはそこだ。

敵対する組織の幹部。しかも、実力はそれなりにある。

消せる時に、何故消さなかったのか。

「……奴と、互角の勝負をするためだ」

「互角の勝負だと？……笑わせるな」

オリジナルであるシグナムを打倒し、個を確立させるために行動しているヴァルフ。

その意思を理解することが出来ないラミアは嘲笑で返す。

「今回ばかりは優先すべき事項があったはずだ。スズカ・ツキムラ、そしてアリサ・ローウェルの所在確認。裏切り者から情報が漏れ、それがどれだけ作戦の障害になるか」

「……………」
「我々、Wシリーズは余計なことを考えず、与えられた任務を遂行していればいい」

既にWシリーズとしての枠を超えているヴァルフに対しては通用しない問答だ。

そのことにラミアは気が付いていない。
もし、気が付いているとしたら、それは……

「それが出来ないのなら欠陥品として私が処分する……覚えておけ」
「……………承知」

渋々といったように頷き、退室する。

その背中を睨むように視線を送り続けるラミア。
そして、もう一人。後姿を見送る視線があった。

「不安定故に、あのザマか……やはり、W14はWシリーズとして欠陥品です。今のうちに処分するべきでは？」

「彼女は、シャドウミラーにとって貴重な戦力。それはできない相談だよ、W17」

そう、アリシア・テストロツサである。

彼女は全てを見ていた。その上で、二人の決定的な違いを見つけていた。

ラミアの言葉を借りて言うならば、不安定であるが故の到着点がW14で、完璧であるが故の未発展がW17なのだ。

アリシアの胸中を読めないラミアは彼女に問いかける。

「ですが、任務を遂行できないWシリーズに何の意味があります？あれでは、量産型にすら劣るでしょう。それにWシリーズの自我確立はアリシア様のプランに反しているのでは？」

「そうだよ。でもね……」

元々は違う。人造人間による自我の確立。それがアリシアの夢。

古くからある人造魔導士計画、ドクター・スカリエツィで有名な戦闘機人計画、CW社の自立作動型汎用端末を踏み台にして生まれた、アリシア・テストロツサのWシリーズ。

だが、彼女の意に反して、Wシリーズには戦争の道具に相応しい性能が求められた。

だから、Wシリーズに人間性を求めなくなったのだ。

しかし、どうだろうか。

W14は自我確立のために、命令違反を起こす。

W11とW12はまるで姉妹のようだ。そんな設定などした覚えはない。

そして……W17だ。

彼女は気が付いていないだろう。

一度、創造主たるアリシアが否定した言葉に、彼女は自分の意見を通そうとした。

Wシリーズという枠組みからはもれていないものの、量産型では有り得ない行動だ。

Wシリーズにとって、アリシアの言葉は絶対なのだから。

「見たくなったの。あの子たち、そして、あなたがどうなっていくのかを」

「……アリシア、様？」

「……」

口を閉じるアリシアを見て、理解できないという表情のラミア。今はそれでもいいと彼女は思った。だが、いつかは……

「……アリシア、借り受けたガジェットの調整はどうなっている」
そんな思考を打ち砕くように、クロノスが入室してくる。突然であったが、ラミアは彼が現れたと同時に表情をいつもの無然としたものに戻す。

少しは空気を読んでほしいと思ったアリシアは思った。
まあ、無理もない。作戦も後半に突入したのだ。
高揚感故の行動だろうと彼女は予測した。

「ああ、あの？型改？今は、完全なAMF発生装置として改修中。試験も含めて二時間つてところかな」

「残り三時間……充分間に合うな。次の作戦には欠かせない機体だ。万全な調整を施しておけ」

黒い外套を翻して、クロノスは出ていく。
行先はシステムXNの調整室だろう。随分とご多忙のようだ。

（周りばかり気にして、足元を掬われなければいいけど）
そんなアリシアの心配は、現実のものになる。

「ハア……腕が痛いよう……」
「大丈夫ですか？スバルさん」

食堂のテーブルに突っ伏しているスバルをキャラは心配そうに見ている。

大丈夫だよ、と顔を上げ、腕を胸の前で左右に揺らす。
妙に小刻みに動いているが、キャラは見ないことにした。

「はい、スバルお待たせ！」
「すみません、時間がかかってしまっ

ギンガは二人分（ナカジマ家基準）のパスタ皿を両手で持ち、エリオは片手でパスタ皿を、もう片方の腕で巨大なパイが乗った皿を持っている。

果たして、四人がけのテーブルに乗り切るのだろうかという量。

「エリオ君？そのパイは何？」
「食堂の人が、買ってきたんだけど余ったから、みんなで食べてっ
て。有名店のかぼちゃパイらしいよ、これがね」

巨大かぼちゃパイをエリオはテーブルの真ん中に置く。
その匂いだけでお腹がいっぱいになりそうだ。

「私たちだけで、食べきれ……ますね、きっと」

最後の方は苦笑交じりになってしまった。

よく考えれば、座っている四人の内、三人が大食いだったのをキャラは思い出した。

「わあ！ずいぶん大きなパイだね」

「うん、おいしそうだ」

なのはとフェイトが定食をプレートに乗せて、隣のテーブルに座る。やはり、パイの大きさには驚くらしい。

「いかがですか？結構、有名な店のものらしいですから」

「じゃあ、少し貰っちゃおうかな………そういえば、ティアナはどうしたの？」

「あれ、さつきまで一緒に書類整理してたんじゃない？」

「ええ、何か私用とかで。先に食べていていいからとは言っていたんですけど」

パイを切り分けながら、ギンガが答える。

かぼちゃが放つ鮮やかな黄金色が、食欲をそそる。

さすがは有名店のものだ。エリオに聞くと、ファッティ何とかという店らしい。

食べた全員が正式な店名を調べようと決意した。

「でも、ティアナ遅いね。アクセルも忙しそうだったし。何だか今日は変だね」

「シミュレーターも調子が悪いし。それに、ここのテレビも故障しているみたい」

なのはにそう言われて、四人は気が付いた。

今は十二時、一分前。

食堂に据え付けられた大型テレビ。この時間帯であれば、様々なニュースを流しているはずなのに。

大きなモニターは黒く染まっている。

その静寂が今朝からの異常と相まって、少し不気味に感じた。

「何か、あったんでしょうか？」

キヤロが怯えたような調子で問い掛けた。

フェイトとエリオがそんな彼女の傍に付き、安心させるように手を握る。

微笑ましそうに見ていたのはだったが、今朝の疑問が今になって蘇ってきた。

大型電子機器の故障。何やら不穏な感じがする。

そのことで少しはやてに質問してみようと、通信用のモニターを開いた。

《ロングアーチより各員へ！》

その時だ。六課隊舎に放送の音が響く。

ロングアーチ所属のアルト・クラエッタだった。その声はひどく焦っている。

それも無理のないことだった。

《隊舎に接近中の熱源、多数！！相手は、ゲシユペンストです！！》

亡霊の大部隊を前にして、平静でいられるはずもないのだから。

「外への通信が通じない？どういうことや？」

驚き交じりに聞き返すはやて。

退院したシグナムを迎えに朝から出かけていたのだが、帰ってくるなり副官であるグリフィス・ロウランに呼び出された。

彼が言うには、最初に気が付いたのはシャリオとマリエルらしい。陸戦用シミュレーターの修理を行っていたのだが、どこにも異常がないにも関わらず、依然とエラーが発生していた。

知り合いのメカニックに相談しようと思つたところ、こちらにもエラーが表示されたという。

それが十分前の話だ。その間に、いくらか調べたとのことだった。隊舎にある全ての通信機器が使用不可能になっている。つまり、情報が完全にシャットアウトされているのだ。

「有り得へん。一体、何が起こつてるんや……」

「部隊長！大変です！」

「っ！なんや！」

呼んだのは通信士のアルトだ。モニターを見ている事から、違う用件らしい。

これ以上、頭が痛くなる内容でないことをはやては願った。だが、現実はそう甘くない。

「周囲に多数の熱源が発生しています！今は、過去の情報と照らし合わせていて……出ました！」

表示された情報は、今の状況では最悪のものだった。

アインストと並び、六課を苦しめている存在。

「くっ！こいつは……アルト！警戒態勢や！」

「はい！！……ロングアーチより各員へ！隊舎に接近中の熱源、多数！！相手は、ゲシュペンストです！！」

「総員、戦闘配備や！！」

アルトに続けて、はやてが出撃をかける。

通信が不通なものも、彼らの仕込みだろう。

陸の孤島と化した六課を襲撃。狙いは、スズカたちに違いない。

そう予想を付けたはやての耳に、予想もしていなかった声が響いた。

《そこまでだ！》

同時に通信用モニターが開く。

そこに映し出されたのはこの部隊の協力者。

圧倒的な能力を持ち、機動六課を救ってきた存在。

《出撃は許さん……機動六課に告ぐ。直ちに武装解除しろ》

心なしか顔色が悪く、ぐったりとしたヴィヴィオを腕に抱え。

ソウルゲインを纏ったアクセル・アルマーはそう告げた。

12:00 機動六課 陸戦用シミュレーター上

ソウルゲインの前にはランドグリーズが四機、そしてガジェット？
型改が四機。

周囲にはホバリングする量産型ゲシュペンストMk-？が六機。

六課隊舎周囲にはもっと待機しているはずだ。

「もう一度、告げる。直ちに武装解除しろ」

その配置を確認してから、少し時間を置いてアクセルは再度、勧告を行う。

すると、目の前にいくつものモニターが投影された。

《あ、アクセル君?!》

《武装解除だあ?!》

《どういふことですか!?!》

はやてが、ヴィータが、リインフォース?がそれぞれの反応を返してきた。

背景を見る限り、はやては司令部に、彼女以外は隊舎の屋上にいるらしい。

その方向へ目を向ければ、フォワードメンバーのほとんどがそこにいた。

もちろんティアナはいない。

「聞く、聞かないは自由だ。その場合、『聖王の器』の安全は保障しない」

腕の中にいる少女を強調するように見せる。

死んでいるかのように静かだった。起きる気配はない。

すると、屋上から身を乗り出して、スバルが叫ぶ。

《アクセルさん?何で、何でそんなことを!?!》

「それが、俺の任務だからだ」

《に、任務?》

スバルを含め若い連中は、何のことか分からないという顔をしている。

だが、八神家の騎士などは、まさかという顔をしている。どうやら、最近の行動で疑いが浮上していたらしい。

だが、少し遅かったようだ。それがこの現状だ。

「繰り返す。今すぐ武装解除に応じてもらう。抵抗する素振りを見せれば……理解できるな？」

《そんな……》

「周辺のAMF濃度は150%超。並の魔導士では誘導弾を生成することさえ叶わん数値だ。いくらエース・オブ・エースだろうと、この状況下では実力の半分も出すことはできない」

今回の作戦に際して用意されたガジェットは、？型改を改修した機体だ。

元々、砲撃能力を強化されたタイプだが、この機体はAMF発生装置としての役割を果たすため、攻撃能力は一切ない。

そのため、一応の護衛としてランドグリーズを配置している。用心深いことだ。指示を出したのは、大方アリアだろう。

そんなことを考えながら、再び六課全員に告げる。

「大人しく従えば、全員の命は保障する。更にお前たちの心がけ次第では、シャドウミラー隊の一員として活動することが出来る」

「シャドウミラー？」

誰かが、そう言った。

その時だ。空間が歪む、そんな感覚を受ける。

タイミングよく来てくれたようだ。

空を見れば、巨大な球体が眩く輝き、その存在を強調している。

ゆっくりと降りていき、シミュレーター上のちょうど中央に着地し

た。

《重力震反応！これは……以前にも確認されたパターンです！！》
《ヴィヴィオを救助した時と同じ……》

「その通りだ。なのは一尉」

球体が衝撃波を放ち、解き放たれ、影が姿を現す。

ツヴァイザーゲイン、アンジュルグ、ヴァイサーガ、スレードゲル
ミル。

指揮官が出張ってくるとは。本気で確保にかかってきたというわけ
か。

アクセルは知らない内に、自分の身体に力が入っていたことに気が
付いた。

(ここからが、正念場だな)

腕を組みながら直立しているツヴァイザーゲイン。

その視線がソウルゲインへと向けられる。

「ご苦労だった。アクセル」

「ああ……」

その様子を見た六課の隊長陣が目を見開く。

疑いが確かなものになった瞬間だった。

《今までずっと騙して……記憶喪失は嘘だったのね！》

シヤマルが叫ぶ。無理もない。

彼女がアクセルを記憶喪失と断定した本人なのだから。

自身の診察ミスが原因で、などと色々複雑なだろう。

だが、その点だけは否定させていただこう。

「嘘ではない。記憶喪失は本当だ……記憶が戻ったのは先日の戦闘で、ツヴァイザーゲインが現れた時だ」

ツヴァイザーゲインへと視線を向けながら、そう答える。

彼女らもそれを追う。全ての騒動の根源へ。

《あなたたちは何者?! シャドウミラー……それが組織の名前ですか!》

なのはがもつともな質問を繰り返す。

その声を聴きつけて、ツヴァイを纏うクロノスが彼女を睨みつける。

「そう。そして、私はシャドウミラーの指揮官、クロノス・ハーヴェイ」

その声に、名前に違和感を覚えたのは隊長陣の三人。

『こちら側』のあいつはフェイトの義兄。必然、この三人は勘付くはずだ。

『向こう側』のクロノ・ハラオウンであることに。

「再び、会えて光栄だ。時空管理局特殊鎮圧部隊『ディザスターズ』隊長……ナノハ・タカマチ特務空尉」

わけが分からないという顔をするのは。

それはそうだ。それはなのではない。ナノハ・タカマチのことだ。

「もっとも『こちら側』ではさしたる力を持たない、と聞いている」

力。あの異常なまでの力を見れば、『こちら側』のなのはの力は普通のレベルだ。

それほど『エルケーニヒ』の力は異常なのだ。

《あなたたちは！アクセルに何をしたんですか！！》

今度はフェイトが叫ぶ。優しい彼女のことだ。

何か弱みを握られているのではないか、もしくは操られているのではないかという可能性にすぎている。

「何も？彼は初めから私たちの仲間……分かりやすく言えば、スパイだね」

それに応えたのはアリシア。現実には甘くはないとばかりに真実を突き付ける。

アンジュルグのバイザーによって顔は覆われ、素顔は見えない。

だが、彼女もそうとう複雑なはずだ。自分とは違う、自分の姿を見ているのだから。

「フェイト・テストロッサ……貴女が……こんな形で出会うなんてね」

《えっ！？どういう、こと》

思わず、アリシアがつぶやいた言葉。それはフェイトの耳にも届いた。

だが、それには答えず、アリシアはアクセルに視線を向ける。

(……………アクセル。中枢を占拠してって言ったのに、何で外から脅してるの……………)

彼が確認した作戦内容とは違う行動を取っていることに疑問を持った視線。

それが向けられているが、アクセルは無視した。そんなことには気付かず、クロノスは警告を続ける。

「では、返答を聞こうか。機動六課部隊長、八神はやて二等陸佐……武装解除に応じるか、否か」

クロノスからは見えないが、モニター越しのはやては唇を噛み締めている。

心が痛む姿だった。だが、決めたはずだ。

こうなることを望んで、この道を選んだのだ。今更、後戻りなどできない。

《ロングアーチより各員へ……その場で待機や》

「賢明な判断だ」

ようやく判断を下したはやてに、クロノスが嘲るように返す。彼女は齒をかみ砕きそんな勢いの表情をしている。

《クロノス・ハーヴェイだったよね。貴方たちの目的は何？ヴィヴィイオまでさらって、それなりの目的があるんでしょっ？》

再びなのはが尋ねる。それこそが一番聞きたいことだろう。そして、クロノスが声を高々にして言いたいこともある。

「我らの目的は一つ

理想の世界を創ることだ」

《理想の、世界？》

《これはまた、ずいぶん大仰な話だな。要は世界征服ってことか

？》

あまりにも壮大な目的にフェイトが困惑し、まるで子供の考えることだとばかりにヴィータが嘲笑する。

クロノスはそんな反応に何も返さず、ただ淡々と続ける。

「言い方を変えればそうかもしれない。だが、何を以て理想の世界とするかは、世界を創る者のみが決定する権利を持つ……そして、世界征服はその権利を行使するための過程に過ぎない」

《御託はいい。その理想とやらを言ってみろ》

シグナムが先を促す。鷹の目は細められたままだ。

鋭い彼女のことだ。不穏なものを感じ取ったのかもしれない。

そして、それは見事の中する。

「永遠の闘争。絶えず争いが行われている、それが我々の理想の世界だ」

12:06 機動六課隊舎 屋上

「ふ、ふざけんな！そんな世界のどこが理想だ！！」

隣にいるヴィータが吠えた。目の色が変わっている。

憤っているのはなのも同じだったが、彼女を始めとしたヴォルケンリッターはそれ以上だろう。

遠い昔から闘争を続けてきた彼女たちにとって、平穩である現在いまを乱す者はただの脅威でしかない。だが、向こうはそうではないらしい。

《理想だよ。戦争があるから破壊があり……同時に新たな創造が始まる。戦争があつたからこそ、発展した技術がどれほどあるか、考えたことがある？》

シヤドウミラーと管理局の技術力の差。

それは大きな戦争を経験してきたから故の差なのだろうか。

教導隊の一員として様々な新型デバイスの開発経緯に携わってきたのはには、闘争から生まれる技術の発展がどれほどあるか、よく知っていた。

《あなたたちが使っているものは、戦争が生み出した技術の結晶……ヒトの叡智とも言えるものなんだよ》

そう、今使っている魔法も元を辿れば、戦争の際に発見されたもの。旧暦のベルカ……戦乱の世において確立された、個人用の武器兵装として運用する技術。

それが魔法の、“魔導”の始まり。

当時の城塞すら破壊する武器が生み出されて以降、各国は競って魔導技術を開発。

果ては巨大な艦船すら魔導の力で飛ばすことに成功する。

そして、多くの生命を犠牲にして、魔導まほうの技術ちからは高まっていく。

「そんな、そんなことがあつてたまるもんか！」

「魔法は人々を護るためのものなんだ！戦争のための技術なんかじゃないんだ……！」

その技術の発展で生まれたエリオが、スバルが叫ぶ。誰かに同意を求める様に。

違うと言ってほしいとばかりに。

魔法は発展のためのもの。救済のためのもの。若い子たちにとって、希望の光のようなもの。それを打ち砕くように、クロノスは続ける。

《だが、戦争無くしてヒトの発展は有り得ん。それは歴史が証明している》

「戦争があるから英雄が生まれる、か……」

シグナムが静かに嘆いた。

昔の記憶に思いを馳せているのかもしれない。かつての戦乱時代。王は多くの武勲を立てた。それはその分、人を殺めている事にも繋がる。

「だからといって、戦争は継続させるものじゃない」

フェイトが敵意を込めた視線でクロノスを睨む。

そう。人類の発展のためとはいえ、わざわざ戦争を起こす必要などありはしない。

それにヴィータとシグナムが続く。

「そうだ、あたしたちは戦争を起こすために戦っているんじゃないねえ……」

「お前たちのような連中から世界を、そこで生きる人々を護るために戦っている」

魔法は人を救うための力。

いつだって、どんな時だって、そう思ってきた。

今のなのはの、根底を支える考えだ。

「兄さん、嘘だって言ってるよ……ねえ、兄さん……」

エリオが涙を流しながら、アクセルに問うた。
しかし、彼は背を向けたまま、何も答えない。

蒼い巨人は、何も語らない。

《無駄だ。アクセルは私と同じく、戦争が続く世界を望んでいる》

「そんな……お兄ちゃん」

《最後通告だ。八神はやて部隊長。武装解除をしてもらおう》

全てのゲシユペンストがその手に持つライフルを構える。

緑色の未確認機が肩に備えた大砲の照準をこちらに向ける。

《さもなくば……死だ》

ろくに攻撃魔法も防御魔法も展開できないこの状況。

若いフォワードメンバーは戦意を喪失している。

確かに、死を宣告されたも同然だ。

《私は……どうすれば……》

司令部のはやても打開策が見つからず、震えている。

この状況では無理もない。

そんな状況下で、なのはは冷静に、言葉を紡ぐ。

「闘争が人類の発展を促す……確かにその通りだね」

「なのは?!」

「なのはさん！？なんで！！」
《ほう……さすがは『エルケー二ヒ』》

誰もが信じられないという目で見ると。

一番に否定しそうな人物だと全員思っていたからだろうか。

「けど、戦いによって生まれるものと、失われるもの。それは等価値じゃない」

十年前を思い出す。全ての始まりの時を。

あの時、相棒と出会い、親友と出会い、魔法と出会った。

あの時、親友は母親を失った。

彼女は新たな家族を得たものの、肉親を全て失った。

十年前を思い出す。新たな出会いの時を。

あの時、新しい友人と出会い、新たな力と出会った。

あの時、友人は家族を失った。

彼女は新たな家族を得たものの、深い傷を残した。

八年前を思い出す。全てを失いかけたあの時を。

夢も、理想も、命すら失うところだった。

いや、実際に何かを失ったのだと思う。

そして、それを代償に何かを得ている。それが今の高町なのはだ。

人は戦うたびに、何か大事なものを失い、それとは別な何かを手に入れる。

そして、失ったものは、もう二度と戻らない。

「その意味を理解せず、結果だけを見る人に……戦いを語る資格なんて、無いんだ!!」

全員がはっと目を見開いた。

戦意を取り戻したらしい。

そして。

《……その通りだ》

そんな言葉が、なのはの耳に届いた。

それが誰から発せられたのかは、分からなかった。

ただ、何故か、胸の中が安堵でいっぱいになった。

12:10 機動六課 陸戦用シミュレーター

アクセルはヴィヴィオを抱えていた両腕を振り上げた。

つまりは少女の身体を放り投げたのだ。

重力に従って落ちる矮躯を、全員が呆然としたまま見つめていた。

そして、その身体が地面に触れた瞬間。

パリン

ガラスが割れたような音をたてて、ヴィヴィオの身体が砕け散った。全員の思考が止まった。

今だ！

その隙を逃すアクセルではない。

一気に距離を詰める。まずは眼前のランドグリーズ。

「せえいつ！！」

がら空きのボディに膝を喰らわせる。例え重装甲の機体だろうと、呆然としていた状況では防御することもかなわず易々と吹き飛んだ。ランドグリーズが倒れるよりも早く、アクセルは両腕を左右に向ける。回転に乗った腕は大気を裂き、唸りを上げている。

「玄武剛弾！撃ち抜けい！！」

狙いは決まっている。広範囲AMFを張っているガジェット？型改四体。

彼らは味方識別を出すアクセルからの攻撃という矛盾に対処できぬまま、迫り来る玄武剛弾にその中枢を貫かれる。

輪を描いて両腕がソウルゲインのもとへ戻ると同時に、全ての？型改が爆散した。

その間、僅か十秒。

あまりの怒涛の展開に、誰も動けなかった。

「……裏切ったのか！！アクセル！！」
「……どうしてなの……アクセル……」

初めに動きを見せたのは二人。

クロノスが怒気を含んだ声で叫び、アリシアが悲しみの声で嘆く。
ツヴァイザーゲインが大剣を抜き放つ。その隣で、アンジュルグは
頂垂れていた。

アクセルは静かに答える。

「闘争を非日常とする世界。それもいいのではないかと、思っただけだ」

「そんな抽象的なもののために、全てを裏切ろうというのですか」

今度はW17からの問いかけだった。

ヴァイサーガが鞘を投げ捨て、五大剣を抜く。
スレイドゲルミルが無言で斬艦刀を形成する。

「主義も主張も、ましてや自我も持たない人形には分かるまい」

言いながら構える。

この一連の中で、全機の攻撃の対象はソウルゲインになった。

少しきつい状況だが、思惑通りだ。

AMFが薄れつつあるとはいえ、まだ彼女たちはろくに戦闘が出来ないのだから。

「……無駄な抵抗は止めたらどうですか？この戦力差、見て分からない隊長ではないでしょう」

「分かってはいるさ」

「なら……」

「だが、諦めるわけにはいかない。だからこそ、俺は俺でいられる

んだ」

ここで諦めては、全てが泡と消える。
ヴィヴィオも失うことになる。

父親として、彼女を護るためにも、ここは引けない。

「意味が分かりませんね。ただ分かるのは隊長の

「それが解らねえから、お前は人形なのさ」

「ッ!!」

その言葉が皮切りとなって戦闘が始まった。

ヴァイサーガがクナイを投げる。烈火刃だ。

ステップを踏んでそれを避け、遠隔起動でシミュレーターを発動させる。

瞬時に廃墟郡が形成される。これで少しはましになった。

ソウルゲインが発する信号を送らなければ、起動できないシミュレーター。

入力しておいた、ヴィヴィオの幻影。

現在、持ちうる手札は出し切った。

分の悪い賭けは承知済み。

あとは勝負をかけるのみ。

「さあ、ショウダウンだ!」

第18話 「楽園からの追放者」(後書き)

命をチップにアクセルは賭けに出た。

負ければ全てを失い、勝って何をもらえるか分からない賭け。

圧倒的に分の悪い賭け。

しかし、彼は最高の切り札を残していた。

次回、「あなたがいて、私がいる」

お楽しみに！

第19話 「あなたがいて、私がいる（前編）」（前書き）

お待たせしました！

そして、前編とかですいません！！

やっぱりこのタイトルだったら、っていうのがやれませんでしたので、前後編に分けさせていただきました（汗

理由は後編にて。

第19話 「あなたがいて、私がいる（前編）」

拳を振り抜き、ランドグリーズの胸部装甲を打つ。

ソウルゲインが放った近距離からの一撃は容易く重量級の機体を吹き飛ばす。

その衝撃は搭乗者の意識すら刈り取り、沈黙させる。

「これで、六機！」

急いで大通りから裏路地へと走りこむ。吐き出された言葉は焦燥を含んでいた。

あれから十数分ほど経ったか。仕留めきれたのはMk-？四機にランドグリーズ二機。

手強い相手が四人もいるというのに、雑兵はまだ残っている。だが、そろそろ頃合いだ。それまでは保たせなければ。

アクセルは建造物を背にして、これからの策を練っていた。

「ッ?!」

瞬間、背筋が泡立つ。ソウルゲインの警報と同時に、全力でその場から離脱。

途端、もたれかかっていた建造物が斜めに切断された。

土埃を巻き上げながら、それなりの高さを誇っていたビルは横に立っていた別のビルをも巻き込み倒壊する。

確認しなくても分かる。これは奴の仕業だ。

「W14……ちっ、斬艦刀とはよく言ったものだ」

艦船すら両断可能な切断力を持たせた武装。

コストに見合うどころか、それ以上の性能を秘めた剣。敵に回した際の恐ろしさを改めて痛感していた。

「隙を見せましたね、隊長」

「何っ！」

だからこそ気が付かなかった。

背後から接近するヴァイサーガに。

全身を隠していた真紅のマントをひるがえす。

両腕からは同色の爪が三本ずつソウルゲインを切り裂かんと伸びている。

身体をひねり、流れるような斬撃を紙一重で避ける。

だが、無理な回避行動を取ったため、態勢が崩れた。

「ぬおおおおお！！」

それを逃すはずもなく。

斬艦刀を片手にスレードゲルミルが迫る。

眼前には爪を収め、居合の構えを取るヴァイサーガ。

回避は不可能。ならば。

刀を抜く寸前のヴァイサーガに接近。

その行動に動揺しつつも、五大剣を引き抜く。

鞘から完全に抜き放たれ、刀身がきらりと光を放つ。

アクセルから見てちょうど、真横一文字。

それを見たと同時に蹴り上げた。剣の腹をちょうど捉える。

思わぬ衝撃に方向をずらされた刀身は、ソウルゲインの頭上の空間を切り裂き。

甲高い金属音。

背後から振り下ろされていた斬艦刀と打ち合う。
一瞬の硬直の後、力の強いスレードゲルミルが五大剣を弾き、斬艦刀を振り切る。

シミュレーターで再現されたアスファルトの道路に長い亀裂が奔る。既にソウルゲインは離脱を終えている。

「当たってはやれんのでな……」

空中で態勢を立て直すヴァイサーガ、斬艦刀を構え直すスレードゲルミル。

両者と対峙しつつ、そうアクセルはつぶやいた。

「成程。特殊処理班隊長の名は伊達ではないな」

「心変わりしたとはいえ、腕は落ちていないか……戦力低下はやむを得ない。アクセル隊長。お許しを」

「許せん。ヴァルフ・アズルならばまだしも、自我を持たない人形に俺が倒せると思うのか。ラミア・ラヴレス」

アクセルの言葉に思うところがあつたのか、ヴァルフをちらと見る。当の本人はその視線を気にせず、正面を見据えている。しばらく思考した後、ラミアは眼前の敵にその眼を向ける。

「命令をこなさないWシリーズは欠陥品。それが私の存在意義です……私は与えられた任務に疑問など持たない」

「そうか。俺は、俺の意思で戦う……人形如きに俺を止められるとは、思わんことだ！」

拳を突出し、青龍鱗を放つ。幾多もの光弾が放たれた先は二体の正面の大地。

当てる気など最初からない。煙幕と牽制の役目を果たせば充分だっ

た。

未だ晴れぬ土埃から表れたのは、螺旋を描いて進む紅の衝角。

ドリル・ブーストナツクル。その後ろには剣を腰ために構えたヴァイサーガ。

それを視界に入れてから、身を屈めて走る。

空を裂くドリルを頭上に感じつつ、迫る五大剣を肘のブレードで受け止める。

「何故、寝返つたのです！クロノス様の片腕と呼ばれ、闘争の世界を望んだ男が！」

「この世界に俺たちの居場所はなかった。それが解つただけさ」

こちらは片手に対し、あちらは両手持ちで対抗。

この辺りがパワータイプとスピードタイプとの違いと言つたところか。

とはいえ、低く屈んだこの体勢からでは無理に反撃に転じることも出来ない。

どうするか。考えるアクセル。

「ならば、その考えもろとも滅せよ！」

「！！！！」

彼らの耳に、怒気を孕んだ声が響いた。

声が聞こえた上空に視線を向ける。

そこから降り注ぐのは幾筋もの光の柱。

青龍鱗とはまた違った、しかし、よく似ている閃光が大地を抉りつつ二人に迫る。

身をひねりかわす。ラミアも同様だ。その間を、荒ぶる光の柱は通り抜けていく。

素早く体を起こし、この原因である、空に立つ阿修羅を睨む。

「クロノス、お前……」

「裏切り者が何を憤っている、アクセル。W17は他よりも少し出来がいいだけであって、人形は人形だ。替えなどいくらでも利く……」

嘲るように、クロノスは言った。ゆっくりと、見せつける様に大地に降り立つ。

それを視界に収めながら、アクセルは冷や汗を流す。まさか、味方ごと狙うとは予想だにしていなかった。

「……………」

「ちょっと、言いすぎだよ……この子の有能さは折り紙つき。知ってるでしょ」

ラムアが俯き、沈黙しているなか、飛翔してきたアリシアが反論する。

Wシリーズの中でも最高傑作と言わしめたラムア。

彼女の実力は誰もが知っている。それを使い捨てのモノのように扱うとは。

だが、クロノスは静かに言った。

「黙っていることだ、アリシア。今の私には冷静な判断が出来ない。その裏切り者に対しての感情故にな」

「……………」

静かだが、どこかどす黒い狂気を含んだ物言いだった。何か言いたそうではあったが、何も語らないアリシア。一瞥してから、クロノスは再びこちらを睨みつける。

「アクセル。貴様も、その機体も今失うには惜しい……考え直すなら、今の内だぞ」

「……言ったはずだ。俺たちのような者の居場所など、この世界にはない、とな」

「ならば、ソウルゲインだけでも回収させてもらう！」

ツヴァイザーゲインが腕を空へ掲げる。

すると、今まで隠れていたのか、残っていたゲシュペンストMk-
？やランドグリーズが一斉に姿を現した。

数は、六機と二機。全機が攻撃準備を終えている。

どうやら、ヴァルフとラミアとの戦闘の間集結していたようだ。

圧倒的に有利な状況になったためか、クロノスが嘲笑しながら問いかけてくる。

「だから言ったのだ。降^{くだ}るなら今の内だと……さて、どうする、アクセル」

最後通告だとばかりの発言だ。もう勝った気でいるらしい。

だがな、クロノス。誰かが言っていた。

獲物を前に舌なめずりは三流のやることだ、と。

「……断る」

「……攻撃、開始」

瞬間、スプリットミサイルやマトリクスミサイルが放たれる。

リニアミサイル・ランチャーやファランクスミサイルの弾頭も混じっていた。

まさに誘導弾のカーテン。『エルケーニヒ』の弾幕を思い起こさせる光景だった。

しかし、アクセルは動かない。

動けないのではない。動かないのだ。それは何故か。

「……今だ、ティアナ！」

動かなくとも、この程度の対処はできるからだ。

叫ぶ言葉より早いか、眩い閃光が横一列に並んだ誘導弾を薙ぎ払った。

全弾に当てなくてもいいのだ。一部に当たれば、爆発が新たな爆発を生む。

あれだけあつた誘導弾は、跡形も無くなっていた。その光景から、いち早く回復したのは誰だったか。

「全武装、展開!!」

《Yes, sir. All weapons free》

おそらく、その声を聴くまで、誰も動けなかつたはずだ。

気付いたものが、上空を見る。

そこには、悠然と構える一機の機動兵器。

右手にハルバートランチャー、左手にガンレイピアを携え、胸部ハッチは開放。

そして、ソードブレイカーのロックも解除済み。

全ての武装を展開し終えた、アシュセイヴァーがそこにいた。

「全部、持っていけえ!!」

《Sword Breaker Phantom Shift》

撃ちだされた弾丸、誘導弾、飛行砲台。

その全ての数が、二倍、三倍と増える。

ソードブレイカー・ファントムシフト。『向こう側』のティアナが得意としていた戦法。

ありとあらゆる弾丸を幻影で増やし、虚を織り交せて攪乱。隠された実弾で確実に相手を屠る。

Wシリーズ駆る全機が撃ち落とそうと躍起になる。

だが、数は通常の三倍。撃ち落とせるはずもなく。

全ての武装を無力化された上で、脚部を、スラスターを撃ち抜かれ行動を停止する。

これで、残っているのは空中に逃げおおせた、ツヴァイザーゲインを含めた四機だけだ。

撃ち終えたアッシュセイヴァーがソウルゲインの隣に立つ。

ソードブレイカーを全基回収して、ティアナは言い放った。

「これが、私の切り札です！」

〈第19話 「あなたがいて、私がいる（前編）」〉

時は少し遡る。

仮想都市で繰り広げられる戦い。

あまりにもアクセルにとって不利な戦い。

それを見つめる複数の視線。機動六課のメンバーたち。

彼女たちの表情は硬く、ある者は手が白くなるほど強く握りしめ、

ある者は唇を噛みしめ俯いている。

だが、彼女たちは見つめることしかできない。

未だ大気中のAMF濃度は高く、飛行もまともに行える状況ではない。

そんな状態で、ただでさえ手強いシャドウミラーに立ち向かってどうなるものか。

唯一、戦闘機人であるナカジマ姉妹のみはその能力を発揮することで、何の問題もなく戦闘できるが、動くことはない。戦闘機人であることがばれることの恐怖と、敵か味方が分からないアクセルへの葛藤が身体を硬直させていた。そして、後者に関してはその場にいる全員に言えることであった。

「……………」

そんな中、今まで沈黙を保ってきたのはが手すりに手を掛ける。今にも飛び出しかねない様子。それを見てシグナムが肩を掴む。

「待て、高町。どうするつもりだ？」

「決まっています。アクセルさんを助けに……………」

「行ってどうなる？状況が分からんお前でもあるまい……………これだけの濃度。動くだけで息がつかまる。それはお前も同じはずだ、高町」

全く持つてその通りだった。だが、なのはは手すりを掴む力を緩めない。

その間にも爆音が轟く。そう簡単にやられはしないと思っけていても、視線は彼を追ってしまう。

「冷静になれ。少なくとも、あと数分は戦闘など無理だ」

「分かっています！それでも、私は……………」

「高町。察してくれ」

私も、彼を救いに行きたいのだ、とシグナムはポツリと嘆いた。はっとして、視線を彼女に向ける。そうだ、彼女は今日退院したばかり。まともに戦闘できる身体でもない。

だというのに、自分は子供みたいに……………」

「……やはり、みなさんはお優しいですね」

安堵を含んだ声が大気を伝って届く。

全員が振り向いた先、橙色の髪の毛を側頭部で結った女性がいた。ティアナ・ランスターである。

「ティア？今まで、どこに……」

「六課周辺に待機していたゲシュペンストの掃討。幻術を使いながらだったから手間取ったけど。あと残っているのは、あのシミュレーターにいる機体だけ」

さらりと述べた言葉。その中におかしな点があることに気づいたのは隊長陣の数名。

何故、待機していた場所が分かる？

何故、残っている機体があれただと断定できる？

代表して尋ねたのはフェイトだった。

知らず知らず問い詰めるような口調になっていたことには気付いていない。

「ティアナ……もしかして、今日の襲撃のことを……？」

「はい。アクセルさんから聞かされていました」

「ッ！！お前え！！」

「待って！ヴィータちゃん！……どうして、黙っていたの？」

ヴィータが飛び出しそうになる。それを止めたのはシャマルだ。今にも殴りかかりそうな小柄な彼女を抑えつつ、静かに尋ねた。ティアナは静かに返す。

「彼の策を成功させるためです。不確定要素は少なくしたいですか

ら

「策だあ?! あんなもん、ただの自殺行為じゃねえか!」

じたばたとヴィータが暴れる。シャマルがなだめつつも、彼女は叫ぶ。

その言葉を聞いてティアナがあからさまに眉間にしわを寄せて睨んだ。

視線に込められた強い感情を受けて、さすがのヴィータも少し怯み、手足をばたつかせるのを止めた。

「……そうです。あれが彼の策です。一步間違えば破滅の大博打。勝っても負けても大差はない、分の悪い賭け」

でも、とティアナは深く息を吸って、次の言葉を口に出す。苦しげで、それでも強い意志が込められた言葉を。

「それが、彼の望んだ道です! 葛藤の中で見つけた、最善の策! その悩みを知らない人に、文句なんて言っただけはほしくはない!」

肩で息をしつつ叫ぶ。アクセルにさえ届くのではないかと思うほどの声量だった。

その必死さに、誰もが動けずにいた。長い付き合いのスバルですら、呆然としていた。

静かになった屋上。ティアナは息を整え、姿勢を正す。

「私も、今からあの場へ行きます。みなさんはAMFが薄くなつてから、行動を決めてください」

《ちよつと待ちいや、ティアナ。勝手な行動は許さへんで》

アシユセイヴァーの待機形態であるカードを構えたティアナを引き

止める声。

機動六課部隊長、八神はやてだ。普段の行動からは想像できないほどの威厳を、今は備えていた。

そして、その威厳によるプレッシャーをティアナに向けている。これ以上の命令違反には処罰を下す。瞳がそう告げていた。

「……はやて“二佐”。罰を下すのなら勝手にどうぞ。私は行き
ます」

《なん……やて……》

「おいこら、ティアナ！お前、上官に、部隊長に向かって、その態度はどういうことだ！！」

再び、ヴィータが吠える。ティアナはその剣幕にも動じず、静かに彼女を、その場にいる全ての人を見据える。

その視線は、以前のティアナにはないものと、スバルはのちに語った。

「ヴィータ“三尉”。私はもう経歴にこだわる必要は、なくなっ
たんです」

「は……？なに、言っ……」

ぼかん、という表現がぴったりだった。他の面々も同様。

そして、ティアナは驚きの言葉を紡ぐ。

「今朝方、管理局本局の人事部へ退職願を届けました。何事もなければ今頃、受理されている頃でしょう」

絶句。誰もが言葉を失った。

スバルなどは、混乱してパニックに陥っているようにも見えた。

その様子に、申し訳なさそうな顔をするティアナ。

それでも更に言葉を紡いだ。

「今の私は、F I社のテストパイロット、ティアナ・ランスター。ただそれだけですよ」

そして、F I社の試作機であるアシユセイヴァーを展開。

高速で飛び立つその機体を、彼女らは目で追うことしかできなかった。

そして、時は現在へ。

「……フロントムシフト。まさか『こちら側』で、しかも我々に向けられたものを、目にする事になるうとはな」

「搭乗者はティアナ・ランスター。『こちら側』で機体を手入れば、思いつくのは必然、ということか」

クロノスとラミアがそれぞれの感想を述べている。

それと対峙しつつ、アクセルとティアナは状況を確認する。

《周囲は片付きました。ただ、弾薬は尽きかけで、エネルギーも厳しいです》

《こちらもだ。だが、それはあっちも同様だ。ツヴァイだけは、それほど消費していないが、これは撤退する時のことを考えてのことだ》

転移には膨大なエネルギーを必要とする。

戦闘用に使うエネルギーを使い果たしてしまえば、安全な転移は不

可能だ。

クロノスはそれほど博打好きではない、むしろ好まない。ならば、隙はあるはずだ。

「どうだ、クロノス。圧倒的有利な状況から転落した気分は……」
『あちら側』を思い出したか？」

「！」

「作戦は失敗したも同然だろう。態勢を立て直すべきではないか？」

安い挑発だ、とアクセルは思った。

これに乗るクロノスではない。普段の彼ならば。

しかし、今の彼は冷静な判断が出来ない状態にある。

それは彼自身が明言したことだった。

「……私を見逃そうというのか？殺さずに撤退させよう？甘いな、アクセル。そこまで甘くなってしまったのか」

だが、そう上手くいくわけがなかった。

どうやら逆に冷静になることを促してしまったようだ。

「その甘さでは世界は救えない……人の意思がバランスを崩すのだ。あの女を思い出せ。我々の宿敵を」

『エルケーニヒ』。奴はたった一人で最高評議会を掌握した。文字通り、全てを手に入れたのだ。あの細腕で。

「だが、人の意思が人を、世界を救い出すのもまた事実だ。俺は己の意思で世界に干渉することを、その意味を知ったのさ、これがな」

高町なのは。『こちら側』の彼女は『エルケーニヒ』とは違った。

優しく、強く、そして脆い。にも関わらず人を救う意志は固い。それは、隣に立つティアナにも言える事だった。こんな馬鹿な男が考えた無謀な策に着いてきてくれた彼女。少し生真面目な相棒をアクセルは誇りに思っている。

「ならば、貴様はこの世界をどうする。戦いを終わらせ、平和をもたらすつもりだとても？　平和は何も生み出さない。ただ世界を腐敗させていくのみ。そして、闘争を忘れた者は、平和を維持するために犠牲になった者がどれだけいたのかも忘れる……それを知らぬ貴様でもないはずだ！」

クロノスの叫びが引き金となったか。

斬艦刀を振りかぶりスレードゲルミルが、五大剣を構えてヴァイサーガが迫る。

「やはり分かっていないな、クロノス……いや、クロノ・ハラオウン」

金属音が響く。

だが、ソウルゲインにもアシユセイヴァーにも衝撃は来ていない。それもそのはずだった。

「馬鹿な……姉上！」

「どうしたの、ヴァルフ。姉さんが恋しかった？」

斬艦刀を受け止めたのは斬艦刀。

新たな腕と回復した脚を持った、アリサ・ローウェル。

「ぐっ、こいつは……！」

「……………」

五大剣を受け止めたのはスザク・ブレード。
無言を貫く機兵、アークゲイン。

「一応、初期型のWシリーズだから、お兄さんって呼んでもいいんじゃない？」

「……やっぱり、貴女には敵わないわ。テスラ研のお姫様」

的外れなことを言ったのはスズカ・ツキムラ。

白衣のまま何の対策もせず、戦場に立つ彼女を見て、アリシアはぽつりとつぶやいた。

どうやら間に合ってくれたらしい。

大急ぎで調整をしてもらったスズカに感謝しつつ、アクセルはクロノスに言い放つ。

「戦いに他人を巻き込み、殺すことでしか己の存在を見いだせない。その後は何が残る？」

「ッ！」

いや、何も残らない。それが解答だ。

だが、それでも納得しないのだろう。

昔からこれと決めたら挺でも動かない。

その凝り固まった思考の行く末が、闘争を日常とする世界。

「生まれるものと失われるもの。それは等価値ではない
はが言っただははずだ」

なの

クロノ。悪いが、俺は闘争が日常である世界を望まない。

俺が望むのは

「……アクセル。まさか私と貴様が違つ道を行くことになるとはな。残念だ」

これ以上、話すことはないという意志を感じ取ったのか、クロノスはそうつぶやいた。

言葉の端々から憎悪と悲哀が混じっているのが分かった。

「ああ、これが……俺の戦争だ」

戦争を終わらせるための戦争。

それを俺は、目指す。

これが、俺が出した結論だ。

「限界か。流れも悪い……引き上げるぞ」

クロノスがこちらに背を向ける。

AMFの濃度も随分と低くなった。

屋上に目をやれば、こちらへ向かう影が複数あることに気づいた。

「うん……」

アリシアは名残惜しそうにこちらを一度見て、クロノスの隣に並んだ。

「隊長、またお会いしましょう」

ラミアもアークゲインを押しやり、飛び立った。

「俺は裏切り者だ……隊長とは呼ぶな」

「了解」

そして、こちらを振り返ることなくアリシアの隣に並ぶ。

「姉上。これで我らは敵同士。次、死合う時には容赦はせん」
「上等よ。悪いけど、斬艦刀対決なら、負けられないからね」

ヴァルフも飛び立つ。いかにも彼女らしい言葉を残して。
四人が揃った。空間が歪み、フィールドが形成される。
敢えて深追いすることもしなかった。下手に手を出しても、転移の
余波が来てはまずい。

「……全Wシリーズに告ぐ。コードATA発動」
「………全員上空へ退避だ！」

アリシアの言葉を聞いて、アクセルは叫んだ。
まさか、この瞬間に発動するとは。

言葉の真剣さを感じ取った全員が飛翔する。生身のスズカはアリサ
によって抱きかかえられていた。
直後、ゲシュペンストやランドグリーズが爆発、四散する。
いくつもの閃光が生まれ、装甲をじりじりと焼いた。

「……終わったか」

爆発が収まったのを見計り、眼下を確認。
衝撃で陸戦用シミュレーターは使い物にならない程、穴だらけとな
っていた。

すでに、ツヴァイらの影は無い。

「……ヴァルフ、ラミア、クロノス。そして、アリシア。決着を、
つけねばな」

時刻は丁度、12時30分。
シャドウミラーによる電撃作戦は、彼らの敗退という結果に終わった。

第19話 「あなたがいて、私がいる（前編）」（後書き）

後編に続く。

第20話 「あなたがいて、私がいる（後編）」（前書き）

どうも、お久しぶりです、SAIHALです。

何とか10月中に投稿することが出来たことに、ほっと安心しております。

前回の投稿以降、マイコプラズマ肺炎で寝込んでおりました……
熱が下がってもしばらくは咳がひどく、とてもまとまな文章がかかる状況ではありませんでした。

気が付けば、もう月末orz

と、近況はここまでにして。

今回はアクセルさんによる説明。

そのため、会話文中心です。

原作っぽく、そしてオリジナルを出しつつ、といった感じになっております。

それでは、どうぞ。

第20話 「あなたがいて、私がいる（後編）」

「さて……話してくれるんか？」

はやてが手をあごの下で組み、アクセルに問い掛ける。

あれから二時間が経っている。六課のメンバーは食堂へと集まっていた。

全員の視線の先には同じテーブルに付いている四人。

順はアリサ、スズカ、アクセル、ティアナ。

この場においても意味がないアークゲインはWシリーズのコードAT A アッシュ・トウ・アッシュによって破壊された周辺の瓦礫撤去に勤しんでいる。

ちなみに事件の際にティアナによって避難させられていたヴィヴィオは、寮母のアイナによって寝かしつけられていた。

彼女が眠ったのを確認してから、俺たちは移動を始め……
そして、今に至る。

「構わない。何から話そうか」

「……シャドウミラーが何か、でいいんじゃないかな。アクセルさんについてもそれで分かるし」

なのはが議題を決める。それからアクセルに視線を向けた。

「……時空管理局特別任務実行部隊」

やや間を置いて、アクセルがつぶやく。

それを聞いた全員が首を傾げた。

「聞いたことあらへんな」

「私もないよ。名前からして特殊部隊だろうけど……」

はやてとフェイトが否定を口に出す。

今、この中で最も多くの情報を保持しているはずの二人すら知らない部隊。

「……『こちら側』の管理局にはない。だが、俺たちのいた管理局には存在していた、これがな」

その時、なのはが立ち上がる。アクセルを除いた全員の視線が彼女に向けられる。

「何か、飲み物を持ってくるよ……長くなりそうだしね」

「あ、私も手伝います」

スバルが立ち上がり、なのはが笑顔を見せる。

立ち去る彼女のうしろ姿にアクセルは心の中で感謝した。

これからする話は、そう簡単に語れるものではない。時間はあればあるほど助かった。

〈第20話 「あなたがいて、私がいる（後編）」〉

「……新暦71年。次元世界を揺るがす事件が発生する ミッ
ドチルダと、ある管理世界間での戦争だ」

その発言に息を呑んだ音が聞こえた。無理もない。

戦争。『こちら側』では無縁といっても過言ではない単語なのだから。

「いま起こっているような、事件じゃなくて？」

「ああ。一時期は管理局も瓦解しかかった、これがな」

そう、広大な次元世界を監視している管理局という巨大組織すら揺らがした事実。

少数精鋭とは、まさに奴らのことを指すに違いない。

そして、勝つためには何でもやる行動力も、脅威の一つだった。

新暦71年におけるミッド北部臨海第八空港での自爆テロ、同年の地上本部襲撃などがその最たるものだ。

「その時、時空管理局は持てる力を集結して、その世界の軍隊を打ち倒し……平和を手にした。『こちら側』では信じられないかもしれないが、この時、本局と地上本部は連携し、聖王教会騎士団も全面的な協力を惜しまなかった」

「マジか！確かに、信じられねえな」

「レジアス中將がまず納得しないだろうね」

ヴィータとフェイトがそれに反応する。

「その時の地上本部代表はオーリス・ゲイズ“少将”」

「オーリスって……レジアス中將のご息女で、補佐官の？」

「レジアス中將は戦争の初期段階に発生した、地上本部襲撃で命を落としている。混乱する現場はその補佐を務めていたオーリス少将

　　当時は三佐だったか。ともかく、彼女が指揮を執ることでの応の收拾がついた。その後、中將の娘であるということ、元々人望もあつたということに加え、特例の昇進をした彼女が地上本部を率いた……だが、彼女も戦争終盤に殉職している」

「ちょ、ちょっと待って下さい！アクセルさんの話だと別世界ってわりには……知っている名前が随分出てきてませんか？」

次々と情報が与えられ困惑する六課メンバー。

そんな中、ギンガがいい質問を投げかけてきた。

確かにそれは全員が疑問に思うことだろう。

ならば、質問者の彼女を例に挙げようか。

「……ギンガ・ナカジマ三等陸尉は、戦後である72年にシャドウミラーへと入隊を果たし、二等陸尉へ昇進。ギンガ隊隊長を務めた……ちなみに、俺が入隊を推薦した」

「なっ！」

見れば見るほど、似ていないようで似ている彼女を見て、薄く微笑むアクセル。

『向こう側』の彼女は冷静でいよとした。最後の最後まで。

ただ、アリサらと会話している時の表情は『こちら側』の彼女に近いものだったようにも思う。

そんな事を考えていると、はやてがポツリとつぶやいた。

「パラレルワールド……そうやな？」

「その通りだ」

パラレルワールド。主に平行世界、並行世界などと定義される。

今流れている時間軸と並行して進む、少し色の違う時間軸。

『こちら側』と『向こう側』と呼ぶのがシャドウミラーでは一般的だった。

そう説明していると、スバルがおずおずと手を挙げつつこう言った。

「あの、よく分からなかったです……」

……確か座学の成績も良いと、ティアナから聞いていたのだがな。スバル？

隣では件の彼女が額を押さえて、この馬鹿とため息をついていた。見かねたなのはが冷や汗をかきながら、手助けをする。

「……そうだね。例えば、私がジュエルシードと出会わなかったら、レイジングハートをユーノ君が持っていなかったら……たぶん、私はここにはいない。世界は常に分岐の可能性を持っていて、私たちがいるこの世界とは別の並行する世界……『もしも』の世界のことをパラレルワールドって呼ぶんだよ……ですよね、アクセルさん？」
「そう。その『もしも』の世界の内の一つから俺たちは来た。その証拠にギンガ・ナカジマは若くして自らの隊を持ち……八神はやては殉職している」

空気が凍った。全員の視線がはやてへと向けられる。当の本人は目を固く閉じて、何かを考えているようだ。アクセルはこの空気を払拭するため、口を動かす。

「他にも例を挙げるならば、ティアナ・ランスターは新暦70年、執務官試験に合格。戦前の71年にシャドウミラーへ配属された。所属は特殊処理班……俺の副官だった」

「えっ?!」

それはティアナから漏れた言葉だった。それもそのはず。

彼女には自分がシャドウミラーの幹部であったことの部分しか告げていない。

『向こう側』のことなどほとんど話してはいなかった。

……余計なことを考えさせないために。

今思えば、説明と言える説明をしなかった俺をよく信じてくれたも

のだと思う。

「もっとも年齢は俺と変わらないくらいで、兄もいなかったはずだ。名前は同じでも、全くの別人と言っていい。性格は瓜二つだがな」

そう言つて、軽く笑う。心配はさせないように。

スズカとアリサが、少し視線を落としているのが気にはなつたが、だが、俺は話し続けなければならない。

苦々しい過去を。敗北にまみれた過去を。

「そして『パーソナルトルーパー』。この存在の有無も、パラレルワールドの証拠だ」

「パーソナルトルーパー、ですか？」

聞きなれない単語にエリオが聞き返す。

隣ではキャラコがすでに頭を抱え、知恵熱でも出しているかのようだった。

「……ゲシユペンスト、のこと？」

「その通りだよ。ただし、貴女たちが言うところのゲシユペンストの正式名称は量産型ゲシユペンストMk-?。形式番号RPT-007。マオ・インダストリー社が作り出した最初のパーソナルトルーパー、ゲシユペンスト。その量産化を視野に入れた試作機、ゲシユペンストMk-?の正式採用機。汎用性、コスト面に優れ、各パーツも手を加えやすく、後のPTに多大な影響を与えた傑作量産機とまで言われているの」

ずばり言い当てたマーチに、今まで口を閉ざしていたスズカがすらすらと答える。

こういった方面は彼女の方が説明上手だ。テスラ研主任技術者の彼

女の方が。

「そして、何よりもP.Tの利点は非魔導師でも使用可能という点。この画期的な新デバイスに追随するように、複数の企業が独自のP.Tを開発し始めたんだよ。フレモント・インダストリー社もその一つ」

「!……ようやく分かった。シャドウミラーが使用していたアシユセイヴァー。あれは、あちらの世界から持ち込んだもの」

「そうだね。ちなみに『こちら側』に来てから量産型のアシユセイヴァーも運用する予定だったけど、まだ温存しているみたいだね」

『向こう側』のF.I社はそれなりに大きな企業だった。

シャドウミラーで運用している小型戦闘機、A-12 ソルプレッサもF.I社製であり、その他にも何機か試作機が存在している。

少なくともアシユセイヴァーしか試作機がなく、それ以外に売り文句がない中小企業ではなかった。

「……あの戦争が戦争として認識されるか、されないか。そんな曖昧な期間の中で、F.I社のアサルト・ドラグーン、Z&R社のヴァルキュリアシリーズ、テスト・ライヒ研究所の特機など多種多様な機体が生み出された。その中でも数多く生産され、戦時にも管理局の主力と言えたのがゲシュペンストMk-?だ」

特に激戦区であったミッドチルダ防衛のため、地上本部に多くの機体が配備された。

首都防衛隊はもちろん、比較的交戦機会が多い101〜109陸士部隊が主だった。

「数多く生産って……どれくらい作られたんですか?」

「およそ3000機」

「なっ！……局員の大多数が使用してたっつてことかよ」

「……片や資金不足でお蔵入り、片や千を超える量産機なんて、世界が違っただけで随分違っよね」

ウィータが素直に驚き、なのはが苦笑いをする。他のメンバーも似たり寄ったりだ。

ゲシュペンストの脅威。それを身を以て知っているのだから当然の反応と言えるだろう。

「と、例えを挙げればきりが無いが、俺がいた世界とこの世界では多くの事柄が異なっている。そのことは理解してくれたと思う」

「じゃあ、最大の疑問だけど……シャドウミラーがこちらに来た理由、それと方法は？」

律儀に片手を挙げて、フエイトが問い掛ける。

反応を見る限り、『向こう側』のはやての死を告げた時よりはましな空気になったようだ。別の意味では張りつめているが。

はやてもその瞼を開けて、こちらを見つめている。

「話を元に戻そうか。戦争の後、しばらくは時空管理局も陸海空一丸となって活動し、復興のために尽力する平穏な時が訪れていた。だが……」

「協力も平和も、長くは続かなかった……違うか？」

「惜しいな、シグナム二尉。結果的にはそうだったが、流れが違う」

「どういう意味？」

「ゆるやかな腐敗さ。戦争のない、平和な世界を作るために努力しましょう。その言葉を隠れみに管理局、いや、本局は少しずつ腐

敗していった……今思えば歪んでいったというのが正しい表現かもしれない」

「そうだ。腐敗、という表現は正しくない。

怠惰で傲慢……腐敗にはそう言った言葉が付いて回る。

ならば、積極性に富んだあれは歪曲なのだろう。」

「最初に始まったのが本局による、戦争を仕掛けた管理世界への徹底した管理だ。軍隊は解体され、当時の政府は総入れ替え。そして、戦争の扇動者はおるか協力者も死罪となった、老若男女問わずだ」

「し、死罪って……管理局の最高刑罰は終身刑で……」

「アクセルが言ったでしょ？歪んでいった、って……戦後に終身刑なんて判決が下されたのは誰一人として、いないわ」

アリサが厳しく言い放った。言われたフェイトは項垂れる。だが、それが真実であり、俺たちにとっての事実だった。

「当時、死刑執行は三日三晩行われた。形だけの裁判を行った後、早ければ数十分で死刑執行。覚えていないが、何百人と行われたはずだ……それが始まりとなって、歪んだ管理体制は次元世界全域に渡るようになる」

しんと静まり返る室内。

大多数が顔を青ざめているのは仕方のないことだ。

よくよく考えてみれば、彼女らはまだ十代の女子供なのだ。

「新暦73年から統制は更に顕著になった。武力による管理世界弾圧。高官による管理外世界統治 “静寂なる世界のために” という文句を掲げて、欲望をむきだしにした獣のように、逆らう者には冷徹な刃のように、次元世界を弾圧・統治していった」

だが、アクセルは舌を休ませることなく、淡々と述べていく。感情を込めず、事実だけを。

「クロノ・ハラオウン……いや、時空管理局特別任務実行部隊、シヤドウミラー隊長、クロノス・ハーヴェイ提督はそれを嘆いた。いつだって世界はこんなはずじゃなかった、と言って」

「それで、行きついた先が……絶えず争っている世界？」

「そう。戦争の結果は、決して出してはならない。平和という名の腐敗が待つのみ。闘争が日常である世界なら、それは永遠に起こらない。それどころではないわけだからな」

「そんなん……理論上のものに過ぎへんやろ」

「理論上というよりは確率の問題だな……闘争を日常とする世界であれば、双方が互いに勝利するための努力を惜しまない。一方的殺戮（オンサイドケ）が起こる可能性は低い……奴の持論だ」

奴は『向こう側』にいた頃、度々語っていた。

昔の思いなど覚えてもいないだろう。

……奴の悲哀を考えれば、分からんでもないが。

「その考えは、間違っではないかもしれないかも。だが、正しくもない」

「なんでそれを『こちら側』で実証しようとするの？……少し無責任な言い方かもしれないけど、『向こう側』でやってほしい……そう、思うよ」

あまりにも暴論としか思えない話に、シグナムはどちらとも取れない発言をする。

フェイトは単純な疑問と、そして、本心とを漏らした。

シグナムにはあえて返すまい。彼女には彼女なりの考えがあったの

ことだ。

だから、フェイトの問いに答えるため、話を先に進めることにする。

「……彼は当時の地上本部司令官と交渉し、クーデターを画策した。主要な研究施設や企業本社の占拠。次元航行艦隊へのクラッキング。当初は順調に見えた。だが、少しばかり急ぎすぎたんだろうな……シヤドウミラーを中心としたクーデター部隊はある部隊に敗れた。それが、『こちら側』に来た理由だ」

「その部隊……もしかして『向こう側』のクロノ君が言っていた……?」

なのはの問いに是と返す。

名前自体は奴が出していたか、とアクセルは思い出した。

「そつだ。敵味方関係なく周囲全てを巻き込む、その性質故に“災いをもたらすもの”の名がつけられた部隊。時空管理局特殊鎮圧部隊。通称『ディザスターズ』」

誰が付けたか、その通称は、後に全管理世界に知れ渡った。

曰く “ 奴らが通る後には、大地すら残らない”。

実態を知っていれば、大仰すぎるとも思えない文句。

最も知られているのが新暦74年、第3管理世界ヴァイゼン北西部での惨劇。

鉦山町アミア……いや、それはもはや正確ではない。

アミアという名前は地図上から消えた。町の象徴である鉦山ごと。

今は爆心地として知られ、誰も近づくことはない。

それを為した張本人こそが“彼女”だ。

「それを率いたのが、コードネーム『エルケーニヒ』……ナノハ・タカマチ特務空尉。『向こう側』の、なのは一尉だ」

「……！！」
「だから、なのはのことを『エルケーニヒ』って呼んでたのか……」
「古代ベルカ語で“魔王”か。余程、手酷くやられたのだろうな……」
「待て、敵味方関係なくと言ったか？」

理由に納得がいくとばかりに頷いていたシグナムが、はたと聞き返す。

先ほどからいいところを突いてくる。

「鋭いな、シグナム二尉……データでは互角のはずだった。だが、結果として、あの戦争を乗り越えた歴戦の陸士部隊、シャドウミラー実働部隊の半数が……奴らにとって味方であるはずの本局武装隊と共に殲滅された。そして、そのほとんどが『エルケーニヒ』と、突撃隊長であり『ベーオウルフ』と呼ばれた、スバル・ナカジマ陸曹長によるものだ」

「わ、私ですか！」

「違うわよ、スバル……あの寝ている方のスバルのことよ」

ギンガは自分で言っていて訳が分からないであろう説明を妹にしつつ、視線をこちらに向けて続きを促してくる。

「俺たちが転移を実行しようとする中で、奴らを説得しようとして『向こう側』の機動六課部隊長は立ち上がった……結果は先ほどの通りだが」

はやてに目を向けると、気にしなくていいとばかりに首を振る。ただし、表情は硬いままだった。

「あの部隊のやり口は実に凄惨だ。いくつもの部隊、何人もの人員がその餌食になった。八神はやてはもちろん……ギンガ・ナカジマ

も、テイアナ・ランスターも、な」

「そ、そんな……」

「……だから、何も言わなかったんですね……余計なこと考えさせないために」

すまなかった、と零すと彼女は顔を背けつつ、別に大丈夫ですとだけ応えた。

自分のことではないとはいえ、やはり動揺するだろう。

あの時伝えなくて、正解だった、とは言い難いが、これがベターだ。

「……俺は『こちら側』に転移する前に奴と、『エルケーニヒ』と決着を付けるため後詰にまわった。そして、奴と交戦。その時だ……奴が体を変異させたのは」

「へ、変異?!」

「言葉通りだ。破壊したデバイスから、バリアジャケットから、植物の蔓のような触手を伸ばし、体とデバイスを融合させた……あの人知を超えた力。今思えば、アインストの力だったのだろうな」

「植物の蔓……アインストのグラスみたいなもんか」

「まさしくその通りだ……あれはなのは一尉の皮を被った、別の何か……そう考えざるを得なかった」

なのはが俯く。少し言い方を考えるべきだったかとも思うが、この点に関してだけは譲れない。

何しろ、アクセルが倒すべき相手はまだ“彼女”なのだから……

アクセルは急いで、話の方向を元に戻すべく口を開く。

「少しそれだが、結局ディザスターズによって致命的な打撃を受けたシャドウミラーが取った最後の手段が、次元転移というわけだ」

「なら、その方法は？」

「それについては、私たちから話させてもらおうかな……ね、アリ

サちゃん？」

「そうは言ってもね。私が話すことなんてほとんどないでしょ。」

まあまあ、とアリサを宥めつつ、スズカは向き直る。

わざとらしく、コホンと咳払いをしてから言葉を紡ぐ。

「私は『向こう側』ではテスラ・ライヒ研究所の主任でね。新型特機の開発もしていたけど、システムXNっていう装置の研究にも従事していたの。」

「えつくす、えぬ？」

「空間・次元転移装置のことよ。アギユイエウス、それとリユケイオスという二基が存在しているわ。」

アリサの言葉に、反応がちらほらと見れた。

クロノスらが現れた時のことを思い出しているのだろう。それを感じつつ、スズカは説明を続ける。

「システムXNのオリジナルとも言えるアギユイエウスと、それを研究して作られたリユケイオス。前者はシステムも含めて転移させられるのに対し、後者は大型化されているから、システム自体は転移出来ないっていう欠点があるけど、一度に多くの物質を転移させることが出来るの。私たちが『こちら側』に来たのはリユケイオスによっただね。」

「なるほどなあ……転移を行ったシャドウミラーの規模はどれくらいなん？」

「F I社やZ & amp ; R社などの企業から奪取したA S K系やR G C系の新型機……テスラ・ライヒ研究所で入手したS R G系、E G系、V R系などの機体……そして、シャドウミラーが元々保有していたゲシユペンストM k - ? やソルプレッサ、フュルギアなども合わせて、約500機かな。」

「嘘っ！！そんなに?!」

スズカが述べた少しばかり桁の違う数に愕然とする六課の面々。事実、それだけの数が管理局に不満を覚えていたということにつながる。

「ああ、クロノスに賛同する次元航行部隊の局員や地上本部の陸士部隊も加わっていたからな……と言いたいところだが、実際こちらに来れた数は半分にも満たない」

「え、何故ですか？」

「空間転移ならまだしも、次元転移。次元航行とはわけが違う。まだまだ不安定で、不確定要素が多すぎるのさ。例えるなら濁流の中、蜘蛛の糸を辿るようなものだ……残りは時空のねじれに巻き込まれて消滅したか、あるいは別の次元に跳んだか……俺の記憶喪失もこの時の影響だ」

W17が先にこちらに到着したのもその影響だろう。

とはいえ、数年前に跳ぶとは……未来に現れる部隊も存在するかもしれない。

つくづく理解が及ばない装置だ。

「だったら、人もそんなにいないんじゃないか？」

「人間でない兵士ならゴマンという。Wシリーズと呼ばれる人造人間……心を持たず指令のみを忠実に実行する、人形だ」

“人形”。その言葉にフェイトとエリオ、スバルにギンガが顔色を変える。

だが、他の三人は別にしても、彼女だけには伝えなければならない。アクセルはフェイトに向き直る。

「フェイト。お前に話しておかなければならないことがある」

「な、何……？」

「『向こう側』にお前は存在しない……アリシア・テストロッサが生きているからだ」

「ッッ！？」

どうして知っているのか。そんな風な顔を向けてくる。

F計画自体は『向こう側』にもあった。立案者はプレシア・テストロッサ。

純粋な人造魔導士プロジェクトの一環として存在していたが、結局これも表沙汰になることはなかった。

「アリシアは幼いころから才能を発揮していた。非魔導師でも使用可能なデバイスの基礎理論を提唱したのはあいつが十代半ばの頃だ……加えて言えばマオ社のオブザーバーを務め、世界初のPT、ゲシユペンストの開発にも携わっている」

「！」

「そして……あいつがドクター・スカリエッティから受け取った戦闘機人のデータを、F計画と統合して生み出されたのが、Wシリーズだ」

「……スカリエッティ……そんな、ことが？」

「『向こう側』では歴史の表舞台に、ドクター・スカリエッティが登場することはなかった……考えようによっては、アリシアがその役をも担っているのかもしれない」

「そんな……そんなのって……」

アリシアにはフェイトのことを伝え、その逆はしないというのは不公平な気がした。

だからこそ伝えたのだが、項垂れる彼女を見ると、少し早計過ぎたかとも思えた。

ここは話の方向を変えることにした。

「先ほどの戦闘だが、西洋甲冑に似た奴がいただろう」

「ソードマンのことか？」

「ああ、正式名称はVR-02、ヴァイサーガ。あれを駆るのがWシリーズ最高傑作、W17だ」

いずれ決着を付けなければならぬ相手。その中の一人。任務の成功率だけで言えば、部隊一と言っても過言ではない彼女。

「あいつは別格だ。任務のためならば、どんなことでも確実にやってみせる……早くカタをつけてしまいたい、こいつがな」

彼女のことを話す際、あえて“人形”という単語を使うことを控えた。

どうも『こちら側』に来てから、Wシリーズの感情の発露に出会うことがしばしばある。

ヴァルフ・アズルがその典型的な例だが、ラミア・ラヴレスにも兆候が見られる。

先ほどの戦闘時。あれだけ苛立ちや怒りという感情にも似たものを見せたのは初めてだ。

……何が原因なのかはわからないが、そこにつけ入る隙があるように思う。

すると、難しい顔をしていたシグナムが口を開いた。

「……ヴァルフ・アズルもそのW17と同じ……？」

「そうだ。ナンバーはW14……『向こう側』のシグナム一等空尉の肉体をベースに、歴代のエースストライカーのパーソナルデータを基に作られたナンバーズだ」

「奴の得物、機体は？」

「『向こう側』で入手したSRG系の機体を『こちら側』で改造したものだと思う」

「武装について言うなら、私と同じ斬艦刀ね。詳しいデータはあとで送るわ」

アリスが合いの手を入れる。

自分の妹分の情報をばらすか……いや、それでもあちらが有利なのは間違いない。

「しっかし、なんであいつらはシグナムの改造コピーなんてもんを生み出したんだ？」

「『エルケーニヒ』の対抗手段とするためさ……ロールアウトは間に合わなかったが」

「『向こう側』の私は？」

「八神はやてと共に出撃。『エルケーニヒ』と交戦後、通信は途絶。それきりだ」

「……そうか」

「それで『向こう側』のクロノ君……クロノス・ハーヴェイの目的はアクセル君やアリスア・テストロツサさん、Wシリーズと共に『向こう側』で為せなかったことを『こちら側』で果たすこと、つちゆうわけか」

「最終的な目的ではない。シャドウミラー隊、いや、クロノスの真の目的は、この世界をテストケースとし、増強した軍事力を持って、元の世界に復讐することだ」

「テストケース……そのために、いろんなところに潜入して、情報を操作しているということですね？」

ギンガが答えを言い当てる。

捜査官としての知恵か。それとも元々の出来か。どちらとも取れる。

「そういうことだ。シャドウミラーは各組織に俺のようなスパイを送り込んでいる、これがな」

「そのスパイを通して、情報を入手しているってわけね」

「ああ。管理局のあちこち……おそらく、F I社にも入り込んでいる」

「……今日は驚かされてばかり……急いで情報漏洩がないか確認してみる」

マーチは足早に食堂から出て行った。

彼女にしてみれば、シャドウミラーについての情報よりも自社の安全の方が大事だろう。

残された者たちはそれぞれの想いを言の葉に乗せ始める。

「永遠の闘争、戦い続けることでバランスを取る世界、か……」

シグナムが遠い目をしてつぶやく。

「戦いの度に技術は進歩していった……それは間違っていないけど」

未だ俯くフェイト。それは自分が扱う愛機デバイスを指しているのか、人造じんぞう魔導士まどうしを指しているのか。

「戦いを望むものにとっては理想かもしれへん……でも、そうでない人にとっては……地獄、やな」

はやてが零した最後の言葉が、室内の全員にのしかかった。

「……私たちの世界を、勝手にさせるわけにはいきません！」

だが、スバルが立ち上がりそう言った。音を立てて椅子が倒れそうになる。

「そうだね。だから、何としても彼らを阻止して、彼らが持つシステムXNを破壊しなきゃならない」

その姿を見て笑顔になり、これからの指針を定めるのは。顔を下げている他の面々もそれに頷き返す。

「……その通りだ」

どうやら何も心配はいらなかったらしい。
この人間はそんなに脆くはない。
あとは、彼女らの判断に任せよう。

「はやて隊長。これで、俺の話は終わりだ……」

ついに語ってしまった過去。

それを聞いて、彼女らはどう思ったのだろうか。

「……はやて隊長。これからの彼らの処遇は？」

「……現状維持や。アクセル君、スズカさん、アリサさんは機動六課で監視下に置く。ティアナはF.I社からの出向者として正式に協力を要請します、以上」

笑顔で問うるのは、したり顔で返すはやて。

あまりにも場違いな光景に呆けてしまう。

「……それだけか？」

「素性と過去はどうあれ、今のお前の意思は我らと同じなのだろうか？ならば、問題はあるまい」

寝そべっていたザフィーラが立ち上がりながら言う。

一番堅物そうだった彼からそう言われるのは、喜ばしいことだった。

「ザフィーラの言う通りや。異論がある人はおる？」

はやてが周囲に顔を向ける。

「アクセルさんがいたから、私たちはここにいる……異論なんて、あるわけないよ」

「なのはに同じく」

「テストロツサに同意だ」

「なのは一尉、フェイト執務官、シグナム二尉……」

誰もが笑顔を見せている。シグナムですら微笑を浮かべていた。この場にアクセルたちに対し否定的な人物はいなかった。ヴィータが伸びをし、手を頭の後ろで組みながら笑う。

「今までと変わらねえってことだろ。なら、それでいいじゃん」

「ヴィータ三尉……」

右手に温もり。ティアナが両手で覆うように握りしめていた。その表情は慈愛に満ちていた。

「良かったですね、アクセルさん」

「ティアナ……」

エリオとキャラが駆けてくる。
子どもらしい笑顔を咲かせて。

「お帰り、兄さん」

「お帰りなさい、お兄ちゃん」

「エリオ。キャラ。それにフリードリヒ」

キュクルーという特有の鳴き声。

軽く翼を羽ばたかせ、白竜はアクセルの肩へ舞い降りる。
喉を撫でてやると気持ちよさそうに目を細め、再び鳴いた。
それを見てアリサがつぶやいた。

「……ホント、こつちに来てから変わったわ」

「アクセル君のこと？まあ、確かに柔らかくなってはいるけど、前からそうだったよね？」

「ああ、言い方が悪かったわ。その柔らかさ、優しさを表に出せるようになった。そういう意味で変わったことよ……前は限られた人の前でしか出せなかったけど、今じゃ普段から溢れてるような感じでしょ？」

「ああ、そういうことかあ……ふふ」

「……何よ、その笑いは」

「少し、悔しいんじゃない？自分しか感じ取れなかったものが、今では表に出されてるのが……それを成し遂げたこの空気が」

「……ふん。別に……悔しくなんてないんだから」

「こつちという時だけは素直じゃないんだから……ふふ」

そんな会話を続ける二人の雰囲気も柔らかい。

ここにはそうさせる、何かがあるのかと、疑問に思った。
だが、それに嫌悪を感じることはない。

(相変わらずの部隊だ……だが、それがいい)

……この時間を少しだけ。
もう少しだけ、楽しむとしよう。

第20話 「あなたがいて、私がいる（後編）」（後書き）

ついに語られた過去。

それに呼応するように眠れる異邦人が覚醒する。

そして、動き出すアインストの影。

次回、第3章『崩壊する世界』。

お楽しみに！

登場人物紹介Part? (前書き)

タヌキはやて「おーい、みんなあ！集まりい〜！」

バニーシグナム「……集、まれ」

タヌキはやて「『なぜなに機動六課』の時間や！」

フェイトお姉さん「『魔法少女リリカルなのは』So close, yet so far』をお読み下さっている皆さん。初めまして、お久しぶりです、こんにちは。解説のフェイト・テストロッサです。アシスタントはこちらの二人……」

タヌキはやて「みんなのマスコットアイドル、タヌキはやてと！」

バニーシグナム「……魅惑のバーニングアイドル、バニーシグナムで、お送りいたします……うう、主はやて、何故このような衣装で？」

タヌキはやて「え？私やあらへんよ？シグナムが持参したんやとばかり……それと、ちゃんとタヌキはやてって呼んでや！」

フェイトお姉さん「あ、そのバニーガールのコスチュームは私が用意したの」

バニーシグナム「テストロッサ?!なんで、こんなものを……というか、さっきの台詞も……」

フェイトお姉さん「ダメだよ、ちゃんと台本通りにしなきゃ。ね?……あとで、いいことを教えてあげるから」

バニーシグナム「あ、ああ……(何なんだ?……今日のテストロッサは……)」

タヌキはやて「……今日のフェイトちゃんは、ずいぶんノリノリやなあ。何かあったんやろか……?」

フェイトお姉さん「さて、第二回『なぜなに機動六課』の内容は、登場人物紹介パート2及び登場用語紹介です」

タヌキはやて「というのも『先日15万PVを達成した記念に』と

いうことらしいんや。いやあ、めでたいことやな!」

バニーシグナム「これもひとえに、応援して下さっている皆様のおかげです。本当にありがとうございます」

タヌキはやて「でも、なんで15万なんや?10とか20に比べたら、きりがいい数字ではないと思うんやけど?」

フェイトお姉さん「何でも、前回受けたダメージの回復量……というところらしいよ?」

タヌキはやて「……ああ『SAIHALの執念』やったっけ?」

バニーシグナム「『SAIHALの執念』です、主……あまり変わりはありませんが」

フェイトお姉さん「それにしても、15万も耐久力があるようには見えないんだよねえ……」

タヌキはやて「そやなあ……精々がガジェット?型)『A』における初期敵MS程度)くらい?」

????「ドグシャアツ!! SAIHALに50000のダメージ」

フェイトお姉さん「そんなメンタルの弱さだから、仕事でミスが多いんだよねえ……」

バニーシグナム「あつ、テストロツサ?!」

????「ブルウウアアツ!! SAIHALに100000の

ダメージ。SAIHAL撃墜 強化パーツ『SAIHALの無

念』入手」

バニーシグナム「ああ……遅かったか」

フェイトお姉さん「とりあえず、フリマで売ることになりましたか」

タヌキはやて「……ハッ!そ、それでは、気を取り直しまして!ど

登場人物紹介Part?

・アクセル・アルマー

言わずと知れた、我らが隊長。愛機はソウルゲイン。

“元”シャドウミラー特殊処理班隊長。ちなみに、ソウルゲインを受領するまではアシユセイヴァーを専用機としていた。

“現”機動六課アサルト分隊長。コールサインはアサルト1。

『こちら側』での出会い、そして、強い意思に触れたことで、クロノス・ハーヴェイの理念に反することになる。

・パーソナルトルーパー

全身装着型デバイスの総称。基本構造はアリシア・テストロツサが発表した非魔導師でも使用可能なデバイス理論を基にしている。

新暦69年に初めて開発に成功したゲシュペンスタイプを基に様々な機種が生まれ、デバイス業界に旋風を起こした。後にフレモント・インダストリー社、Z&R社、テスラ・ライヒ研究所などが追隨して開発を始める。

同系譜として、高機動強襲型のアサルト・ドラグーン、高火力砲撃型のヴァルキュリアシリーズ。また、特機として区分されるGシリーズ、EG系、VR系などが存在する。

PTの導入を後押ししたのが地上本部代表、レジアス・ゲイズ中將である。彼はミッド高台に建造を予定していた地上防衛用巨大魔力攻撃兵器・アインヘリアル予算全てをPT製造にまわしている。

「一基の巨砲より、千機の機兵を」とは中將の弁であり、事実三基製造予定であったアインヘリアルの資金を基に、三千機のゲシュペンスタイプMk-?が量産された。

・世界間戦争

新暦71年の連続テロ事件を始まりとするミッドチルダと『とある管理世界』との戦争。

呼称は世界間戦争が一般的だが、一年戦争、ミッドチルダ戦役などの別称もある。

また、パーソナルトルーパーの性能が実証された戦争でもあり、質量兵器メインの『とある管理世界』と互角以上の戦いを繰り広げた戦後、その管理世界は全てを剥奪され、事実上ミッドチルダの管理下におかれる最初の世界となる。

・アリシア・テストロッサ

シャドウミラー幹部兼技術者。24歳（新暦75年現在）。

マオ社のオブザーバーを務め、パーソナルトルーパーを生み出した技術者として知られる有名人。

……余談だが、服装はレモン様のものである。

・ティアナ・ランスター（『向こう側』）

シャドウミラー特殊処理班副隊長。享年23歳（新暦75年没）。

新暦66年、航空隊を志望し見事合格。以来、持って生まれた精密射撃技能と頭の回転の速さを活かし、首都航空隊にて活躍する。また、才能にはかり頼ることなく努力を続けてきた彼女は、70年に執務官試験に一発合格を果たした（三等空尉待遇）。

新暦71年初頭、その目覚ましい経歴が特殊処理班隊長に就任した

ばかりのアクセルの目に留まり、副官としてスカウトされる。特務隊として有名であったシャドウミラーが自分如きに目を付けてくれたことを素直に喜び、引き抜きを受けた。この際、後に愛機となるアシユセイヴアーを受領する。

幸か不幸か、この直後『世界間戦争』が勃発。アシユセイヴアーを駆り、ソードブレイカー・ファントムシフトという戦法を用いた殲滅戦でいくつもの戦場を生き延びてきた。

戦争後、恐怖に満ちた次元世界を変えるべく行動を開始。しかし、75年冬。撤退する特殊処理班を追撃するディザスターズを食い止めるべく、体を張って後詰にまわる。

一応は生還するも、戦闘の際に受けた傷は深く、アクセルの腕の中で最期を迎えた。

・ギンガ・ナカジマ（『向こう側』）

シャドウミラー・ギンガ隊隊長。享年18歳（新暦74年）。

新暦71年の時点で、既に陸士108部隊所属であり、『こちら側』の彼女よりも二つ年上。

71年の臨海第八空港テロ事件にて、実の妹であるスバル・ナカジマを失う。

彼女が失意のうちに陥るなか『世界間戦争』は開戦。

妹を救えなかったという思いが彼女を責め続け、感情を無くしていく。

それでも、妹の代わりに多くの命を救うことを胸に戦時を生き延びる。

72年、戦時中の功績を見たアクセルがシャドウミラーへと入隊を推薦。感情のほとんどを失い、流れに身を任せていた彼女はそれを断ることもなく、ギンガ隊隊長へと就任する。

そして、アクセルやティアナら特殊処理班の面々、協力者であるア

リサヤスズカとの触れ合いによって徐々に感情を取り戻していく。が、新暦74年。第3管理世界ヴァイゼンにおけるディザスターズとの交戦において、『ベーオウルフ』と名を変えたスバルと邂逅。まさか、生きていたとは思ってもいなかった彼女は呆然。そして、その隙を操られていたスバルは逃すはずもなく……致命傷を受けた彼女は、もはや敗戦寸前のシャドウミラー隊を逃がすべくコードATAを発動させ、追撃するディザスターズの兵を道連れにし、短い生涯の幕を下ろした。

・スバル・ナカジマ（『向こう側』）

ディザスターズの突撃隊長。階級は陸曹長。

新暦71年の空港テロに際し、『エルケーニヒ』に拾われる。

その後は、彼女の操り人形となり、世界間戦争において要塞攻略など重要局面で投入された。

当初は専用のゲシュペンストMk-?（右腕にG・I・ステーク装備）を使用していたが、大戦中期にゲシュペンストMk-?（当時はアルトアイゼン・ナハトと呼称）を受領し、『ベーオウルフ』の二つ名で呼ばれるようになる。

……余談だが、身体は十代後半、精神は十代前半というアンバランスな人物である。

・アインスト・シュテル

またの名を星光の殲滅者、シュテル・ザ・デストラクター。

圧縮拡散の特殊能力を持つ。

彼女が放つ魔法はデフォルトで圧縮されており、着弾と同時に拡散
|| 爆発する。

瞬間的攻撃力は他の類を見ないほど突出している反面、誘爆性が高い故に一定以上の衝撃を受けると形を成さなくなる欠点を持つ。
“大いなる意思”への恭順度はそこそこ。蘇らせてくれた礼をしているだけ、とは本人の談。そこにテレ要素は一つもない。単にギブアンドテイクの関係である。

彼女の本心は、なのはとの闘争、魔導の競い合い、それに尽きる。
「会いたかった。会いたかったです、高町なのは！」「だから、私は貴女を倒す。静寂なる世界なんてどうでもいい……私自身の意思で！」などの台詞を想像した作者は、決して悪くはないと思いたい。

・アインスト・レヴィ

またの名を雷刃の襲撃者、レヴィ・ザ・スラツシャー。

結合分断の特殊能力を持つ。これによりどんな防御魔法も無意味であり、出力を上げれば砲撃も両断する。攻撃面に特化したゼロエフエクト、と言えば解りやすいだろうか。

“大いなる意思”への恭順度は普通。本人は『監視者』としての役割、つまりアインストとしての活動を積極的にこなしているが、あくまでそれは『監視者ごっこ』なのである。

彼女の本心は、自分が楽しければいいのである。つまりヒーローごっこと同義なのだ。

シグナムやフェイトなどの強敵と闘いながら、目的を果たしていく。これ以上、面白い『ごっこ遊び』があるだろうか。いや、ない（反語）。

・アインスト・ディアーチエ

またの名を闇総べる王、ロード・ディアーチエ。

空間接続の特殊能力を持つ。それに伴い、見える範囲への一瞬での転移（瞬間移動）を可能にしている。

また、この能力の真価は“扉”と“扉”を繋ぐことであり、彼女自身がアインストの計画の要である。

“大いなる意思”への恭順度はゼロ。しかし、本編では言われるがまさに活動しているようにしか見えないが、これは誤り。

本人曰く「王たる我を蘇らせた褒美はやらんとな」。どこの金ぴかをイメージしているの言うまでもない。

登場人物紹介Part? (後書き)

タヌキはやて「なんや、随分少ない内容やな？」

バニーシグナム「ええ、確かに……テストロッサ？何か知らないか？」

フェイトお姉さん(?)「……フフフ」

タヌキ&バニー「??」

フェイトお姉さん(?)「アツハハハ！まだ気が付かないのかなあ？」

バニーシグナム「……！！貴様、その衣装は?!」

アリシアお姉さん「そう！私はアリシア・テストロッサ！！フェイトなら、今頃は地球でのんびり休暇中よ！」

タヌキはやて「な、なんやてっ！」

アリシアお姉さん「フフフ、作者を脅して第二回をでっち上げる……存外に楽しませてもらったよ、特にそのバニーガールコスの人にはね？」

バニーシグナム「き、っさまあ！！そこに直れ、レヴァンティンで叩き切ってくれる!!」

アリシアお姉さん「断らせてもらうよ!……それじゃあ、ご覧の皆様！本編でお会いいたしましょう!!」

タヌキはやて「転移……なんて、素早い奴や」

バニーシグナム「まさか、単身で六課にやってくるとは……敵ながら見上げた奴です」

タヌキはやて「……そやな。ところで、シグナム。その格好だと、ポーズとつても決まってるないで？」

バニーシグナム「……!?!?」

アリシア「さてさて、逃げ切れたことだし、次回予告を！」

シュネー「アクセル隊長が夢見たもの。それは眠れる異邦人が目覚める予兆だった」

ロート「果たして、眠り姫が語る過去とは？そして、各地で動くアインストの真意とは？」

ラミア「次回『崩壊の予兆』……どうぞご期待を」

アリシア「……どこから出てきたの、あなた達……って言うか、台詞取らないでよぉ〜!!」

ヴァルフ「付け足させてもらえば、徐々に内容は充実していくとのことだ。存分に期待してほしい。それでは、また……」

アリシア「あなたまで?!」

クロノス「11月25日に追加要素が出たそうだ……やれやれ、私
が報告するまでもないことだろう」

アリシア「世界はこんなはずじゃなかった!!」

第21話 「崩壊の予兆」(前書き)

やあ (、・・・)

ようこそ、『魔法少女リリカルなのは』So close, yet so farへ。

この油揚げパフェはサービスだから、まず食べて落ち着いて欲しい。

うん、「また」なんだ。済まない。

仏の顔もって言うしね、謝って許してもらおうとも思っていない。

それでも、言い訳にはならないが、聞いて欲しい。

前投稿の翌日のことだ。

いつも通りに、ファイルを開いたら。

全てのデータが消えてしまっていたんだ。

別段、何をしたわけでもないのにね。

それからは二十日不貞寝の一日復旧さ。

そんなことを聞かされたら、今まで愛読していてくれた君はとても憤慨するだろう。

でも、この新着を見たとき、君はきつと言葉では言い表せない、「ときめき」みたいなものを感じてくれたと思う。

殺伐とした世の中で、そういう気持ちを忘れないで欲しい。そう思って、めげずに投稿したんだ。

じゃあ、ページをめくろうか。

第21話 「崩壊の予兆」

これは夢だ。

紅蓮の地獄。灼熱の焦土。

いつか見た風景。

鉦山町アミアの惨劇。

自身の記憶の再生。

ここでかけがえのない仲間を失った。

“目の前に立つ”ギンガ・ナカジマが、その証拠だ。

「…………隊長。私は、どうやらここまでの、ようです」

肩で息をしながらも、彼女は“笑顔”でそう告げた。

彼女は左手で脇腹を押さえている。

そこには、風穴があいていた。

『ベーオウルフ』スバル・ナカジマの一撃によるもの。

その他にも大小様々な傷があちこちについている。

流血も酷く、右腕は内部構造が露出して、剥き出しの回路が時たまショートした音を立てている。

そんな状態だというのに、何故笑っていられるのか。

アクセルには理解できなかった。

「……隊長は残った隊員を連れて、離脱を……私が隙を作ります」
「……どうするつもりだ」

追手はすぐそこまで来ている。

ディザスターズの狂犬共を相手に、今のギンガでは……
いや、どのような状態であっても、一人では自殺行為だ。

……だとすれば、残された手は唯一つ。
ギンガは質問に答えず、先を続ける。

「隊長。後生です、一つだけお願いがあります」

普段のギンガからとても想像できない朗らかな口調。

妹を失ってから、表に出さないようにしていた感情。

満面の笑みを浮かべながら彼女は、この世で最後となる言葉を告げる。

「妹を、頼みます。あの子は、弱い子ですから」

そう言って、駆け出す。

最後の最後まで、彼女は家族の事だけを考えていた。

彼女らしいと言えば、彼女らしい。

そこまで自分の道を貫くことが出来る人間はそうはいない。

「コードATA……発動!!」

向かう先には、血に飢えたゲシュペンストの部隊。

既に人の形すら捨て、ただただ獲物を狩るためだけの猟犬。

管理局の犬を灰に帰すべく、ギンガはさらにスピードを上げる。

「ギン ツ!?!」

彼女を止めるべく追おうとしたが、腕の中の重みで動きを縫いとめられた。

視線を下に向けると、そこには血塗れの女性。

アクセルが好んで着る服に似て、より軽量なものに身を包んだ彼女。特徴的な橙色のロングヘアは黒ずんだ血で染まっている。

「ティアナ……」

「隊長……そんな顔をしてはいけません」

息をするにも億劫だとばかりに、顔を歪めつつ、アクセルを窘める。いつの間にか、周囲の風景も変わっていた。

「ああ、隊長……ひとつだけ、発言を、許していただけですか……?」

流れ出るべき血すら止まり、あとは死に向かうだけの身体。そんな身体と魂を繋ぎとめているのは、強固な精神と未練。

「……許可する。言ってみろ」

それを言わせてしまえば、彼女の未練は消えると解っているのに。アクセルの口は意思とは無関係に、動いてしまった。

それも当然である。これは、夢なのだ。

だから、ティアナ・ランスターはあの時と同じ言葉を紡ぐ

「アクセルさん。私は

貴方のものになりたかった」

それは、『こちら側』のティアナと同じ言葉。

やはり、同一人物なのだと感じてしまう。

だが、それだけでは、終わらない。

「でも、これでやっと

貴方のものになれる」

そう言っつて、満足そうに微笑む。

もう言いたいことは、全て言っつたとばかりに

そして、今まで強く握っつていたアクセルの袖から手が離れる。

重力に従っつて、彼女の手が落ちて

目が覚めた。

「何て、夢だ……」

かけていた毛布は隅に追いやられている。

自分はそこまで寝相は悪くなかつたはずだが、おそらくは見ていた夢に体が反応したか。

我ながら女々しいものだつづばやきつつ、起き上がる。

時間は五時。早朝訓練にもまだ早い。

同室のエリオはまだ夢の中のようだ。穏やかな顔つきで寝ている。

そのことに少しばかり微笑み、弟分を起こさないよう普段服に着替

えて、静かに室外へと出る。

長い廊下を歩く。小鳥のさえずりがどこからか聞こえてきた。さて、エリオを起こさないように外に出たはいいが、どうするか。特に何も考えていなかったなので、訓練までは暇が出来たが……

「どうしたものか……む？」

すると、正面から誰かが走ってくるのが見えた。

白衣を着て駆けるその姿は、どこか危なっかしさを感じさせる。

「どうした。シャマル医務官。こんな朝早くに」

「あっ！アクセル君！！ちようどよかった！！今すぐ医務室に向かつて！！私ははやてちゃんを……」

「待て、少し落ち着け……何があった？」

シャマルに深呼吸するよう促す。緊急だからこそ冷静にならなければならぬ。

それを解ってくれたのか、深呼吸を一、二回して彼女は口を開いた。

「スバル……いえ、スバル・ナカジマさんが目を覚ましたの。じきに通常の思考ができるようになるわ」

……なるほど。慌てようも分かるといふものだ。

もし、アインストとしての自我が残っていたのならば、彼女は脅威となる。

ならば、急がなくてはならない。

「了解した。俺が彼女を見ている間に、はやて二佐へ伝えてくれ」

「ええ！お願いするわね！！」

十分気を付けて、と最後に口にして彼女は駆け出す。アクセルもその背中が見えなくなる前に、医務室の方向へと歩き出す。

だが、数歩も進まない内に歩みを止め、未だ姿が見えるシャマルを見据える。

「……………医務室にも、通信機器はあつたはずだが」

……………随分慌てていた、そういうことにしておこう。

深く考えずに、アクセルは再び歩き出した。

先ほどよりも、速度を上げて。

〈第21話 「崩壊の予兆」〉

目覚めたスバル・ナカジマが最初に確認したのは、自身の身体のことだった。

力が入らない。いったいどれほどの間、自分は眠っていたのだろうか。

一応、神経は繋がっているようだが、いまずぐ起き上がれそうにはない。

だが、時間を掛ければ、元のようになるだろう。

次に確認したのが、愛機が存在だった。

いくつもの戦場を共にした、ゲシュペンストMk-？。

近くにはないようだったが、この建物内にあることは感じるこ

出来た。

「
」

意味のない言葉を口にしてみる。出るのは乾いた息の音。別に喉がつぶれている訳でもない。潤せばなんとかなる。

そこまで確認してから、周囲をゆっくりと見渡す。

如何せん、首は硬くなっており眼球だけでの確認だったが。

白いカーテン、質素な室内、医療用の電子機器。

病院もしくはどこかの医務室だろうと彼女は結論付けた。

記憶に残る最後の光景は、迫りくる蒼い戦神。

ということは、彼が所属する部隊の本部内と断定していいだろう。

「……その様子だと、特に異常はないようだな。『ベーオウルフ』」

突然、考えていたスバル・ナカジマの耳に飛び込む声。

視線だけを聞こえてきた方へと向ける。

部屋の扉に背中を預けて、一人の男性が立っていた。

赤髪に白いジャケット。彼女を窺うような視線がこちらと交差した。

「……その名は、あまり好きではありません」

「『こちら側』にも、スバル・ナカジマがいる。俺たちと同様に異邦人であるお前をそう呼ぶわけにもいかん、これがな」

我慢してもらおう、と言いつつ男性　アクセル・アルマーは畳んで立て掛けてあったパイプ椅子を広げて座る。

それから何やらベッド脇の機器をいじる。すると、段々とスバルの上半身が起き上がり始めた。

リクライニング機能付きのベッドだったらしく、すぐに二人の視線が同じ高さになった。

「さて、話してもらおうか。『バーオウルフ』」

「……お前、でもいいです。その呼び方だけは止めてくれますか……それよりも、何を語れと？」

「決まっている。全てだ……お前が奴と、『エルケーニヒ』と出会ったから『こちら側』に来た経緯の全て。要点だけでいい」

全てを見透かそうとする瞳を向けながら、身を乗り出すアクセル。話し難い環境ではあるが、文句を言っても始まらないだろう。仕方はなしに、彼女はポツリポツリと語り始めた。

「あの人と　　ナノハ特尉と出会ったのは、新暦71年の臨海第八空港で、です」

燃え盛る炎で出来た迷路を、当てもなく歩み続けていた。

父に、母に、それから、姉に助けを求めながら。

ふとした瞬間に転び、しかし起き上がる気力すら尽きていた。

追い打ちをかけるように、倒れてきた彫像。

為す術もなく潰されかけた彼女を救ったのが、ナノハ・タカマチ特務空尉だ。

彼女は彫像を破壊し、朦朧としていたスバルを見て

《見つけた……始まりの地に至る血……純粋な源流……我が手に》

嗤ったのだ。

それからはもうスバル自身の記憶とは言えない。

操られるがまま、訓練に時を費やし、戦場に身を賭した。

『世界間戦争』では常に最前線の突破口として扱われた。付いた名前が『ベールオウルフ』……十代の女の子に付けるような名じゃないことは確かだが、彼女の行為を考えれば、納得できる名だった。

戦争が終わってからも、傀儡生活は終わらない。

局に反抗する管理世界の鎮圧。ゲリラの掃討。巨大宗教団体の弾圧。次元世界を股にかけ、ディザスターズの突撃隊長として活動してきた。

そして、75年。撤退するシャドウミラーの追撃作戦。

初めの内はテスラ・ライヒ研究所周辺を哨戒していたが、研究所が爆破されたことを確認後、研究所に突入した。

そして、劫火の中を自慢の突進力で突き抜けながら、例の転移装置が格納されているはずの地下格納庫へと到達。

瞬間、巨大な光に呑み込まれた。それが炎だったのか、それとも転移時に発せられた光だったのかは分からない。

……気が付いたら『こちら側』に来ていた。

「後は、貴方の知っている通りだと思います……満足しました？」

「ああ、納得はできた……それで、お前はこれから、どうするつもりでいる？」

渋い顔をしながら問いかけるアクセル。

だが、スバル・ナカジマにはその質問の意味が理解できなかった。

「これからって……どういうことですか？」

「……言葉通りだ。この先、『こちら側』でどう生きていくか、そういう意味だが？」

詳しく説明されても、理解が出来なかった。

ここで、生きていく……そんな選択肢など、彼女にはない。

「……私を殺してくれるんじゃないんですか？」
「なにを……？」

アクセルがこちらを見た瞬間、声を詰まらせた。
それも当然の反応だろう。スバル・ナカジマは無表情だった。

「私は生きていては駄目な存在だと思います。いくら操られていたとは言え、私は多くの人を、多すぎる命を奪ってきました。それは許されることではないと思います」

静かに自らの思いを吐露する。

その様はまるで決められた文章をただ読み上げる人形にも等しかった。

「でも、それは『向こう側』での話です。『こちら側』で罪にはならない。裁かれることもありません……なら、私が背負った罪に対する罰は、きつと“死”だけです」

しかし、それでも彼女が語るのは偽らざる本心。

“スバル・ナカジマ陸曹長”の心からの想いだった。

「それだけじゃない。私は姉を、家族を殺しました……肉親殺しの罪は、とても重いと考えます、だから……」
「だから、俺にお前を殺せと言うわけだ」

こくりと、スバル・ナカジマは肯定の意思を示した。
あくまで無表情を保ったままだったが。

彼女の話最後まで聞き終えたアクセル。

彼の反応は実に単純明快な

「ふざけんじゃねえぞ、餓鬼が……」

憤怒だった。

「ヒッ！」

憎しみとも取れる感情が滲み出す眩きに、スバル・ナカジマが短い悲鳴を漏らす。

だが、アクセルは止まらない。止められない理由がある。

姉を殺した？大勢の人間も殺した？だから生きてはいけない？ならば、こちらは仲間ともを失った。かけがえのない、もう二度と出会えることはない仲間たち。

一人の命で、それらを全て清算できるとでも思っているのか。

思い上がりも甚だしい。そんなことは、出来はしない。

何よりも、涼しい顔のまま近しい者を殺したと告げる人間に、そんなことを言われたくはなかった。

沸々と湧きあがる怒りを抑えられないまま、後ずさりして今にも寝台からずり落ちそうな彼女に詰め寄る。

「スバル・ナカジマ、お前は ツー！」

だが、突然の警告音アラートでアクセルは追及を止めざるを得なくなった。

しばらく甲高く耳障りな音が続く。

途中で慌てたような音が入った。

《緊急出撃！各員は出撃準備が整い次第、出撃してください！繰り返しします……》

警告音を鳴り響かせたまま、肝心要の出撃内容を告げぬ放送が続く。声の主はアルト・クラエッタ二士か。不明瞭な報告で懲罰を喰らわなければいいが。

だが、緊急さは伝わってくる。ある意味、正しいと言えようか。

「チツ　　続きは帰ってきてからだ、こいつがな」

荒々しく立ち上がり一瞥をくると、小動物のように体をすくませた。

こちらが本当の彼女と言えるだろう。まだ、情操面は幼いままらしい。無理もない。十一歳の時に連れ去られ、以来傀儡のまま戦場暮らしだ。

そこまで考えて扉の前で止まり、彼女を見ずに口を開く。

「スバル・ナカジマ。貴様が命を捨てるといふのなら、俺は構わない……だが、六課（六）にいる誰にもお前を殺させはせん。死にたければ、一人で勝手にやれ」

「……………」

返事は帰ってこない。期待はしていないが、ここまで張り合いがないと、加虐のようにも思えてしまう。

だが、続けるしかないだろう。

何よりも、彼女のために。

「俺は、お前のことを頼まれた……ギンガは最後まで、自分の事よりも、お前のことを気にかけていた」

「ッ……」

妹を頼みます、それが奴の最後の言葉だった。
思えば、今朝方の夢は『向こう側』のギンガからのメッセージだったのかもしれない。

「今のお前が考えていること。それは姉の気持ちを無駄にする行為だ」

言い終わっても、最後まで返事は帰ってこなかった。

だが、時折生じる、ベッドの軋む音。

これが彼女の動揺を伝えていた。

それだけ聞いて、アクセルは未だ不明の任務先へと向かうべく、転移ポートへと急ぐ。

あとに残されたスバル・ナカジマは俯いたままだった。

アクセルの去っていく足音が聞こえなくなってから嘆く。

「分かってるよ、そんなこと……」

感情が言葉を通して伝わってくる。それほどに悲痛で静かな叫びだった。

先ほどまでの感情を殺した声ではない。

“スバル・ナカジマ”本心からの言葉。

「どうしたらいいの。教えてよ」

お姉ちゃん」

紡がれた言葉は誰にも届くことはなく。

ただただ窓から差し込む光が、嘆く少女を温めるかのように照らし続けていた。

日光の反射で、眩いまでに輝く海面。
照り返しを存分に受けながら、星光の殲滅者は忌々しげに宙に浮いていた。

ただ眩しいだけではない。どこか居心地の悪さすら覚える。
それは、自身が闇より出ずる存在がためか。
それは、自身が仮初の命に過ぎないためか。
だからこそ、陽の光が当たる場を忌むのか。

「馬鹿馬鹿しいですね……」

自嘲の如くつぶやき、愛杖・ルシフェリオンを左から右へ、半円を描くように振る。

それに合わせて、六つの光球が生まれた。
まるで脈打つように、収縮を繰り返している光球は、ゆっくりと前方へと動いていった。

その先には倉庫群が立ち並び、更に先には市街地が広がっている。
収縮は段々と回数を増していき……

「パイロバースト」

シユテルの一言とともに、フェーワフエンクム光球が弾けた。

紅蓮の杭となり真つ直ぐ街へと向かう。

当然、非殺傷などという甘いものは設定されていない。

予想される甚大な被害を前に、今か今かとシユテルは無表情のまま

待ちわびていた。

《Straight Buster》

不意に、シュテルの耳にそんな電子音声が聞こえた気がした。直後、全ての紅蓮の杭は横から放たれた桃色の閃光によって薙ぎ払われた。

その光景を見て、無表情を保っていた彼女の口角が吊り上る。もともと、レヴィやディアーチェなどの近い者が見て分かる程度ではあったが。

「ああ……ようやく、来て頂けましたか」

彼女が待っていたのは、これだ。

破壊によって生まれる、怨嗟の声も聴きたくはあるが、最も聞きたい声はまた別にある。

「うん……貴女を止めるためにね」

そう、現れた宿敵、高町なのはのものだ。

彼女が真に望むもの、真に願うもの、真に求めるもの。

それは、彼女がじぶん彼女であることの証明。

言ってしまうは自我同一性の確立、もしくは存在価値レソルデートルの確認という、エイコイステック利己的であるで子供じみた願望。

そのための方法こそが、なのは宿敵と闘い、自身シュテルが討ち果たすこと。十年前、それを完全に成すことはできなかった。

得ることができたのは、宿敵との出会いと敗北と、未練。だからこそ、この世に蘇ることが出来たことに感謝した。彼女の中で“静寂なる世界”など、どうでもよかった。ただ、蘇らせてくれた恩を返しているだけ。もし自分の願いを邪魔するようであれば、“大いなる意思”の寝首をかくことも厭わない心算だった。全ては、この闘争のためだけに。

「……どうして、私はヒトのように、この世に生を受けなかったのでしょうか。そうすれば、きっと貴女と共に十数年という時間を過ごせたというのに」

ルシフェリオンを胸に抱き寄せつつ、残念だとばかりに首を振る。そんな告白じみた台詞を聞かされて、なのはは頬を染めつつ困惑する。

「へ……あ、あの、それってどういう意味で言ったの？」

「どういう意味も何も……十数年という時間を共に切磋琢磨しつつ、貴女と闘うことが出来たのに、という果たせなかつた願望ですが」

それが何か、と小首を傾げつつシユテルは問うた。

対するなのはは何故か少しがっかりしたように肩を落としつつも、レイジングハートを構えた。

笑顔を保ちながら、どこか剣呑な雰囲気を感じつつある。

「じゃあ、大人しく私と一緒に来てもらえないかな。制限は付くけど、きつと何とかしてあげられると思うよ？」

「何を言っているのです、タカマチナノハ。私が口にしたのは、叶うことのない願い。であれば、今の環境で出来る限りの事をするだけです」

シユテルも同様にルシフェリオンを構えつつ、再び六つの光球を生み出す。

反抗する意思を見て取った、なのも光球を同じ数だけ作り出す。

「前は二対一だったよね。今回は？……自慢じゃないけど、私は十年前よりも強くなってるよ？」

「必要ありません。元々、私一人で対応するつもりでしたが、あの子が駄々を言うものですから……それに、例え十年もの空白期ブランクがあるうと、それが貴女に負ける要因に成るとは欠片も思っていない」「随分な自信だね……でも、怪我也治ったし、以前のようにはいかないよ？」

「ええ。今度は瞬く間に、貴女の魔導を焼滅し、貴女自身を撃墜して御覧にいれましょう」

軽い挑発の応酬。周囲を漂う光球は跳び出す機会を待つ兵隊のようにも見える。

知らず知らずのうちに、お互いの唇の端が上がっていた。

「そっか。それじゃあ……」

「ええ、それでは……」

同時に杖を振る。合計十二個の誘導弾が、一斉に飛び出す。

数駿の間を置いて、衝突。爆音とともに煙幕が生まれた。

それを切り裂き、両者が相見える。魔杖がぶつかり合い、大気が震えた。

「時空管理局、機動六課所属、高町なのは！あなたを逮捕します！」
「星光の殲滅者、シユテル・ザ・デストラクター！貴女を倒させて

いただきます！」

相反する星の光が、再び戦いの鐘を鳴らす。

第18管理外世界イスタ 熱帯雨林^{セルバ}

高温多湿の亜熱帯世界。独自の動植物種が多く生息し、その全容は把握しきれていない。

また、地下鉱物資源の産地でもあり、多くの企業が採掘場を設けている。

そんな採掘場の一つ、ヴァインデイン・コーポレーションが保有する一帯。

そこは、もはや採掘場とは呼べない有様だった。

「ごめんね、いきなり。邪魔だったからさ」

採掘用であろう重機は無残にも原型を留めない程に破壊され、作業員のほとんどが倒れ伏している。

両者には共通した傷があった。

一つは、斬撃による傷跡。もう一つは、電撃による火傷だ。

「ここが一番、集中してたんだ。ま、運がなかったと思ってね？」

為したのは一人の少女。

風にはためくマント、同じように揺れる蒼い長髪。

杖先で肩をリズムよく叩き、真紅の瞳を爛々と輝かせている。
雷刃の襲撃者 レヴィ・ザ・スラッシャーだ。

「さてと 結構、早かったね？」

唐突に、彼女はそう言った。

誰かに話しかけるようにはあるが、彼女が向いている方向には誰もいない。

だが、彼女はにやりと笑いつつ、視線だけを後ろに向けた。

「……………」

やや距離を置いたところに、一人の女性が無言で佇んでいた。

輝く様な金色の髪をなびかせ、手には漆黒の戦斧。露出が少ないバリアジャケットを装着している。

電撃で焼け焦げた大地を踏みしめている彼女は、レヴィと同じ真紅の瞳の奥で静かに炎を灯していた。

それを見たレヴィはまるで悪戯を成功させた子供のように、にやにやと笑う。

「いいね。その眼。ボクら好みに染まってるよ。憎しみの炎ってヤツ？」

「……………どうして、こんなことを？」

「あゝ、ダメダメ。キミとボクは初対面だろ？質問する前に、自己紹介はちゃんとしなきゃ」

「……………時空管理局執務官、フェイト・テストロッサ・ハラオウン」

若干、苛立たしそうにしながらも素直に応えた。

レヴィは硬いなあ、と言いながらフェイトの戦斧と似た杖、バルニフィカスの石突を地面に刺し、もう片方の手を腰に当て宣言する。

「ボクは雷光^{レヴィ}！閃の太刀にて戦いを征す者！！……うん、いい感じだ。やっぱり名乗る時の“ばりえーしょん”は多くないかね！」

一人でうんうんと頷きながら、同意を求めてくる。

フェイトを苛立たせる言動、狙っているのか、天然なのか。

「そうそう、さっきの質問だけど……“静寂なる世界のために”

って言ったなら満足する？」

次の瞬間、レヴィの正面で電撃が奔った。

否、それはフェイトが自慢のスピードで彼女の眼前まで移動しながら、同時に長年の相棒であるバルディッシュ・アサルトをハーケンフォームへと変形させたため、そう見えたに過ぎない。

だが、稲妻に見えても仕方がない。それ程の速度だった。

並の者ならば、反応すらできずに一撃で昏倒するレベル。

「不意を打ったつもり？でも、速さが足りないよ」

「ッ！」

だが、凶悪な笑みを顔に張り付けたまま、レヴィは難なくバルニフィカスの柄で防御して見せた。魔力刃は掠りもしていない。

しかも、普通に受け止めたのではない。フェイトがバルディッシュを振り下ろすのに合わせて“一歩前進して”受け止めたのだ。

一撃で終わらせるつもりだった。常人ならば反応できない速度で奇襲して見せたというのに。

彼女は高速で迫るフェイトに対して更に踏み込み肉薄。余裕とばかりに受け止めてさえ見せた。

フェイトは歯噛みせざるを得なかった。まさかここまでのものだったとは。

最早、目と鼻の先と言っている距離に互いの顔があった。

レヴィが口を大きく裂いて、嗤う。

「圧倒的な力の差を理解して、絶望した？」

防御の構えのままバルニフィカスが変形。フェイトも見覚えのある斬馬刀の形態を取る。

段々と力の均衡が崩れ始めてきた。この矮躯のどこにそんな力があるのかと、フェイトは理不尽さを感じた。

「なら、その絶望を抱いたまま」

一気に劣勢に追い込まれたフェイトは、このままではやられてしまうと感じ、距離を取るタイミングを見計らう。

しかし、スピードが同一かそれ以上ということは、下手に離れても一瞬で間合いを詰められ、斬られるということ。

（まずい。ザンバーの一撃は下手すると……！）

どうする、と悩む暇もなく、さらに力が強まる。

このままでは、押し切られる。

「蒼雷に打ち砕かれる……！」

レヴィの咆哮と同時に。

特大級の雷が辺り一帯を包んだ。

煉獄。その表現が一番びつたりだった。

どうして、こうなったのか。少年には理解できなかった。確かに、ここでの暮らしは楽なものではなかったと思う。みんな生活は苦しかったし、いつも忙しい毎日だった。それでも、笑うことはあった。それでも、生きていた。

生きて、いたんだ。

しかし、この状況では周囲に生きている命はないだろう。むしろ、ここで生きている少年がイレギュラー奇跡なのかもしれない。吹きつける風は肺を焼くほどに熱く、近くで木材が音を立てて燃えている。

「随分とつまらぬ些事に、我を煩わせたものだ……」

声が聞こえた。その方向に目を向ければ、誰かがこの煉獄を物ともせず立っている。

否、それは君臨しているといった方が適切かもしれない。

輝かんばかりの銀髪。背中から生えている三対の黒翼。手に携えるは剣十字が刻まれた杖と本。

顔は見えないが、体付きから言っ、おそらく少女と言っ、いい年齢のはずだ。

その外見には似合わない口調と姿勢。間違いない。

この地獄を創り出した、元凶だった。

鬼か、悪魔か、それとも魔王か。

いや、それでもまだ足りない。

少年が思いつく限りの蔑称ではまだ。

「だが、久方振りに力を揮^{ふる}えた……余興としては充分と言えよう」

視界が段々と霞みかかっていく。

だから今のうちに、少年はこの言葉を、この光景を記憶に刻む。憎悪の感情を共にして、復讐の名の下に。

そして、少年 トーマ・アヴェニールは意識を失った。

炭化した木材を足蹴に、闇総べる王は鼻を鳴らした。

“ゆらぎ”が感じられなくなってから暫く経った。

とすれば、“ゆらぎ”に頼ることなく“扉”を開ける術が必要になるのは当然のことだった。

そして、“大いなる意思”の言葉を受けて、候補となったのがこの地である。

『向こう側』で、この地は荒野も同然の風景とのことらしい。

象徴たる鉾山すら跡形も無く消え去り、後に残るのは多数のクレー

ター。

“かの者”が成し遂げた、『向こう側』に伝わる業の一つだ。

「ふん

」

ディアーチエは自らの能力である“空間接続”を利用し、上空へと瞬間移動する。

直後、魔力の槍を生み出し、焦土へと投げつける。

過たず黒槍は大地を穿ち、人ひとりが入るには十分な穴を創り出した。

だが、クレーターというものではない。精々が陥没程度の穴。

それがまた、ディアーチエの自尊心プライドを削る。

別段として、力を欲している訳ではない。

“静寂なる世界”という目的を達するに、個人の思考など些事にも劣る。

しかし、それにも“かの者”同様の力がなければ、達することはできない。

「そも、そう簡単に繋がるモノではないか……」

“大いなる意思”。その口車に踊らされたと言ってもいい。

『こちら側』と『向こう側』。決して交差するはずのない世界。

しかし、二つの世界の一点がもし、同一となる　つまり、重な

ったならば“扉”が開かれる可能性もあるのではないか。

内心、馬鹿馬鹿しいと思う話だった。

そんなことはまず有り得ない。机上の空論どころの騒ぎではない。

そもその前提が間違っている。

繋がる点を創り出すというのは百歩譲って良しとしよう。

だが、それを創り出す者が異なっていれば、創り出される点もまた異なる。

その証拠に、鉦山は熱風にさらされながらも、まだ残っている。

「……我には出来ぬと宣うわけだ……そのような無礼を働いておいて、塵一つ残ると思うなよ！」

頭上にいくつもの黒槍を生み出し、次々と鉦山へと斉射する。

それには彼女の普段から腹に溜め込んでいたものが乗せられているかのようだった。

悠然と立つ鉦山への怒り。当ての外れた“大いなる意思”への嘲り。まだ見ぬ“かの者”への妬み。昼寝を邪魔する子鼠への苛立ち。就寝を遮る小姑への恨み。

ほぼ八つ当たりも同然ではあったが、込められたエネルギーは相当量であり、段々と抉られ始めていく。

「ん？」

鉦山決りに夢中になっていたディアーチェだったが、ふと近づいてくる魔力反応に気が付いた。

総量は決して少なくはない。だが、反応はたったの一つ。

王であるディアーチェに対して、一人で向かってくる。

普段ならば、舐めた真似をと憤るところではあるが、接近する反応は既知のものだった。

「ほう、剣の騎士か。十年前の無礼を詫びに、頭を垂れに来たか？」

「……何のことだか分からんな、アインスト」

怨嗟を押し殺した口調で疑問を投げかける女性。

そう、反応はヴォルケンリッターの将、シグナムのものだった。

彼女は眼下に広がる地獄を見て、憎しみのこもった瞳を向ける。

だが、ディアーチェはどこ吹く風とばかりに、鼻で嗤って一蹴した。

「たわけ。忘れたとは言わせんぞ。王たる我に弓を引き、胸を貫いたことを……まあいい。王の寛容さを見せぬままに消えた身だ。此度は水に流そうではないか　　して、ついに我が軍勢に加わりに来たか？」

「ふざけるな……！貴様、これだけのことをしでかしておいて、何も感じていないというのか……！」

もはや怒りを隠そうともせず、腕を一振り、周囲を見ると促すシグナム。

何を見ろというのか、一瞬理解できなかった風に眉を顰めるディアーチエ。

数瞬遅れて、もしやと思った結論に行き着き哄笑する。

「ハ　　！掃いて捨てるほど存在いる塵芥のことを何故、気にかけねばならん……！甘くなったな。あの小鴉の影響か」

「　　もういい。その表情で、その声音で……！それ以上、語るな」

レヴァンティンを鞘から抜刀、敵意を込めた視線を向けつつ構える。ディアーチエは良い退屈しのぎになりそうだとばかりに破顔する。今の闇王ディアーチエにとって、シグナムは極上の道化だった。

「いいぞ。刃向かうことを許す。烈火の将」

「もう語るなど……！言ったあ……！」

二つ名の烈火の如く、シグナムは暴君を討つべく斬りかかった。

そして、今ここに。
世界崩壊に向けた物語が、動き始めた

第21話 「崩壊の予兆」(後書き)

いやはや一時はどうなることかと……
本当に、どうしてだろうね(；；)
すっぱり消えてましたので復旧するにも気落ちしてしまつて。
それでも読者の方々を裏切るわけにもいかず。
完徹で書き上げました。どこか、おかしいところがありましたら、
ご報告を。

というわけで、第21話でした！
色々伏線を仕込ませた回であります。
さて、君はいくつ見つけられるかな……w

ちなみにオリ技のイメージですが……

シュテルノパイロバースト……『東方非想天則』 霊鳥路 空の技よ
り地獄波動砲
ディアーチエノ黒槍……『テイルズ・オブ・デステイニー』よりデ
モンズランス

あと、なのポGODよりマテリアル三人娘の魔力光は……
シュテル・紅蓮、レヴィ・蒼、ディアーチエ・黒
と表記します(今回から、明確にって意味です)。

今回はバトル三昧です。
表現力に自身のない作者ではありますが、頑張りたいと思います。
では、また次回お会いしましょう！

P S ・登場人物紹介 P a r t ? 更新しますた。

第22話 「魔王墜ちて、冥王嗤つか？」（前書き）

どうも、皆様。お久しぶりです。

一応の生存報告。SAIHALは生きています。

ただ、前回よりスランプに入りましてorz
いや、自分如き若造が何を言うのか、という方もいらっしゃると思いますが。

ネタが、まとまらないんですっ！！

いや、ホント。この話も結構難産でした。

オマージユがちらほらとありますし。

多作品描写を借りて、ようやくと……でした。

まあ、作者の戯言はさておき。

長らくお待たせしました、本編をどうぞ。

第22話 「魔王墜ちて、冥王嗤つか？」

第12管理世界フェイキア 海上

二重の星の軌跡が海上を彩る。

一つは桃色で、一つは紅蓮。

片や光の下で平和へと促す、不屈の魔導士。

片や闇を伴い闘争を求める、殲滅の魔導士。

容姿は酷似していながら、その生き方は対照的。

「はあっ、はあっ……」

「こんなものですか、貴女の実力は」

対峙する二人。シュテルは汗一つかいていないが、なのはは肩で息をする程、体力を消耗している。

消費した魔力量の消費は同等。ならば、ここまで体力に差がつくのは何故なのか。

「まだ、まだっ!!!」

震える手でしっかりと杖を握りしめ、照準を向けると同時にノートイムで閃光を放つ。

ショートバスター。射程と威力をある程度犠牲にしてチャージタイムを短縮した、なのは最速の砲撃。

大気を裂き直進する閃光は過たずシュテルを呑み込んだ。

直撃により発生した煙によって、彼女の姿は判別できないが、そこから人影が出てくる様子はない。

「やった……？」

《Caution! Master!》

えっ、と驚くのが早いか、右脇腹に衝撃。

有り得ない方向からの襲撃。完全に不意を突かれた。

吹き飛ばされながらも姿勢制御を試み、後方を確認する。

そこには脚を構えたままの残心を取るシュテルがいた。

「ッ！？……な、んで……」

ゆるりと姿勢を整える姿を見て、なのはは驚愕するしかなかった。

自身最速の砲撃。移動魔法が発動した形跡もなければ、防御魔法が張られたわけでもない。

間違いなく直撃だったはずなのに、彼女には傷一つなかった。

痛む脇腹よりも困惑による衝撃の方が気になった。

「理解できない、そんな顔をしていますね……まあ、無理もありませんか」

困惑するなのはを嘲笑うかのように　　実際に笑っているわけではないが　　彼女は溜め息をついた。

そして、人差し指を立てて、先に一つの魔力スフィアを生み出す。

「今の私はアインスト・シュテル。十年前とは違う。それは前回の時も証明したはずですが」

スフィアはゆっくりと収縮を繰り返していた。

前回と言えば、シュテルが放った誘導弾を受けた時。

とても誘導弾だけの威力ではない衝撃を受けた。

あの時は、炸裂弾か何かによる爆発だと推察していたが。

「……爆発、じゃない」

そつだ。先刻、シユテルが街に狙いを定めた攻撃を思い出す
遠目でしか確認できなかったが、あれは膨大な魔力を込めたスファイ
アの一部を緩めて、直射砲に発展させたのではないか。
だとすれば、彼女の能力は……

「魔力の圧縮……それも、ごく短時間で高濃度にまで圧縮できるほ
どの……」

「その通りです。私が得た能力は“圧縮拡散”。多方面に応用が利
く能力でして、重宝しています。そして、貴女の苦し紛れの一撃を
避けたのもその一つ」

「！……まさか、誘導弾を移動用に使ったって言うの？」

圧縮させたスファイアを踏み台にして、その瞬間魔力を解放。
得られる爆発的な加速を利用していつきに距離を詰めた。

言うだけならば簡単だ。だが、考えても見てほしい。

数発で、シールドとジャケット越しの骨に罅を入れる威力。

防御には絶対の自信を持つ、なのはのシールド越しにも関わらず、
である。

それを移動用に使用するなんて、普通の人間ならば、考えない。

「それを可能にするのが、アインストの力です。我々の肉体強度、
再生能力はヒトの数十倍上をいきます……自らの攻撃の反動で傷付
きなどしない」

なのはにとって耳が痛い話だった。そして、黒い気持ちが芽生える。
かつての墜落事故。そもその原因は自分にあった。

酷使し過ぎた、幼き身体。あまりにも強力過ぎる、集束魔法。

当然、限界が来る。たまたま、ちょうどよくその時に強敵と遭遇した。

運が悪かったとはいえ、それは自業自得だ。

だというのに、目の前の彼女は　　かつての自分なのはを彷彿とさせる姿を持ちながら、人外の体を持っているというのだ。嫉妬するなどというのは、無理な話だった。

「それに、貴女はもう一つ見落としていますよ」

見落とす……

最初は何のことだか考え付かなかったが、自身と彼女を比較して考え付いた。

体力の差だ。少女の躰とより成長した躰。どちらが先に体力が尽きるかといえば、前者の**はず**。

アインストとしての力が働いているとしても、この差はおかしい。彼女の体力が落ちていないと言うのは、納得が出来る。

だが……何故、こちらの体力がこうまで削られている？
まだ十五分ほどしか経っていないというのに。

「まだ気が付きませんか？……教導ばかりで勘が鈍っているようですね。観察眼は鍛えなければ。仮にも砲撃手でしょう？」

そう窘められるように言われて、はっと気が付いた。

否、気が付かされたと言うべきか。

周囲に目を凝らすと、僅かにはあるが大気が“**紅い**”。

塵が日光を反射しているでも、海面からの照り返しでもない。

まるで、**紅い**粒子が何かが浮いているかのような……

「大気中に魔力を撒いて、いた……？」

「……及第点ですね。まあ、良しとしましょう。おっしやる通り、

周囲に攻性の魔力を“拡散”させています。微粒子サイズで拡散させていますから、デバイスでも探知は不可能。貴女は気付かぬうちに体力を削り取られていた、というわけです」

無表情のままに告げるシユテル。

納得すると同時に、彼女のその態度に苦々しく唇を噛み締める。

彼女にしてみれば何時もと変わらぬ口調だったのだが、なのはには説明するのも億劫で仕方がないという風に見えた。

十年前と何が違うのか。

何も変わらないのではないか。

成長していないのでないか。

幼い頃の自分に似た、しかし、自分の数段上をいくその姿に、糾弾されているような気がしてならなかった。

付け足して言えば、それはなののはにとって許されざる言葉だった。

魔法こそが、自分の生きる道。

そのためだけに、今までを費やしてきた。

十年と言う歳月を、否定されるにも似た発言だけは、許せなかった。

「レイジングハート……ブラスターモード、お願い」

《Master?!》

だから、見せなければならぬ。

十年の集大成を。自らの魔法を。

私が手にした、この光を。チカラ

だから……

「お願い。レイジングハート」

《……All right, master. Blaster set》

十年來の相棒が悩みながらも、切札を出す。

間を置いて力が噴き出した。

バリアジャケットが変化し、同時に魔杖もより先鋭な形状を取る。

リミッターを付けられている状態ではあるが、本気中の本気。

ブラスターモード。外面はエクシードモードと何ら変わらないが、

全くの別物。

僕しもたるビット四基を追隨させ、ここに不屈のエース・オブ・エースが現出した。

「なるほど。使用者ほんにんと端末デバイス、双方の限界を超えた自己強オーバープ化スト、ですか……ハイリスクですが、ハイリターンでもある」

拡散魔力を寄せ付けぬほど漲られ、氣迫にも似た他を圧倒する魔力に対峙するシュテルは、ほうと息を漏らす。

それが感心か歓心かの区別は付かなかったが、あのシュテルの余裕さを幾何かは削いだことに嬉しさを感じずにはいらなかった。

だが、そんななのは心中を察したかのように、そして、浮かんだ感情を否定するかのようシュテルは告げる。

「ですが、それは失策ですよ。タカマチナノハ」

失策。

再三にわたって告げられた否定の言葉なのは心を抉った。

抉られた傷はジクジクと痛み、ただ一つの感情へと導く。

怒りだ。

なのはは強く柄を握りしめた。

摩擦で掌が焼ける様に痛む。

だが、それも気にならない程になのはは憤慨していた。

「…………ふざけないで」

そう、ふざけないで欲しい。

何が失策だと言うのだ。

現に拡散魔力を寄せ付けず、消耗した体力もいくらかは戻った。

魔力は十二分、眼前の敵を打倒するには申し分ない。

ここからは、攻守交代。

追い詰められた兎は彼女。

追い詰め始める狗は自分。

そのはずなんだ

！！

「行くよ、レイジングハート！」

《Yes, my master!》

〈第22話「魔王墜ちて、冥王嗤つか?」〉

砲口を向ける。杖先に円環。
機械音を立てて、大口径カートリッジをロード。
五つの砲の照準がシュテルに狙いを定めている。

「デイバイン!!!」

《Buster!!!》

放たれるは神の名を冠した破城槌。大気を切り裂き、光の柱はシュテルへと向かう。

かつて、大樹の暴走を止め、階上の床を穿ち、天空にその名を轟かせた砲撃。
それが五発。一発一発が必殺の一撃に等しい。

「当たらなければ

」

だが、それでも。

「 どうということはありません」

複数の圧縮場スフィアを創り出し、常人ならば確実に躊躇する隙間を、シュテルは軽々と縫うように抜けていく。

今できる限界を尽くしてもなお、彼女にはまだ届かない。

「つく……」

《Acceler shooter》

再び唇を噛み締めつつ、次はスフィアを形成。

複数の追尾誘導弾による絨毯爆撃。加えて、ビットによる多角射撃。上から下から右から左から前から後ろから斜めから、ありとあらゆる角度からの同時射砲撃。

先ほどと違い、威力は低いものの隙間は無い。
これならばダメージは期待できる。

「数を増やせば、当たるとでも？」

……はずだった。

だが、デイバインバスター同様すり抜けられ、最後はプラスチックファイアーにより一網打尽。

下方の弾幕の薄さ。そこを突かれたが故の結果だった。

通常の人には空を飛ばない。だから、下方への注意は疎かになる。

しかし、なのはは戦技教導官にまで抜擢された人材。一部弾幕に穴があくなんてことは、通常有り得ない。

そう、通常ならば。今の彼女は果たして冷静だと言えるか。

答えは、否だ。

幾度にわたり十年間の研鑽を否定され、彼女の十八番、デイバインバスターすら軽々と避けられた。

それは存在自体の否定に等しい。

あちらはこの闘いで存在価値を確かめるというのに、こちらはこの闘いで同じものを削られていく。

「さて、そろそろチェックメイトといきましょうか」

終始変わらぬ表情ではあった、どこか余裕めいたものを感じさせる。

いや、疑心暗鬼におちいったなにはそう見えてしまった。

苛立ちながらも決着を思わせる発言に身を固くする。

「……そう簡単にいくとでもっ！」

「勿論、思っていますよ」

ルシフェリオンを一度、横薙ぎに振るう。

特に変化はない。何も起こらない。
不審に思うなのは。簡単に踏み込めるわけもない。
もう一度、振るう。
目に見えた変化は……

《 丱 Master! The trace of
hacking was checked》
「っ!!」

ノイズ交じりの機械音声。その後に告げられた事実。
ハッキング。不可能なことではない。
しかし、戦闘中に、しかもこの短時間でなんてことは有り得ない。
と、声を大にして言いたかった。
焦るなのは気にせずシユテルは腕をまっすぐ伸ばす。

「これが私の“魔導”……」

掌をこちらに向ける。何かを掴み取るように。

「これが私の“力”……」

その掌を宙に向ける。すると、どうだろう。

「!?!?」

ブラスタービット四基全ての砲口が、一斉になのはを向いた。

「忠告したはずです。失策だったと……さあ、踊りなさい。タカマ
チナノハ」

拳を握りしめる。

連動するようにビットが次々に光を放った。

「レイジングハート?!」

《Signal is stopped! Out of control, master!》

こちらの制御を離れているという報告を受けて、信じられないといった気持ちになる。

まさか、本当に拡散させていた魔力でハッキングを仕掛けているとは。

どれだけの演算能力があれば、可能とするのか。

これがシュテルの力……

「そんなこと?!」

認められるはずもなかった。

高く射撃を避けつつ、ビットの代わりとして誘導弾を形成。その数八つ。二つずつセットにしてビットへと向かわせる。

こうなった以上、撃ち落とすしかない。

炸裂弾で挟み込み、愛機の分身と呼べる飛行砲台を破壊。

その瞬間から目を逸らす。

自傷行為にも似た感覚を覚えながら、また誘導弾を生み出し、自身もシュテルに向かう。

「は、あ………」

飛行魔法を駆使しつつ、ブラスターモードの余波に苦悶の息を吐くのは。

どうしてこうなったのだろうか。

今度はこちらが追い詰める番ではなかったのか。
自問自答するなのは耳に再び告げられる。

「足元がお留守ですよ」

眩くシュテル。同時に右足の脛に衝撃。

見れば一基のビットが喰らいついている。

そんな、と嘆かざるを得ない。

確かに破壊したと思った。事実、このビットは浅いながらも黒く焼け焦げた跡。

完全に破壊しきれなかった。目を逸らしたのは自分。痛恨のミス。

誘導弾を右脛へ。その一撃でビットは破壊できた。

しかし、代償は小さくはない。

あちらは無傷で、こちらは体力・魔力ともに消耗、加えて右足一本。

「
」

見守り、導き、救い出す、桃色の彗星。

蹂躪し、滅し、闘い抜く、紅蓮の明星。

対称的な生き方。鏡と鏡に映った鏡像。

違うからこそその差異は、絶対的だった。

「色々と試行した結果、判明したのですが、どうやら私は貴女ほど、
砲撃能力・集束魔法能力に秀でていないようです」

それでも他者と比べれば上位に位置するのですが、とシュテルは付け足して言う。

それがどうしたというのか。慰めのつもりか。

怒り心頭に加え、焦燥感に駆られたのはシュテルの心中を読もうとすらしらない。

ろくに警戒もせず接近していく。

「しかし、私には貴女にないモノがあった」

それがこの一つです、とルシフェリオンを振りかぶる。

途端、穂先の形状が変化した。

槍型。エクシードモードに当たる形態。今のレイジングハートと同じ形態。

繰り出されると予想するのは、集束系かA・C・Sのような零距离離砲撃。

集束系ならば、撃たれる前にこちらが撃てる。A・C・Sにしても多少スピードはあるが同様だ。

対策はある。

だが、その予想は大きく外れることとなる。

「ディザスター、ブレード」

瞬間、穂先が燃え上がった。

否、そう見えるほどに魔力が溢れだし、幅広の魔力刃を形成する。

初めて見る術式に驚愕し身を固め、すぐに身構える。

だが、一瞬とはいえ、なのはは動きを止めた。

止めてしまったのだ。

「遅い……！」

それを見逃すシュテルではない。一刀両断の意思を込め、宿敵を打ち倒す魔剣を振り下ろす。

なのはの防御は間に合わない。シールド発生時のタイムラグ間に腕を切り落とされるだろう。

流石のエース・オブ・エースも事実として屈せざるを得ない。

全てがスローモーションのように感じられた。

そして、災厄の魔剣がなのはを捉えた。

「でええい!!」

捉えた、寸前。

割って入った、咆哮。

舞い降りたのは、蒼軀と白刃。

誤らずルシフェリオンの穂先を捉えた。

「ッ!？」

驚愕の声をあげたのは彼女なのはとシュテル二人のどちらだったか。

燃え上がる魔力刃の軌道はなのはの正面を通過していく。

ルシフェリオンが振り下ろされるのが視界の端に映ったのを見つつ、

アクセルフィンを展開、加速により後退。

その横に現れたのは蒼き巨神。

「アクセル、さん……どうして？」

「なるほど……俺という奴はどこまでも縁があるらしい」

なのはの言葉は聞こえなかったように、アクセルはつぶやいた。

ソウルゲインの、アクセルの双眸には、シュテルの姿しか映っていない。

否。彼はシュテルの先に、違う人物を見ている。

かつて、暴虐の限りを尽くした魔王の姿を。

「また、俺の前に現れるか。『エルケーニヒ』」
「……これは、些か分が悪いようですね。まさか強引に結界を抜けてくる者がいるとは、思いもせませんでした」
「俺とソウルゲインの前に立ちはだかり、破れなかったものはない。それを知らなかった貴様のミスだ、これがな」
「……納得しました。魂を獲する者の名は、伊達ではなかったということですか」

会話が成立していない会話をする二人。ついていけないのは。睨みあう二人。先に動いたのはシュテル。魔力刃を収め、ルシフェリオンを下ろした。

「消耗した魔力も大きい。ここは引きましょう……タカマチナノハ、一つ忠告しておきます」

足元に現れる空間の穴。

その向こうに見えるのは深淵。

シュテルは躊躇もせず一歩踏み出して入る。

「光を消さなければ、陰は消えないものです。ならば、光ある限り、陰を消そうとしても意味はない」

只の徒労に過ぎない、と続ける。

ようやく冷静さを取り戻したのではあったが、彼女の言わんとしていることがよく分からない。

「どういつ……」

「それすらも理解できないのならば、貴女はいずれ光によって滅せられる。それが今の貴女に定められた末路^{うごめい}」

「魔王の次は預言者気取りか？」
「いいえ、これが預言ではなく事実。未来を信じ続け、過去を蔑るにしようとしても、いずれは未来に押しつぶされる。ただそれだけの話です」

すでに上半身が吞まれ、残りは頭部のみ。
それも今は沈もうとしている。

「それでは、またいずれ。次こそは、真なる魔導を競い合いましよ
う。タカマチナノハ」

宿敵の名を最後に残し、彼女は消えた。
シンと静まり返っていた海上、唐突に音が蘇る。
シュテルが消えたことにより結界が解除されたことを知らせるもの
だった。

「無事か、なのは一尉」

「あ、はい……」

ブラスターモードは既に解除されていた。
張っていた魔力も元通り。
それこそ消耗しきっていた時と同様の状態まで。

「一尉?! おい、しつかりしろ!!」

だから、倒れるのは必然だった。
力強い二本の腕と巨軀に受け止められたのを感じつつ、薄れゆく思
考の中、ぼんやりとこう思った。

父親って、いろいろものかあ。

第22話 「魔王墜ちて、冥王嗤うか？」（後書き）

圧倒的な力を誇るシユテルさんでした。

描写モチーフはシナンジユ、UCデストロイ。

オリ魔法は……

ディザスターブレード/RHエクシード穂先にビームソードアックス的な刀身。

ルベライト・エクステンション/魔力粒子による広域結界。粒子網による捕縛、攻性粒子による攻撃、微細粒子による端末へのハッキングを兼ねている。

実は魔王より冥王の方が好きな作者でしたw

次回は雷光VS蒼雷のドッグファイト、を予定。

予定は未定ですが、何とか頑張ります！

それでは、お楽しみに。

第23話 「Dog Fight」(前書き)

あけましておめでとございます！
今年もよろしくお願ひします！！

とうとう年を越してしまいました。

年内に終わるはずだった、この物語。

だと言つのに、ようやくと中盤が終わり始めたという……
進行速度の遅さに、涙です。

さてさて、今話もオリジナルVSマテリアル。
フェイトVSレヴィです。

Godのレヴィは素晴らしいの一言ですが、作者のレヴィもそれに
負けないように頑張りました。

それでは、どうぞ。

第23話 「Dog Fight」

〔第23話「Dog Fight」〕

第18管理外世界イスタ

熱帯雨林上空^{セルバ}

飛び交う鎌状の弾幕。色は金と蒼。
弾幕の間を駆ける影もまた金と蒼。

フェイト・テスタロッサ・ハラウンと、アインスト・レヴィ。

双方が構える武器もまた鏡映しの様。^{デバイス}

共に取る型は死に神の鎌。金と蒼。

これまた同一ではあるが、一点だけ異なる点がある。

それは表情。

彼女が浮かべるのは狂気に満ちた狂喜。^{ロレイン}

彼女が浮かべるのは苦痛に満ちた苦悶。^{フェイト}

理由は明確だった。

「まださっきのダメージが残ってるみたいだね！」

「っ……………!!」

「それはキミの遅さが招いた結果さ!! さあ、そのけそのけ!
僕がとーる!!」

レヴィの指摘とその余裕さに、唇を噛み締める。彼女の言う通り、戦闘開始直後に受けた特大級の雷いかずち。そのダメージを引き摺ひきずっている。

ブリックアクション

緊急離脱が上手くいき直撃は免れたものの、掠さらっただけで、余波を受けただけで、未だ痺れが残っているのだ。

儀式魔法にも劣らない術式を、いとも簡単に、しかも一瞬で発動して見せた。

攻撃魔法として発展させた雷撃ならば、自身も短時間詠唱で発動できるが、明らかに威力が違う。オーバースペックにも程がある。

加えて、自分の売りである速さを見切られているときた。

正直、勝てる見込みは少ない、とフェイトは冷静に判断せざるを得ない。

「……………だけど、負けられない」

そう。負けられない。

目の前の彼女てきは、自分の友人であり、先生とも呼べる女性に怪我を負わせた。

更に追い打ちをかける様に彼女の尊厳プライドも踏み躪ふみった。

騎士たる彼女に対して、そんな仕打ち。決して許されることではない。

付け足して言えば、フェイトにも意地がある。

勝てる見込みは少ない。だが、それがどうしたというのだ。

「……………闇の書の、構築体マテリアル……………そして、アインスト」

自身の過去を模した存在であり、アインストという存在。

幼く、弱い頃の姿。手を伸ばしても届かない悲劇を招いた姿。

あの頃の自分とは違う。

未来が勝てないという、道理はない。

「ハーケン、セイバー!!」

《H a k e n S a b e r》

カートリッジ一発を消費し、追尾式の魔力刃を放つ。

あの速さの前には鈍足にも等しいが、牽制にはなるだろう。
放つと同時に、右側へ迂回しながら、レヴィへと迫る。

「だから！遅いつて言ってるだろう!!」

風を切る音をたて、水色に輝く雷撃の鎌を展開。
直角軌道を描きつつ、ハーケンセイバーに接近。

一閃。リング状の魔力は霧散。

それを尻目に見ながら、フェイトへと直進。

「くっ!!」

牽制にすらならなかったことに歯噛み。

負けじとこちらもハーケンフォームへと移行。

「ハアアアツ!!」

「やあああつ!!」

ポールアックミラツシヤ

戦斧と破断斧が激突し、同時に放電が起きた。

奔る電撃を互いに無視し、雷撃の鎌を振るう。

時に切つ先で、時に柄同士でぶつかり合い、その度に金属音と電撃音が響き渡る。

空中に描かれる螺旋状の軌跡。

まるで遣伝子モデルのように織りなされた中で、幾度となく斬り合

い、斬り結び、斬り裂く。

「電刃衝

」

「プラズマ

」

幾度目かの鏢迫り合い。

大きく振りかぶった逆袈裟と袈裟切りの一撃が相打ちに終わると、すぐさま空中でバックステップを踏みながら、魔力スフィアを生み出す。

数はともに六つ。両者は鏡合わせのように腕を振った。

「連射あ!!!」

「ランサー!!!」

放たれたのは雷撃の槍。

放たれた六つの槍の内、五つはともに相殺し合う。

だが、残り一発は互いにすれ違い、術者へと一目散。

その頃には術者同士も、自ら目がけて放たれた追尾式の槍を振り払うべく上昇。

しかし、追尾性の高い誘導弾はそう容易に振りきれない。

ある一点で直角に曲がる。目指す方向は同一。

「よっ、とー!」

「っ!!!」

交差。すれ違いざまに一閃。これまた相打ち。

だが、互いに追われていた誘導弾を相殺し合うことに成功した。

それを確認するが早いか、互いに空中でブレーキを掛ける。

同時に向き合う。やはり、表情は最初と変わらない。

レヴィは愉快そうな笑顔。

フェイトは焦りを伴うしかめ面。

「アハ　　スラッシュ やっぱり好きな事やって、ブツた斬って、撃ち抜いて、楽しくスラッシュ襲撃するのは、ぜんぜんまったくおもしろカッコいいよねえ。そう思わない、オリジナル?」

「はっ、はっ、はっ……私の名前は、フェイト、テストロッサ……オリジナルなんて名じゃない……っ!!」

「ふうん? そうだったっけ……えっと……へいと、ふえいと、フェイト……ううん、呼びにくいけど、まあ、いいや。で、フェイト。キミはどう? 楽しい?」

ボクと闘ってみてさ、と笑顔のまま問い掛けてくる。

……楽しくない、と言えば、嘘になる。

無邪気に問う彼女に、思わず本音を言いかけてしまう。

状況は全く違うけれど、十年前を思い出す。

当時は敵同士だった、シグナムとの闘い。

カートリッジシステム搭載なんて無茶もしたし、ソニックフォームを作ったのもそうだ。

全ては彼女に勝つために。

彼女が戦闘狂と思われてしまう原因、負けず嫌いの衝動。バトルマニア

その時と似たような高揚感。今、胸にこみ上げてくるのはそれだろうか。

「……楽しいだなんて、思わない」

だが、その気持ちは、今必要ない。

今は公務の真つ最中。世界の脅威足り得る、彼女を捕らえる。

そして、敵討ちとはまた違うけれど、友人のシグナム尊厳を護る。

「私は時空管理局の執務官! 貴女を逮捕するために、ここにいます!」

「！」

声高々に宣言。

カートリッジを二発、連続ロード。

足元に金色の魔方阵が出現する。

《Zanber form》

魔雷が旋風を巻き起こし、バルディッシュ・アサルトの限定解除フォームが姿を現す。

巨大な魔力刃。斬艦刀と見紛う如き大剣には濃密な魔力が込められている。

これだけでも、十分な戦力。

しかし、これだけでは終わらない。

「ソニック　　！！」

フェイト自身のバリアジャケットも限定解除フォームへと移行。

両腕、両足にソニックセイルを展開。

防御を捨て、速度による一撃昏倒を目的とした高機動形態。

リミットブレイクに当たる『真・ソニックフォーム』には劣るものの、リミッターがかけられた現在のフェイトが出せる最高速だ。

「これなら　　」

身構え、空を駆ける。

否、その速度は既に、空を切ると言っても過言ではない。

あつと言つ間もなく、距離を詰めた。

移動時に振りかぶり、着点と同時に振り下ろす。

「うえっ!?!」
「いける!?!」

自身の声すら後ろに置き去りにする、開戦時とは比較できないほどの速度。

今までのスピードに目が慣れていたレヴィは反応が遅れる。

眼前に迫る大太刀。

驚愕するレヴィの思考とは別に、右手で携えるバルニフィカスで受ける。

それは反射も同然だった。

力のマテリアルが故の闘争本能が腕を動かした。

「あつつぶなあ!?!」

目を見開き、心臓が早鐘のように打っているレヴィ。

対するフェイトは防がれたことに驚かない。

彼女は自分よりも何倍も強い強敵。

模擬戦の勝率が思わしくない、シグナムにも打ち勝つほどだ。

ならば、その強敵がたじろいでいる今こそが勝機。

ここからの出方で流れを引き込めるかが決まる。

「つつ!?!やあああ!?!」

そう判断したフェイトは柄を手の中で回転させ、再び打ち下ろす。

防戦に追い込まれたレヴィは何とか離脱を試みる。

鎌を振り上げ、大剣を弾いたと同時にバックステップ。

「くっ!?!このおっ!?!」

しかし、体勢を立て直す前にフェイトの追撃。

シールドを張ることもままならず、レヴィは大きく吹き飛ばされる。

「アーハッハッハッ！！電光散らして、ボク再登場！」

レヴィの咆哮と同時に嵐が晴れ、彼女が姿を現す。

その手のバルニフィカスはザンバーフォームと同形に変化し、バリアジャケットも十年前の未完成ソニックフォームを彷彿とさせているが、そこに込められた力は全くの別物。

同時に、発せられるプレッシャーにフェイトは身を強張らせる。

「さあ、見せてやるぞ！生まれ変わったこの力！！」

抜刀するかの如き構えをとり、レヴィは狙いを定める。

フェイトも受けて立つとばかりに視線を鋭くし、肩越しにザンバーを構える。

「スプライト

」

自分を超えるスピードを持つレヴィを止める。

至難の業だが、策はある。

カウンターだ。レヴィが突進をスタートかけてきたと同時に仕掛ける。

単純だが、効果はあるはずだ。

「GO！！」

あるはずだった。

そう、あるはずだったのだ。

予測はしていた。十分なダメージは与えられないだろうと。予想もしていた。おそらく当てることすら難しいだろうと。だが、それすら覆す結末が訪れる。

「え？」

気がついた時には、^{スラッシュ}襲撃されていた。

しかも、一度ではない。バルディッシュを構えたままの態勢で衝撃が三度。

腹部を横一線、背中を右肩から左腰にかけて一閃、そして、バルディッシュ・ザンバーに一撃。

軌跡は確認できなかつた。

知覚すらできないほどの速度。

「これが、ボクが手にした最高のスピードと最強の剣……」

声が遠くから響いてきたように聞こえる。

かと思えば、耳元で告げられたようにも聞こえる。

その度に斬られていく。手甲を、二の腕を、脛脛を。

為す術もなく、ただただ斬られてゆく。

「つまり、ボク最強！！」

トドメとばかりに腹部に蹴りを一撃。

フェイトはくの字に折れ曲がり、熱帯林へと真っ逆さまに落ちていく。

半ば朦朧としかけた彼女の視界に映るモノ。

倍まで延長されたバルニフィカス・スラッシャーの刀身。

そして、勝利を確信したレヴィの笑み。

「雷刃滅殺う」

「極光斬！！」

振り下ろされた必殺の雷刃。
誤らずフェイトへと伸びて。

「サンダー！レイジツ！！」

「フリード！！お願い！！」

しかし、当たることはなかった。

巨大な刀身に火炎弾が命中し、レヴィにも落雷。

奇襲に狼狽し手元が狂い、更にブラストフレアによって刀身は逸らされる。

大々的に放たれた雷刃は掠ることもなくフェイトの傍を通り過ぎる。

「リボルバーシュート！！」

忌々しげに雷撃を避けるレヴィに迫りくる魔法弾。

直射だったが、ちょうど回避点を狙って放たれ、タイミングは完璧だった。

「もおおお！！」

煩わしさを募らせたレヴィは一気に上昇して襲撃者を確認する。

赤髪の少年と桃色髪の少女、二人が乗っている白竜。そして、先ほど射撃魔法を行った紫色の女性だ。

言わずもがな、エリオとキャロ、フリードリヒに、ギンガだ。

落下するフェイトは既に青髪の女性　スバルがキャッチしていた。

「さあ、アインスト。四対一……ううん、五対一だけど、どうします？」

挑発するように笑うギンガ。人数を否定する。
対するレヴィは肩をがっくりと落とし、ため息をついた。
顔を俯かせて、ツインテールを垂らしている。

「はあああ……最近、こんなのはつかだなあ。白魔導師の時も、シグナムの時も、聖王の剣の時も……今回も　何なんだよホントにさあそんなに決着つけさせたくないのそんなにトドメ刺しちゃダメなのそんなに殺しちゃダメなのだいたいこの“オシゴト”にも飽きてきたし自由な時間も取れやしなしいし何でこんな熱いところ来なきゃいけないのか分かんないし戦いも中途半端で気晴らしも出来やしない……」

ふ、と顔を上げた時に見えたその瞳には、何やら危ない光を湛えていた。

誰かが息を呑んだ。いや、その場にいた全員がそうだった。フリードリヒも怯えたように首をすくめた。

長い時間が経ったのかとも思ったが、それは一瞬だった。

「いいや、今回は帰る。でも、“オシゴト”だけは済ませてくね」

へら、と笑った。だが、どこか空虚な笑みだった。

それが逆に恐怖感を増させた。

アクアブルーの魔方陣を展開して、腕を前に出す。

フォワードメンバーは身構えるが、それが自分達に対するものではないことに気が付く。

眼下の大地から、何やら鈍く輝いている物体がいくつも浮かんできた。

ここ、イスタに数多く存在する地下資源の鉱物のひとつだろう。

「何……あれ？」

「ボクも知らないけど、集めてこいって言われてるんだ。後で使うんじゃない？」

強力な磁力で地下から空中へと無理やり引き上げているのだ。直径2メートル程度の球体になるまで集まったそれを満足げに見るレヴィ。

「じゃあ、ボク、もう帰るね。ああ、それと今度邪魔したら……」
にこやかに全員に笑いかけ。

殺しちゃうから。

それは絶対零度の笑みだった。

たった一言。それだけで十分だった。

それだけで年端のいかない少年少女は竦み、姉妹は身構えた。レヴィは何もせず、明後日の方向へと向き直り、飛んで行った。

「……はあ……どうにか、なったね」

数秒の後、全身を弛緩させて、しかし、フェイトを落とさないようにスバルがウイングロードに膝をつく。

それに合わせて全員が安堵の息を吐く。冷や汗が顔面を伝っている。一週間分にも匹敵する疲れが今、どっと押し寄せていた。

しかし、今の時刻は昼にもなっていない。

五分後。後に残る激務を想像して、四人は更なるため息をつくのであった。

第23話 「Dog Fight」(後書き)

本作独自設定。

・ソニックフォーム

リミッターがかけられたフェイトの本気。真とは異なり、形状は十年前のソニックと同一。速度は真に劣るものの、防御はそれなり(と言っても障子紙か段ボールかくくらいの差)。

前話のなのはさんが披露したブラスターモードも同じ様な感じですが、リミッターブラスターと言ってもいいでしょう。だから、シユテルさんにいいようにやられたのです。

それと、G O Dをプレイしてからの変更点を抜粋。

- ・レヴィが呼ぶシユテルの呼称「シユテル」 「シユてるん」
- ・シユテルが呼ぶなのはの呼称「高町なのは」 「タカマチナノハ」
- ・マテリアル組の、闇の書とは無関係発言 関係を持ちつつもまた違ったものに変化

などなど、細かいですが変更してみました。

次話は闇王VS烈火の将。

これまた時間がかかりそうですが、頑張ります！
それでは、もう一度。

今年もS A I H A Lをよろしくです！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5903v/>

魔法少女リリカルなのは ~ So close, yet so far ~

2012年1月2日02時52分発行